

早稲田大学審査学位論文

博士（人間科学）

BPD 傾向者における見捨てられスキ
ーマと BPD の徴候との関連

The Relationships between the Abandonment
Schemas and Borderline Personality
Characteristics in Individuals with
Borderline Personality Features

2014 年 1 月

早稲田大学大学院 人間科学研究科

井合真海子

IGO, Mamiko

研究指導教員： 根建金男教授

目次

第 1 章 境界性パーソナリティ障害および BPD 傾向者の特徴

- はじめに P.4
- 第 1 節 境界性パーソナリティ障害 (borderline personality disorder: BPD) の特徴 P.5
- 第 2 節 BPD に関連する見捨てられ不安 P.13
- 第 3 節 BPD 傾向者に関する先行研究 P.15
- 第 4 節 本章のまとめ P.17

第 2 章 認知行動理論における見捨てられスキーマ

- 第 1 節 近年の BPD 研究における認知行動理論的視点 P.18
- 第 2 節 BPD および BPD 傾向者と見捨てられスキーマとの関連 P.21
- 第 3 節 本章のまとめ P.25

第 3 章 BPD 傾向者と見捨てられスキーマに関する先行研究の問題点

- 第 1 節 見捨てられスキーマの測定に関する課題 P.26
- 第 2 節 見捨てられスキーマの作用機序に関するメカニズムの検討の課題 P.28
- 第 3 節 BPD 傾向者を対象とした見捨てられスキーマに対する介入の課題 P.30
- 第 4 節 本章のまとめ P.31

第 4 章 本論文の目的・意義・構成

- 第 1 節 本論文の目的 P.32
- 第 2 節 本論文の意義 P.34
- 第 3 節 本論文の構成 P.36

第 5 章 見捨てられスキーマ尺度 (the Abandonment Schema Questionnaire: ABSQ) の開発

- 第 1 節 本章の目的 P.39
- 第 2 節 【研究 1-1】 ABSQ の作成と信頼性の検討 . P.40
- 第 3 節 【研究 1-2】 ABSQ の併存的妥当性の検討 . P.46
- 第 4 節 【研究 1-3】 ABSQ の弁別的妥当性の検討 . P.50
- 第 5 節 本章の考察 P.55

第 6 章 質問紙調査による見捨てられスキーマの作用機序に関するメカニズムの検討

- 第 1 節 本章の目的 P.57
- 第 2 節 【研究 2】 見捨てられスキーマが BPD の徴候に及ぼす影響 P.58
- 第 3 節 【研究 3】 見捨てられスキーマのが誘発する対処方略の検討 P.66
- 第 4 節 本章の考察 P.77

第 7 章 見捨てられ場面における見捨てられスキーマと BPD の徴候の関連

- 第 1 節 本章の目的 P.82
- 第 2 節 【研究 4】 見捨てられ場面における見捨てられスキーマと BPD の徴候の関連に関する実験的検討 P.83
- 第 3 節 本章の考察 P.102

第 8 章 見捨てられスキーマの変容が BPD の徴候の改善に及ぼす効果

- 第 1 節 本章の目的 P.106
- 第 2 節 【研究 5】 認知的再構成の手続きが見捨てられスキーマの変容に及ぼす効果 P.108
- 第 3 節 【研究 6】 見捨てられスキーマの変容が BPD の徴候の改善に及ぼす効果 P.124

第 4 節	本章の考察	P.155
第 9 章	総括的考察	P.157
引用文献		P.176
あとがき		P.189
添付資料のリスト		P.191
添付資料		P.193

第 1 章 境界性パーソナリティ障害および BPD 傾向者の特徴

はじめに

1980 年にアメリカ精神医学会 (American Psychological Association: APA) が制定した精神障害の診断・統計マニュアル・第 III 版 (Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, 3th Edition: DSM-III) において多軸診断が採用され, 第 II 軸に新たな類型としてパーソナリティ障害が加わってから, 約 35 年が経過した。2013 年に出版された DSM-5 (Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, 5th Edition, 2013) によれば, パーソナリティ障害とは, “その人の属する文化から期待されるものから著しく偏り, 広範でかつ柔軟性がなく, 青年期または成人期早期に始まり, 長期にわたり安定しており, 苦痛または障害を引き起こす, 内的体験および行動の持続様式である。その偏りは認知, 感情性, 対人関係機能, 衝動の制御の不全を引き起こし, 著しい機能不全や主観的苦痛を引き起こすもの” である。DSM-5 では, パーソナリティ障害について, これまでの診断基準から, 「Alternative DSM-5 Model for Personality Disorders」が新たに Section III に加わり, パーソナリティ障害の重症度を機能的不全の重症度や病理学的な人格特性によって評価するという試みがなされている。つまり現在は, 従来の分類論的な診断基準から, より Dimensional perspective (次元的な視点) でパーソナリティ障害を評価する動きに移行しつつある過渡期にあると捉えられる。したがって, パーソナリティ障害に関する研究も, 障害の連続性を考慮し, これまであまり注目がなされなかった軽症群を対象とした研究も蓄積する必要があると考えられる。

第 1 節 境界性パーソナリティ障害 (borderline personality disorder: BPD) の特徴

1) 境界性パーソナリティ障害の疫学

境界性パーソナリティ障害 (borderline personality disorder: BPD) とは, パーソナリティ障害の一つとして位置づけられている, 「対人関係, 自己像, 感情などの不安定及び著しい衝動性の広範な様式で, 成人期早期までに始まり, 種々の状況で明らかになる本質的特徴を持つ障害」である (DSM-5, 2013)。APA の治療ガイドライン (2001) によると, BPD の中核症状として, 感情の不安定性・衝動性困難・認知機能の異常が挙げられている。BPD は, 親しい人物や仲間に対する揺れ動く評価, 見捨てられ不安, 自殺企図, ギャンブルなどの浪費, 怒りや敵意の強烈な表明による否定的気分の著しい反応性等の症状を有している (Dougherty, Bjork, Huckabee, Moeller, & Swann, 1999)。Table1-1 に DSM - 5 の BPD の診断基準を示す。

DSM - 5 の Section III では, Alternative Model として, パーソナリティ障害の診断の新機軸が設けられている。Alternative Model によると, パーソナリティ障害の中でも, BPD は, 以下の A と B の二つの基準を満たすことが条件となる。まず, A. パーソナリティの障害の特徴として, ① 自我同一性, ② 自己主導性 (self-direction), ③ 共感性, ④ 親密性のいずれかの 2 つ以上の領域について, 中程度～重度なパーソナリティの機能障害を有している。そして, B. 病理学的な性格特性として, ① 感情不安定性, ② 不安, ③ 分離不安, ④ 抑うつ, ⑤ 衝動性, ⑥ 危険を伴う行動 (risk-taking), ⑦ 敵意, の 7 つのうち 4 つ以上 (⑤, ⑥, ⑦ のうちどれか一つは含む) ことが, 診断基準として挙げられている。また, A の機能障害の評価については, レベル 0 (障害なし) ~ レベル 4 (極度の障害) まで 5 段階のレベルが設けられており, 中程

Table 1-1 DSM - 5 による BPD の 診断 基準

対人関係，自己像，感情の不安定性および著しい衝動性の広範な様式で，成人早期までに始まり，種々の状況で明らかになる疾患として診断される。以下の 9 つの診断基準のうち 5 つ（またはそれ以上）によって示される。

① 現実に，または想像の中で見捨てられることを避けようとするなりふりかまわない努力。

注：基準⑤で取り上げられる自殺行為または自傷行為は含めないこと。

② 理想化とこき下ろしとの両極端を揺れ動くことによって特徴付けられる，不安定で激しい対人関係様式。

③ 同一性障害：著明で持続的な不安定な自己像または自己感。

④ 自己を傷つける可能性のある衝動性で，少なくとも 2 つの領域にわたるもの。

（例：浪費，性行為，物質乱用，無謀な運転，無茶食い）

注：基準⑤で取り上げられている自殺行為または自傷行為は含めないこと。

⑤ 自殺の行動，そぶり，脅し，または自傷行為の繰り返し。

⑥ 顕著な気分反応性による感情不安定性。

（通常は 2~3 時間持続し，2~3 日以上持続することはまれな，エピソード的に起こる強い不快気分，いらいら，または不安定性）

⑦ 慢性的な空虚感。

⑧ 不適切で激しい怒り，または怒りの制御の困難。

（例：しばしばかんしゃくを起こす，いつも怒っている，取っ組み合いの喧嘩を繰り返す）

⑨ 一過性のストレス関連性の妄想様観念または重篤な解離性症状。

度 (Moderate) のレベル 2 以上が, BPD の基準を満たすこととなる。

DSM - 5 によると, BPD の有病率は一般人口の約 1.6 ~ 5.9%, 精神科外来の約 10%, 精神科入院患者の約 20% と見積もられており, 加齢とともに有病率は減少するとされている。

BPD の他の疾患との合併率については, 多くの研究がなされている。第 II 軸との合併率は, 回避性パーソナリティ障害が最も高く (47.4%), 次いで強迫性パーソナリティ障害 (25.7%), 反社会性パーソナリティ障害と続いている (15.4%)。第 I 軸との合併率の報告は研究によって異なるが, 大うつ病との合併率は約 30% ~ 約 80% と, 一貫して高いことが報告されている (Arntz & Veen, 2001; Conklin & Westen, 2005; Koenigsberg, Harvey, Mitropoulou, Schmeidler, New, Goodman, Silverman, Serby, Schopick, & Siever, 2002; Zanarini, Frankenburg, Dubo, Sickel, Anjana Trikha, Levin, & Reynolds, 1998)。本邦においては, Moriya, Miyake, Minakawa, Ikuta, & Nishizono-Maher (1993) が第 I 軸との合併率を調べ, BPD 患者においては, 大うつ病 59%, 摂食障害 34%, 薬物依存障害 22%, 不安障害 9% の合併率であったことを報告している。

性差に関しては, DSM - 5 では約 75% が女性であると述べている。ただし, この性差に関しては, もともと BPD の診断基準自体が女性が診断されやすくなっており, 診断の際に性差のバイアスが生じているとする報告もある (Boggs, Morey, Skodol, Shea, Sanislow, Grilo, McGlashan, Zanarini, & Gunderson, 2005)。よって, 先行研究の結果がそのまま BPD の性比を反映しているとは限らないといえるだろう。

2) 境界性パーソナリティ障害の病理論

初めて「ボーダーライン」の概念を本格的に論じたのは、Stern (1938) であるとされている (町沢, 2003)。彼は神経症でも分裂病にも分類されない、心理療法の効果が極めて乏しい患者を、神経症のボーダーライン・グループ (borderline group of neurosis) と呼んだ。彼はこのグループを、母親の愛情が不十分な結果から来る性格であると考えた。Mahler (1972) は、自身の分離-個体化理論から、子供の母親に対しての強い両価的な態度に注目し、この両価的な態度が「分裂 (splitting)」を招き、このような深い分裂が BPD の基本的な構造欠陥を作り出すと論じた (町沢, 2003)。

さらに、BPD の研究に大きな影響を与えたのは Kernberg (1967) の境界パーソナリティ構造 (Borderline Personality Organization: BPO) の理論である。Kernberg は米国の自我心理学と英国の対象関係論を融合した形で、記述的分析と構造的な分析から、境界例の臨床像を展開した (牛島, 1991)。Kernberg の理論は「境界」を人格の機能水準として位置付けており、神経症と精神病の中間に位置付けしようとする点は従来の理論と同様である。このような中間領域として規定された BPO は概念的に広範であるといえる。そのため、BPO は BPD 以外のパーソナリティ障害にも当てはまる人格構造となっている。

Masterson (1980) は、BPD の形成要因について、Kernberg が先天的な要因を比較的重視したのとは対照的に、環境的な要因を重視している。彼は Mahler の分離-個体化理論から、BPD の症状を分離-個体化段階の発達停止と捉え、BPD に特徴的な見捨てられ不安はこの発達停止が要因となると提唱した。そして、BPD の中心的な不安として見捨てられ抑うつ (Abandonment depression) を据えた。これは、抑うつ・怒りと憤り・

恐怖・罪悪感・受け身性と無気力・空虚感と空しさの 6 つの要素から成るものである。この発達停止はその後の対人関係パターンに影響し、しがみつきと拒絶を繰り返す極端な対人関係しか持てなくなる、とされている。

1970年代から現在に至るまでは、GundersonがBPD研究において多大な影響力を与えた。Gunderson(1984 松本他訳 1988)はBPDを明確なパーソナリティ障害と主張し、分裂病や神経症と異なる独立の疾患単位であると主張した。Gunderson(1984 松本他訳 1988)は、BPDの症状として、①きわめて不安定な対人関係、②操作的な自殺企図、③不安定な自己感、④否定的感情、⑤自我異質的な精神病体験、⑥衝動性、⑦低い達成能力、の7つを提唱した。現在のDSM-5の診断基準には、Kernbergの理論と、このGundersonの理論が強く反映されている。

一方で、1990年代に入り、Linehan(1993)が提唱した生物・心理・社会モデルに基づいた、BPDの因果モデルが注目されている。このモデルでは、BPDは感情統制不全という生物学的脆弱性と、非承認的な(invalidative)環境という環境要因の相互作用により形成されると仮定している。Linehan(1993)によれば、素因としてある感情統制の脆弱性・衝動制御困難性に加え、感情体験の正当性を認めない幼児期の経験が相互作用し、BPDの非機能的な行動や、理想化と脱理想化を繰り返すような両価的な行動が形成される。そして、その揺れ動く感情や行動により潜在的な愛着対象との間に修正体験が成されなかったこと、また、修正・消去体験が成されていても何らかの生物学的要因によりそれが維持できないために、感情不安定性が維持される。Linehan(1993)はこの理論を基に、行動療法、認知行動療法を援用した弁証法的行動療法(Dialectical Behavior Therapy: DBT)を提唱した。

また、Linehanと同様に、認知行動理論的な視点に基づき発展した理論として、Youngの早期不適応スキーマ理論が挙げられる。Young, Klosko, & Weishaar (2003 伊藤他訳 2008) は、パーソナリティ障害の病因として、強固な「早期不適応スキーマ」が存在する、と仮定した。幼少期に形成された不適応的なスキーマ (Youngによると18種) の影響により、患者は自らのスキーマに基づいて、「スキーマへの服従」、「スキーマへの回避」、「スキーマへの過剰補償」という非機能的なパターンを繰り返し、不適応的なスキーマを強めていくとした。よって、Youngはこれらの不適応的なスキーマに介入し、修正体験を重ねることによって、健康的な部分が育ち、パーソナリティ障害が改善すると考えた。

BPDに関する理論の変遷を概観すると、近年においては、認知行動理論に基づいたBPDの病理論が定着しつつある。上述したDBTやYoung et al. (1990, 2003 伊藤他訳 2008) のスキーマ・セラピー (Schema Therapy: ST) については、実証研究がなされ、知見が蓄積されつつある。しかし、知見の多くは治療法の効果研究によるものであり、それぞれの理論を検討するような研究は少なく、理論の妥当性については未だ課題が残る。

3) BPDの主な症状

APAが挙げているBPDの主な症状は、先述したように大別すると感情不安定、衝動制御困難、認知・知覚異常が挙げられる。一方、BPDの診断基準について因子分析を行った研究がいくつか報告されているが、それらの知見によると、「感情統制不全」、「行動統制不全」、「関係性の混乱」の3因子構造が最も多く報告されている (Sanislow, Grilo, & McGlashan, 2000; Sanislow, Grilo, Morey, Bender, Skodol, Gunderson, Shera, Stout, Zanarini, & McGlashan, 2002)。よって本節では、

この 3 因子構造に添って，BPD の症状を概観する。

まず，「感情統制不全」には，Linehan (1993) をはじめとして，近年多くの BPD 研究者が注目している。BPD 患者の感情統制不全とは，短時間で，急激に変化する気分状態に特徴付けられる (Herpertz, Gretzer, Steinmeyer, Muelbauer, Schuerkens, & Sass, 1997)。例えば，BPD 患者は健常群と比べ，不安や悲しみの持続時間が長く，不安→怒り・悲しみ，悲しみ→不安の移り変わりが激しい (Reisch, Ebner-Priemer, Tschacherl, Bohus, & Linehan, 2008)。Linehan (1993) によると，BPD 患者は感情刺激に対する高い感受性と，感情の強烈さの高さ，そして感情状態がベースラインに戻ることへの遅さに特徴付けられる，としている。

感情調節に関わる脳機能の不全に関する研究もなされている。例えば，van Elst, Ludaescher, Wilke, Huppertz, Thiel, Schmahl, Bohus, Lieb, & Hesslinger (2003) は，BPD に関して functional magnetic resonance imaging (fMRI) を用いた研究を行い，BPD 患者は健常群に比べて海馬，扁桃核，眼窩野，前部帯状皮質，前頭全野背外側の萎縮があったと報告している。また，BPD においては，脅威の察知，あるいは嫌悪刺激によって賦活する扁桃核が，中性表情刺激においても健常群と比べて活性化しやすいことが示されている (Donegan, Sanislow, Blumberg, Fulbright, Lacadie, Skudlarski, Gore, Olsin, Mcglashan, & Wexler, 2003)。Ruocco, Amirthavasagam, & Zakzanis (2012) によると，BPD と脳に関する 11 の研究のメタ分析の結果，健常群と比べて海馬が平均 11%，扁桃核が平均 13% 萎縮していた。

次に，BPD の症状の因子のひとつである「行動統制不全」は，衝動性の高さと同義であるといえる。BPD の衝動性困難とは，衝動的な攻撃性の表出，自傷行為，自己破壊的な行動などの症状を指す。この衝動性の高さは

BPD の行動化につながり、激しい怒りの表出、突然関係を切るといった不安定な対人関係、自傷行為、無茶食い、飲酒、無謀運転、さらには自殺企図といった様々な行動化を引き起こす要因の一つとなっている。Soloff, Lynch, Kelly, Malone, & Mann (2000) はパーソナリティ障害を有する患者を衝動性高群、衝動性コントロール群、衝動性無し群の3群に分けたところ、BPD患者は他のパーソナリティ障害患者よりも衝動性高群の割合が高かった(74%)ことを報告している。さらに、認知的評価と気分・感情の制御を行う前部帯状皮質、扁桃体を制御することによって衝動性を抑制する役割を果たす眼窩野の機能不全が、BPDの感情統制不全や衝動性の高さに関連があることが指摘されている(e.g., Johnson, Hurley, Benkelfat, Herpertz, & Taber, 2003)。

BPDの症状の因子の3つ目である「関係性の混乱」について、Hill, Stepp, Wan, Hope, Morse, Q Steele, M Steele, & Pilkonis (2011) は、BPD患者は、他のパーソナリティ障害や第I軸疾患に比べて、対人関係の機能が低いことを報告している。Russell, Moskowitz, Zuroff, Sookman, & Paris (2007)の研究では、BPD患者は、対人関係において、支配的・攻撃的・服従的な行動がめまぐるしく変わって起こることが示された。また、BPD患者は、BPDではない精神疾患患者よりも他人に対しての期待が低く、より不満や恐怖を覚えることが報告されている(Drapeau & Perry, 2004)。本邦では、Ooshima (2000)が、BPD患者とヒステリー神経症を比較し、BPDの特徴を検討した結果、BPD患者は衝動行為や対人関係障害が目立ち、その背景にBPDの対人操作的な傾向や孤独への耐性低下などを認めた、と指摘している。

このように、BPDの機能不全は多領域に渡り、深刻な問題を示す。よって、これらの機能不全を引き起こす中核的な要因に対してアプローチすることが求められる。

第 2 節 BPD に関連する見捨てられ不安

本章の第 1 節では，BPD の特徴を概観した。第 2 節では，BPD の特徴の中でも特に中核的な症状とされる，見捨てられ不安の強さについて詳細に述べることにする。

BPD の特徴として，BPD 研究初期より，見捨てられ不安の強さが指摘されている（e.g., Gunderson, 1984 松本他訳 1988）。DSM - 5 では，見捨てられ不安に関連して，“現実には，または想像の中で見捨てられることを避けるようななりふりかまわない努力をすること”が，BPD の診断基準の一つにあげられている。

見捨てられ不安は，主に Mahler（1972）の分離－個体化理論の分離不安の概念から説明されてきた。前述した通り，Masterson（1981 冨永他訳 1990）は，Mahler の理論から，BPD の症状を分離－個体化段階の発達停止と捉え，見捨てられ不安もこの発達停止が要因となると提唱した。そして，「見捨てられ抑うつ」を，BPD の症状の中心概念として据えた。Schmahl, Elzinga, Vermetten, Sanislow, McGlashan, & Bremner（2003）は，BPD の見捨てられ不安や孤独への耐性の低さは，BPD 患者の臨床像において不可欠な部分であると述べている。Herpertz et al.（1997）は，BPD 患者において，衝動性や自傷行為をする傾向にある群は，孤独に関連するストーリーについて有意に孤独感が高く賦活されたと報告している。この BPD の見捨てられ不安は，対人的な場面で強く引き起こされる。浜中（2004）は，BPD 患者は見捨てられることに激しい怒りやパニック，絶望をもって反応することが多く，BPD 患者に認めがちな逸脱行動はこういった見捨てられ不安による強い苦痛から逃れたいために行われやすいとしている。これは治療場面でも顕在化し，治療者のちょっとした態度に激昂したり，自傷行為等の行動化を起こしたり，治療時間外に頻繁に電話をかけてくるなどといった様々な治療上の問題が起こるこ

とが指摘されている (Gunderson, 1984 松本他訳 1988)。Gunderson (1996) は, BPD の孤独に対する耐性の無さは, BPD で典型的に見られる依存や, 注意引き行動に関連していると述べている。また, BPD の見捨てられ不安は親密度が高まると深刻になり, より劇的な行動の誘因となるとされる (Mason & Kreger, 1998 荒井他訳 2003)。これに関連して Beck & Freeman (1990) は, BPD は親密さと依存に対する欲求不満があるために, しばしば強い怒りが引き出される, としている。

欧米においては, BPD の見捨てられ不安に対する実証的な研究がいくつか報告されている。Schmahl et al. (2003) は, 女性の BPD 患者は, 統制群と比べ, 見捨てられ記憶の想起において有意に前部帯状皮質の血流量が減少したと報告している。Schmahl, Elzinga, Ebner, Simms, Sanislow, Vermetten, McGlashan, & Bremer (2004) は BPD と PTSD との相違を検討したところ, 見捨てられ場面の提示条件において BPD 群は, PTSD 群と統制群よりも有意に皮膚電位 (SCL) が上昇した。また, Bell, Billington, Cicchetti, & Gibbons (1988) は, BPD 患者は感情障害, 失調感情障害, 統合失調症よりも有意に疎外感が高いことを見いだしている。さらに, BPD 患者は統制群より拒絶や見捨てられに関するストーリーに拒絶的に反応したという報告や (Limberg, Barnow, Freyberger, & Hamm, 2011), BPD 患者は気分障害患者や不安障害患者よりも, 拒絶への過敏性が高いという報告がある (Staebler, Renneberg, Stopsack, Fiedler, Weiler, & Roepke, 2011)。

以上の臨床的知見と実証研究より, BPD は見捨てられ不安を強く有しており, BPD の症状である自殺企図, 自傷行為, 対人関係の不安定さ, 感情の不安定さ等は, 見捨てられ不安がその誘因の一つとなっていることが仮定できる。つまり, BPD の見捨てられ不安は, BPD の主要

な症状とされる「感情統制不全」「行動制御不全」「対人関係の混乱」を引き起こす中核的な要因であることが予測される。

第 3 節 BPD 傾向者に関する先行研究

本章の第 1・2 節では、主に BPD 患者の特徴を挙げてきた。ところで、BPD ほど症状が重篤ではないが、BPD と類似した認知・行動パターンの一群が存在することも指摘されている（斉藤，2007）。斉藤（2007）は、この一群は、比較的健康的な母集団にいるが、些細な刺激による自傷行為や軽度の抑うつ傾向、あるいは空虚感の訴えなどを特徴とすると述べている。このような BPD と類似した特徴を持つ青年期の非臨床群は抑うつ気分が強い（Trull, 1995）。さらに、2 年間の追跡調査の結果によると、BPD と類似した特徴を顕著に持つ大学生は、BPD の特徴がさほどみられない者よりも不安障害・気分障害の罹患率が高く、学業成績が悪く、対人関係の機能が低下していた（Trull, Useda, Conforti, & Doan, 1997）。Trull et al. (1997) は、大学生の BPD 傾向を持つ者を対象とした研究は、以下の理由において重要であるとしている。1) BPD は非臨床群においても、比較的有症率が高い、2) 最も深刻で、重い機能障害に陥っている患者が臨床研究の対象になっていることから、BPD と診断された臨床群は BPD の典型例ではないかもしれない、3) BPD の特徴を有している青年期の非臨床群は、多領域において機能障害を表しており、十分研究対象になりうる。

また、第 2 節で述べた見捨てられ不安についても、BPD 臨床群に限らず、BPD 傾向を持つ者にも見受けられるとされている。佐々木・小川（1994）は、Mahler の「見捨てられ抑うつ」について、臨床の場に限らず、多くの若者が「見捨てられ抑うつ」として特徴付けられる心理状態や対人関係の問題を抱えやすくなっているとして、

大学生を対象とした見捨てられ不安を測定するための尺度を作成している。しかし、BPD 傾向者を対象として、BPD の見捨てられ不安と、BPD の徴候との因果関係について直接的に検討した実証的な研究は少なく、特に本邦においてはほとんど見られないのが現状である。よって、BPD 傾向者の見捨てられ不安へのさらなる検討が必要であると考えられる。

BPD 臨床群と BPD 傾向者の連続性に関しては、以下のような知見がある。Arntz, Bernstein, Gielen, Nieuwenhuizen, Penders, Haslam, & Ruscio(2009)は、パーソナリティ障害の疾患連続性に関して、タキソメトリック分析を行った。その結果、BPD は、パーソナリティ障害の中でも連続性が強く示唆される疾患であることが明らかとなった。これは、BPD の傾向をもつ非臨床群と BPD 臨床群は大きい質的な差異はなく、症状の重症度（つまり、社会的機能の程度）の差異によって分類されることを示していると解釈できる。また、第 1 節で述べた DSM - 5 の Section III においては、機能不全を 5 つのレベルで評価する基準が導入されており、これまでのような極度の機能不全レベルの病態のみを対象とするのではなく、軽症群も支援の対象となり得ることを示している。

よって、本論文では、BPD 傾向者を対象として、BPD の徴候のメカニズムを解明することを目的とする。なお、上述した先行研究では、BPD 傾向をもつ非臨床群（以下 BPD 傾向者）は、BPD を測定する尺度の得点が高いが、医療機関にかかっていない者であり、その明確な定義はなされてこなかった。よって、本論文では、BPD 傾向者の概念をより明確にするため、BPD 傾向者を以下のように定義する。1) BPD と類似した認知・行動パターンを持っているものの、生活に重篤な支障をきたしていない者、2) 現在自殺念慮や激しい自傷行為など、生命の危

機や極度の心理的苦痛を有していない者，3) 医療や心理治療を受けていない者。

本研究の対象者は，BPD臨床群には該当しないものの，症状においては「軽度（生活に大きな支障がない程度）」にあたる一群であり，BPD傾向者と臨床群の差異は，基本的には質的差異ではなく，症状による生活支障度の差異であると捉える。生活支障度に影響を与える大きな症状的要素として，「激しい自傷行為・自殺企図」，「自殺念慮」，「強度の抑うつ状態」が想定されるため，それらを有している者は，医療機関にかかっても臨床群に近い病態として扱い，本研究では除外することとする。なお，本論文では，BPDの「行動化」について，自傷行為等が他の行動化と独立しているとは捉えず，その強度によって区別する立場をとる。つまり，自傷行為についても，軽度の過食・飲酒傾向や，頻回ではない性的逸脱等の自傷行為は，BPD傾向者の徴候に含めて考え，行動化の一部として測定する。

本論文では，BPD傾向者の特徴を把握して，BPD傾向者に対する有効な支援法を考察する。

第4節 本章のまとめ

本章では，BPDおよびBPD傾向者の特徴を概観することを目的とした。第1節では，BPDの特徴や病理論の変遷について述べた。第2節では，特にBPDの見捨てられ不安高さの重要性について論じた。第3節では，BPD臨床群ほどは重篤ではないものの，BPDの特徴をもつBPD傾向者が存在し，支援・研究の必要性があることを述べた。

第 2 章 認知行動理論における見捨てられスキーマ

第 1 節 近年の BPD 研究における認知行動理論的視点

BPD の治療においては，BPD の概念が出現した当初は精神分析療法が有効な治療法とされてきた。しかしながら，治療は長期に渡るうえ，ドロップアウトなどの問題もあり，実証研究も乏しいことから，明らかな効果があるとは言い難い。

さらに，BPD の治療としては，精神療法と薬物療法との併用が推奨されてきた。しかし，BPD に対する薬物療法は十分に確立されているとはいえず，抑うつ症状に対する選択的セロトニン取り込み阻害薬（SSRI）の処方や，不安症状に対する抗不安薬など，その時点で表面化している症状に合わせて処方されているのが現状である。そして，その効果も個人差が大きい。

このように BPD に有効な治療法はいくつか提唱されているものの，BPD の治療のコンプライアンスの悪さもあり，どれも十分に確立しているとはいえない状態にあった。このような状況の中で，1990 年代に入り，パーソナリティ障害に対する有効な治療法として，認知行動療法が注目されはじめた。Beck & Freeman（1990）は，「パーソナリティ障害の認知療法」を著し，パーソナリティ障害に対する認知療法に特化して説明している。Beck & Freeman（1990）は，パーソナリティ障害には特有の強固なスキーマ（一定の認知的枠組み）が存在し，BPD においては，「この世界は危険で悪意に満ちている」，「私は無力で傷つきやすい」，「私は生まれつき嫌われ者だ」といった 3 つのスキーマが強固にあると仮定している。Beck & Freeman（1990）は，パーソナリティ障害にあっては，典型的スキーマは持続的な形で，日常的に行われる情報処理の一部として活性化しているものと述べて

いる。つまり、パーソナリティ障害においてはスキーマが活性化される頻度が多いため、そのスキーマはより強固となり、また症状も慢性的になると考えられる。

Beckらのスキーマ理論にのっとると、スキーマの活性化により、自動思考レベルにおける認知の歪みが生じると捉えられる。これらのBPDの認知様式については、以下のような報告がある。Arntz & Veen (2001)は、BPD群とクラスターC群、健常群を比較し、BPD群は他の2群よりも有意に他人をネガティブに評価することを見出している。また、対人関係に関して、BPD患者は、BPDではない精神疾患患者よりも他人に対しての期待が低く、より不満や恐怖を感じる (Drapeau & Perry, 2004)。Korfine & Hooley (2000)は、BPD患者と健常群に対して中性単語、否定的な単語、BPDに関連する単語の3種類の単語に関して同じくDirect Forgetting課題を実施した結果、BPD群は健常群よりも有意にBPDに関連する単語を覚えていたとしている。

表情認知に関する研究では、BPD患者はポジティブ表情認知の正答率は健常群と差はないが、ネガティブ表情 (悲しみ・恐怖・嫌悪など) 認知の正答率は有意に悪いとする報告 (Unoka, Fogd, Füzy, & Csukly, 2011) がある。

これらの研究から、BPDの者は自分を取りまく世界を否定的・悪意的に捉える傾向があるといえる。認知行動理論から考察すれば、BPDの悲観的なスキーマが自動思考レベルの処理に影響を与えていると解釈できる。よってBPDの認知療法においては、BPDに特徴的なスキーマの変容、それに由来する二分法的思考等の認知様式の緩和が治療標的となる。患者が両極に揺れ動く認知を統合し、悲観的なスキーマを適応的なものに変容させることが、BPDの症状を改善へと導くと解釈される。これに関連して、Beck & Freeman (1990)の“パーソナリティ障

害の認知療法”では、BPDに対する治療の手順として以下を示している。まず、取り組むべき問題をクライアントと共有して、危機対応や限界設定をしっかりと行う。そのうえで、スキーマや自動思考に介入する認知的技法、幼少期の苦痛な体験の修正を目的とする体験的技法、ロールプレイや行動実験などの行動的技法を適宜用いることを推奨している。

また、1990年代に入り、Linehan（1993）が提唱した「弁証法的行動療法（Dialectical Behavior Therapy: DBT）」の有効性が注目されてきた。DBTは、BPD患者適用のためにmindfulnessなどを取り入れ高度にパッケージ化した、従来の認知行動療法の発展型であるといえる。DBTは典型的には、週一回の個人治療、週一回の集団技能訓練、そして電話での相談で構成されている。トリートメントは3週間から1年と様々な期間があるが、基本的なDBTの介入は1年の個人・集団介入のパッケージで構成されている（Linehan, Armstrong, Suarez, Allmon, & Heard, 1991）。現在では、BPDに対して最も治療効果のある療法の一つとしてAPAの治療ガイドラインに掲載されている。

一方、Young（1990）はBeckの認知療法を発展させ、パーソナリティ障害のスキーマに治療の焦点をあてた「スキーマ・セラピー（Schema Therapy: ST）」を提唱した。この療法は、既存の精神分析の理論に、認知の再体制化、アサーショントレーニングなどの認知行動理論を融合させたものである（Kellogg & Young, 2006）。Youngはパーソナリティ障害の治療の標的であるスキーマを「早期不適応スキーマ」と命名し、このスキーマを同定し、感情喚起的技法・対人的技法・認知的技法・行動的技法によって介入していくことを治療目標としている（井上, 1995）。

Beck & Freeman（1990）の認知療法や、STで強調さ

れる点は、幼児期の体験によって形成された強固な認知構造を治療において重要視していることである。これは、BPD に対する他の精神療法にも共通する部分であるといえる。BPD においては、生理的基盤はもちろん、幼児期の生育環境が非常に大きな要因となっており、その不適応的な生育環境が BPD に特徴的な強固なスキーマを形成させると捉えられている。BPD のこうした強固なスキーマをいかに変容させていくかが、認知行動療法的治療においては治療目標となり得る。スキーマを変容させることにより、BPD に顕著にみられると指摘されている二分法的思考や他人に対するネガティブな解釈が緩和される可能性がある。また、スキーマを治療の標的にすることは、スキーマの活性化から引き起こされる攻撃性、対人関係の不安定さ、抑うつ症状、感情の不安定性など、様々な BPD の徴候の改善につながると推察される。

第 2 節 BPD および BPD 傾向者と見捨てられスキーマとの関連

第 1 章第 2 節では、BPD の見捨てられ不安の重要性について述べた。これに関連して、Beck の認知療法や Young の ST をはじめとする認知行動療法的な視点では、BPD の見捨てられることに対する過度な不安および過敏性を、スキーマ理論に則り、「見捨てられスキーマ」によるものであると仮定している。前述した Young の早期不適応スキーマの一つにも、「見捨てられ/喪失スキーマ」が挙げられている。このスキーマは、“重要な他者は、自分よりもより魅力的で、知的で、安定した人物のもとに去ってしまうだろうとする信念”とされている (Cecero, Nelson, & Cillie, 2004)。Lee, Taylor, & Dunn (1999) は、Young の the Young Schema Questionnaire (YSQ) の中の「見捨てられ」因子について、「親しい感情的な愛着 (愛情) が終わるだろうという予想」であると説明し

ている。このスキーマは BPD に特徴的なスキーマの一つとされており (Young et al., 2003 伊藤他訳 2008), Nordahl, Holthe, & Haugum (2005) は, BPD 患者は他のパーソナリティ障害の患者よりも, 「見捨てられ感/不安定スキーマ」の得点が有意に高かったと報告している。また, 若者の BPD 患者においては, Young の早期不適応スキーマ群の中で「見捨てられスキーマ」と「不信・虐待スキーマ」が顕著であることが報告されている (Lawrence, Allen, & Chanen, 2011)。井沢 (2005) は, 大学生を対象に研究を行い, BPD に特徴的なスキーマを測定する BPD のためのスキーマ同定質問紙 (the Borderline Schemata Questionnaire: BSQ) を作成した。そのスキーマ群の中でも「見捨てられ感」スキーマが BPD に特徴的なスキーマの一つとして位置付けられている。

「見捨てられスキーマ」が高い者は, 他者との関係が深まろうとすると, その関係を絶つような行動を取り, 結果的に「見捨てられた」ことが事実となり, 見捨てられスキーマを維持, 強化していく。また, 見捨てられスキーマが賦活されることに伴う苦痛を, 回避しようとする。その結果, 他者, 特に自分にとって重要な人物への理想化や価値下げが起こったり, 対人場面を過度に回避するような BPD の傾向が生まれると推測できる。

これに関連して, Young et al. (2003 伊藤他訳 2008) は, スキーマが特定の不適切な対処方略を誘発することを指摘している。Young はこの不適切な対処を「スキーマへの服従」, 「スキーマへの回避」, 「スキーマへの過剰補償」に分類している。見捨てられスキーマに関しては, その気もないのに相手とつきあう (スキーマの服従), はじめから親密な対人関係を作らない (スキーマへの回避), 自分から相手に対して距離を置く (スキーマへの過剰補償) 等の対処があることが指摘されている。

この「見捨てられスキーマ」を仮定することによって、BPD が親しい対象ほど行動化を激化させることも説明できる。つまり、親しい人物が少しでも自分から距離を置くような行動（あるいはそうだと BPD の者が解釈するような行動）があると、とたんにこの「見捨てられスキーマ」が賦活され、二分法的思考から「自分は見捨てられる」といった極端な認知が起こり、攻撃や自傷行為など BPD の徴候に至る、といった因果関係が推測できる。

「見捨てられスキーマ」を賦活させる実証的な研究として、Lundh, Lars-Gunner, & Czyzykow-Czarnocka (2001) の研究がある。Lundh et al. (2001) は、Young の YSQ の「見捨てられスキーマ」項目を先行提示して感情ストループ実験を行う群と、何も提示しないで感情ストループ実験を行う群とで、「見捨てられ」に関する単語の反応の違いを検討した。その結果、BPD 患者においては、「見捨てられスキーマ」項目を提示した群の方が、有意にストループ課題の反応時間が長かったことを報告している。これは、BPD 患者が見捨てられスキーマに有意長く注意を向けたということである。

さらに、見捨てられスキーマが幼少期から形成されている中核的な要因であることについての根拠として、以下の研究が挙げられる。

Simard, Moss, & Pascuzzo (2011) は、3～7 歳の子どもへの親に対する愛着行動を分類し、15 年後の愛着行動および早期不適応スキーマとの関連を調べた。その結果、3～7 歳の時点で、不安定で両価的な愛着行動を示した子どもは、そうでない愛着行動を示したグループよりも、15 年後に見捨てられ／不安定スキーマをはじめ、不信／虐待や感情剥奪、失敗や服従スキーマといった早期不適応スキーマの得点が高いことが示された。Simard et al. (2011) は、こうした不適応スキーマは、高い見捨てられ不安や、否定的な自己像等と関連していると述べてい

る。この研究では、3～7歳では子どもにスキーマ尺度を実施していないが、幼少期の愛着行動がスキーマの形成に影響を与えていることが示唆されており、スキーマも幼少期より形成されるものと解釈できる。

Sieswerda, Barnow, Verheul, & Arntz (2013) は、BPD 患者を対象に研究を行い、BPD 患者はクラスター C のパーソナリティ障害の患者よりも、スキーマに由来する刺激を提示した条件では、スキーマに由来する刺激を提示しない条件よりも、状況に対するネガティブな解釈の増加量が有意であったと報告している。Sieswerda et al. (2013) は、幼少期との虐待体験の関連も検討し、幼少期の性的虐待がスキーマに由来する刺激場面を提示した際のネガティブな解釈と関連があることを見出している。これは、幼少期の体験とスキーマが密接であり、それが BPD の認知的特徴に影響していることを示していると解釈できる。

以上の知見から、BPD のスキーマは幼少期から強固に形成され、思春期以降にも影響を及ぼしていることが推測できる。そして、BPD では見捨てられスキーマ得点が最も顕著であることが報告されていることをふまえると (Nordahl et al., 2005)、見捨てられスキーマが幼少期より形成され、BPD の徴候の中核的要因として作用している可能性が考えられる。

第 1 章第 2 節で論じた BPD の見捨てられ不安の重要性和、本節で論じた見捨てられスキーマの視点を併せると、見捨てられスキーマは BPD の様々な徴候を誘発する中核的な要因であると仮定される。これまで報告されてきた臨床的な知見と認知行動理論を踏まえると、BPD で問題となる見捨てられ不安は、根底に「見捨てられスキーマ」が存在しており、見捨てられについての過度な感受性から、対人関係のあらゆる場面、特に親密な他者を対象とした場面で容易にスキーマが活性化され、様々な症

状の様相を呈するという仮説が成り立つ。しかし、本邦において見捨てられスキーマに関して詳細に検討した実証的な研究は未だほとんどなされていない。また、大学生の BPD 傾向者を対象として、見捨てられスキーマを含む BPD に特徴的なスキーマ群を検討した研究は見受けられるが（e.g., 井沢, 2005; Samuel & Ball, 2013), BPD 傾向者を対象として、見捨てられスキーマに特化して検討した研究は見受けられない。BPD 臨床群と BPD 傾向者に質的な違いがないと仮定すると、BPD 傾向者にも強固な見捨てられスキーマが存在していると考えられる。したがって、本論文では、BPD 傾向者の見捨てられスキーマに注目し、研究を行う。

第 3 節 本章のまとめ

本章では、1990 年代より発展してきた、BPD に対する認知行動理論的視点について概観した。そして、見捨てられ不安に関連する「見捨てられスキーマ」に注目し、これまでの知見を通して見捨てられスキーマの重要性を述べた。そして、本論文では、認知行動理論の視点に立ち、BPD 傾向者の見捨てられスキーマについて検証することを示した。

第 3 章 BPD 傾向者と見捨てられスキーマに関する先行研究の問題点

第 1 章では、BPD および BPD 傾向者の特徴を取り上げ、特に見捨てられ不安の高さに注目した。第 2 章では、認知行動理論の視点から、見捨てられスキーマが BPD の徴候の中核的な要因である可能性に言及した。その内容をふまえた上で、本章では BPD 傾向者の見捨てられスキーマ研究に関する課題を論じる。

第 1 節 見捨てられスキーマの測定に関する課題

見捨てられスキーマの測定に関する問題を挙げる前に、まず「スキーマ」とはどのような概念なのか、本節で整理したい。

そもそも、「スキーマ」は、主に認知科学研究に由来するものであり、知識を構成するモジュールとして想定される概念とされる（三宅，1999）。過去の経験がスキーマを構成し、そのスキーマがその後の入力情報の処理に影響を与えており、スキーマは新しい事実や概念を取り込むための心理的枠組みであると説明されている（佐藤・町沢，1992）。Beck & Freeman（1990）はスキーマについて、精神病理の領域においては、きわめて個人的で独自の内容を有する構造であり、高力価のスキーマは、情報処理に系統的な偏倚をもたらす、と述べている。一方、Teasdale, Segal, & Williams（1995）は、情報処理的な側面を含めた抑うつに関するメカニズムを検討し、抑うつのスキーマモデルは「ネガティブな具体的な意味」（negative specific meanings）を出力し、それはネガティブな自動思考の連続として経験されると述べている。また、Young（2003 伊藤他訳 2008）は、パーソナリティ障害にみられるような強固なスキーマについて、“全般的で広範な主題もしくはパターンであり、記憶、

感情，認知，身体感覚によって構成されるもの”と定義している。上記の内容から，「スキーマ」という概念は，研究者あるいは分野によって異同はあるものの，「ある状況や物事に対する知識が組織化された認知的枠組み」であり，「ある特定の状況下において，特定の認知（自動思考）・感情・行動に影響を与える」ものであると解釈できる。

そこで本論文では，スキーマを，ある特定の状況や物事に対する認知的枠組みであり，それに基づき言語的な概念を形成したり，その概念に合致するように情報を処理し，その結果特定の認知（自動思考），感情・行動を引き起こすという過程が生じるもの，と定義する。そしてこの定義にもとづき，見捨てられスキーマを，1) 見捨てられることに関する認知的枠組みであり，見捨てられると感じる場面において，特定の認知（自動思考）・感情・行動を誘発するもの，2) BPD 傾向者において強固であり，内容特殊性をもつもの，と定義する。

以上の定義をふまえると，スキーマの測定は「言語的内容」と「特定の認知・感情・行動を誘発する機能」の測定に大別できる。

スキーマの「言語的内容」を測定する方法としては，質問紙による測定が挙げられる。しかしながら，既存の尺度では，見捨てられスキーマを十分に測定できるとは言い難い。例えば，Young & Brown（1990）の the Young Schema Questionnaire（YSQ）は見捨てられスキーマのみを測る質問紙ではなく，16のスキーマを全般的に測定する質問紙である。その16のスキーマは，Youngの臨床経験をもとに分類しており，見捨てられスキーマを1因子として扱っているが，追試研究によると，YSQについて主成分分析を行った結果，Youngが想定している16の因子には必ずしも分かれず，全体で13～17因子構造となったことが示されている（Oei & Baranoff, 2007）。

また、Ball & Young (2001) は、YSQ の改訂版として、the Early Maladaptive Schema Questionnaire-Research Version (EMSQ-R) を開発しているが、EMSQ-R について探索的因子分析を行った結果、4 因子構造であることが示されている (Samuel & Ball, 2013)。つまり、見捨てられスキーマという因子を抽出して測定するという意味では、YSQ および EMSQ-R は不向きであると考えられる。本邦では、井沢 (2005) が、Layden, Newman, Freeman, & Morse (1993) の提唱したスキーマ理論をもとに、BSQ (the Borderline Schemata Questionnaire) を作成した。しかしながら、BSQ でも見捨てられスキーマに関する項目は 3 項目のみであり、見捨てられスキーマを詳細に測定しているとは言い難い。

以上のことから、見捨てられスキーマの言語的内容を測定するためには、信頼性・妥当性が高く、さらに見捨てられスキーマの内容を詳細に測定できる尺度の開発が必要である。

見捨てられスキーマの「特定の認知・感情・行動を誘発する機能」の測定に関しては、見捨てられスキーマが BPD の徴候に与える影響の検討として、次節で詳細に述べることとする。

第 2 節 見捨てられスキーマの作用機序に関するメカニズムの検討の課題

第 2 章で論じたように、BPD の徴候の中核的な要因として見捨てられスキーマがあり、見捨てられスキーマの活性化が認知・感情・行動において様々な機能不全を引き起こすことが考えられる。また、BPD 傾向者は BPD 臨床群と本質的な違いはないと仮定されることから、BPD 傾向者においても、見捨てられスキーマが BPD の様々な徴候に影響を与えている可能性が考えられる。しかしながら、BPD 傾向者を対象として、見捨てられスキ

ーマが本当に BPD の徴候を誘発しているのかというメカニズムを検討した実証研究はほとんど見受けられない。見捨てられスキーマの定義をふまえると、見捨てられスキーマが賦活され、特定の自動思考や感情が喚起され、BPD に特徴的な行動化（BPD の徴候）が起こるという因果モデルについて、検討する必要があると考えられる。

また、見捨てられスキーマについては、第 2 章第 2 節で述べたように、特定の不適応的な対処を誘発していることが指摘されている（Young et al., 2003 伊藤他訳 2008）。しかし、見捨てられスキーマが見捨てられ場面において、特定の不適切な対処を誘発しているかどうかに関するメカニズム研究は見受けられない。見捨てられスキーマが誘発している対処が BPD の徴候を強化していることが明らかとなれば、その対処を修正することにより、見捨てられスキーマの影響がより緩和されて、BPD の徴候が改善することを示唆できると考えられる。

見捨てられスキーマのメカニズムをより詳細に捉えるためには、実験室場面での研究も求められる。見捨てられ場面を設定することによって、見捨てられスキーマが実際に賦活し、どのように特定の認知・感情・行動に影響を与えているのかということ、実験的に測定する必要があるといえる。

さらに、BPD 傾向者において、見捨てられスキーマが BPD の徴候に影響を与えているというメカニズムを実証するためには、見捨てられスキーマをターゲットとする介入を行い、見捨てられスキーマが変容することによって、BPD の徴候が改善するかどうかを検証することが求められる。しかし、見捨てられスキーマにターゲットを絞り、介入を行った実証研究は見受けられない。

第 3 節 BPD 傾向者を対象とした見捨てられスキーマに対する介入の課題

第 2 章で述べたように、近年認知行動療法の立場から、BPD に対して有効な治療法が提唱されており、その効果も実証されてきた。しかしながら、見捨てられスキーマの重要性という観点に立つと、いくつかの課題が挙げられる。

まず、ST (Young et al., 1990, 2003 伊藤他訳 2008) やパーソナリティ障害の認知療法 (Beck & Freeman, 1990) など、BPD に特徴的なスキーマ全般に焦点を当てた介入法の治療効果は示されているものの、見捨てられスキーマに特化した治療法の効果ではない。BPD における見捨てられスキーマの強固さをふまえると、見捨てられスキーマの変容に重点を置いた介入を行うことが効果的であると考えられる。しかし、前述したように、見捨てられスキーマに焦点を当てた介入の効果を検討した研究は見受けられない。

また、ST や DBT は無作為割り付け試験において治療効果が実証されているものの、臨床的な経験から様々な技法がパッケージ化された治療法であり、メカニズム研究からの積み重ねにより構築されたものではない。そして、治療パッケージは広範で、長期にわたる。例えば、DBT においては、基本的に 1 年間の治療パッケージが推奨されている。この理由として、これらの治療法は、BPD 臨床群、その中でも特に自殺企図や自傷行為が顕著な重症群を想定していることが挙げられる。ここで、本論文において BPD 傾向者を対象とする場合、上述のような深刻な行動化を示していない軽症群に該当すると解釈される。よって、軽症群に位置する BPD 傾向者を対象とする場合は、必ずしも既存の治療法に基づく年単位の治療を行う必要はないことが推察される。このことから、BPD 傾向者を対象とした場合は、BPD 傾向者の特徴を踏まえ

たより効率的な支援法を開発する必要がある。そして、見捨てられスキーマを焦点とすることが、支援の効率化の一助となる可能性が考えられる。

第 4 節 本章のまとめ

本章では、BPD および BPD 傾向者に関する先行研究の問題点と、今後どのような研究が必要なのかについて展望した。第 1 節では、スキーマおよび見捨てられスキーマを定義したうえで、見捨てられスキーマの既存の尺度における測定の問題点について述べた。第 2 節では、見捨てられスキーマのメカニズム研究に関する問題点に言及した。第 3 節では、介入研究に焦点を当て、BPD 傾向者に対する介入の課題について、主に実証研究の視点から論じた。

第 4 章 本論文の目的・意義・構成

第 1 節 本論文の目的

これまでの BPD 研究の臨床的見地から，見捨てられ不安の重要性が示唆されてきた。これに関して，認知行動理論の視点からは，見捨てられスキーマが BPD の徴候の重要な要因であることが指摘されている。しかしながら，見捨てられスキーマが BPD の徴候にどのような影響を与えているかという実証研究は未だ見受けられない。

BPD 傾向者における見捨てられスキーマが BPD の徴候に及ぼす影響を明らかにして，見捨てられスキーマに焦点を当てた介入の有効性が示唆されれば，今後の BPD 傾向者への効果的な支援法の発展に寄与できると考えられる。本論文では，BPD 傾向者を対象として，以下の 3 点を目的として研究を行った。

1) 見捨てられスキーマを測定する尺度の開発

第 3 章第 1 節で述べたように，YSQ (Young & Brown, 1990) や BSQ (井沢, 2005) といった従来のスキーマを測定する尺度は，見捨てられスキーマに特化したものではなく，見捨てられスキーマを測定することに関しては課題が残る。

よって，研究 1 においては，見捨てられスキーマの「言語的内容」を測定することを目的として，見捨てられスキーマ尺度 (the Abandonment Schema Questionnaire : ABSQ) の作成および信頼性・妥当性の検討を行った。見捨てられスキーマの言語的内容を測定する妥当性の高い尺度が開発されれば，見捨てられスキーマを実証的に研究していく上で有用なツールとなる。

2) 見捨てられスキーマの作用機序に関するメカニズムの解明

近年の認知行動理論的立場からは、見捨てられ不安に関連する見捨てられスキーマが、BPDのスキーマ群の中でも主要なスキーマであることが指摘されている(Lundh et al., 2001)。しかしながら、見捨てられスキーマが、どのようなメカニズムでBPDの様々な徴候に影響を及ぼしているかという実証的な研究は未だなされていない。

よって、研究2では、見捨てられスキーマがどのようにBPDの徴候に影響を与えるのかについて、BPDの特徴的な徴候である感情不安定性や、対人関係の混乱および衝動的行動といった行動化との関連を質問紙調査によって検討を行った。

また、見捨てられスキーマが不適切な対処を誘発することによって、BPDの徴候が強化することが指摘されているが(Young et al., 2003 伊藤他訳 2008)、見捨てられスキーマからどのような対処が誘発されて、BPDの徴候に影響を与えているかを調べる実証的な研究はなされていない。BPDの認知様式に関する知見を踏まえると、BPD傾向者は、見捨てられ場面において、全か無か思考や他者に対するネガティブな評価などの不適切な認知的対処を行っている可能性がある。また、相手に過度な怒りを表出したり、逆に相手との関係を断絶することに至るような行動的対処を行うことが、見捨てられスキーマを維持していると推測される。よって、研究3では、見捨てられ場面における自動思考レベルの認知的対処や、その場の行動的対処のうち、見捨てられスキーマによってどのような対処行動が誘発されて、BPDの徴候を強化するのかについて、質問紙調査において検討した。

研究4では、実験室場面において、BPD傾向者は、見捨てられ場面で実際に見捨てられスキーマが賦活される

かどうか，また見捨てられスキーマがその場の認知・感情・行動にどのような影響を与えているかどうかについて，量的・質的に検討を行った。

3) 見捨てられスキーマの変容が BPD の徴候の改善に及ぼす効果

見捨てられスキーマが BPD の徴候に与える影響の因果関係を検討するためには，研究 1～4 の知見をふまえて，見捨てられスキーマを操作することで，BPD の徴候が変化するかどうかを調べる必要がある。これまで，見捨てられスキーマに関連する刺激を提示して，その場の生理学的反応や感情反応を調べる研究は見られたが (Lundh et al., 2001)，見捨てられスキーマの変容に焦点を当てた研究は見受けられない。

そこで，研究 5 では，まず見捨てられスキーマの内容特殊性に注目し，認知的再構成の手続きの有用性について 2 週間の短期的介入実験を行い，予備的に検討した。そして，研究 6 では，研究 1～5 の知見を踏まえて，見捨てられスキーマの認知的枠組み全体の変容，および見捨てられスキーマが誘発する対処方略の変容に焦点を当てた 2 ヶ月の長期的介入実験を行い，見捨てられスキーマに焦点を当てた介入の効果を検討した。

第 2 節 本論文の意義

第 1～3 章で展望したように，かねてより BPD の病理においては，見捨てられ不安の高さが中核的なものとして指摘されてきた。そして，BPD 臨床群ほど重篤な症状はないものの，BPD の特徴を有する BPD 傾向者においても，見捨てられ不安が高いことが示唆されている。1990 年代に入り，認知行動理論的な立場から，見捨てられ不安に関連して見捨てられスキーマの重要性に言及されてきた。しかしながら，見捨てられスキーマについて

詳細に検討した研究は見受けられない。本論文において BPD の病理における見捨てられスキーマの重要性が示唆されれば、従来の臨床的知見と実証研究を結ぶ橋渡しとなる知見を提供することができ、有意義であるといえる。

そして、本論文において見捨てられスキーマを測定するツールを開発することは、今後の BPD 傾向者に関する研究における実証研究において有用なツールとなり得る。さらに、BPD 傾向者のアセスメントツールとして、カウンセリング現場にも活用できると考えられる。

また、Young の ST は、無作為割り付け研究においても、治療効果が示されている（Giesen-Bloo, Dyck, Spinhoven, Tilburg, Carmen, Asselt, Kremers, Nadort, Arntz, 2006）。しかし、スキーマに焦点を当てることの有効性について、根拠となるメカニズム研究は乏しい。本研究により、見捨てられスキーマと BPD の徴候との関連が詳細に検討されることは、これらの治療効果の根拠となるような基礎的知見を提供することにつながるといえる。さらに、様々なスキーマ群の中でも、見捨てられスキーマに介入の焦点を当てることが有用である可能性が示されれば、これまで主に臨床的な知見から指摘されていた BPD の見捨てられ不安の高さについて、認知行動理論的な立場から重要性を示唆することができる。

本論文によって、見捨てられスキーマの重要性が実証されれば、ST や Beck & Freeman (1990) のパーソナリティ障害の認知療法といった既存の治療法で示されなかった、見捨てられスキーマに焦点を当てた介入の有効性が示唆されるといえ、BPD 傾向者に対するより効果的な支援法の発展に寄与できると考えられる。

最後に、BPD 傾向者が潜在的に存在することは指摘されているものの、BPD 傾向者に注目し、BPD 傾向者の病理のメカニズムや、有効な支援法について検討した研究

はほとんど見受けられない。BPD 傾向者は様々な不適応を抱えており，将来精神疾患にかかるリスクも高い（Trull et al., 1997）。よって，BPD 傾向者を対象として，病理のメカニズムを検討することは，予防的な観点から有用であり，今後の有効な支援への足掛かりとなり意義深いといえる。本論文では，BPD 傾向者と BPD 臨床群の異同を明らかにし，本論文の研究で得られた知見をもとに，BPD 傾向者の特徴に沿った介入法を考察した。

第 3 節 本論文の構成

本論文の全体的な構成を，Figure 4-1 に示す。第 1 章では，BPD および BPD 傾向者の特徴について概観し，特に見捨てられ不安の重要性について論じた。第 2 章では，認知行動理論の視点から，見捨てられスキーマに関する研究を概観し，見捨てられスキーマの重要性について述べた。第 3 章では，見捨てられスキーマに関して，測定とメカニズム，介入法それぞれについて課題と展望を考察した。

第 4 章では，それまで述べた問題点を踏まえて，本論文の目的・意義・構成を示した。第 5 章では，見捨てられスキーマの言語的な内容（内容特殊性）を詳細に測定するための尺度を作成し，その信頼性・妥当性の検討を行った（研究 1）。第 6 章では，BPD 傾向者の見捨てられスキーマが BPD の徴候に与える影響のメカニズムの解明，および見捨てられスキーマが誘発する対処方略のメカニズムの解明を目的として，見捨てられスキーマ全体の認知的枠組みが，感情の不安定性や行動化（しがみつき・むちゃ食い等）といった BPD の徴候とどのような関連を示すか（研究 2），見捨てられスキーマがどのような対処方略を誘発し，BPD の徴候を強化しているのかについて（研究 3），そのメカニズムに関する調査研究を行った。第 7 章では，実験室場面を用いて，見捨てられ場面

での見捨てられスキーマの賦活の程度や、見捨てられスキーマに関連する認知・感情・行動について、発話思考法を用いて量的・質的に検討した(研究4)。第8章では、BPD傾向者における見捨てられスキーマの変容がBPDの徴候の改善に及ぼす効果を検討することを目的として、見捨てられスキーマに焦点を当てた介入を行い、BPDの徴候の改善に対する効果を検討した(研究5, 研究6)。第9章では、第5~7章で得られた結果をもとに、総括的考察を行った。

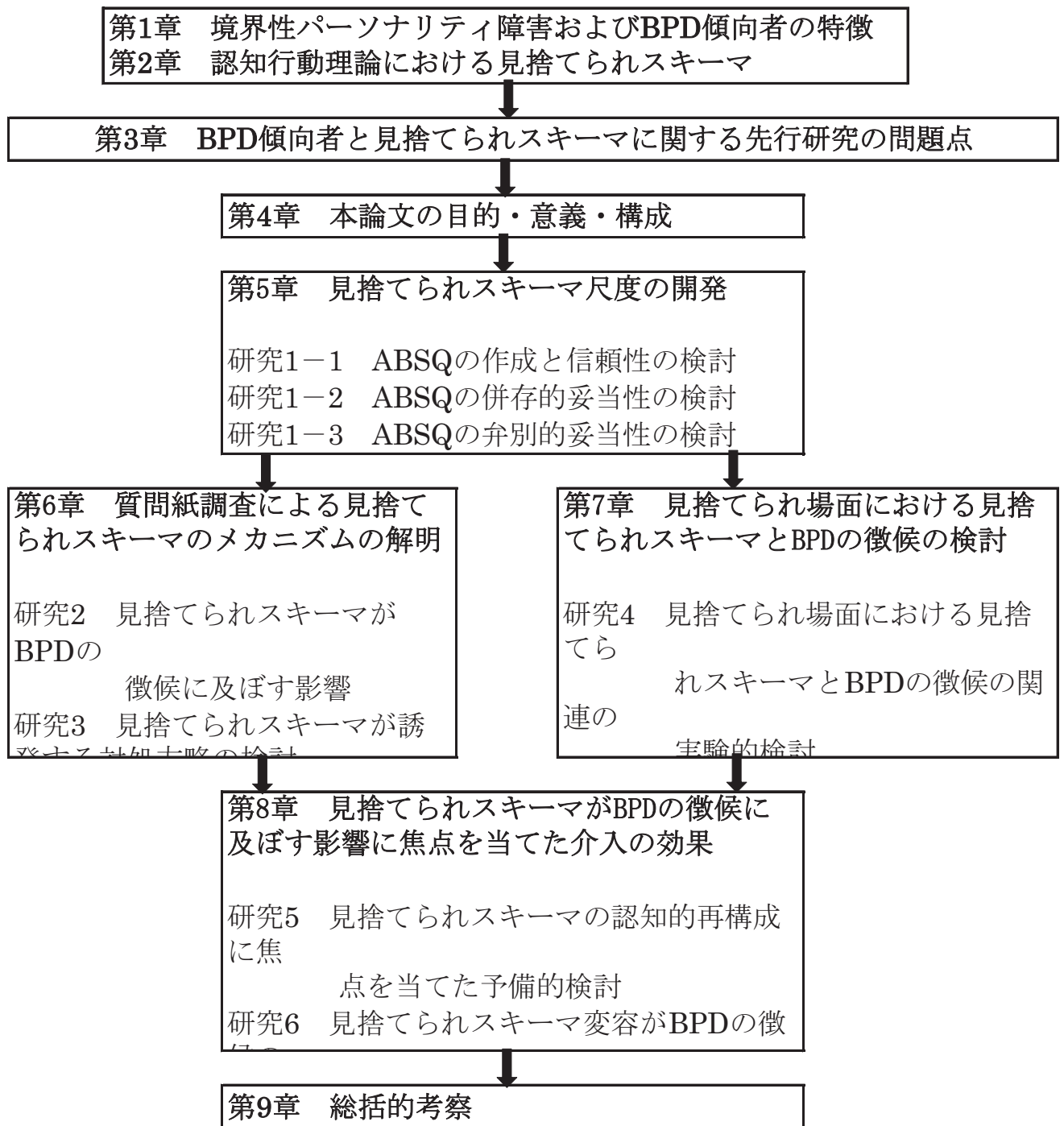


Figure 4-1 本論文の構成

第 5 章 見捨てられスキーマ尺度 (the Abandonment Schema Questionnaire: ABSQ) の開発

第 1 節 本章の目的

BPD の病理研究においては，かねてから臨床的知見により，見捨てられ不安の高さが中核的要因として指摘されてきた。そして，1990 年代より発展してきた認知行動理論の視点からは，見捨てられることに関する認知的枠組みとして，見捨てられスキーマという概念が提唱されてきた (e.g., Cecero et al., 2004; Young et al., 1990, 2003)。これまでの臨床的知見と認知行動理論を併せると，BPD の徴候には，中核的要因として強固な見捨てられスキーマが存在し，そのスキーマがその後の認知・感情・行動に影響を与え，BPD の徴候が維持されていると解釈できる。しかしながら，見捨てられスキーマについて実証的に検討した研究はほとんど見受けられない。

まず，実証研究を行うにあたっては，見捨てられスキーマを詳細に検討する研究が求められるが，既存の尺度では，見捨てられスキーマを詳細に検討するという点に関して信頼性・妥当性に問題がある。そこで，本章では，見捨てられスキーマを詳細に検討する信頼性・妥当性の高い尺度 (見捨てられスキーマ尺度 ; the Abandonment Schema Questionnaire: ABSQ) の開発を目的として，研究 1-1 では ABSQ の作成と信頼性の検討，研究 1-2 では ABSQ の併存的妥当性の検討，研究 1-3 では ABSQ の弁別的妥当性の検討を行った。

なお，本論文では，「見捨てられスキーマ」を，1) 見捨てられることに関する認知的枠組みであり，見捨てられると感じる場面において，特定の認知 (自動思考)・感情・行動を誘発するもの，2) BPD 傾向者において強固であり，内容特殊性をもつもの，と定義している。ABSQ

は、見捨てられスキーマの内容特殊性、つまり「言語的内容」の測定を目的とする。見捨てられスキーマは、BPDに最も特徴的であると考えられるスキーマであり、「見捨てられること」に関して強固で偏倚的な認知的枠組みをもつ。したがって、その内容もかなり特殊性を有するといえる。ABSQでは、BPDに特徴的な内容特殊性を十分抽出できるように、既存の尺度およびBPDの臨床経験がある臨床心理士の協力をもとに、予備調査の段階から内容的妥当性を担保できるよう項目作成を行うこととした。

なお、見捨てられ不安を含むBPDの徴候は、本邦の非臨床群大学生においても十分確認されており、健常範囲の大学生においても、BPD特有の感情的特徴があることが指摘されている（e.g., 細羽・中谷, 2002）。よって、BPD傾向者の見捨てられスキーマを調べることを目的とした本論文において、大学生を対象に研究を行うことは妥当であるといえる。

第2節 研究 1-1 ABSQの作成と信頼性の検討

目的

研究 1-1 では、大学生を対象として、見捨てられスキーマ尺度（ABSQ）を作成することを目的とした。予備調査では、BPDに特有の見捨てられスキーマの特徴を十分抽出するために、既存の見捨てられ不安および見捨てられスキーマ尺度、および先行研究の知見を参考にして研究実施者が項目を作成し、KJ法に準じた方法で分類して、ABSQの項目を作成した。得られた項目については、「スキーマ」の内容的妥当性を担保するために、スキーマの概念に精通しかつBPD臨床経験のある臨床心理士に依頼し、項目の内容的妥当性の評定を依頼した。この予備調査で得られた見捨てられスキーマ項目について、本調査において因子分析を行い、ABSQを作成した。また、ABSQの再検査信頼性の検討も行った。

方法

1. 予備調査 見捨てられスキーマの項目を作成するため、見捨てられ不安や見捨てられスキーマに関する既存の尺度から 61 項目を収集した。項目収集に用いた尺度は (a) 見捨てられ抑うつ尺度 28 項目 (佐々木・小川, 1994), (b) 青年期対象関係尺度の見捨てられ不安項目 7 項目 (井梅・平井・青木・馬場, 2006), (c) 愛着スタイル尺度 18 項目 (中尾・加藤 2004), (d) the Early Maladaptive Schema Questionnaire-Research (EMSQ-R; Cecero, Joshua, Nelson, & Gilie, 2004) の見捨てられ不安に関するスキーマ 5 項目, (e) BSQ (井沢, 2005) の“見捨てられ感”因子 3 項目であった。また、研究実施者が、先行研究の知見を参考に、見捨てられスキーマを表すのにふさわしいと思う 8 項目を新たに作成した。それら 69 項目を、臨床心理学専攻の大学院生 3 名が、KJ 法に準じた方法で分類した。分類された項目から、どのような見捨てられスキーマが働いているかを検討し、見捨てられスキーマに関する 26 項目を作成した。項目作成の際は、原項目の内容を参考にして、見捨てられスキーマの概念に合致するオリジナルな項目を作成した。項目内容に関して十分な妥当性を確保するため、BPD に対して臨床経験をもち、なおかつスキーマの概念に精通している臨床心理士 6 名に項目選定を依頼した。“1. ふさわしい”-“3. ふさわしくない”の 3 件法で評定を求めて、26 項目のうち、評定平均が 2.0 以下であった 6 項目を除外し、最終的に 20 項目が選出された。よって、これらの項目を本調査で用いた。

本調査

2. 対象者と調査時期 2006 年 7 月に、首都圏内の大学生を対象に質問紙調査を行った。有効回答者数は 230 名

(男性 115 名, 女性 114 名, 不明 1 名, 平均年齢 20.48 歳, $SD=1.89$) であった。また, 再検査信頼性の検討を行うため, 2006 年 10 月～2009 年 5 月の期間に, 首都圏内大学生 110 名(男性 60 名, 女性 50 名, 平均年齢 20.39 歳, $SD=1.37$) を対象に, 同一の対象者に対して 2 回にわたって質問紙調査を行った。全ての調査について, 精神科・心療内科に受診中, あるいは心理治療を受けている者は回答を控えるように求めた。なお, 2006 年 7 月に行った調査の対象者と, 再検査信頼性の検討のため行った調査の対象者は全て異なる。

3. 手続き 講義場面での一斉配布による質問紙調査を行った。調査者が質問紙を配布し, その場で回収した。本調査は強制ではないこと, 回答内容は統計的に処理され, 個人情報漏洩する心配のないことを調査前に教示した。再検査信頼性に関しては, 講義場面での一斉調査, もしくは研究実施者からの個人配布により, 同一の対象者に対して ABSQ への回答を 2 回にわたって求めた。2 回目の調査は 1 回目から 3 週～6 週の間隔を空けて行われた。

4. 調査材料 予備調査で作成した見捨てられスキーマ 20 項目を用いた。「以下の質問は, あなたの普段の考え方について調べるものです。以下の質問項目について, あなたの普段の考え方にあてはまる番号を○で囲んでください」と教示を行なった。“1.全く当てはまらない”-“4.とても当てはまる”の 4 件法で回答を求めた。

5. 倫理的配慮 本研究は, 早稲田大学「人間科学部研究倫理委員会」の承認を得て実施した。

結果と考察

1. G-P 分析 まず, 項目の判別力の信頼性を調べるために, 見捨てられスキーマに関する 20 項目の総得点を算出し, 全体の 25% を基準として得点高群 (60 名, 平均

値 47.95, $SD=6.10$), 低群 (60 名, 平均値 24.68, $SD=4.51$) に分け, G-P 分析を行った。高群と低群について t 検定を行った結果, 全ての項目において, 高群は低群より有意に見捨てられスキーマに関する項目の得点が高いことが示された ($t(118) = 5.72 \sim 13.74, p < .001$)。このことから, 全ての項目において, 判別力の高さが確認されたといえる。

2. 探索的因子分析 予備調査で得られた見捨てられスキーマに関する 20 項目に対して, 最尤法 Promax 回転による因子分析を行った。その結果, 固有値 1 以上の因子が 3 因子抽出された。解釈のしやすさ, スクリーンプロットの落差から, 3 因子構造が妥当であると考えられた。そこで, 3 因子構造を仮定し, 再度最尤法 Promax 回転による因子分析を行った。因子負荷量が .40 に満たなかった 2 項目を削除し, 再度同様の手続きを行った。因子負荷量が .40 以上の因子が二つ以上ある多重負荷項目は示されなかった。最終的に, 解釈可能な 3 因子 18 項目が抽出された。因子分析の結果と因子間相関を Table 5-1 に示す。各因子の因子間相関について中程度の値が得られた。BPD に関連するスキーマ群は, 相互に密接に関連し合っていることが指摘されているため (井沢, 2005), 各因子間の相関は無視できないといえる。よって, 因子間の相関を仮定する Promax 回転の結果を採用することが妥当であると判断した。因子分析の結果, 最終的に抽出された 18 項目を見捨てられスキーマ尺度 (the Abandonment Schema Questionnaire: ABSQ) と命名した。

Table5-1 見捨てられスキーマ項目の最終的因子分析結果，最尤法プロマックス回転($\alpha = .89$)

項目内容	抽出因子			共通性
	I	II	III	
第一因子 恒常的な見捨てられ・孤独($\alpha = .86$)				
私は生まれつき一人ぼっちだ。	.87	-.06	-.24	.52
自分のことを誰も助けてくれないだろう。	.78	-.10	-.00	.56
私はいつも見捨てられる。	.73	-.00	.06	.59
人は簡単に私を裏切る。	.60	.03	.13	.51
私の人間関係はいつもうまくいかない。	.57	-.08	.23	.50
人はいったん自分のところから去っていったら，もう二度と戻ってこない。	.46	.13	.12	.38
その人から好かれるようなことをしないと，人は私の元を去っていく。	.44	.20	.15	.44
第二因子 親密な関係に対するしがみつき・同一視($\alpha = .83$)				
人は私が大切に思うのと同じくらい，私のことを大切に思わなければならない。	.11	.70	-.18	.44
親しい人は私が必要ときに側にいるべきだ。	-.10	.70	.04	.46
親しい人は私とできるだけたくさん時間を過ごすべきだ。	-.05	.69	.12	.51
親しい人が私から離れていったら，私は生きていけない。	-.08	.65	.06	.44
私には常に親しい二者関係が必要だ。	.07	.62	-.13	.34
親しい人は，私の一部である。	-.17	.60	.04	.33
私は全ての人に好かれなければならない。	.09	.49	.06	.32
誰かが私の考えを否定するということは，私のことが嫌いであるということだ。	.25	.41	-.11	.24
第三因子 他者からの好意に対するあきらめ($\alpha = .81$)				
私が必要としていても，人は私から離れていく。	.07	-.17	.95	.85
人は私が思う以上に，私のことを想ってはくれない。	.05	.18	.60	.56
私が親密になりたいと思うほど，人はうんざりして離れていく。	.22	.14	.46	.50
	因子間相関	I	II	III
	I	-	.40	.65
	II		-	.56

第1因子には，「私は生まれつき一人ぼっちだ」など，人はいずれ自分の元から離れていき，自分は孤独になるだろうという，恒常的な見捨てられ感を示す項目が含まれている。よって，この因子を，「恒常的な見捨てられ・孤独」因子と命名した。この恒常的な見捨てられ・孤独因子は，BSQの“見捨てられ感スキーマ”にある「私は人から必要とされるような人間ではないだろう」といった項目と関係する内容であり，対象が誰であっても見捨て

られ感を持つ可能性がある，と解釈できる。

第 2 因子には，「人は私が大切に思うのと同じくらい，私のことを大切に思わなければならない」など，親密な関係に対する過度なしがみつきの同一視が認められる項目が含まれている。よって，この因子を，「親密な関係に対するしがみつきの同一視」因子と命名した。恒常的な見捨てられ・孤独因子とは異なり，親密な他者という対象を想定しているスキーマである。よって，BPD の病態として挙げられている親密な対人関係上の問題に関連しているスキーマであると考えられる。

第 3 因子には，「私が必要としても，人は私から離れていく」など，他者に対する一方向的な自分の思いや，他者の自分への好意に対する過小評価を示す項目が含まれている。よってこの因子を，「他者からの好意に対するあきらめ」因子と命名した。親密な関係に対するしがみつきの同一視因子と同様に，親密な（あるいは親密になりたい）対象が想定されている。Cecero et al. (2004) は，Young の見捨てられ／不安定スキーマについて，“重要な他者は，自分よりも魅力的で，知的で，安定した人物の元に去ってしまうだろうとする信念”と説明しているが，他者からの好意に対するあきらめ因子はこれに近い概念であると考えられる。

これまでの BPD に関連するスキーマの尺度構成では，見捨てられスキーマは 1 因子のみの構造である場合が多かったが，本研究で因子分析を行った結果，3 因子構造であった。これらのことから，ABSQ は，見捨てられスキーマを詳細に検討するという本研究の目的に添った尺度であるといえる。

3. 内的整合性の検討 信頼性を検討するために，Cronbach の α 係数を算出したところ，ABSQ 全体で $\alpha = .89$ ，「恒常的な見捨てられ・孤独」因子で $\alpha = .86$ ，「親密な関係に対するしがみつきの同一視」因子で $\alpha = .83$ ，

「他者からの好意に対するあきらめ」因子で $\alpha = .81$ であった。したがって、高い内的整合性が得られたといえる。

4. 再検査信頼性の検討 ABSQ の再検査信頼性の検討を行うため、1 回目の調査と 2 回目の調査についての信頼性係数を求めたところ、ABSQ 全体で $r = .85$ 、「恒常的な見捨てられ・孤独」因子が $r = .83$ 、「親密な関係に対するしがみつき・同一視」因子が $r = .77$ 、「他者からの好意に対するあきらめ」因子が $r = .77$ であった。「親密な関係に対するしがみつき・同一視」因子と「他者からの好意に対するあきらめ」因子の信頼性係数が若干低いものの、.70 以上あることから、許容できる範囲であると考えられる。また、ABSQ 全体では .85 と高い信頼性係数が得られたことから、ABSQ の十分な再検査信頼性は示されたといえる。

調査 1 の結果から、ABSQ について、内的整合性、再検査信頼性それぞれが十分な値であることが確認された。

第 3 節 研究 1-2 ABSQ の併存的妥当性の検討

目的

研究 1-1 で信頼性が確認された ABSQ の併存的妥当性の検討を目的とした。併存的妥当性を検討する指標として、見捨てられ不安を測る尺度と、BPD 傾向を測る尺度を使用した。見捨てられ不安の根底には見捨てられスキーマがあると考えられるため、ABSQ の得点と見捨てられ不安を測る尺度の得点は高い有意な正の関連を示すことが仮定される。また、見捨てられスキーマは BPD 傾向者の徴候と関連があることが考えられるため、ABSQ の得点と BPD 傾向を測る尺度の得点は中程度の有意な正の関連を示すことが仮定される。さらに、BPD と共存率が高いとされる抑うつの影響を統制し、見捨てられスキーマと見捨てられ不安および BPD 傾向との関連性をよ

り明確に検討するために、抑うつを測定する尺度の得点を統制した偏相関分析を行った。

方法

- 1. 対象者と調査時期** 2006年7月～2009年5月に、首都圏内の大学生を対象に質問紙調査を行った。有効回答者数は222名（男性115名，女性105名，不明2名，平均年齢19.83， $SD=2.11$ ）であった。全ての調査について、精神科・心療内科に受診中，あるいは心理治療を受けている者は回答を控えるように求めた。
- 2. 手続き** 講義場面での一斉配布による質問紙調査を行った。調査者が質問紙を配布し，その場で回収した。本調査は強制ではないこと，回答内容は統計的に処理され，個人情報漏洩する心配のないことを調査前に教示した。
- 3. 調査材料** (a) ABSQは，調査1で作成した尺度で，見捨てられスキーマに関する内容18項目から構成される。4件法で回答を求めた。ABSQの併存的妥当性を検討するための指標の詳細は，以下の通りである。まず，(b) 愛着スタイル尺度の見捨てられ不安項目（中尾・加藤，2004）は，ABSQと見捨てられ不安との関連を測るために用いた。一般他者を想定した成人の愛着スタイルを測る尺度の中の，見捨てられ不安に関する内容18項目から構成される。“1全く当てはまらない”－“7.非常によく当てはまる”の7件法で回答を求めた。十分な信頼性・妥当性が確認されている。(c) DSM-IV-TR (Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders 4th ed Text Revision) の見捨てられ不安の単項目は，ABSQと見捨てられ不安との関連を測るために用いた。DSM-IV-TRのBPD診断項目の見捨てられ不安に関連する1項目について，「はい」「いいえ」の2件法で回答を求めた。(d) 日本語版 the Personality Diagnostic Questionnaire-Revise: PDQ-R (上原・佐藤・

坂戸・佐藤，1996)のBPD項目は，ABSQとBPD傾向との関連を測るために用いた。パーソナリティ障害の診断を目的として作成された質問紙のBPD診断項目で，12項目から構成される。「はい」「いいえ」の2件法で回答を求めた。十分な信頼性・妥当性が確認されている。(e) the Zung Self-Rating Depression Scale: SDS (福田・小林，1973)の自殺項目を除いた19項目は，抑うつ程度を測るために用いた。現在の抑うつ状態を測るための尺度である。“1.ほとんどない”-“4.ほとんどいつもある”の4件法で回答を求めた。十分な信頼性・妥当性が確認されている。

以上の各尺度の提示順序に関しては，カウンターバランスをとった。

4. 倫理的配慮 本研究は，早稲田大学「人間科学部研究倫理委員会」の承認を得て実施した。

結果と考察

ABSQ得点と各尺度の得点の相関係数，平均値および標準偏差をTable5-2に示す。

Table5-2 ABSQと見捨てられ不安項目，PDQ-R，SDSのPearsonの積率相関係数，平均値(M)，標準偏差(SD)

		見捨てられ不安	PDQ-R	SDS	M	SD
ABSQ	合計点	.75***	.56***	.47***	35.02	8.21
	F1	.61***	.58***	.45***	12.73	4.12
	F2	.59***	.30***	.27***	15.99	4.09
	F3	.60***	.48***	.43***	6.31	1.99

*** $p < .001$ ** $p < .01$

ABSQ= the Abandonment Schema Questionnaire 見捨てられ不安=愛着スタイル尺度 見捨てられ不安項目

F1=恒常的な見捨てられ・孤独

SDS=the Zung Self-rating Depression Scale

F2=親密な関係に対するしがみつき・同一視

PDQ-R=the Personality Diagnostic Questionnaire-Revised

F3=他者からの好意に対するあきらめ

1. 併存的妥当性の検討 ABSQ の併存的妥当性を確認するため、ABSQ 合計点と見捨てられ不安項目得点との相関を求めた。その結果、ABSQ と見捨てられ不安項目間に有意な高い正の相関が得られた ($r = .75, p < .001$)。さらに、ABSQ の各下位因子についても、有意な正の相関が得られた ($p < .001$)。相関係数は、各下位因子が近接した値であった ($r = .59 \sim .61$)。また、抑うつの影響を統制するために、ABSQ 合計点と見捨てられ不安項目得点について、SDS 得点を統制した偏相関を求めた。その結果、有意な高い正の相関が得られた ($r = .67, p < .001$)。このことから、ABSQ は見捨てられ不安と十分な関連を示したといえる。加えて、DSM-IV の見捨てられ不安項目について、「はい」と答えた群 (41 名, ABSQ 平均値 = 40.37, $SD = 8.09$) と「いいえ」と答えた群 (173 名, ABSQ 平均値 = 34.99, $SD = 8.00$) に分け、ABSQ 合計点に関して一元配置の分散分析を行った。その結果、群間で有意差が得られた ($F(1, 212) = 11.16, p < .001$)。見捨てられ不安項目について「はい」と答えた群の方が、「いいえ」と答えた群よりも有意に ABSQ 得点が高かった。また、ABSQ の各下位因子においても、同様に分散分析を行った。その結果、「恒常的な見捨てられ・孤独」因子 ($F(1, 212) = 5.30, p < .05$)、「親密な関係に対するしがみつき・同一視」因子 ($F(1, 212) = 8.52, p < .001$)、「他者からの好意に対するあきらめ」因子 ($F(1, 212) = 8.36, p < .001$) 全ての得点に関して群間で有意差が得られた。「はい」と答えた群の方が「いいえ」と答えた群よりも有意に得点が高かった。よって、BPD 病理の特徴として示されている見捨てられ不安の内容に関しても、見捨てられスキーマと関連があることが確認された。

次に、ABSQ と PDQ-R 得点の相関係数について、ABSQ 合計点と PDQ-R 得点は中程度の相関を示した ($r = .56, p < .001$)。最も相関係数が高かったのは「恒常的な見捨

てられ・孤独」因子であり ($r = .58, p < .001$), 最も低かったのは「親密な関係に対するしがみつき・同一視」因子であった ($r = .30, p < .001$)。また, ABSQ 合計点と PDQ-R 得点について, SDS の得点を統制した偏相関係数を算出したところ, 有意な中程度の正の相関が得られた ($r = .45, p < .001$)。この結果から, 抑うつの影響を除外しても, 見捨てられスキーマと BPD 傾向には有意な関連が示された。

また, ABSQ 合計点と SDS 得点については, 有意な中程度の正の相関が示された ($r = .47, p < .001$)。これは, 抑うつと BPD との共存率が高いという先行研究 (e.g., McGlashan, Grilo, Skodol, Gunderson, Shera, Morey, Zanarini, & Stout, 2000) から予測される結果であるといえる。

以上のことから, ABSQ の得点は, 見捨てられ不安の得点や BPD 傾向の得点, 抑うつの得点と有意に関連することが示された。よって, 仮説は概ね支持されたことから, ABSQ の併存的妥当性は確認されたといえる。さらに, 相関分析の結果から, 見捨てられ不安については ABSQ の各下位因子が同程度の関連性を示しているが, BPD 傾向については「恒常的な見捨てられ・孤独」因子が最も関連が強い可能性が示された。

第 4 節 研究 1-3 ABSQ の弁別的妥当性の検討

目的

研究 1-3 では, ABSQ の弁別的妥当性について検討を行った。まず, ABSQ の弁別的妥当性を示すのに必要な尺度として, 井沢 (2005) が作成した BPD に特徴的なスキーマを測定する BPD のためのスキーマ同定質問紙 (the Borderline Schemata Questionnaire: BSQ) が挙げられる。この尺度は, BPD に特徴的なスキーマ全般を測定する尺度である。BSQ は, 見捨てられスキーマに限

らず広範なテーマを測定しているため、見捨てられ不安との関連は ABSQ の方が強いことが予測される。また、もう一つ弁別性の検討が必要な尺度として、愛着スタイル尺度の見捨てられ不安項目（井梅・平井・青木・馬場，2006）が挙げられる。見捨てられスキーマは見捨てられ不安と密接に関連しているが、認知行動理論にのっとると、見捨てられ不安は見捨てられスキーマが賦活された結果であると考えられる。よって、見捨てられスキーマは、BPD の徴候のより中核的な要因であると仮定されることから、見捨てられ不安よりも BPD 傾向との関連が強いことが予測される。

以上の 2 つの尺度との弁別性を検討することを、研究 1-3 のエンドポイントとした。

方法

1. 対象と調査時期 2009 年 4~5 月に、首都圏内の大学生を対象に質問紙調査を行った。有効回答者数は、222 名（男性 115 名，女性 105 名，不明 2 名，平均年齢 19.83 歳， $SD=2.11$ ）であった。全ての調査について、精神科・心療内科に受診中、あるいは心理治療を受けている者は回答を控えるように求めた。

2. 手続き 講義場面での質問紙調査を行った。調査者が質問紙を配布し、その場で回収した。本調査は強制ではないこと、回答内容は統計的に処理され、個人情報漏洩する心配のないことを調査前に教示した。質問紙の回答所要時間は 15 分程度であった。

3. 調査材料 弁別的妥当性の検討のために使用した尺度は以下の通りである。(a) ABSQ18 項目。十分な信頼性・妥当性が確認されている。4 件法で回答を求めた。(b) PDQ-R の BPD に関する項目（上原ら，1996）。「はい」「いいえ」の 2 件法で回答を求めた。十分な信頼性・妥当性が確認されている。BPD 傾向を測定するために用

いた。(c) SDS (福田・小林, 1973)。抑うつ傾向を測るための尺度である。倫理的配慮から、自殺項目は削除し、19項目を実施した。4件法で回答を求めた。十分な信頼性・妥当性が示されている。(d) BPDのためのスキーマ同定質問紙(BSQ;井沢, 2005)。BPDに特徴的なスキーマを測るための尺度である。20項目からなる。原尺度は“あてはまる”, “あてはまらない”の2件法であるが、本研究では多変量解析を目的としているため、“1まったくあてはまらない” - “4.とてもあてはまる”の4件法に変更して回答を求めた。十分な信頼性・妥当性が確認されている。(e) 愛着スタイル尺度の見捨てられ不安項目(井梅ら, 2006)。7件法で回答を求めた。十分な信頼性・妥当性が確認されている。

4. 倫理的配慮 本研究は、早稲田大学「人間科学部研究倫理委員会」の承認を得て実施した。

結果と考察 各尺度の平均値と標準偏差をTable5-3に示す。

Table 5-3 ABSQ, PDQ-R, 見捨てられ不安項目, BSQ, SDSの平均値と標準偏差

N=213		
	M	SD
ABSQ	35.08	8.27
F1	12.76	4.21
F2	15.99	4.06
F3	6.33	2.01
PDQ-R	4.03	2.33
見捨てられ不安	59.51	20.81
BSQ	38.47	11.17
見捨てられ感	5.97	2.06
依存	4.36	1.38
情緒喪失	3.44	1.48
無能感	6.08	2.18
個性化の欠如	7.53	2.69
不信	5.36	1.83
愛されるに値しない	5.73	2.39
SDS	40.44	7.81

ABSQ= the Abandonment Schema Questionnaire

F1=恒常的な見捨てられ・孤独

F2=親密な関係に対するしがみつき・同一視

F3=他者からの好意に対するあきらめ

PDQ-R=the Personality Diagnostic Questionnaire-Revised

見捨てられ不安=愛着スタイル尺度 見捨てられ不安項目

BSQ= the Borderline personality Schema Questionnaire

SDS=the Zung Self-rating Depression Scale

BPDとの合併率が高いとされている抑うつの影響を統制するため、SDSの得点を統制した偏相関分析を行った。その結果を、Table 5-4に示す。

Table5-4 SDSを統制したABSQとBSQ, 見捨てられ不安項目, PDQ-Rとの偏相関係数

	BSQ						見捨てられ不安	PDQ-R
	見捨てられ感	情緒喪失	無能感	個性化の欠如	不信	愛されるに値しない		
ABSQ								
All	.62***	.50***	.50***	.44***	.53***	.51***	.67***	.45***
F1	.69***	.70***	.45***	.56***	.53***	.63***	.50***	.48***
F2	.24***	.07	.32***	.13*	.28***	.13*	.55***	.21**
F3	.55***	.42***	.39***	.33***	.41***	.45***	.49***	.36***

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$

ABSQ= the Abandonment Schema Questionnaire

F1=恒常的な見捨てられ・孤独

F2=親密な関係に対するしがみつきの同一視

F3=他者からの好意に対するあきらめ

PDQ-R=the Personality Diagnostic Questionnaire-Revised

見捨てられ不安=愛着スタイル尺度 見捨てられ不安項目

BSQ= the Borderline personality Schema Questionnaire

偏相関分析の結果, ABSQ得点はBSQ得点と比べて, 見捨てられ不安項目との偏相関係数が高い値であった (ABSQ: $r = .67$, $p < .001$, BSQ: $r = .46$, $p < .001$)。相関係数の差の検定を行ったところABSQの方がBSQよりも有意に相関係数が高かった ($p < .001$)。よって, ABSQはBSQと比べて見捨てられ不安と関連が強い概念を測定していることが示された。

また, ABSQ得点は見捨てられ不安項目得点と比べて, PDQ-R得点との偏相関係数が高い値であった (ABSQ: $r = .45$, $p < .001$, 見捨てられ不安: $r = .30$, $p < .001$)。相関係数の差の検定を行ったところ, ABSQと見捨てられ不安項目の偏相関係数の差が有意傾向であった ($p < .10$)。この結果から, 見捨てられスキーマは, 見捨てられ不安と比べると, よりBPD傾向と強い関連を示したと解釈できる。

さらに, ABSQ得点とBSQ得点は, PDQ-Rと同程度の相関係数を示した (BSQ: $r = .40$, $p < .001$)。よって, 見捨てられスキーマに測定概念を特化したABSQにおいても, BPD傾向との関連性を十分に確認できることが示された。

本研究の結果から、仮説は概ね支持された。よって、ABSQが見捨てられスキーマを測定することに特化した尺度であり、既存の尺度と弁別は可能であると考えられる。また、BPDに特徴的なスキーマ全般を測る尺度(BSQ)と同程度に、BPD傾向と有意な関連を示すことが明らかとなった。これは、見捨てられスキーマとBPDの徴候との関連性が強く、見捨てられスキーマがBPDに特徴的なスキーマの中でも中核的な要因となっていることが推察される結果である。

第5節 本章の考察

本章では、見捨てられスキーマ尺度(ABSQ)を作成し、その信頼性・妥当性を検討した。研究1-1では、予備調査において見捨てられスキーマの内容的特殊性を十分考慮した項目を作成し、因子分析を行った。その結果、ABSQについて18項目3因子が抽出され、高い内的整合性が得られた。研究1-2では、ABSQの併存的妥当性の検討を行った。その結果、抑うつの影響を統制しても、ABSQの得点と見捨てられ不安およびBPD傾向を測る尺度の得点との相関係数は有意であった。よって、ABSQの併存的妥当性は概ね確認された。研究1-3では、既存の尺度である、BPDのスキーマを測定する尺度(BSQ)および見捨てられ不安を測定する尺度(愛着スタイル尺度の見捨てられ不安項目)との弁別性を検討した。その結果、ABSQの得点はBSQの得点よりも、見捨てられ不安項目の得点との相関係数が有意に高い値であった。また、見捨てられ不安を測定する尺度の得点よりも、PDQ-Rの得点との相関係数が有意に高い値であった。よって、ABSQは、既存の尺度よりもBPD傾向者における見捨てられスキーマの測定に特化しており、弁別性は示されたといえる。

既存の見捨てられスキーマを測定する尺度は、BPDの

様々なスキーマに関連する因子の中の1因子として扱われており、項目内容も少なかった。また、パーソナリティ障害のスキーマを測定する尺度として広く用いられているYSQは、追試の結果では、想定された因子数とは異なった因子数が抽出されており(Oei & Baranoff, 2007)、見捨てられスキーマを測定するうえでは十分な信頼性が示されているとは言い難い。研究1において、見捨てられスキーマについて詳細に検討することが可能であり、信頼性・妥当性が高い尺度が新たに作成されたといえる。

また、ABSQの得点は、BPDのスキーマ全般を測定するBSQ得点と比較しても、BPD傾向を測定するPDQ-R得点との相関係数の値が同程度であった。加えて、見捨てられ不安を測定する尺度の得点よりもPDQ-Rの得点との相関係数の値が高く、見捨てられ不安と比べてもBPDの傾向と密接に関連していることが示された。これは、見捨てられスキーマの重要性を示した結果であり、見捨てられスキーマを研究する有用性について改めて示唆されたといえる。

今後は、ABSQを用いて、見捨てられスキーマがBPDの徴候に与える影響に関するメカニズム研究を行うことが求められる。また、ABSQは、大学生のBPD傾向者における見捨てられスキーマの強度を測定するアセスメントとしても用いることができ、学生相談等のカウンセリングの場においても、有効なツールとなり得ると考えられる。

研究2以降では、研究1で開発したABSQを用いて、見捨てられスキーマのメカニズムおよび見捨てられスキーマがBPDに徴候に及ぼす影響について検討した。

第 6 章 質問紙調査による見捨てられスキーマの作用機序に関するメカニズムの検討

第 1 節 本章の目的

見捨てられスキーマについて，先行研究の臨床的な知見と認知行動理論を併せると，見捨てられスキーマが賦活されることによって，感情の不安定性や対人場面での極端な行動，過食等の衝動行動につながっているという因果関係が考えられる。そして，見捨てられスキーマが見捨てられ場面での不適切な対処を誘発して，恒常的な BPD の徴候が維持されると推測される。しかし，これらのメカニズムについて実証的に検討した研究は見受けられない。よって，本章では，見捨てられスキーマが BPD の徴候に及ぼす影響の検討（研究 2），および見捨てられスキーマがどのような不適切な対処して，BPD の徴候を強化しているかの検討を行い（研究 3），見捨てられスキーマが BPD の徴候に影響を与える詳細なメカニズムを検討することを目的とした。

見捨てられスキーマに関するこれらのメカニズムを検討することは，見捨てられスキーマへの介入の必要性を示すことにつながると考えられる。また，見捨てられスキーマが誘発する不適切な対処方略を明らかにすることによって，見捨てられスキーマが BPD の徴候に及ぼす影響に関する包括的なメカニズムを解明することができると考えられる。さらに，Beck & Freeman（1990）のパーソナリティ障害の認知療法や，ST（Young et al., 1990, 2003）といった既存のスキーマを対象とした治療法が，どのように BPD の症状改善につながっているのかという治療メカニズムに関しても，一定の示唆を与えることができるだろう。

第 2 節 研究 2 見捨てられスキーマが BPD の徴候に及ぼす影響

目的

見捨てられスキーマが BPD の徴候に与える影響の詳細な検討を行った。BPD 傾向者の徴候である、感情の不安定性、しがみつき・怒りの表出・むちゃ食いなどの行動化に焦点をあてて、見捨てられスキーマの影響を相関分析、回帰分析、パス解析によって検討した。なお、加藤（2005）は、感情不安定性を BPD の行動化の要因と捉え、感情の不安定性→BPD の行動化というモデルを立て検討を行っている。よって、研究 2 では、見捨てられスキーマ→感情の不安定性→行動化という因果関係を仮定し、確認的にパス解析によって検討を行った。

また、BPD は女性に有意に多くみられるという報告が多数あるため（e.g., Johnson et al., 2003）、女性と男性では BPD 傾向者の徴候が異なる可能性もある。性差がある場合は、男女別に分析を行う必要があるため、性差についても検討した。

方法

1. 対象者と調査時期 2006 年 10 月～11 月に、首都圏内の大学生を対象に質問紙調査を行った。有効回答者数は 253 名（男性 158 名，女性名 95 名，平均年齢 21.02 歳， $SD= 2.44$ ）であった。精神科・心療内科に受診中，あるいは心理治療を受けている者は回答を控えるように求めた。

2. 手続き 講義場面での一斉配布による質問紙調査を実施した。調査者が質問紙を配布し，その場で回収した。本調査は強制ではないこと，回答内容は統計的に処理され，個人情報漏洩する心配のないことを調査前に教示した。

3. 調査材料 (a) ABSQ は、見捨てられスキーマを測るために用いた。18項目から構成される。4件法で回答を求めた。研究1で信頼性・妥当性は確認されている。

(b) 日本語版感情不安定性尺度 (the Affective Lability Scale: ALS; 加藤, 2005) 43項目は、BPDの中核症状とされる感情の不安定性を測るために用いた。ALSは、第1因子「不安・抑うつ揺らぎ」16項目、第2因子「高揚感の揺らぎ」11項目、第3因子「怒りの揺らぎ」10項目、第4因子「睡眠の揺らぎ」6項目の、計4因子から構成される。“まったくあてはまらない”～“とてもあてはまる”の4件法で回答を求めた。加藤(2005)によって、十分な信頼性・妥当性が確認されている。

(c) 日本語版 PDQ-R (上原ら, 1996) の BPD 項目は、BPD 傾向を測るために用いた。なお、PDQ-R の行動化項目については、多変量分析を目的とするため、“全くない”, “1ヶ月に1回程度”, “1週間に1回程度”, “1週間に2~3回程度”, “ほとんど毎日”の5件法に変更して回答を求めた。

(d) Structured clinical interview for DSM-IV Axis II (SCID-II; First, Gibbon, Spitzer, Williams, & Benjamin, 1997 高橋監訳, 2002) より、行動的側面に関する7項目(しがみつき, 不安定な対人関係, 自殺念慮, 自傷行為, かんしゃく, 攻撃, 易怒性)を抜粋して、BPDの行動的側面の徴候を測るために用いた。SCIDの項目内容にある行動の頻度については、PDQ-Rと同様に5件法で回答を求めた。

以上の各尺度の提示順序に関しては、カウンターバランスをとった。

4. 倫理的配慮 本研究は、早稲田大学「人間科学部研究倫理委員会」の承認を得て実施した。

結果と考察

1. 性差 ABSQ得点とPDQ-R得点については、性差は

認められなかった(男性 ABSQ 平均値 33.41, 女性 ABSQ 平均値 34.57, $t(250) = -.122, n.s.$; 男性 PDQ-R 平均値 3.79, 女性 PDQ-R 平均値 3.86, $t(251) = -.23, n.s.$)。よって, 分析は男女分けずに行うこととした。BPD は女性が有意に多くみられるとされているが, 大学生を対象として PDQ-R を用いた研究においては, 性差が有意ではなく, むしろ男性の方が多かったとする報告もある (Trull, 1995)。今後は, 性差について, 対象の年齢層や文化差も考慮する必要があるだろう。

2. 相関分析・回帰分析 ABSQ 得点と各尺度の得点の相関係数, 平均値および標準偏差を Table 6-1 に示す。

Table6-1 ABSQとALS, PDQ-R, SCIDのPearsonの積率相関係数, 平均値(M), 標準偏差(SD)

ABSQ	ALS			PDQ-R		SCID		M	SD
	合計点	不安抑うつ の揺らぎ	高揚感の揺らぎ	怒りの揺らぎ	睡眠の揺らぎ	合計点	行動化得点		
合計点	.69***	.73***	.57***	.57***	.45***	.49***	.16*	33.84	9.60
F1	.57***	.61***	.44***	.50***	.38***	.50***	.08	10.84	4.24
F2	.46***	.48***	.42***	.38***	.27***	.22***	.19**	11.21	3.37
F3	.63***	.67***	.54***	.48***	.46***	.46***	.13*	6.35	2.25

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$

ABSQ=the Abandonment Schema Questionnaire

PDQ-R=the Personality Diagnostic Questionnaire-Revised

F1=恒常的な見捨てられ・孤独

ALS=the Affective Liability Scale

F2=親密な関係に対するしがみつき・同一視

F3=他者からの好意に対するあきらめ

ABSQ 合計点と ALS 合計点については、 $r = .69$ ($p < .001$) という高い値の相関係数が得られた。

さらに ABSQ の各下位因子を独立変数、ALS の各下位因子を従属変数として、強制投入法による重回帰分析を行った (Table 6-2)。

Table 6-2 ALSの各因子を従属変数とする重回帰分析

		ALS			
		不安抑うつ の揺らぎ	高揚感 の揺らぎ	怒りの 揺らぎ	睡眠の 揺らぎ
$R(R^2)$.73(.54) ^{***}	.59(.35) ^{***}	.57(.33) ^{***}	.47(.22) ^{***}
ABSQ	F1	.27 ^{***}	.10	.34 ^{***}	.07
	F2	.29 ^{***}	.26 ^{***}	.26 ^{***}	.12 [†]
	F3	.35 ^{***}	.36 ^{***}	.12	.36 ^{***}

*** $p < .001$ p[†] < .10

ABSQ= the Abandonment Schema Questionnaire

F1=恒常的な見捨てられ・孤独

F2=親密な関係に対するしがみつき・同一視

F3=他者からの好意に対するあきらめ

ALS=the Affective Liability Scale

注)Table内の数値は標準偏回帰係数

その結果、ALSの「不安・抑うつ
の揺らぎ」因子に対しては、ABSQの3因子すべてが有意な標準偏回帰係数を示した。このことから、見捨てられに関するどのスキーマが賦活されても、不安や抑うつ
の揺らぎが生じやすいと解釈できる。「高揚感の揺らぎ」因子には、ABSQの「親密な関係に対するしがみつき・同一視」因子と「他者からの好意に対するあきらめ」因子が有意な影響を示していた。このことから、見捨てられスキーマの中でも、親密な他者が想定される内容のスキーマによって、高揚感の揺らぎが起こると推測される。「怒りの揺らぎ」因子には、ABSQの「恒常的な見捨てられ・孤独」因子が最も有意な影響を示した。恒常的な見捨てられ感を抱えている者は、怒り感情が起きやすいことが示唆された。「睡

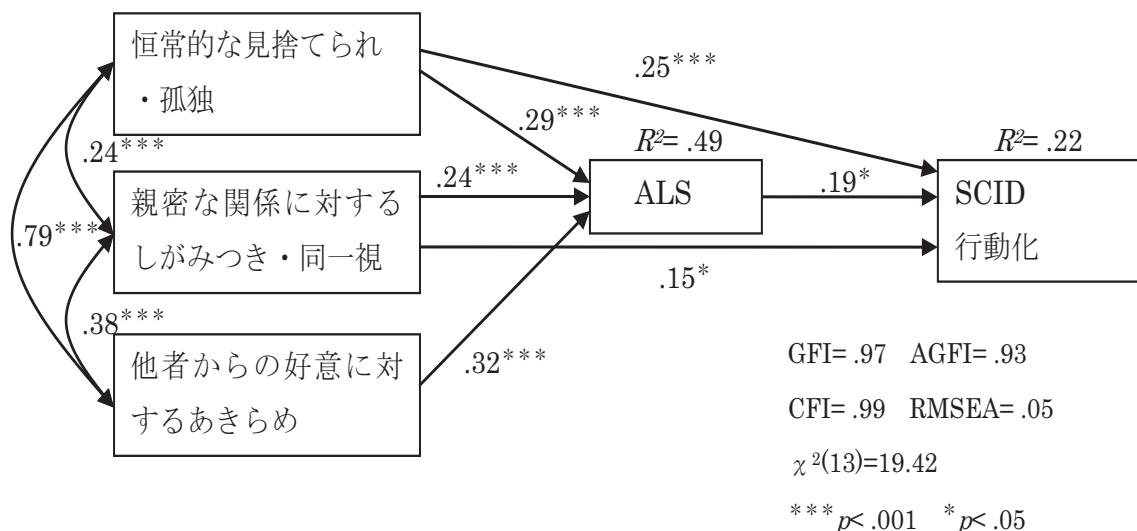
眠の揺らぎ」因子には，ABSQの「他者からの好意に対するあきらめ」因子が有意な影響を示した。よって，他者からの好意が得られないと考えることが，睡眠を妨害する要因のひとつとなる可能性がある。

次に，ABSQ合計点とPDQ-R得点との関連について検討した結果，調査2と同様，ABSQの得点は，PDQ-Rの得点に対して，有意な相関係数を示した($r = .49, p < .001$)。各下位因子を検討したところ，ABSQの各下位因子の中で，最も高い相関を示したのは「恒常的な見捨てられ・孤独」因子であり($r = .50, p < .001$)，最も低い相関を示したのは「親密な関係に対するしがみつき・同一視」因子であった($r = .22, p < .001$)。これは，研究1と同様の結果である。一方，PDQ-Rの行動化項目の合計点とABSQ合計点は，有意ではあるものの，相関係数は低い値であった($r = .16, p < .05$)。さらに，「恒常的な見捨てられ・孤独」因子については，有意な相関係数が示されなかった($r = .08, n.s.$)。これに対して，SCIDの行動化項目合計得点とABSQ合計点とは，有意な中程度の相関を示した($r = .43, p < .001$)。このように，PDQ-Rの行動化得点よりSCIDの行動化得点の相関が高くなったことには，PDQ-Rの項目にはギャンブルや飲酒など多くの大学生が経験しやすい行動が含まれていたことが関係しているかもしれない。一方SCIDの項目では，しがみつきや対人関係の不安定さなど，BPDに特徴的とされるような行動が項目に多く含まれていたため，PDQ-Rの行動化得点よりも，ABSQの得点との相関係数が高い値であったと考えられる。

ABSQの得点とALS，PDQ-RおよびSCIDの得点との関連を検討した結果，ABSQの各下位因子によって強く関連するBPD傾向者の徴候が異なることが示された。これは，感情の不安定性や各行動化において，ABSQの各下位因子の役割が異なる可能性を示唆しているといえる。

3. パス解析 ABSQ→ALS→行動化という因果関係を検証するために、パス解析を行った。なお、行動化指標については、相関分析から、PDQ-Rの行動化得点よりも、SCID行動化得点の方が、BPD傾向をよく捉えている可能性が示された。よって、パス解析ではSCID得点のみを行動化指標として、モデルに投入した。さらに、パス解析におけるモデルの男女の相違を検討するため、全てのパス係数に等値制約を課さないモデル(Model 1)と、全てのパス係数に等値制約を課すモデル(Model 2)を設定し、多母集団同時分析によるモデルの検証を行った。モデルの採択の指標として、AICおよびBCCを用い、モデルの適合度の指標として、GFI、AGFI、CFI、RMSEAを用いた。分析にはAmos5.0を用いた。

パス解析の結果、Model 1は、AIC=59.12、BCC=62.33、GFI=.99、AGFI=.92、CFI=1.00、RMSEA=.05、 $\chi^2(2)=3.12$ という値を示し、Model 2は、AIC=53.42、BCC=55.36、GFI=.97、AGFI=.93、CFI=.99、RMSEA=.05、 $\chi^2(13)=19.42$ という値を示した。この結果から、モデル適合度は両モデルとも高い値であることが確認された。さらに、AICおよびBCCの値において、Model 2の方がModel 1よりも低い値を示したことから、Model 2を最良のモデルであると判断した。よって、男女でモデルの傾向が異ならないModel 2を採択した。



注) 有意なパス係数のみ記載

Figure 6-1 見捨てられスキーマが BPD の徴候に及ぼす影響

採択した Model 2 を Figure 6-1 に示す。Model 2 を検討すると、ABSQ の全ての因子は、ALS に対して有意な正の影響を示した ($\beta = .24 \sim .32$, $p < .001$)。さらに、ALS から行動化に有意な正の影響が示されたことから ($\beta = .19$, $p < .05$)、ABSQ → ALS → 行動化という因果モデルが支持されたといえる。さらに、ABSQ の「恒常的な見捨てられ・孤独」因子得点から行動化得点に直接影響を与えるパス係数は ($\beta = .25$, $p < .001$)、「恒常的な見捨てられ・孤独」因子得点から ALS の得点を介して、行動化の得点に影響を与えるパス係数 ($\beta = .19$, $p < .05$) よりも若干高かった。このことから、「恒常的な見捨てられ・孤独」因子は、感情の不安定性を媒介して行動化に影響を与える場合と、直接的に行動化に影響を与える場合が考えられる。一方、ABSQ の「親密な関係に対するしがみつき・同一視」因子得点が行動化得点に直接影響を与えるパス係数は ALS の得点を介するパス係数よりも低く、「他者からの好意に対するあきらめ」因子得点は、行動化得点に直接影響を与える有意なパス係数は示されなかった。よって、この 2 つの因子は、主に感情の不安

定性を介して行動化に影響を与えていると考えられる。

これらのことから、見捨てられスキーマが揺れ動く感情のトリガーとなり、感情の不安定性を介して各行動化に影響を与えているという仮説は概ね支持された。

第 3 節 研究 3 見捨てられスキーマが誘発する対処方略の検討

目的

研究 3 では、見捨てられ場面で見捨てられスキーマがどのような対処方略を誘発して、BPD の徴候に影響を与えているのかについて、質問紙調査によって調べた。

強固な見捨てられスキーマは、不適切な対処を誘発すると考えられるが、認知行動的理論の視点から、その不適切な対処がさらに BPD の徴候を強化するという因果モデルが想定される。そこで、研究 3 では、見捨てられスキーマ→見捨てられ場面の対処→BPD の徴候という因果モデルを想定して、検証を行った。スキーマから誘発される対処は、大きく認知的対処・行動的対処に分類できる。認知的対処としては、先行研究から、BPD は白か黒か思考が強く (Veen & Arntz, 2000)、他者に対してネガティブな評価をしやすい (Arntz & Veen, 2001; Drapeau & Perry, 2004)、といった報告がある。そこで、このような思考様式が見捨てられスキーマから派生しているかどうか、検討を行った。また、行動的対処については、ストレスに対して問題解決型の対処がとれず、衝動的な対処や回避といった対処が行われることが指摘されている (Russell et al., 2007; Young et al., 2003 伊藤他訳 2008)。また、対人場面については、感情不安定性や適切な自己主張スキルが身につけていないために、その場での自身の感情を訴えたり、適切な対人対処ができないとされている (Linehan, 1993)。よって、見捨て

られ場面についても，見捨てられスキーマが賦活することにより，不適切な対人スキルを使用している可能性が考えられる。そこで，研究 3 では，行動的対処について，対人スキルも含めて検討を行った。

なお，本研究における BPD 傾向者の「対処」と「BPD の徴候」の定義について，「対処」は見捨てられスキーマから誘発される見捨てられ場面の対処であり，慢性的に特定の対処を行うことにより，BPD の徴候が強化されるもの，と定義する。一方，「BPD の徴候」については，DSM-5 で定義されているような BPD の病理と合致するような BPD 様の徴候，と定義する。

方法

1. 対象者と調査時期 2010 年 10 月～2011 年 6 月に，首都圏内の大学生を対象に質問紙調査を行った。欠損値を除外した有効回答者数は，352 名（男性 155 名，女性 182 名，不明 15 名，平均年齢 20.36 歳， $SD=1.84$ ）であった。精神科・心療内科に受診中，あるいは心理治療を受けている者は回答を控えるように求めた。

手続き 講義場面での一斉配布による質問紙調査を実施した。調査者が質問紙を配布し，その場で回収した。本調査は強制ではないこと，回答内容は統計的に処理され，個人情報漏洩する心配のないことを調査前に教示した。

2. 調査材料 (a) ABSQ18 項目。4 件法で回答を求めた。研究 1 で信頼性・妥当性は確認されている。(b) PDQ-R の BPD 項目（上原ら，1996）。BPD 傾向を測るために用いた。「はい」，「いいえ」の 2 件法で回答を求めた。十分な信頼性・妥当性が確認されている。(c) SDS の自殺項目を除いた 19 項目（福田・小林，1973）は，抑うつ程度を測るために用いた。4 件法で回答を求めた。十分な信頼性・妥当性が確認されている。(d) 見捨てられ

経験の有無を問う単項目は、研究実施者が独自に作成した。「あなたは、誰かから『見捨てられた』と思う、あるいは『見捨てられるのではないか』と不安に感じたような経験はありますか？ある／ないどちらかに○をつけてください」と教示して、回答を求めた。なお、(e)以降の質問項目は、(d)に「ある」と答えた者にのみ回答を求めた。(e) 3次元モデルにもとづく対処方略尺度 (Tri-Axial Coping Scale: TAC-24; 神村・海老原・佐藤・戸ヶ崎・坂野, 1995) は、心理的ストレスを経験した個人が、どのような認知的・行動的対処をとる傾向にあるかを測定するための尺度である。「情報収集」、「放棄、諦め」、「肯定的解釈」、「計画立案」、「回避的思考」、「気晴らし」、「カタルシス」、「責任転嫁」の8つの下位尺度24項目から成り、“1. そのようにしたこと(考えたこと)はこれまでにない。今後もし決してないだろう。”、“2. ごくまれにそのようにしたこと(考えたこと)がある。今後もしあまりないだろう。”、“3. 何度かそのようにしたこと(考えたこと)がある。今後もし時々はそうするだろう。”、“4. しばしばそのようにしたこと(考えたこと)がある。今後もしたびたびそうするだろう。”、“5. いつもそうしてきた(考えてきた)。今後もしそうするだろう。”の5件法で回答を求めた。TAC-24については、十分な信頼性・妥当性が確認されている。全般的なストレスサーに対する対処方略を測定するために広く用いられている尺度であり、スキーマに対する不適切な対処方略を、認知的側面・行動的側面ともに測る上で、有用な指標であると考えられる。本研究では見捨てられ場面における対処方略の傾向を調べるために、教示部分の「精神的につらい状況に遭遇したとき」という部分を、「他人から見捨てられたと感じるような状況に遭遇したとき」と変更した。

(f) ENDCORE (簡易版) 6項目 (藤本・大坊, 2007) は、一般的な対人関係スキルを測るための尺度(例、自

分の衝動や欲求を抑える)である。“1. かなり苦手”～“かなり得意”の7件法で回答を求めた。ENDCOREについては、十分な信頼性・妥当性が確認されている。本研究においては見捨てられ場面での対人関係スキルを測るため、教示文を一部変更し、「見捨てられたと感じた場面において、対人関係に対してどのように対処するか」とした。(g) DBTにおける日本語版マインドフルネス尺度の「効果的な対人コミュニケーション」因子(effective interpersonal communication: DBT-C)5項目(斉藤・守谷, 2009)を用いた。BPDに対する治療の効果が実証されているDBTにおいて、介入の焦点となっているような対人関係スキルを測定するための因子である。「他人の意見と比べてしまい、自分の意見を主張することに自信がない」など、主に自己主張のスキルを測る内容から構成されており、“1. いつもそうである”～“5. いつも違う”の5件法で回答を求めた。DBT-Cについては、十分な信頼性が確認されている。また、DBT-C5項目の得点とDBTコミュニケーション・スキル尺度やミロン臨床多軸目録-IIの境界性スケールの日本語短縮版の得点との有意な関連が確認されている。なお、「効果的なコミュニケーション」は全項目が逆転項目である。

3. 倫理的配慮 本研究は、早稲田大学「人を対象とする研究に関する倫理委員会」の承認を得て実施した(承認番号: 2010-210)。

結果と考察

各尺度の得点の平均値および標準偏差をTable 6-3に示す。

Table6-3 ABSQ, PDQ-R, SDSの平均値と標準偏差

	全て		見捨てられ経験あり (n=107)		見捨てられ経験なし(n=237)	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
ABSQ						
All	36.39	8.17	39.83	8.16	34.70	7.73
F1	13.04	3.89	15.04	3.94	12.04	3.47
F2	16.82	4.26	17.5	4.30	16.51	4.27
F3	6.53	1.83	7.30	1.89	6.15	1.70
PDQ-R	3.72	2.35	4.65	2.52	3.23	2.10
SDS	40.45	7.8	42.82	8.58	39.16	6.97

ABSQ= the Abandonment Schema Questionnaire

F1=恒常的な見捨てられ・孤独

F2=親密な関係に対するしがみつき・同一視

F3=他者からの好意に対するあきらめ

SDS=the Zung Self-rating Depression Scale

PDQ-R=the Personality Diagnostic Questionnaire-Revised

1. 見捨てられ経験の有無 調査の結果，見捨てられ経験があると答えた者は107名，なしと答えた者は237名であった。よって，大学生の約3割は，見捨てられ経験をしていることが示された。

また，見捨てられ経験がある者となない者とで，ABSQおよびPDQ-R得点の差があるかどうか調べるために，*t*検定を行った。その結果，ABSQ合計得点，PDQ-R得点についてともに有意差が示された。両尺度とも，見捨てられ経験「あり」と答えた者の方が，有意に得点が高かった（ABSQ： $t(342) = 5.60, p < .001$ ；PDQ-R： $t(342) = 5.45, p < .001$ ）。さらに，PDQ-R得点の平均値を基準に，4点以上をBPD傾向高群（PDQ-R得点平均値5.65， $SD=1.65$ ），3点未満をBPD傾向低群（PDQ-R得点平均値1.76， $SD=1.05$ ）に分け，見捨てられ場面の経験に差があるかどうかについて， χ^2 検定を行った。その結果，PDQ-Rの得点が高い群の方が，低い群よりも有意に見捨てられ場面を多く経験することが示された（ $\chi^2(1) = 17.21, p < .001$ ）。この結果から，BPD傾向が高い者の

方が，見捨てられ場面を多く経験している可能性が示唆された。

2. 性差 ABSQ 合計得点および PDQ-R 得点について，性差を調べるために t 検定を行った。その結果，両尺度とも，性差は有意ではなかった（ABSQ：男性平均値 36.41，女性平均値 35.44， $t(333) = .87, n.s.$ ；PDQ-R：男性平均値 3.80，女性平均値 3.57， $t(333) = .96, n.s.$ ）。よって，研究 3 では性別を分けずに分析を行うこととした。

3. 相関分析 見捨てられ経験「あり」と答えた者で，欠損値を除外した 102 名のデータについて相関分析を行った。その結果を Table 6-4 に示す。

Table6-4 ABSQとTAC-24, DBT-C, ENDCORE, PDQ-Rとの相関係数

	TAC-24							ENDCORE	PDQ-R		
	カタルシス	放棄・あきらめ	情報収集	気晴らし	回避的思考	肯定的解釈	計画立案			責任転嫁	
ABSQ											
All	.01	.34***	-.13	-.11	-.07	-.38***	-.26**	.24*	-.46***	.22*	.55***
F1	-.27**	.27**	-.24**	-.33***	-.18	-.42***	-.21*	.19	-.46***	.16	.51***
F2	.32***	.28**	.06	.16	.08	-.24*	-.26**	.23*	-.25*	.22*	.35***
F3	-.11	.25*	-.12	-.13	-.09	-.23*	-.07	.11	-.44***	.12	.52***

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$

ABSQ= the Abandonment Schema Questionnaire

F1= 恒常的な見捨てられ・孤独

F2= 親密な関係に対するしがみつき・同一視

F3= 他者からの好意に対するあきらめ

TAC-24=the Tri-Axial Coping Scale

DBT-C=DBTにおける日本語版マインドフルネス尺度「効果的なコミュニケーション」因子

PDQ-R=the Personality Diagnostic Questionnaire-Revised

相関分析の結果，DBT-Cの得点と，ABSQの各因子の得点間にはそれぞれ有意な負の相関が示された。一方，ENDCOREの得点は，ABSQ合計得点とは有意な弱い相関を示したものの，低い値であった（ $r = .22$ ， $p < .05$ ）。さらに，TAC-24の各下位尺度の得点は，「放棄・あきらめ」，「肯定的解釈」の得点とABSQの全ての因子の得点間に有意な弱い相関が示された。

4. 重回帰分析 BPDの徴候に関連のある対処方略を調べるために，見捨てられ経験「あり」と答えた者のデータについて，TAC-24で測定される対処方略の各因子と，DBT-Cで測定される「効果的なコミュニケーション」，ENDCOREで測定される対人スキルを独立変数，PDQ-Rの全体得点，および「感情の不安定性」に関する3項目と「行動化」に関する5項目の得点を従属変数とする強制投入法の重回帰分析を行った。その結果をTable 6-5に示す。

Table6-5 TAC-24, DBT-C, ENDCOREを独立変数, PDQ-Rを従属変数とする重回帰分析

従属変数	$R(R^2)$	独立変数 (Standardized β coefficients)									
		TAC-24									
		カタルシス	放棄・あきらめ	情報収集	気晴らし	回避的思考	肯定的解釈	計画立案	責任転嫁		
PDQ-R											
All	.50(.24)***	.09	.19 [†]	-.03	-.07	-.08	-.29**	-.13	.01	-.21**	.03
感情不安定性	.42(.17)**	-.00	.21 [†]	.06	-.03	.00	-.06	-.23*	-.00	-.38***	.06
行動化	.38(.14)*	.09 [†]	.05	-.07	-.02	-.06	-.12*	-.02	-.01	-.21*	-.12

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, $p^{\dagger} < .10$

従属変数

PDQ-R=the Personality Diagnostic Questionnaire-Revised

独立変数

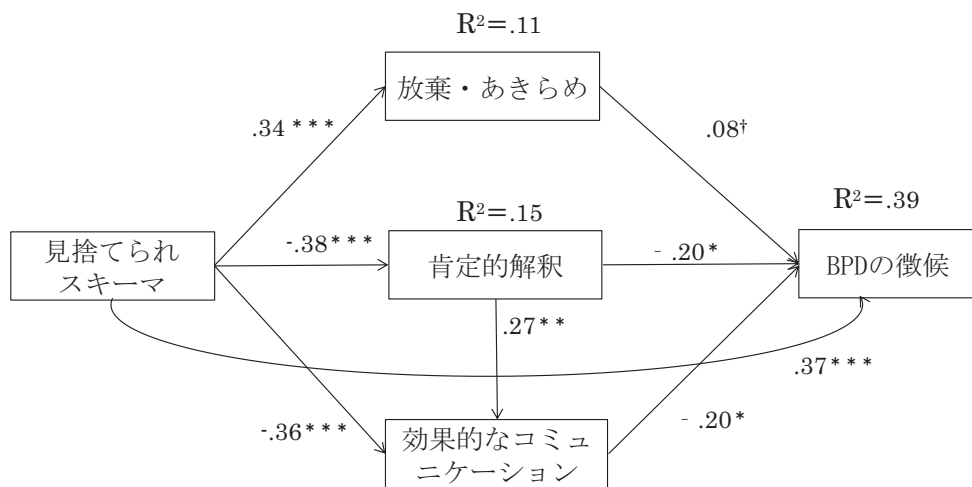
TAC-24=the Tri-Axial Coping Scale

DBT-C=DBTにおける日本語版マインドフルネス尺度「効果的なコミュニケーション」因子

重回帰分析の結果，BPDの徴候を測定するPDQ-Rの全体得点については，TAC-24の「放棄・あきらめ」因子の得点の標準偏回帰係数が有意傾向であった（ $\beta = .19$, $p < .10$ ）。一方，認知的対処である「肯定的解釈」因子の得点と効果的なコミュニケーションを測定するDBT-Cの得点は，有意な負の標準偏回帰係数を示した（順に， $\beta = -.29$, $p < .01$, $\beta = -.21$, $p < .01$ ）。PDQ-Rの「感情の不安定性」に関する項目については，TAC-24の「放棄・あきらめ」因子と「計画立案」因子，対人的対処である「効果的なコミュニケーション」因子の得点が有意傾向または有意な標準偏回帰係数を示した（順に， $\beta = .21$, $p < .10$, $\beta = .23$, $p < .05$, $\beta = -.38$, $p < .001$ ）。PDQ-Rの「行動化」に関する項目については，TAC-24の「カタルシス」因子と「肯定的解釈」因子の得点が有意および有意傾向の標準偏回帰係数を示した（順に， $\beta = .09$, $p < .10$, $\beta = -.12$, $p < .05$, $\beta = -.21$, $p < .05$ ）。

5. パス解析

見捨てられスキーマが特定の不適切な対処を誘発して，その対処がさらにBPDの徴候を強めるという因果モデルが考えられる。そこで，見捨てられスキーマ→対処行動（認知的対処を含む）→BPDの徴候という因果関係を想定して，パス解析を行った。様々なモデルを検討した結果，最終的にFigure 6-2のモデルが採択された。



注) 有意なパス係数のみ記載

GFI= .99 AGFI= .95
 CFI= 1.00
 RMSEA= .00
 $\chi^2(2) = 1.88 \quad p = .39$
 $***p < .001 \quad **p < .01$
 $*p < .05 \quad \dagger p < .10$

Figure 6-2 見捨てられスキーマが対処方略および BPD の徴候に及ぼす影響

パス解析の結果、ABSQ の得点が、認知的対処である「放棄・あきらめ」因子の得点に対して有意な正のパス係数を示し ($\beta = .34, p < .001$), 「肯定的解釈」の得点に対して有意な負のパス係数を示した ($\beta = -.38, p < .001$)。また、ABSQ の得点は、対人的対処である「効果的なコミュニケーション」因子の得点に対して有意な負のパス係数を示した ($\beta = -.36, p < .001$)。そして、「肯定的解釈」因子と「効果的なコミュニケーション」因子の得点は PDQ-R の得点に対して有意な負のパス係数を示し (ともに $\beta = -.20, p < .05$), 「放棄・あきらめ」因子の得点は PDQ-R の得点に対して有意傾向の正のパス係数を示した ($\beta = .08, p < .10$)。また、ABSQ の得点から PDQ-R の得点に直接影響を与える有意な正のパス係数も示された ($\beta = .37, p < .001$)。パス解析の結果から、見捨てられスキーマ → 対処行動 → BPD の徴候という因

果モデルは概ね支持された。このことから、見捨てられスキーマが、「放棄・あきらめ」、「肯定的解釈の不足」といった認知的対処および「効果的なコミュニケーションの不足」といった不適切な対人的対処を誘発して、これらの対処がさらに BPD の徴候に影響を与えるという因果モデルが示された。また、見捨てられスキーマから、直接的に BPD の徴候に影響を与える経路も示された。よって、BPD の徴候の改善を促進させるためには、見捨てられスキーマの内容そのものの変容を促すことに加えて、見捨てられスキーマが誘発する認知的対処・対人的対処についても、変容を促すことが有効である可能性が考えられる。

第 4 節 本章の考察

本章では、質問紙調査によって見捨てられスキーマの作用機序に関するメカニズムを解明することを目的とした。

まず、研究 2 では、見捨てられスキーマが BPD の徴候に与える影響について検討した。相関分析の結果から、ABSQ の得点が見捨てられ不安項目の得点のみならず ALS の得点、PDQ-R の得点、SCID の得点とも有意な相関係数を示したことから、見捨てられスキーマは、見捨てられ不安だけではなく、感情の不安定性、BPD 傾向や行動化など、様々な BPD の特徴とも関連があることが明らかとなった。特に、ABSQ の得点と ALS の得点は高い相関係数を示したことから ($r = .73$, $p < .001$)、見捨てられスキーマと感情の不安定性は高い関連性があることが示唆された。また、パス解析の結果では、見捨てられスキーマが感情の不安定性を引き起こし、BPD に特徴的な行動化に至っている可能性が示された。よって、BPD の中核症状とされている感情の不安定性を改善し、行動化を防ぐためには、見捨てられスキーマに介入することが有効である可能性が示唆されたといえる。これは、認知

行動理論を支持する結果であり，BPD傾向者の徴候の改善に認知的介入の効果が期待できるということである。

また，研究2の相関分析とパス解析の結果から，特にABSQの「恒常的な見捨てられ・孤独」因子が，行動化を中心とするBPD傾向に強く関連している可能性が示唆された。さらに，重回帰分析の結果，ALSの各下位因子によって，強く関連するABSQの下位因子が異なることが示された。以上のことから，ABSQの各下位因子によって強く関連するBPD傾向者の徴候や影響力が異なる可能性が示された。これは，見捨てられスキーマを詳細に検討することを目的として開発したABSQを用いたことで示唆された，新しい知見であるといえる。

研究2の結果から，見捨てられスキーマは，感情の不安定性や行動化といったBPDに特徴的な病理のトリガーとなっていると解釈できる。よって，見捨てられスキーマはBPD傾向者の徴候の中核部分に位置すると考えられることから，BPD傾向者の研究において見捨てられスキーマを検討する重要性を支持する結果が得られたといえる。さらに，本章で対象とした大学生のBPD傾向者においても，感情の不安定性や行動化などのBPDの特徴を有していることが示された。BPDの特徴を有するBPD傾向者は，様々な機能不全に陥っていることが指摘されていることから（Trull, 1995; Trull et al., 1997），本邦においても，BPD傾向者は機能不全により，社会生活に何らかの支障をきたしている可能性が考えられる。よって，BPD傾向者に対して，BPDの徴候の悪化を防ぐという予防的観点は重要であることが改めて確かめられたといえる。

研究3においては，まず，見捨てられ場面を経験した者は経験しなかった者よりも見捨てられスキーマ得点が高いことが示された。これは，見捨てられスキーマが見捨てられ場面の認知（見捨てられたと思うこと）に関わ

っている可能性を示唆していると考えられる。

また、パス解析の結果から、見捨てられスキーマが見捨てられ場面に対する「放棄・あきらめ」、「肯定的解釈の不足」といった認知的対処や、「効果的なコミュニケーションの不足」といった対人的対処を誘発して、その対処が BPD の徴候を強化している可能性が示唆された。見捨てられスキーマから直接 BPD の徴候に与える影響の経路も示されたことから、BPD の徴候を改善するためには、見捨てられスキーマの内容そのものを変容する他にも、見捨てられスキーマが誘発する対処方略についても変容することが有効であることが示唆された。さらに、重回帰分析の結果と併せると、見捨てられスキーマが「放棄・あきらめ」、「効果的なコミュニケーションの不足」という不適切な対処を誘発すると、BPD の徴候の中でも特に「感情の不安定性」に影響を与えることが考えられる。一方、見捨てられスキーマが「肯定的解釈の不足」という不適切な対処を誘発すると、BPD の徴候の中でも特に「行動化」に影響を与える可能性が示唆された。研究 2 では、見捨てられスキーマの各因子が、感情の不安定性や行動化に影響を与えていることが示されたことから、見捨てられスキーマの各因子に関連する異なる対処方略が誘発されることによって、影響を与える BPD の徴候が異なる可能性が考えられる。

次に、研究 3 において見捨てられスキーマおよび BPD の徴候と関連があることが示された対処方略について考察する。対人スキルについて、本研究で用いた「効果的なコミュニケーション」スキルは、DBT において治療ターゲットのひとつとされている自己主張スキルを測定している（斎藤・守谷，2009）。よって、DBT で訓練されているような対人スキルを身につけて、適切に自身の感情や要求を表現できるような対処能力を向上させることが、見捨てられスキーマからの影響を変容し、BPD の徴

候を改善させる上で有効であると考えられる。

「放棄・あきらめ」, 「肯定的解釈の不足」等の要因は, “認知的対処”とされている。これは, 対人関係に関するネガティブな評価や, 白か黒か思考が強いとされる BPD の認知様式の先行研究と一致する結果である (e.g., Arntz & Veen, 2001)。よって, 見捨てられスキーマの内容に焦点を当てた介入とともに, 見捨てられ場面での解釈の仕方について, 肯定的な解釈の視点を持つように促す等, 自動思考レベルに対する認知的介入を取り入れることで, 見捨てられスキーマの影響を断ち切ることができると考えられる。

研究 2 と 3 の結果から, 見捨てられスキーマが BPD の徴候に影響を及ぼすメカニズムを包括的に検討することができたと考えられる。これらの結果から, 見捨てられスキーマは BPD の徴候に影響を与える中核的な要因となっている可能性が示唆された。さらに, 見捨てられ場面において, 見捨てられスキーマが特定の不適切な対処を誘発して, BPD の徴候が強化されていることが示された。これは, 従来 ST やパーソナリティ障害に対する認知療法において指摘されてきた, 認知行動理論を支持する知見であるといえる。

したがって, BPD の徴候を改善するためには, 見捨てられスキーマの内容そのものに介入すると同時に, 見捨てられスキーマが誘発している認知的・行動的対処をターゲットとして介入を行うことで, BPD の徴候の改善をより促進できると考えられる。

なお, 研究 3 では, BPD 臨床群の治療においてターゲットとされているような対人スキルが, BPD 傾向者でも不足している可能性が示された。これは, BPD 傾向者と BPD 臨床群の連続性を支持する結果であるといえる。

研究 2・3 において, BPD 傾向者の見捨てられスキーマに関連する一連の特徴が示されたことにより, BPD 傾

向者に対するメカニズム研究の基礎的知見として、有益な示唆を提供することができたといえる。ただし、本章の研究の結果は、質問紙調査による量的分析によるものである。今後は、BPD傾向者において見捨てられ場面で、実際に見捨てられスキーマが賦活されているのか、見捨てられスキーマがどのように思考や行動に影響を与えるのか、そして、実際にBPDの徴候を強化するような対処をとっているのかについて、実験的な手法による検討が求められる。

第 7 章 見捨てられ場面における見捨てられスキーマと BPD の徴候の関連

第 1 節 本章の目的

第 6 章では、見捨てられスキーマの作用機序に関するメカニズムについて量的に検討した。研究 2 では、見捨てられスキーマが感情や行動に影響を与えることが、パス解析によって示された。しかし、見捨てられ場面で具体的にどのような見捨てられスキーマに関連する思考が浮かび、その思考がどのように感情や行動に影響を与えるのかについては、詳細に検討されていない。研究 3 では、見捨てられ場面における見捨てられスキーマが誘発する対処方略のメカニズムを検討したが、BPD 傾向者が実際に見捨てられ場面でどのような対処方略をしているのかは詳細に検討できていない。そこで、本章では、BPD 傾向高群および BPD 傾向低群を対象として、日常的に経験するささいな見捨てられ場面(大きな苦痛を伴うトラウマティックな出来事ではなく、日常的に経験する見捨てられ感を伴う場面)を抽出し、その場면을想起するイメージ想起実験を行い、両群の結果を比較した。そして、BPD 傾向高群の見捨てられ場面での見捨てられスキーマの賦活の程度と思考・感情・行動との関連について、発話思考法によって思考内容を抽出し、感情指標・半構造化面接の結果をあわせて、その思考がどのように感情や行動に影響を与えているかを量的・質的に検討した。

なお、BPD の特徴として、親密な関係になるほど、感情的反応が顕著になるという知見がある (Mason & Kregg, 1998 荒井他訳 2003)。そこで、イメージ想起の見捨てられ場面について、対象の親密度が高い場面と低い場面を設定し、対象の親密度の違いによって、見捨てられ場面での反応に違いがみられるかどうかについても検討した。

第 2 節 研究 4 見捨てられ場面における見捨てられスキーマと BPD の徴候の関連に関する実験的検討

目的

第 6 章の研究 2, 研究 3 では, 見捨てられスキーマが BPD の徴候に及ぼす影響, および見捨てられスキーマの維持・強化要因について, 質問紙調査において検討した。その結果, 研究 2 では, 見捨てられスキーマが直接的, あるいは感情の不安定性を介して BPD の徴候である行動化に影響を与えていることが示された。研究 3 では, 見捨てられスキーマから誘発される対処方略として, 「放棄・あきらめ」, 「肯定的解釈の不足」という認知的対処と, 「効果的なコミュニケーションの不足」という対人的対処が示された。しかし, BPD 傾向者において, 見捨てられ場面で実際に見捨てられスキーマが賦活して, BPD の徴候に影響を与えているのかどうか, また BPD の徴候を強化するような不適切な対処を誘発しているのかどうかについて, 検討がなされていない。

そこで研究 4 では, 見捨てられ場面をイメージ想起する実験を行い, BPD 傾向高群と BPD 傾向低群の反応の違いを比較して, 見捨てられ場面における BPD 傾向者の見捨てられスキーマの賦活の程度と, 感情・行動反応について検討した。研究 4 の仮説は, 以下の通りである。

仮説 1) ABSQ の得点は, BPD 傾向高群の方が BPD 傾向低群よりも見捨てられ場面想起後に有意に増加する。

仮説 2) BPD 傾向高群の方が, BPD 傾向低群よりも顕著に見捨てられスキーマに関連する発話(発話思考法)と, スキーマに関連する感情・行動反応(感情指標・半構造化面接の反応)が示される。

仮説 3) BPD 傾向高群において，親密度が高い場面と低い場面では，関連する見捨てられスキーマの因子が異なる。

以上の 3 つの仮説を検証することを，研究 4 のエンドポイントとした。

方法

1. 実験参加者 2010 年 4 月～2013 年 4 月に，首都圏内の大学生を対象にスクリーニング調査を行った。欠損値を除外した有効回答者数は，604 名（男性 278 名，女性 306 名，不明 20 名，平均年齢 19.87 歳， $SD=1.39$ ）であった。ABSQ の平均値は 35.96 ($SD=8.75$)，BPD 傾向を測定する PDQ-R 得点の平均値は 3.79 ($SD=2.22$) であった。PDQ-R の平均値 + $1/2SD$ 以上で，かつ ABSQ の得点が平均値以上である男女 9 名（男性 4 名，女性 5 名，平均年齢 19.22， $SD=1.30$ ）を BPD 傾向高群，BPD 傾向の得点が平均 - $1/2SD$ 以下で，かつ ABSQ の得点が平均値以下である男女 7 名（男性 3 名，女性 4 名，平均年齢 20.43， $SD=2.37$ ）を BPD 傾向低群として，実験の対象とした。PDQ-R 得点は正規分布を示しており，PDQ-R の得点が平均 + $1/2SD$ 以上である者は，BPD の徴候を有しており，BPD 傾向者にあたると判断した。

なお，実験実施前に健康アンケートを実施し，現在医療や心理的治療を受けている者，極度の疲労や抑うつ状態，自殺念慮・激しい自傷行為等がある者は実験から除外することとしたが，該当者はいなかった。

2. 実験者 臨床心理士有資格者の大学院生女性（30 代）1 名

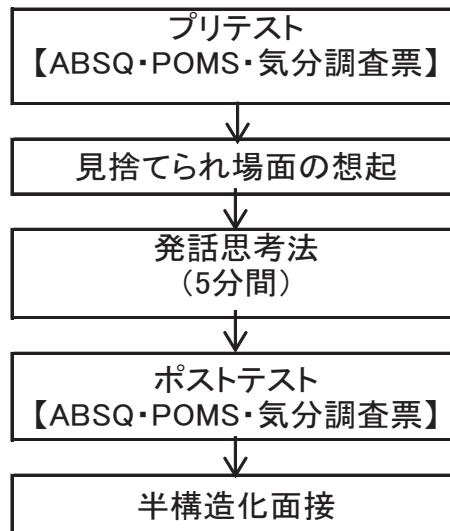
3. 実験場所 静かな環境の実験室にて，実験者と実験協力者が 1 対 1 で行った。実験者は実験協力者の右斜め後ろに座り，実験を行った。

4. 実験材料 (a) ABSQ18 項目。4 件法で回答を求めた。研究 1 で十分な信頼性・妥当性が確認されている。イメージ想起前後の見捨てられスキーマの活性化の程度を調べるために用いた。(b) SDS の、自殺項目を除いた 19 項目 (福田・小林, 1973)。当日の抑うつ気分状態を測定するために用いた。4 件法で回答を求めた。十分な信頼性・妥当性が確認されている。(c) POMS (横山・荒記, 1994) から、「緊張-不安」, 「抑うつ-落ち込み」, 「混乱」, 「怒り-敵意」の 4 つの下位尺度 42 項目を抜粋した。イメージ想起前後の気分状態の変化の測定のために用いた。“1. まったくなかった” ~ “非常に多くあった” の 5 件法で回答を求めた。十分な信頼性・妥当性が確認されている。(d) 気分調査票 (坂野・福井・熊野・堀江・川原・山本・野村・末松, 1994) の「リフレッシュ」8 項目。イメージ想起前後の気分状態の変化の測定のために用いた。“1. 全く当てはまらない” ~ “4. 非常に当てはまる” の 4 件法で回答を求めた。十分な信頼性・妥当性が確認されている。(e) 研究実施者が作成した、見捨てられ場面のイメージ鮮明度、対象の親密度を問う項目。操作チェックのために用いた。それぞれ 7 件法で回答を求めた。

5. 半構造化面接 実験参加者から抽出した見捨てられ場面に関して、(a) その場面における主観的な感情・考え、(b) 実際にどのような対処をとったか、(c) 普段の見捨てられ場面での行動傾向、(d) 相手の親密度によって、反応に差があるかどうか、について半構造化面接を行った。質問内容は、研究実施者が独自に作成した。

6. 手続き 実験の手続きを Figure7-1 に示す。実験協力希望者から、事前に実験に関するインフォームド・コンセントを得た。了承を得られた実験協力者に対して、承諾書へのサインを求めた。実験では、まず当日の抑うつ気分状態の測定のため、SDS に回答を求めた。次にプ

リテストとして、POMS、気分調査票のリフレッシュ項目、ABSQに回答を求めた。その後、「本実験は、あなたが普段誰かに“見捨てられた”，あるいは“見捨てられるのではないか”と感じる場面についてお聞きするものです。大きな苦痛を伴うトラウマティックな出来事ではなく、普段あるようなささいな場面で、あなたが“見捨てられた”と感じるのはどのような場面ですか？“見捨てられた”と感じた場面を一つ思い出して下さい」と教示を行い、参加者の見捨てられ経験について、親密度高／低いずれかの場面を想起してもらい、1分間その場面についてイメージする時間を設けた。その後、「これから、先ほど思い浮かべていただいた“見捨てられた”と感じた場面で、自然に頭に浮かんできていた考えについて、そのまま声に出して話してください」と教示して、5分間の発話思考法を行った。次に、イメージ場面の鮮明度、対象の親密度の程度に関する質問紙に回答を求めた後、イメージ場面における感情や思考について、POMS、気分調査票のリフレッシュ項目、ABSQに回答を求めた。その後、イメージ想起した見捨てられ場面に関する半構造化面接を行った。2回目の実験では、1回目と同様の手続きを、親密度の高／低いずれかの場面（実験参加者が1回目で実施していない場面）で実施した。場面提示の順序については、カウンターバランスをとった。



*親密度高／低場面を2回に分けて実施

Figure 7-1 実験手続き

7. 倫理的配慮 本研究は、早稲田大学「人を対象とする研究に関する倫理委員会」の承認を得て実施した（承認番号：2009-143）。

結果

BPD 傾向高群および BPD 傾向低群の各指標の平均値および標準偏差を Table 7-1 に示す。

Table7-1 BPD傾向高群・低群 親密度高/低場面の平均値と標準偏差

		BPD傾向高群 N=9				BPD傾向低群 N=7			
		親密度高場面		親密度低場面		親密度高場面		親密度低場面	
		M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
SDS		44.33	3.24	45.22	3.73	37.86	4.06	38.00	4.16
ABSQ									
全得点	Pre	43.89	9.02	39.67	8.87	26.14	4.85	27.71	5.85
	Post	45.67	10.58	43.33	8.89	26.43	7.21	29.86	8.19
	変化率	0.04	0.13	0.10	0.11	0.00	0.13	0.08	0.18
F1	Pre	16.11	3.59	15.11	3.48	8.86	2.34	9.86	2.79
	Post	17.44	4.07	16.89	3.55	9.71	3.45	11.14	4.18
	変化率	0.08	0.12	0.12	0.05	0.09	0.20	0.12	0.27
F2	Pre	19.44	5.96	17.67	5.00	12.29	2.63	13.43	3.41
	Post	19.89	6.05	18.78	4.60	12.00	2.94	13.57	3.55
	変化率	0.02	0.09	0.08	0.16	-0.02	0.11	0.02	0.12
F3	Pre	8.33	2.06	6.89	2.26	5.00	1.83	4.43	1.90
	Post	8.33	2.69	7.67	2.29	4.71	1.98	5.14	1.95
	変化率	0.00	0.27	0.14	0.25	-0.02	0.33	0.20	0.35
POMS									
緊張-不安	Pre	17.00	7.63	17.67	7.76	8.57	5.94	8.14	5.01
	Post	17.67	8.14	18.89	8.58	8.43	7.32	11.71	11.34
	変化率	-1.03	1.41	0.22	0.55	-2.03	1.80	0.37	0.69
抑うつ-落ち込み	Pre	19.33	7.65	20.67	10.06	8.71	7.97	5.71	4.68
	Post	22.00	15.18	24.33	11.94	11.43	10.20	13.14	12.82
	変化率	0.00	0.68	0.06	0.46	0.51	1.00	1.21	1.59
混乱	Pre	14.44	5.77	12.33	5.36	8.00	5.83	6.57	4.47
	Post	13.89	5.11	13.89	6.01	8.71	5.06	9.29	8.60
	変化率	0.05	0.33	0.16	0.28	0.21	0.37	0.32	0.53
怒り-敵意	Pre	11.89	8.75	9.89	9.25	3.86	4.56	1.86	2.48
	Post	11.78	9.56	13.67	9.68	1.71	1.89	3.43	4.58
	変化率	0.20	0.83	1.73	3.05	-0.07	1.05	1.11	2.23
気分調査票									
リフレッシュ	pre	19.89	2.09	18.56	4.33	24.00	3.37	21.57	2.88
	Post	16.78	3.77	15.78	4.12	19.86	4.30	17.71	3.40
	変化率	-0.15	0.17	-0.14	0.15	-0.17	0.14	-0.17	0.17

ABSQ= the Abandonment Schema Questionnaire

SDS=the Zung Self-rating Depression Scale

F1=恒常的な見捨てられ・孤独

F2=親密な関係に対するしがみつき・同一視

F3=他者からの好意に対するあきらめ

1. 操作チェック 見捨てられ場面のイメージの鮮明度の平均値は、7点満点中 5.13 ($SD=1.45$) であった。よって、各実験参加者が中程度以上に見捨てられ場面についてイメージできていたことから、イメージ想起の操作は適切に行われたといえる。また、親密度高/低場面の親密度得点について t 検定を行った。その結果、親密度高場面の方が、親密度低場面よりも有意に親密度得点が高かった (親密度高場面平均値 5.75, 親密度低場面平均値 1.38, $t(30)=8.40, p<.001$)。よって、場面の親密度の操作も適切に行われたといえる。

また、親密度高/低場面の SDS 得点について、 t 検定を行った。その結果、有意差は示されなかったことから ($t(30)=-.80, n.s.$)、当日の抑うつ気分状態は両条件において差がないことが確認された。

2. 量的分析：BPD 傾向高群と BPD 傾向低群の差の検定

BPD 傾向高群と BPD 傾向低群の各指標の得点を比較した。まず、ベースラインおよびプリテスト段階の、ABSQ 得点、SDS 得点、POMS の各下位尺度の得点、気分調査票のリフレッシュ項目の得点について、BPD 傾向高群と BPD 傾向低群を比較する t 検定を行った。その結果、全ての指標において両群に有意差が示された。ABSQ 得点、SDS 得点、POMS の各下位尺度の得点は、BPD 傾向高群の方が BPD 傾向低群よりも有意に高い値であった (ABSQ: $t(14)=4.68, p<.001$, SDS: $t(14)=3.56, p<.01$, POMS 緊張-不安: $t(14)=2.40, p<.05$, POMS 抑うつ-落ち込み: $t(14)=2.71, p<.05$, POMS 混乱: $t(14)=2.21, p<.05$, POMS 怒り-敵意: $t(14)=2.20, p<.05$)。一方、気分調査票のリフレッシュ項目の得点は、BPD 傾向低群の方が BPD 傾向高群よりも低い値であった ($t(14)=-3.01, p<.01$)。

上記のように、各指標においてプリテストの段階で 2 群間に有意差が示されたことから、イメージ想起前後の

変化率（ポストテスト - プリテスト / プリテスト）を算出し、BPD 傾向低群と BPD 傾向高群の差について t 検定を行った。その結果、親密度高場面において、ABSQ 得点、POMS の各下位尺度の得点、気分調査票のリフレッシュ項目の得点変化率について、両群に有意差は示されなかった（ABSQ： $t(14) = .55, n.s.$ 、POMS 緊張 - 不安： $t(14) = 1.13, n.s.$ 、POMS 抑うつ - 落ち込み： $t(14) = -1.13, n.s.$ 、POMS 混乱： $t(14) = -.88, n.s.$ 、POMS 怒り - 敵意： $t(14) = .57, n.s.$ 、気分調査票： $t(14) = .26, n.s.$ ）。同様に、親密度低場面においても、変化率の差について t 検定を行った。その結果、POMS の抑うつ - 落ち込みの得点変化率について、BPD 傾向高群と BPD 低群の差が有意傾向であった（POMS 抑うつ - 落ち込み： $t(14) = -2.08, p < 0.10$ ）。BPD 傾向低群の方が、変化率が高い値が示された。その他の指標については、両群に有意差は示されなかった（ABSQ： $t(14) = .55, n.s.$ 、POMS 緊張 - 不安： $t(14) = .32, n.s.$ 、POMS 混乱： $t(14) = -.74, n.s.$ 、POMS 怒り - 敵意： $t(14) = .45, n.s.$ 、気分調査票： $t(14) = .33, n.s.$ ）。

使用したほとんどの指標について変化率に差が示されなかった要因として、ABSQ や気分指標に関して、BPD 傾向高群の各指標のスコアがプリテストの段階で高得点圏に位置しているため、得点の上昇率に限界がある可能性が考えられた。POMS の抑うつ - 落ち込み得点の変化率が、BPD 傾向低群の方が高かったことも、BPD 傾向高群の得点がプリテストの段階で高得点圏だったことによる天井効果が原因であると解釈できる。そのため、これ以降の分析では、BPD 傾向高群と BPD 傾向低群のデータに関して、それぞれの指標のイメージ想起前後の得点の変化について、分散分析で検討を行った。

3. 量的分析：ABSQ 得点 BPD 傾向高群の ABSQ 合計得点について、条件（親密度高 / 低）および時期（プリテ

スト／ポストテスト) を独立変数, ABSQ の得点を従属変数とした 2 要因の分散分析を行った。その結果, 時期の主効果が有意傾向であった ($F(1,8) = 4.22, p < .10$)。プリテストよりもポストテストの方が, ABSQ の得点が高かった。さらに, ABSQ の「恒常的な見捨てられ・孤独」因子について, 時期の主効果が有意であった ($F(1,8) = 18.89, p < .05$)。「親密な関係に対するしがみつき・同一視」因子と「他者からの好意に対するあきらめ」因子については, プリテストの時点で条件間に有意な得点差が示された ($t(8) = 2.98, p < .01; t(8) = 2.87, p < .05$)。そのため, 各条件の変化率 (ポストテスト - プリテスト / プリテスト) を算出し, 条件の差について t 検定を行った結果, 有意差は示されなかった (*n.s.*)。

一方, BPD 傾向低群の ABSQ 合計得点について, 同様に 2 要因の分散分析を行った。その結果, 条件・時期ともに有意差は示されなかった (*n.s.*)。また, ABSQ の「恒常的な見捨てられ・孤独」因子, 「親密な関係に対するしがみつき・同一視」因子, 「他者からの好意に対するあきらめ」因子の各因子についても同様に 2 要因の分散分析を行った。その結果, 条件・時期ともに有意差は示されなかった (*n.s.*)。

以上の結果から, BPD 傾向高群においては, 相手の親密度の高低に関わらず, 見捨てられ場面において見捨てられスキーマが活性化されている可能性が示唆された。特に, 「恒常的な見捨てられ・孤独」因子が賦活される傾向にあることが推定される。一方, BPD 傾向低群は, 見捨てられ場面において見捨てられスキーマが賦活している可能性は示されなかった。

4. 量的分析：気分状態指標 BPD 傾向高群の気分状態指標について, 条件 (親密度高 / 低) および時期 (プリテスト / ポストテスト) を独立変数, POMS および気分調査票の得点を従属変数とした 2 要因の分散分析を行っ

た。その結果、「混乱」指標について交互作用が有意傾向であった ($F(1,8) = 3.61, p < .10$)。単純主効果の検定を行った結果、条件・時期ともに有意差は示されなかった (*n.s.*)。「緊張－不安」、「抑うつ－落ち込み」、「怒り－敵意」指標については、主効果・交互作用ともに有意差は示されなかった (*n.s.*)。また、気分調査票の「リフレッシュ」項目に関しても、同様に 2 要因の分散分析を行った。その結果、時期の主効果が有意であった ($F(1,8) = 13.08, p < .01$)。プリテストよりもポストテストの方が、得点が有意に減少していた。

BPD 傾向低群においても、条件（親密度高／低）および時期（プリテスト／ポストテスト）を独立変数、POMS および気分調査票の得点を従属変数とした 2 要因の分散分析を行った。その結果、POMS について、「抑うつ－落ち込み」に時期の主効果が示された ($F(1,6) = 5.55, p < .05$)。プリテストよりもポストテストの方が、得点が有意に増加していた。その他の下位尺度である「混乱」、「緊張－不安」、「怒り－敵意」指標は、主効果・交互作用ともに有意差は示されなかった (*n.s.*)。また、気分調査票の「リフレッシュ」項目に関しても、2 要因の分散分析を行った。その結果、時期の主効果が有意であった ($F(1,6) = 16.03, p < .01$)。プリテストよりもポストテストの方が、得点が有意に減少していた。

以上の結果から、BPD 傾向高・低群ともに見捨てられ場面において、快感情が低減していることが明らかとなった。また、BPD 傾向低群のみ、抑うつ－落ち込みの気分得点において、イメージ想起後に得点が有意に増加していることが示された。

5. 発話内容分析 BPD 傾向高群・低群ともに発話思考法で得られた発話内容については、研究実施者がセンテンスに分けて、各センテンスの内容を要約した。要約した内容について、臨床心理士の資格を持ち、BPD 臨床経験

のある者 1 名（30 代男性）に妥当性の確認を依頼した。妥当性があると評定された要約の内容について，見捨てられスキーマの各因子に関するような内容が含まれているかどうか，臨床心理士の資格を持ち，BPD 臨床経験のある者 2 名（20 代男性，30 代男性）に評定を依頼した。各実験参加者の各場面での発話内容の中に ABSQ の 3 因子が含まれるかどうか調べるために，ある／なしの 2 件法で回答を求めた。2 名の評定者から得られた評定について，「ある」を 1 点，「なし」を 0 点として，BPD 傾向高群・BPD 傾向低群それぞれの発話内容のスキーマ得点を親密度高／低場面別に算出した。2 名の評定者間一致係数は， $\kappa = .60$ ($p < .001$) であり，高い一致率を示した。

得られた各因子の得点を Table 7-2 に示す。

Table 7-2 発話思考法の評定で得られた ABSQ の各因子得点の平均値と標準偏差

		ABSQ		
		F1	F2	F3
BPD 傾向高群				
	親密度高場面	.67 (.87)	1.76 (.50)	.11 (.33)
	親密度低場面	1.11 (.93)	.78 (.97)	.67 (.71)
BPD 傾向低群				
	親密度高場面	.00 (.00)	.14 (.38)	.14 (.38)
	親密度低場面	.00 (.00)	.00 (.00)	.00 (.00)

ABSQ= the Abandonment Schema Questionnaire

F1=恒常的な見捨てられ・孤独

F2=親密な関係に対するしがみつき・同一視

F3=他者からの好意に対するあきらめ

各因子の得点について，BPD 傾向高群と低群で差があるかどうか， t 検定を行った。親密度高場面における ABSQ の「他者からの好意に対するあきらめ」因子においては，両群に有意差は示されなかった ($t(14) = -.18$, $n.s.$)。一方，親密度高場面における ABSQ の「恒常的な見捨てられ・孤独」因子と「親密な関係に対するしがみつき」因子については，群間で有意および有意傾向の差

が示された（順に， $t(14) = 2.02$ ， $p < .10$ ， $t(14) = 6.69$ ， $p < .001$ ）。BPD 傾向高群の方が，BPD 傾向低群よりも各因子の得点が高い値であった。親密度低場面においては，ABSQ の全ての因子について，群間で有意および有意傾向の差が示された（「恒常的な見捨てられ・孤独」因子： $t(14) = 3.14$ ， $p < .01$ ，「親密な関係に対するしがみつき」因子： $t(14) = 2.10$ ， $p < .10$ ，「他者からの好意に対するあきらめ」因子： $t(14) = 2.48$ ， $p < .05$ ）。BPD 傾向高群の方が，BPD 傾向低群よりも各因子の得点が高い値であった。なお，BPD 傾向低群では，親密度高場面においては「恒常的な見捨てられ・孤独」因子，および親密度低場面においては ABSQ の全ての因子の評定点が 0 であり，ABSQ に関連する発話内容は評定されなかった。以上の結果から，見捨てられ場面では，BPD 傾向高群の方が低群よりも見捨てられスキーマに関連する思考内容が多いことが示された。

次に，BPD 傾向高群の特徴を検討することを目的として，BPD 傾向高群における親密度高／低場面の発話内容に差があるかどうか， t 検定を行った。その結果，「恒常的な見捨てられ・孤独」因子の得点については差が示されなかった（ $t(8) = -1.08$ ，*n.s.*）。「親密な関係に対するしがみつき・同一視」因子については，有意な差が示され（ $t(8) = 3.41$ ， $p < .01$ ），親密度高場面の方が，有意に得点が高かった。「他者からの好意に対するあきらめ」因子についても，有意な差が示され（ $t(8) = -2.29$ ， $p < .05$ ），親密度低場面の方が，有意に得点が高かった。この結果から，「恒常的な見捨てられ・孤独」因子は，相手の親密度にかかわらず見捨てられ場面において賦活されるが，「親密な関係に対するしがみつき・同一視」因子は，相手が親密な場合に一層賦活されやすいことが示された。一方，「他者からの好意に対するあきらめ」因子は，相手の親密度が低いほど賦活されやすい可能性がある。

Table7-3 ABSQの各因子ごとの発話思考法の内容の分類

	親密度高場面	親密度低場面
ABSQ		
F1	自分は（会うことを）はりきっていたのに、周囲はそうではないかと思ひ、悲しい。やっぱり自分は嫌がられているのか。	自分には誰も味方してくれない。自分がいけなかったのか、だから見捨てられたのか。
F2	自分は期待されていないのか、友達よりもあまり好かれていないのか。自分が（その人にとって）友達の中で一番じゃないのか。自分のことが嫌いなのか。あいつの方がいいのか。自分は一緒にいたい。嫌がられたくない。どうしたら友達だと思ってくれるのか。この子だったら分かってくれるだろうと思つたのに、何で分かってくれないのか。	どうしてそっけないのか。なぜこんな対応をするのか。こちらから挨拶したのに、なぜ挨拶しないのか。自分と友達になるのが嫌なのか。
F3		友達と思われていないんじゃないか。自分は相手の都合に合わせてたのに。このまま（この人とは）疎遠になっていくだろう。もう（友人関係を）終わりにしよう。もっと親しくなれると思つていた。次に挨拶してくれなかったら、もう友達になれない。

ABSQ=the Abandonment Schema Questionnaire

F1=恒常的な見捨てられ・孤独

F2=親密な関係に対するしがみつき・同一視

F3=他者からの好意に対するあきらめ

Table7-3には、ABSQの各因子と関連があると推察されるBPD傾向高群の発話内容の要約を分類したものを、部抜粋して掲載した。発話内容を見ると、「自分は嫌がられている」、「自分には誰も味方してくれない」、「もう友達になれない」など、見捨てられスキーマに関連する内容とともに、否定的な解釈や、極端な結論に至るような思考内容が確認できる。

6. 半構造化面接 BPD傾向者の見捨てられ場面における思考・感情・行動的特徴を詳しく検討するために、半構造化面接で得られた自己報告を検討した。半構造化面接で得られた自己報告の内容の一覧をTable7-4、Table7-5に示す。

Table7-4 反抗増加面接の回答内容（観密度高場面）

群	ID	感情	感情の点数	感情のコントロールの種類	感情が収まるまでの時間	相手に対しての考え	その状況での対処法
P D 傾 向 高 群	1	絶望感	9点	最初の方はその事ばかり考えていた。生活に支障はなかったが・・・。	一週間以内、3日以内でかきおさまった。たいた問題じゃなかったと思っ	公平に扱って欲しかった。友人関係にウエイトを置けなかった。友人関係にウエイトを置けなかった。友人関係にウエイトを置けなかった。友人関係にウエイトを置けなかった。	とにかくPCを使っているいろいろないるやるようにした。たくさん情報を集めた相手に対して、「回電話で「やかすすし」と抗議した。PCからいったん離れて、本を読むようにした。イライラしていたので。
	2	ショック 悲しみ びつくり	7点 6点 6点	その後にはその人と話すことがあったが、いつものように話さなかった。シュンという感じ。	大きな悲しみはその日中に消えたが、要所要所で思い出す。次にコンタクトをとった時の相手の対応に基づいて気持ちの変化があった。以前よりは親しく声をかけづらくなった。	最初は何となく仲良かったのにさみしいな、だんだんどうとまじい、付き合いたくないと思っ。関係が酸っぱくなっ。どうしたらいいかわからなくなった。	後で「何かつめたくない？」と聞いた。同席の人にその後話して、これはどれくらい気になるのかな？と聞いた。
	3	さみしい 不安	7.5点	コントロールができなことはなかった。	メールの返信が返ってきたらおさまった。	裏切られた。あまり自分を好きじゃないのに、自分の前では友人のように行動する人だと思っ。	ちとつとこの事について考えて、TVを見てすごした。そこまで深刻に考えてなかったんで、あえて気持ちを紛らわすことはなかった。
	4	びつくり さみしい 悲しい	9点 10点 9～10点	学校では平気だったが、家に帰ってからは悲しくて泣いた。眠れなくなった。その子と話すよ、話し終わった後で落ち込む。	多忙な時期に人になって、それどころじゃなくなった。最初にはみんないかにかきおさまったが、これでいいかな、と思っ始めた。	あまり親しくなりすぎると、気を遣わなくていいと考える人かな。自分のことを優先に考える人かな。	最初は何となく理由を聞きまくったが、教えてもらえなかった。感情をぶつけることはしなかった。
	5	さみしい くやしい 血涙 プライドを傷つけられた感じ	7～8点	コントロールがきかぬ感じがした。思ったが、多少距離はあったと思っ。ストレス、見ていると寝れる。	どれくらいかかはつきりないが・・・おききしたくない。時々不安におさわわられたりする。気持ちの変化はない。	特にそれまでと変わらない、もともと時間なきとまじい。しらない人だと思っ。今度からさういうことろつたりでいいかなと思っ。	取柄はみんな理由を聞きまくったが、教えてもらえなかった。感情をぶつけることはしなかった。
	6	不安 悲しい さびしい 見捨てられた	9点 5点 6点 4～5点	不安を落ち着かせようと思っしたが、やまない感じ。	友人が一人来た時でおさまった。友人が来た時でおさまった。	戻りきつあいなのであまり変わらないが、まじいタイプだから、ぐちならいいけど、意見を求めるのはやめようと思っ。	すごくメールを見返して、連絡が来ないか確認した。結果的に自分の手で解決した。不安だと思っ。不安だと思っ。不安だと思っ。
	7	悲しい	9点	一人でずつと考えて、そんなな人信じられなと思っ。他の子と仲良くしようかなと思っ。後の授業には集中できなくて、家に帰ってもずつと考えていた。よく眠れなかつた。	2～3日くらいはずつと心に構っていた。その気持ちをはたかめていた。前向きに思っ。で、もつと話をしたり気を付けて、がんばってみようと思っ。許さうと思っ。	悪気がなくやっていては分るので、認めない。私を責めないで、いらいらごちやごちやにならない。基本的には相手に対してはフラッシュバックをしない。時々その一面を考える。断定はできない。他の友人に直接相談はできなかったが、「友人にうそをつかれたらどうする？」と聞いた。自分の気持ちや考えを書く。	「何をどういうこというの？」とは言っ。声とげとげしくなっ。そわそわして、手いじりはじめた。ふさげた感じ、私あの時留んでたんだぞ」「考えてること違うよね」と言っ。親に話した。本を認めた。
	8	怒り さみしさ	6～7点 4～5点	かつとするとコントロールがうまくいかなくて、攻撃的になってしまっ。裏情に出る、声のトーンがとげとげしくなる。	怒りは違う話題に移ったからすぐに収まっ。さみしさは、電話を切ってもしばらくもやまやまな思っ。日常生活していたり、親に話したらおさまった。	そういう子なのかな？前からさういう子だったのよ。で・・・。その気持ちが大きくなることはなかった。	
	9	さみしい	3～4点	少しそのことに關してのきずることはあったが、日常生活に支障をきたすことはなかった。	さみしさはすぐにおさまった。不安「信頼されないうんじやないか」という気持ちが寝るまであった。寝たら気にならなくなった。	うそを教えられたと思っ。1～2週間たつて、聞運ったことば言っなくなっと思っ。	特に何もなかった。
	10	悲しい 無力感	8点 6点	この状況ではたまたまコントロールができていないことがある。	30分くらい、「仕方がないかな」と考えた。	人間とはこういうもので、その人に限ったことではない。	物にはあたらはない。
	11	むなしい	7点	コントロールできないことはない。	体力がなくなるとなると休むので休めば平気。その日中には回復した。	また寝てさうな。よくあることだ。いつものことだ。	ぼーっとしてただけ。このまま1時間くらいベットの所で座っている。ネットを見たり、携帯ゲーム。
	12	さみしい 悲しい	7点 7点	コントロールできないことはない。	返事がくるまでずつとさみしい。	忙しいだろうな。あまり遊びたくないかな。	ずつと待っている。寝てしまっ。
	13	さみしい あきらめ	6点 7点	コントロールできないことはない。	メールして、5分間くらい。	忙しいだろうな。	会う約束として、候補日をきいたりした。何かするということはない。
	14	さみしい あきらめ 不安	1～2点 7点 4～5点	そんなに乱れることはない。忘れるか気にしない。	5～10分くらいはおさまる。	悪い人じゃない、一人にしてやるという意識もない。悪意もない。相手を憎んだことはない。	自分の知っていることを顔の中で思っ。こういう話題だったら話せるかな。
	15	疑問	7点	コントロールできないことは全くない。	20分くらい。	悪いのによく行くな。みんな申しいな。	相手が誘いたいけど誘えなうだったので、話題を変えた。
	16	悲しい ゆううつ	8点 5点	コントロールできないことはない。	その目のうち、悲しいという気持ちはなくなっ。	変化はない。自分の要因。	思考の回避。考えないようにしていい。

P
D
傾
向
低
群

Table7-5 半構造化面接の回答内容(親密度低場面)

群	ID	感情	感情の点数	感情のコントロールの程度	感情が収まるまでの時間	相手に対しての考え	その状況での対処法
B P D 傾 向 低 群	1	不安 さみしい	各4点	特になし	すぐおさまった。そこから歩いてすぐ忘れた。	麻しくて怖い。今までそこまでは思っていない気がした。でもそれだけしつかりした人なんだろうとも思った。ステータスを持っている人なので、言うこととは間違っていない。	特に何もしていない。
	2	がっかり 悲しい もったいない	6点 5点 7点	日常生活レベルで(感情のコントロールがきかなくなることはない)が、普段の行動はいつも通り。ちょっとおもやもやす程度	1週間もしたらなくなかった。	他の生徒から自分について説明されるようなことと聞くことを信じているんだと思つた。信頼感を失つた。	特に何もしていない。
	3	残念 クカムカ 悲しい	8点 7点 5点	コントロールがきかなくなることはないが、その後その人に対する態度は変わった。	半年くらい。気持ち自体の変化はなかつた。久しぶりに会った時に気持ちがなくなっていた。	相手かひと。そばに寄りたくない。話ができない、合わない。	よそよそしい態度もつた。その話題はそれなりのことにして、当たり前に行きた友人と相談した。あまり考えないようにした。
	4	イライラ 不安 さみしい	9点 6点 3点	連絡がきたあと、30分くらいは“はあ”と気が落ち込んだ	その人のことを何も考えてない時は平気だが・・・気持ちが強さは今も同じくらい。	べつと見が癒しい人だったので、見た目ほど優しい人ではないんだ。今考えたら、思ったことをちゃんと言おう人なのか。	TV見たり、本を読んだり。もういいや、と思つて、他の友達と遊ぶ約束をした。その人は笑顔で接する。
	5	イライラ くやし さみしい	8~9点 4~5点 9点	その授業が嫌いになった。コントロールがきかなくなると悲しかった。	2限だったが、星食を食べ終わったらおさまった。	もうその人とはそんなにかんがなくていいのか。・・・と思つた。一方的に仲が良かったと思つていたが、時間とか約束にルーズな人。悪感。	途中で自分では自分も話しかけていたが、後半は他の勉強をはじめた。あまりそばにはよらないようにした。友人と関係ない話をした。
	6	孤独感 あきらめ 怒り	各7点	コントロールがきかなくなることはない。	授業が終わってしばらくすると忘れるが、次に行く時また「嫌だな」という気持ち。「またあの中に入っていくのか」という不安感。考えること自体疲れる。教室に入る直前の気持ちの方が大きい。	自分とは関係のない人になつた。	別のことを考えようとした。
	7	悲しい 見捨てられた 不安	5点 8点 8点	感情のコントロールがきかなくなることはないが、不安な状態が続いていく。慢性的な軽い不安は続いている。	不安はまだ残っていて、おさまっていない。「ず」と不安に思つても仕方ないし、自分でコントロールする。感情的なものなので、自分も直せる。ところどころ「直そう」と前向きな気持ちもある。	思かだな。さげすむような味方。塾でわいわいがやがやするのとは違うかな、と思つた。自分を正当化した。	指摘されたところを直そうと思つたが、分かんないまま動きをしていて、他人に話した。全く関係のない話を友人とした。
	8	心配 不安	8点 8点	すぐに授業だったが、先生の言うことに集中できなかった。勉強するところじやない、と思つた。	1時間以上。次の日は普通までは戻らなかつたけど、少し回復した。	その人がわがまま、気分屋とは思わなかつた。こっち側に原因があつたのかな、という考えに向いた。	会つたらもっと多きい声であいさつして、相手の反応をためめそうと寝て忘れる。
	9	混乱、動揺 怒り 悲しい・・・さみしい	8点 7点 8点	その空間にいることが嫌になつた。怒りがおさまらない。動揺もつた。相手の好感度が下がった	その場でしばらく續いていて、他の子と話して少しおさまつてきて、完全におさまつたのは夕食を離れてから。	あの子にはそういうことを期待しない。あんまり関わらないようにしよう。八方美人な子。自分が楽しければいいや、という子。「私が見捨ててやる」と思つた。	褒に怒つたりできなかつたので、気にしないふりを装つた。顔はこぼして話をしてるのをささげたり、ちよつとした嫌がらせをした。その子に対して話しかけなかつた。他の友達と会つて、悪態を言った。
	10	悲しみ 怒り	6点 5点	しばらく怒つてから、思ひ出さずとつと落ち込むことが何度あつた。	30分~1時間くらい。	自分から解決する気がない。私をアシストする気がない。別り別られた、価値がなくなった。友達いないなと思つた。距離の取り方を考える。	ブログに長い記事を書いた。時間がたつたら消した。気持ちの整理になつた。
	11	さみしい 苦しい	6点 8点	特に生活に支障をきたささない。	2日くらい。その次に会った時、それまではおもやもやしていたが、相手に会つたら大丈夫だつた。	悪い人たちではない。そういう人になるのは分かる。自分が考えすぎているだけ。	逆に自然にふるまう。同じような体験を思い出し、大丈夫と自分に言い聞かせる。
	12	もやもや 疑問	9点 7点	コントロールできないことはない。	その日に家族や友人に話して、相手がおかしいと言われておさまつた。	1回前に会った時はテンションが高かつた。気持ちが高かつた。家族や友人に話した。	
	13	不安	5点	コントロールできないことはない。	そんなに長くはない。トータルで5分くらい。	悪い人ではない。単純に忘れていただけ。悪意があるわけではない。	話す機会がある時は、できるだけ話しやすいうように心がけた。向こうが自分のことをおとなしいと思つていると思うから、積極的に話してみた。
	14	さみしい 悲しい 後悔	2~9点 5点 8点	コントロールがきかぬ程度ではない	すぐにおさまった。気持ちが切り替えた。	授業中に質問できたらよかつたのかな。	他の人に質問した。
	15	不安	5点	コントロールできないことはない。	1分くらい。	忙しそうだな、メールの確認が遅いのか。	「忙しいんだろうな」と考えて、自分で理由をつけた。
	16	イライラ 罪悪感	8点 9点	その瞬間は感情にまかせて挨拶しなかつたが、その後の苦痛はそんなに強くない。次に挨拶したらしてくれらるかも、と気持ちを転換した。	10~15分くらい。次会ったときに挨拶してみよう、という前向きな気持ちになつた。	みんなに対してそういう反応をしているんだつたら、大丈夫か？損していいんじゃないか？	考えを変えて楽になつた。その後一度挨拶してきてきた。

BPD 傾向高群・低群ともに，半構造化面接において，見捨てられ場面で主観的に経験した感情とその強度（0～10）を自己報告してもらった。その感情得点の平均値と標準偏差を Table 7-6 に示す。

Table 7-6 半構造化面接において報告された感情の平均値と標準偏差

	イライラ・怒り	悲しみ・落ち込み	不安・心配	孤独	動揺・ショック
BPD傾向高群					
親密度高場面	1.50(2.98)	4.78(4.00)	2.83(4.27)	5.32(3.65)	1.78(3.56)
親密度低場面	4.23(4.12)	3.33(3.32)	2.89(3.62)	2.56(3.47)	1.56(3.13)
BPD傾向低群					
親密度高場面	.00(.00)	4.43(4.16)	.71(1.89)	2.14(3.08)	.00(.00)
親密度低場面	3.14(4.10)	1.57(2.70)	1.43(2.44)	1.29(2.36)	1.00(2.65)

まず，BPD 傾向高群・低群で得点に差がみられるかどうかを調べるために， t 検定を行った。その結果，親密度高場面における「孤独」に関する感情について，差が有意傾向であった（ $t(14) = 1.85$ ， $p < .10$ ）。BPD 傾向高群の方が，BPD 傾向低群よりも得点が高い値であった。その他の感情（イライラ・怒り，悲しみ・落ち込み，不安・心配，動揺・ショック）については，有意差は認められなかった（*n.s.*）。この結果から，BPD 傾向高群は，特に相手の親密度が高い場面において，孤独感を感じやすいと考えられる。

次に，BPD 傾向高群の特徴を調べることを目的として，BPD 傾向高群から得られた感情の強度について，親密度高／低場面で差があるかどうかを調べるために， t 検定を行った。その結果，「イライラ・怒り」について，親密度高／低場面で有意差が示された（ $t(16) = -1.64$ ， $p < .05$ ）。親密度が低い場面の方が，親密度が高い場面と比べて有意に「イライラ・怒り」の得点が高かった。その他の感情（悲しみ・落ち込み，不安・心配，孤独，動揺・ショック）については，有意差は認められなかった

(*n.s.*)。

相手に対する考えに関して、実際に見捨てられ場面において考えた内容について自己報告してもらった (Table 7-4, Table 7-5)。研究 3 で示された BPD 傾向者の認知的対処の特徴である、「肯定的解釈の不足」が実際に見受けられるかを検討するために、相手に対してネガティブな印象が強くなったと回答した者の回答者数を調べた。その結果、親密度高場面においては、BPD 傾向高群では 9 名中 7 名、BPD 傾向低群においては 7 名中 2 名であった。親密度低場面においては、BPD 傾向高群では 9 名中 5 名であった。一方、BPD 傾向低群では 7 名中 0 名であった。両群の差について、 χ^2 検定を行ったところ、親密度高・低場面ともに差が有意であった (親密度高場面: $\chi^2(1)=3.87, p<.05$, 親密度低場面: $\chi^2(1)=5.66, p<.05$)。また、研究 3 で示された BPD 傾向者の認知的特徴である、「放棄・あきらめ」について検討するために、相手との関係性を断絶するような思考内容や、その場面の問題解決を放棄するような思考内容の有無について調べた。その結果、親密度高場面においては、BPD 傾向高群では 9 名中 2 名、BPD 傾向低群では 7 名中 0 名が、「放棄・あきらめ」に関連する思考を有していた。親密度低場面においては、BPD 傾向高群では 9 名中 5 名、BPD 傾向低群では 7 名中 1 名であった。両群の差について、 χ^2 検定を行ったところ、親密度低場面において差が有意傾向であった ($\chi^2(1)=2.86, p<.10$)。

行動的側面に関して、実際に見捨てられ場面で行った行動について自己報告をしてもらった (Table 7-4, Table 7-5)。その結果、BPD 傾向高・低群ともに、「友などに相談する」といった対処について、親密度高/低場面に関してともに報告された。一方、「相手との関係に距離を置く」という行動を報告したのは、BPD 傾向高群においては親密度低場面では 9 名中 5 名、親密度高場面で

は、9名中0名であった。BPD傾向低群においては、親密度低場面では7名中1名が報告したが、親密度高場面では、7名中0名の報告であった。両群の差について、 χ^2 検定を行ったところ、親密度低場面において差が有意傾向であった ($\chi^2(1)=2.86, p<.10$)。BPD傾向高群の方が、低群よりも「相手との関係に距離を置く」という報告が多かった。また、BPD傾向高群における親密度高／低場面の差について、データに対応がある場合の比率の検定方法であるマクネマー検定を行ったところ、差が有意傾向であった ($p<.10$)。親密度低場面の方が、高場面よりも「相手との関係に距離を置く」という報告が多かった。

「相手に直接自分の気持ちについて言う」という行動は、BPD傾向高群は、親密度高場面では9名中6名が報告したが、親密度低場面では0名であった。一方、BPD傾向低群では、親密度高場面では7名中1名が報告したが、親密度低場面では7名中0名であった。両群の差について、 χ^2 検定を行ったところ、親密度高場面において有意差が示された ($\chi^2(1)=4.39, p<.05$)。BPD傾向高群の方が、低群よりも「相手に直接自分の気持ちについて言う」という行動を有意に多く報告していた。また、BPD傾向高群における親密度高／低場面の差について、マクネマー検定を行ったところ、有意な差が示された ($p<.05$)。親密度高場面の方が、低場面よりも「相手に直接自分の気持ちについて言う」という行動を有意に多く報告していた。相手に直接伝える内容について、BPD傾向高群においては、「後から伝える」という対処をとった者が多く、その場で直接的に伝える者は少なかった。BPD傾向低群においては、伝える行動はせずに、「忘れる」、「気晴らしをする」、「後日積極的に話しかける」といった行動をとる者が多かった。

また、BPD傾向高群では、相手の親密度によって感情

や行動は異なるか，という質問に関しては，「（親密度が高い場合においては）ネガティブな感情が持続する」と答えた者が最も多く，9名中6名であった。

半構造化面接の結果から，BPD傾向高群の方が，相手の親密度が高い見捨てられ場面での孤独感を感じやすい可能性が示された。認知的側面については，研究3で示されたような「肯定的解釈の不足」，「放棄・あきらめ」といった認知的対処が，BPD傾向高群の方が多い傾向にあることが示された。特に，「放棄・あきらめ」については，親密度が低い場面において見受けられる認知的対処である可能性が示唆された。

行動的側面においては，「相手と距離を置く」行動は，BPD傾向高群において多い可能性が示された。「相手に直接言う」という行動については，BPD傾向高群の方で多く報告されたが，その場の対処方略として用いている者は少なかった。さらに，BPD傾向高群においては，親密度の違いによって，その後の感情や対処行動に差があり，ネガティブな気分は親密度が高い相手に対する方が長く持続する可能性が示唆された。

第3節 本章の考察

まず，本章の仮説を順に検証する。

仮説1) ABSQの得点は，BPD傾向高群の方がBPD傾向低群よりも見捨てられ場面想起後に有意に増加する。

仮説1について，BPD傾向高群とBPD傾向低群の間でABSQの得点の変化率については差が示されなかったものの，BPD傾向高群のみ，ABSQ得点が見捨てられ場面イメージ想起後に有意に上昇していたことから，仮説は概ね支持されたものと考えられる。よって，BPD傾向高群では，平常場面においても見捨てられスキーマを強く有しているが，見捨てられ場面においては，さらに見捨てられスキーマが賦活されることが示されたといえる。

仮説 2) BPD 傾向高群の方が，BPD 傾向低群よりも顕著に見捨てられスキーマに関連する発話（発話思考法）と，スキーマに関連する感情・行動反応（感情指標・半構造化面接の反応）が示される。

仮説 2 について，発話思考法の評定から，BPD 傾向高群の方が，BPD 低群よりも見捨てられスキーマに関連する発話が有意に多く報告されたことが分かった。また，感情では「孤独感」，行動では「相手と距離をとる」といった，先行研究でも指摘されているような BPD の特徴が，BPD 傾向高群で多く示された。このことから，仮説 2 も概ね支持されたといえる。また，BPD 傾向高群の発話内容（Table 7-3）と半構造化面接の結果（Table 7-4，Table 7-5）から，適切な自己主張といった対人スキルの欠如や，出来事に対する「放棄・あきらめ」「肯定的解釈の不足」といった対処が，BPD の徴候の維持に影響していることが推察された。

仮説 3) BPD 傾向高群において，親密度が高い場面と低い場面では，関連する見捨てられスキーマの因子が異なる。

仮説 3 について，ABSQ の得点の増加率については，親密度高／低場面で有意な差は示されなかった。一方，発話思考法の発話評定においては，BPD 傾向高群において，親密度高場面では，「親密な関係に対するしがみつき・同一視」因子に関する発話が有意に多く報告され，親密度低場面では，「他者からの好意に対するあきらめ」に関する発話が有意に多く報告された。この結果から，仮説 3 は一部支持されたと考えられる。

発話思考法の結果から，親密度が低い相手には高い相手よりも依存欲求が働かないため，「恒常的な見捨てられ・孤独」・「他者からの好意に対するあきらめ」スキーマの影響が優位に働き，相手との関係断絶に至る可能性が考えられる。

研究 4 の結果から、BPD 傾向者では、見捨てられ場面において見捨てられスキーマが賦活し、そこから派生する「放棄・あきらめ」などに関するネガティブな自動思考から、孤独感を感じやすくなるといえる。そして、相手の親密度が低い場合は「相手と距離をとる」といった対処行動をとり、相手の親密度が高い場合には、関係を断つまでには至らないものの、問題解決はされないため、ネガティブな気分が長期間持続する、という認知－感情－行動のメカニズムが想定される。つまり、見捨てられ場面において、見捨てられスキーマ関連思考が誘導され、それが自動思考レベルにおける認知的対処や感情・行動を誘発しているという、情報処理を含めた見捨てられスキーマの認知的枠組み全体の特徴が明らかになったといえる。また、研究 3 で得られた不適切な対処方略が、見捨てられ場面で実際に行われている可能性が示された。

なお、本研究では、BPD 臨床群の治療においてターゲットとされているような対人スキルが、BPD 傾向者でも不足している可能性が示された。また、親密度が高い相手であるほど、感じる感情の持続時間が長いことが示された。一方、親密な相手に対する過度な攻撃性等は、本研究では報告されなかった。これは、BPD 傾向者と BPD 臨床群の異同を示していると解釈できる。つまり、BPD 傾向者と臨床群は、衝動性の程度については差があり、相手との関係を切ることや、しがみつき等の行動化は見受けられるものの、極端な行動化にはあまり至らないと考えられる。この結果は、BPD 傾向者について、生活に重篤な支障をきたしていない者であり、現在自殺念慮や激しい自傷行為など、生命の危機や極度の心理的苦痛を有していない軽症群である、とする本論文の立場と一致する。したがって、BPD 傾向者に対する介入については、衝動性をコントロールすることを目的とするよりは、見捨てられスキーマの変容等の認知的介入と、適切な自己

主張スキルを身につけることに焦点を当てることで、より効果的であると考えられる。

研究 4 では、BPD 傾向者は、見捨てられ場面において見捨てられスキーマが賦活し、BPD に特徴的な認知的・行動的特徴を示すことが示唆された。つまり、見捨てられスキーマの認知的枠組み、およびその見捨てられスキーマの認知的枠組みが誘発する対処方略に介入することが、BPD の徴候の改善につながる可能性が、実験的手法においても示されたといえる。よって、今後の研究では、第 6 章の研究 2～3 と本章の研究 4 の知見に基づき、見捨てられスキーマの内容特殊性と見捨てられスキーマが誘発する対処方略に焦点を当てて、見捨てられスキーマの変容を促すような介入研究を行うことが望まれる。

第 8 章 見捨てられスキーマの変容が BPD の徴候の改善に及ぼす効果

第 1 節 本章の目的

研究 1 では，見捨てられスキーマの内容特殊性を十分捉えた尺度である ABSQ の開発を行った。研究 2～4 では，見捨てられスキーマの作用機序に関するメカニズムの解明を目的として，研究を行った。その結果，見捨てられスキーマが，感情の不安定性や行動化といった BPD の徴候に影響を及ぼす中核的な要因である可能性が示された。ただし，BPD 傾向者において，見捨てられスキーマが BPD の徴候に影響を与えているというメカニズムを実証するためには，見捨てられスキーマに焦点を当てた介入を行い，見捨てられスキーマが変容することによって，BPD の徴候が改善するかどうかを検証することが必要であると考えられる。しかし，見捨てられスキーマにターゲットを絞り，介入を行った実証研究は見受けられない。

よって，本章では，研究 2～4 で得られた見捨てられスキーマのメカニズムの検証を行うことを目的として，見捨てられスキーマの変容に焦点を当てた介入研究を行った。具体的には，BPD 傾向者を対象として，研究 1 で明らかになった見捨てられスキーマの内容特殊性を踏まえて，見捨てられスキーマの内容と機能を含めた認知的枠組み全体を変容を促すような介入実験を行った。ところで，見捨てられスキーマの内容の変容を促す介入手続きを検討するにあたり，研究 1～4 の結果から，BPD 傾向者の見捨てられスキーマは強固であることが推察されるため，見捨てられスキーマの反証の手続き自体が困難な場合も考えられる。そこで，研究 5 では，見捨てられスキーマの内容の反証を促す認知的再構成に焦点を当てた 2 週間の予備的介入実験を行った。そして，見捨てら

れスキーマに認知的再構成の手続きが実施可能かどうか検証した。また、見捨てられスキーマの内容の反証の手続きのみの短期的な介入によって、BPDの徴候が変化するかどうか検討した。そして研究6では、研究1～5の知見をふまえて、見捨てられスキーマの内容と機能の変容に焦点を当てた8週間の長期的介入実験を行った。研究6では、見捨てられスキーマの内容の反証手続きに加えて、研究3・4で明らかとなった見捨てられスキーマが誘発する対処方略についても焦点を当てて、見捨てられスキーマの内容面・機能面を含めた認知的枠組み全体の変容を促進するような介入を行った。見捨てられスキーマの内容そのものがBPDの徴候に与える影響に加えて、見捨てられスキーマから対処方略を媒介してBPDの徴候に与える影響についても介入対象とすることで、より効果的にBPDの徴候の改善が促進されると考える。

見捨てられスキーマに焦点を当てた介入の効果を検討することで、研究1～4で示された見捨てられスキーマがBPDの徴候に与える影響の因果関係について明らかにできると考えられる。また、本章の研究によって、見捨てられスキーマに焦点を当てた介入の有効性が示されれば、BPD傾向者に対する有効な支援法を検討するうえで、有用な示唆を提供できるといえる。

第 2 節 研究 5 認知的再構成の手続きが見捨てられスキーマの変容に及ぼす効果

目的

研究 1 では、見捨てられスキーマの内容特殊性に注目し、ABSQ の開発を行った。そして、研究 4 の発話思考法による発話内容の分析の結果から、ABSQ の内容が BPD 傾向者に特徴的なスキーマであることが示された。また、研究 2～4 では、見捨てられスキーマが BPD の徴候に影響を与える中核的な要因であることが示唆された。よって、ABSQ で測定している見捨てられスキーマの内容に介入することは、BPD 傾向者の BPD の徴候の改善に有効であると考えられる。具体的には、BPD 傾向者に対して、普段意識していなかった見捨てられスキーマの特異的な内容を意識化させ、妥当性があるかどうかについて検証する、認知的再構成の手続きを行うことが、見捨てられスキーマの内容の変容に有効であると考えられる。その際、ABSQ を用いて自身が強固に持っている見捨てられスキーマの言語的内容を把握し、客観視を促すことは、認知的再構成の過程で有用であることが推察される。ただし、BPD において強固であるとされる見捨てられスキーマの内容が、認知行動療法の手続きのひとつである認知的再構成の技法を用いて実際に変化するかどうかについて、検証した研究は見られない。BPD 傾向者の強固な見捨てられスキーマの認知的枠組み全体を変容させるためには、スキーマの特性上、長期的な介入が適切であると考えられる。しかし、長期的な介入手続きを検討する準備段階として、見捨てられスキーマの内容の変容に効果的な手続きであると考えられる認知的再構成法を用いることが、BPD 傾向者において実践可能かどうか予備的に調べる必要があると考えられる。

そこで、本研究では、BPD 傾向者の見捨てられスキーマ

マの内容特殊性に焦点を当てて、見捨てられスキーマに対して認知的再構成の手続きを行う見捨てられスキーマ焦点群と、実験期間は何も介入を行わない Waiting List (WL) 群を設定して、次の2つの仮説を検証する2週間の予備的介入実験を行った。

仮説 1)見捨てられスキーマの内容の反証を促す認知的再構成法の手続きは、BPD傾向者において実践可能である。

仮説 2)見捨てられスキーマ焦点群は、WL群と比較して、BPDの徴候(BPD傾向、感情のコントロール、見捨てられ場面での反応傾向)の得点が有意に変化する。

研究 5 では、この2つの仮説の検証を行うために、2週間の介入前後における見捨てられスキーマ得点およびBPD傾向の得点を測定した。また、研究 4 で用いた見捨てられ場面のイメージ想起実験の手続きを行い、介入前後における見捨てられ場面での反応傾向(感情・対処行動)の変化についても調べた。

方法

1. 実験参加者 2010年12月～2012年3月に、首都圏内の大学生を対象にスクリーニング調査を行った。講義場面での一斉配布による質問紙調査を実施した。調査者が質問紙を配布し、その場で回収した。本調査は強制ではないこと、回答内容は統計的に処理され、個人情報が出漏りする心配のないことを調査前に教示した。欠損値を除外した有効回答者数は、大学生456名(男性275名、女性152名、不明29名、平均年齢20.01歳、 $SD=1.70$)であった。スクリーニング調査には、ABSQとPDQ-Rを用いた。PDQ-R全体の平均得点は、4.12($SD=2.63$)で

あり、平均値 + $1/2SD$ は 5.44 点であった。そこで、PDQ-R の得点が 5 点以上で、かつ ABSQ の得点が平均値 (34.14 点) 以上である男女 16 名を、BPD 傾向高群として実験の対象とした。実験参加者は無作為に、見捨てられスキーマ焦点群 8 名 (男性 5 名, 女性 3 名, 平均年齢 20.63, $SD=1.30$) と Waiting List (WL) 群 8 名 (男性 4 名, 女性 4 名, 平均年齢 19.63, $SD=1.95$) に振り分けられた。WL 群において、実験終了までにドロップアウトが 1 名みられた。最終的に見捨てられスキーマ焦点群 8 名 (男性 5 名, 女性 3 名, 平均年齢 20.63, $SD=1.30$) と Waiting List (WL) 群 7 名 (男性 4 名, 女性 3 名, 平均年齢 19.00, $SD=0.89$) を分析の対象とした。なお、実験実施前に健康アンケートを実施し、現在医療や心理的治療を受けている者、極度の疲労や抑うつ状態、自殺念慮・激しい自傷行為等がある者は実験から除外することとしたが、該当者はいなかった。

2. 実験者 臨床心理士有資格者の大学院生女性 (30 代) 1 名

3. 実験場所 静かな環境の実験室にて、実験者と実験協力者が 1 対 1 で行った。

4. 実験材料 (a) ABSQ 18 項目。4 件法で回答を求めた。研究 1 で信頼性・妥当性は十分確認されている。見捨てられスキーマの程度の変化を調べるために用いた。(b) SDS の、自殺項目を除いた 19 項目 (福田・小林, 1973)。実験参加者の抑うつ気分状態を測定するために用いた。4 件法で回答を求めた。十分な信頼性・妥当性が確認されている。(c) PDQ-R の BPD に関する項目 (上原ら, 1996)。PDQ-R の項目については、多変量分析を目的とするため、“全くあてはまらない”, “どちらかといえば当てはまらない”, “どちらかといえば当てはまる”, “全く当てはまる”, “ほとんど毎日” の 5 件法に変更して回答を求めた。BPD 傾向を測定するために用いた。(d)

DBT における日本語版マインドフルネス尺度(斉藤・守谷, 2009)の、「情動コントロール」因子。BPDの徴候の一つである感情の不安定性を測るために用いた。4件法で回答を求めた。十分な信頼性が確認されている。また、DBT-C5項目の得点とDBTコミュニケーション・スキル尺度やMCMI-IIの得点との有意な関連が確認されている。(e) POMS(横山・荒記, 1994)から、「緊張・不安」、「抑うつ・落ち込み」、「混乱」、「怒り・敵意」の4つの下位尺度42項目を抜粋した。イメージ想起前後の気分状態の変化の測定のために用いた。5件法で回答を求めた。十分な信頼性・妥当性が確認されている。(f) 気分調査票(坂野ら, 1994)の「リフレッシュ」8項目。イメージ想起前後の気分状態の変化の測定のために用いた。4件法で回答を求めた。十分な信頼性・妥当性が確認されている。(g) TAC-24(神村ら, 1995)は、「情報収集」、「放棄、諦め」、「肯定的解釈」、「計画立案」、「回避的思考」、「気晴らし」、「カタルシス」、「責任転嫁」の8つの下位尺度24項目から成る。5件法で回答を求めた。十分な信頼性・妥当性が確認されている。本研究では見捨てられ想起場面における対処方略の傾向を調べるために、教示部分の「精神的につらい状況に遭遇したとき」という部分を、「他人から見捨てられたと感じるような状況に遭遇したとき」と変更した。(h) 研究実施者が作成した、見捨てられ場面のイメージ鮮明度、対象の親密度を問う項目。操作チェックのために用いた。それぞれ7件法で回答を求めた。

5. 手続き まず、実験協力希望者から、事前に実験に関するインフォームド・コンセントを得た。了承を得られた実験参加者に対して、承諾書へのサインを求めた。実験参加者はそれぞれ見捨てられスキーマ焦点群とWL群にランダムに割り振られた。両群ともに、1回目の実験室来室において、ベースラインの測定のための、ABSQ,

PDQ-R, SDS への回答を求めた。次に, イメージ想起実験の手続きを行った。「本実験は, あなたが普段誰かに“見捨てられた”, あるいは“見捨てられるのではないか”と感じる場面についてお聞きするものです。大きな苦痛を伴うトラウマティックな出来事ではなく, 普段あるようなささいな場面で, あなたが“見捨てられた”と感じるのはどのような場面ですか?“見捨てられた”と感じた場面を一つ思い出して下さい」と教示を行い, 参加者の見捨てられ経験について, 1 分間その場面についてイメージする時間を設けた。続いて, イメージ後の気分や考えについて, ABSQ, POMS, 気分調査票のリフレッシュ項目に回答を求めた。その後, 見捨てられスキーマ焦点群に対して, 見捨てられスキーマに関する心理教育, ホームワークの説明を行った。心理教育では, 見捨てられスキーマの概念の説明と, 見捨てられスキーマがどのような影響を及ぼすのかについて, 研究 1~4 の知見をもとに説明を行った。具体的には, 見捨てられることに対する強固な考え方を見捨てられスキーマと呼ぶこと, 見捨てられスキーマが感情の不安定さや行動に影響すること, 相手の親密度によって刺激されるスキーマの内容が異なること等について説明を行った。次に, ABSQ の中から, 特に自分の考えにあてはまると思う項目を, 相手の親密度が高い場合, 低い場合に分けて, 3 項目ずつ選ぶように求めた。ホームワークは, ABSQ の中から選んだ項目の内容の反証を行う認知再構成の課題と, 実際に起こった見捨てられ場面の思考・感情を記録して, 代替思考を案出する思考記録表から構成された。ホームワークは冊子にして配布を行った。実験の所要時間は約 60 分であった。WL 群については, 一回目の実験室来室において, ベースライン測定とイメージ想起の実験のみを行った。実験の所要時間は約 30 分であった。両群ともに, 1 回目の来室から約 2 週間後に再度実験室に来室し

てもらい，1回目と同様の手続きを行った。その後，見捨てられスキーマ焦点群に対しては，2週間の介入実験の感想などを尋ねるインタビューを行った。WL群については，デブリーフィングを行い，希望があれば介入群と同様の介入を行った。

6. 倫理的配慮 実験においては，事前にいかなる段階でも参加を中断できること，いったん参加に同意した場合でも，いつでも同意を撤回できることを口頭および書面で説明した。本研究は，早稲田大学「人を対象とする研究に関する倫理委員会」の承認を得て実施した（承認番号：2010-232）。

結果

各指標の平均値および標準偏差を Table 8-1 に示す。

Table8-1 各群における各指標得点の平均値と標準偏差

		N=15				時期	交互作用
		見捨てられスキーマ焦点 N=8		Waiting List群 N=7			
		M	SD	M	SD	F(df)	F(df)
SDS	Pre	46.75	6.25	39.43	6.21		
	Post	44.38	6.12	39.00	4.93		
ABSQ 全得点	Pre	41.38	8.35	43.29	3.86	$F(1,13)=3.61, p<.10$	$F(1,13)=2.01, n.s.$
	Post	34.13	4.26	42.29	6.92	Pre>Post	
F1	Pre	16.75	4.17	17.14	2.27	$F(1,13)=4.23, p<.10$	$F(1,13)=3.62, p<.10$
	Post	13.13	1.96	17.00	3.06	Pre>Post	焦点群において, Pre>Post
F2	Pre	16.88	4.97	17.86	3.63	$F(1,13)=1.37, n.s.$	$F(1,13)=.05, n.s.$
	Post	14.88	2.70	16.57	4.69		
F3	Pre	7.75	1.58	8.29	1.80	$F(1,13)=.88, n.s.$	$F(1,13)=3.18, p<.10$
	Post	6.13	0.99	8.71	0.95		焦点群において, Pre>Post
PDQ-R	Pre	29.88	5.82	29.57	4.04	$F(1,13)=10.47, p<.01$	$F(1,13)=.01, n.s.$
	Post	28.25	5.90	27.57	4.08	Pre>Post	
DBT-E	Pre	17.38	5.04	14.14	5.24	$F(1,13)=.02, n.s.$	$F(1,13)=.49, n.s.$
	Post	16.50	4.34	14.86	3.53		

ABSQ= the Abandonment Schema Questionnaire

F1=恒常的な見捨てられ・孤独

SDS=the Zung Self-rating Depression Scale

F2=親密な関係に対するしがみつきの同一視

PDQ-R=the Personality Diagnostic Questionnaire-Revised

F3=他者からの好意に対するあきらめ

DBT-E=DBTにおける日本語版マインドフルネス尺度「情動コントロール」因子

1. 群の等質性に関する検討 まず、プリテスト段階のPDQ-R得点、ABSQ得点について、 t 検定を行った。その結果、有意差は示されなかった($t(13) = .14, n.s.$)。よって、BPD傾向、見捨てられスキーマの強さについて、両群の等質性が示されたといえる。

2. 操作チェック イメージ想起実験の操作チェックとして、見捨てられ場面のイメージの鮮明度の平均値を求めた。イメージ鮮明度の平均値は、7点満点中5.59($SD=$

1.45) であった。よって、各実験参加者が中程度以上に見捨てられ場面についてイメージできていたことから、イメージ想起の操作は適切に行われたといえる。

次に、見捨てられスキーマ焦点群の介入操作が適切に行われているかについて、ホームワークの達成度について調べた。提出されたホームワークの実施状況を確認した結果、見捨てられスキーマ焦点群の全ての参加者が、ABSQの反証の案出および最低2場面の思考記録表の記入を行っていた。よって、介入操作も適切に行われていたと判断できる。

3. ABSQ 得点 見捨てられスキーマ焦点群と WL 群の ABSQ 合計得点について、介入前後の変化を調べるために、群（見捨てられスキーマ焦点群 / WL 群）および時期（プリテスト / ポストテスト）を独立変数、ABSQ の得点を従属変数とした 2 要因の分散分析を行った。ABSQ 得点は、イメージ操作導入前のベースライン測定値を用いた。分析の結果、ABSQ の合計点について、時期の主効果が有意傾向であった ($F(1,13) = 3.61, p < .10$)。プリテストからポストテストにかけて、ABSQ の得点が低減していた。さらに、ABSQ の各因子についても、同様に 2 要因の分散分析を行った。ABSQ の「恒常的な見捨てられ・孤独」因子の得点について、交互作用が有意傾向であった ($F(1,13) = 3.62, p < .10$) (Figure 8-1)。時期の単純主効果を検定した結果、見捨てられスキーマ焦点群は、有意に得点が低減していた ($F(1,13) = 8.40, p < .05$)。しかし、WL 群については、有意な得点の変化は認められなかった (*n.s.*)。

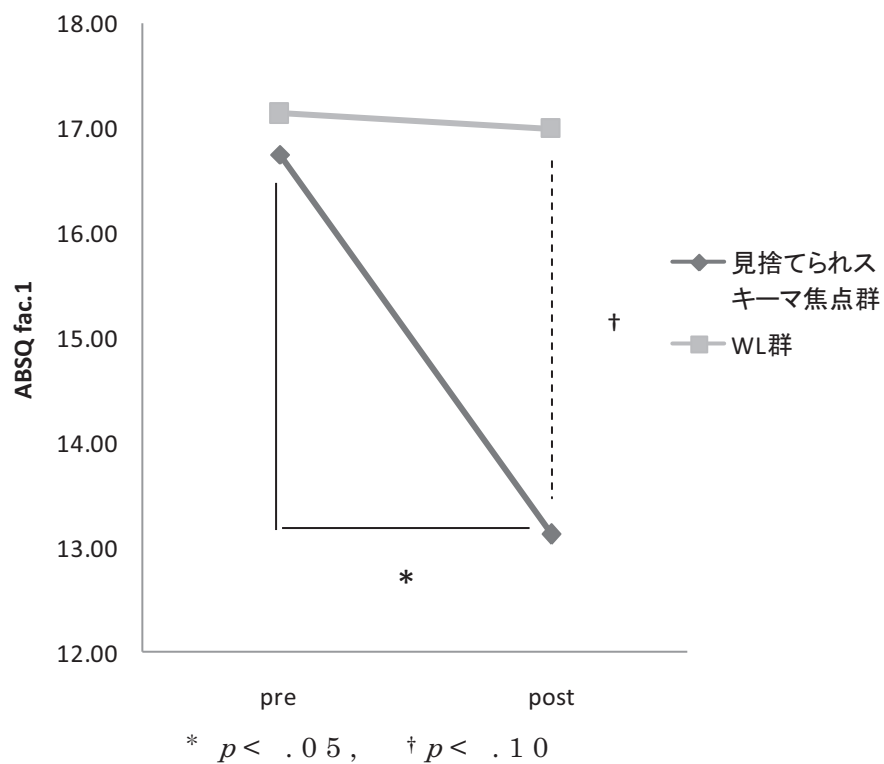


Figure 8-1 「恒常的な見捨てられ・孤独」因子得点の平均値の変化

次に ABSQ の「親密な関係に対するしがみつき・同一視」因子の得点については，主効果，交互作用ともに有意な結果は得られなかった (*n.s.*) (Figure 8-2)。

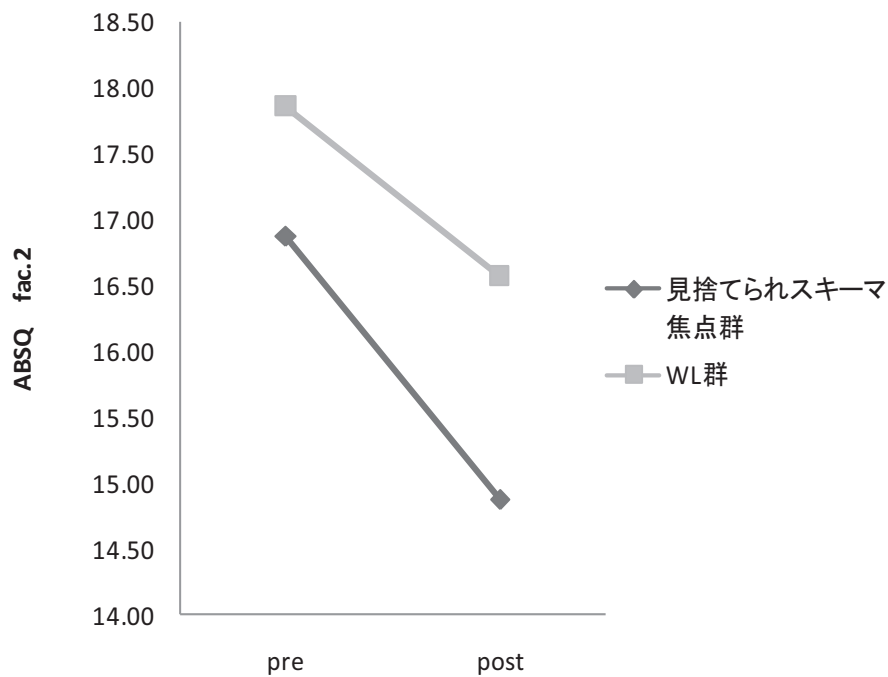
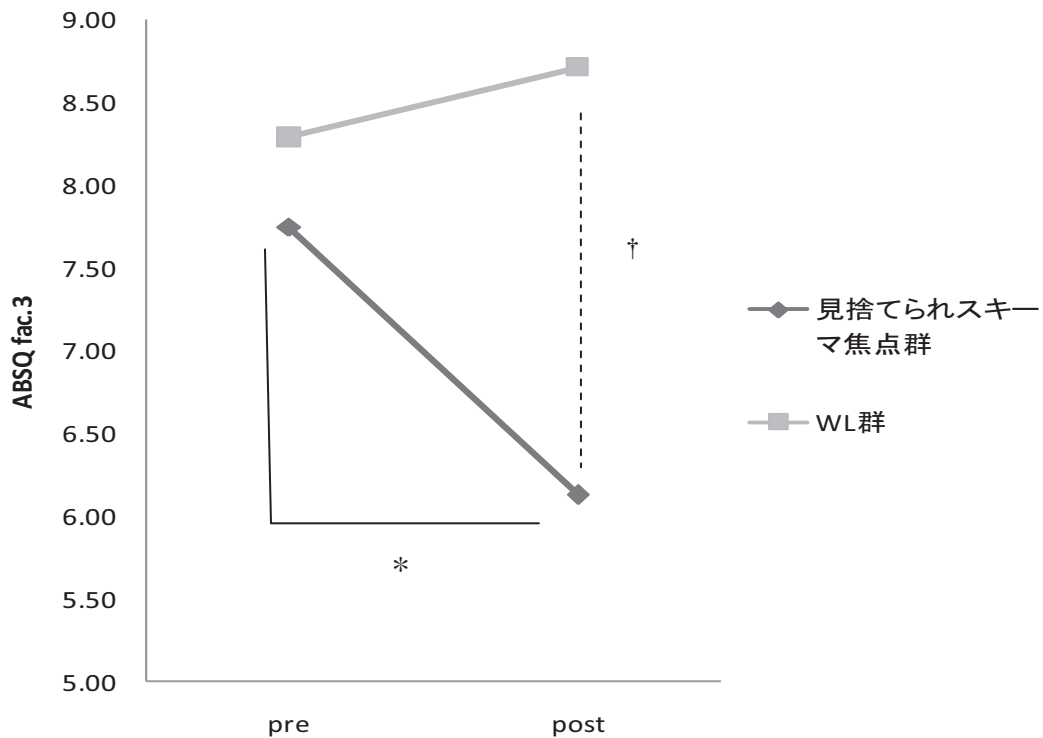


Figure 8-2 「親密な関係に対するしがみつき・同一視」因子得点の平均値の変化

ABSQ の「他者からの好意に対するあきらめ」因子の得点については，交互作用が有意傾向であった ($F(1,13) = 3.18, p < .10$) (Figure 8-3)。時期の単純主効果を検定した結果，見捨てられスキーマ焦点群は，有意に得点が低減していた ($F(1,13) = 6.94, p < .05$)。しかし，WL群については，有意な得点の変化は認められなかった (*n.s.*)



* $p < .05$, † $p < .10$

Figure 8-3 「他者からの好意に対するあきらめ」因子得点の平均値の変化

この結果から、ABSQの得点は、「恒常的な見捨てられ・孤独」因子と、「他者からの好意に対するあきらめ」因子の得点について、見捨てられスキーマ焦点群の方が、WL群よりも介入前後で得点が有意に低減していることが示された。

4. PDQ-R 得点 BPD傾向を測定するPDQ-R得点について、見捨てられスキーマ焦点群とWL群の介入前後の変化を調べるために、群（見捨てられスキーマ焦点群 / WL群）および時期（プリテスト / ポストテスト）を独立変数、PDQ-Rの得点を従属変数とした2要因の分散分析を行った。その結果、時期の主効果が有意であった（ $F(1,13) = 10.31$, $p < .01$ ）。両群とも、プリテストからポストテストにかけて、PDQ-Rの得点が低減していた。

5. SDS 得点 抑うつ状態を測定する SDS 得点については、 t 検定の結果、プリテスト段階で、見捨てられスキーマ焦点群と WL 群の間に有意差が示された。見捨てられスキーマ焦点群の方が、SDS 得点が有意に高かった ($t(13)=2.27, p < .05$)。そこで、各群の変化率 (ポストテスト-プリテスト/プリテスト) を算出し、見捨てられスキーマ焦点群と WL 群の差について t 検定を行った。その結果、有意差は示されなかった (見捨てられスキーマ焦点群平均値 $-.08$, WL 群平均値 $.00$, *n.s.*)。

6. DBT における日本語版マインドフルネス尺度「情動コントロール」因子得点 感情の不安定性を測定する「情動コントロール」因子の得点について、群 (見捨てられスキーマ焦点群 / WL 群) および時期 (プリテスト / ポストテスト) を独立変数、「情動コントロール」因子の得点を従属変数とした 2 要因の分散分析を行った。その結果、主効果、交互作用ともに有意な結果は得られなかった (*n.s.*)。

7. イメージ想起実験 見捨てられ場面のイメージ想起実験のプリテストとポストテストにおける各指標の測定値について分析を行った。平均値と標準偏差を Table 8-2 に示す。

Table8-2 各群におけるイメージ想起実験の各指標得点の平均値と標準偏差

		N=15					
		見捨てられスキーマ焦点 N=8		Waiting List群 N=7		時期	交互作用
		M	SD	M	SD	F(df)	F(df)
POMS							
緊張-不安	Pre	22.00	7.76	23.17	6.37	$F(1,13)=1.79$, n.s.	$F(1,13)=1.31$, n.s.
	Post	17.67	8.14	19.86	9.46		
抑うつ-落ち込み	Pre	32.50	12.55	33.33	10.19	$F(1,13)=2.79$, n.s.	$F(1,13)=1.84$, n.s.
	Post	15.13	7.86	31.00	18.17		
混乱	Pre	14.13	5.36	16.83	3.66	$F(1,13)=1.69$, n.s.	$F(1,13)=.50$, n.s.
	Post	9.63	4.87	15.71	7.43		
怒り-敵意	Pre	20.25	10.95	15.17	14.40	$F(1,13)=.71$, n.s.	$F(1,13)=.11$, n.s.
	Post	14.25	7.78	11.43	15.69		
気分調査票							
リフレッシュ	pre	10.63	3.38	10.17	3.49	$F(1,13)=2.27$, n.s.	$F(1,13)=3.39$, $p<.10$
	Post	16.63	6.02	10.50	3.89		焦点群において, Pre<Post
TAC-24							
カタルシス	pre	8.38	3.70	9.67	4.59	$F(1,13)=.15$, n.s.	$F(1,13)=2.63$, n.s.
	Post	10.00	3.34	8.67	5.24		
放棄-あきらめ	pre	8.50	2.83	8.67	2.07	$F(1,13)=.06$, n.s.	$F(1,13)=.06$, n.s.
	Post	8.13	2.30	7.33	3.67		
情報収集	pre	6.63	3.62	7.67	1.86	$F(1,13)=2.06$, n.s.	$F(1,13)=.49$, n.s.
	Post	8.38	3.81	7.00	5.37		
気晴らし	pre	8.00	2.56	8.00	3.58	$F(1,13)=3.56$, $p<.10$	$F(1,13)=.04$, n.s.
	Post	9.00	3.02	9.00	3.02	Pre<Post	
回避的思考	pre	7.75	3.06	7.00	1.41	$F(1,13)=5.08$, $p<.05$	$F(1,13)=.39$, n.s.
	Post	9.88	1.96	7.00	3.69	Pre>Post	
肯定的解釈	pre	8.50	3.74	8.17	1.72	$F(1,13)=5.40$, $p<.05$	$F(1,13)=.01$, n.s.
	Post	10.50	2.98	8.67	4.63	Pre<Post	
計画立案	pre	9.50	3.51	8.17	2.93	$F(1,13)=.21$, n.s.	$F(1,13)=.00$, n.s.
	Post	9.75	3.81	6.00	3.16		
責任転嫁	pre	8.75	2.49	8.67	3.01	$F(1,13)=.68$, n.s.	$F(1,13)=.13$, n.s.
	Post	7.75	1.98	7.33	3.98		

TAC-24=the Tri-Axial Coping Scale

8. 気分指標 見捨てられスキーマ焦点群とWL群の, イメージ想起後の気分状態の変化を調べるために, 群(見捨てられスキーマ焦点群/WL群)および時期(プリテスト/ポストテスト)を独立変数, 各気分指標の得点を

従属変数とした 2 要因の分散分析を行った。まず、POMS の「緊張－不安」,「抑うつ－落ち込み」,「混乱」,「怒り－敵意」の 4 つの下位尺度について分析を行った結果、いずれの下位尺度についても、主効果、交互作用ともに有意な結果は得られなかった (*n.s.*)。気分調査票の「リフレッシュ」項目については、交互作用に有意傾向が認められた ($F(1,13) = 3.39, p < .10$)。時期の単純主効果の検定を行ったところ、見捨てられスキーマ焦点群のみ、プリテストからポストテストにかけて、有意に得点が低減していた ($F(1,13) = 7.28, p < .05$)。

9. TAC-24 TAC-24 の「情報収集」,「放棄,諦め」,「肯定的解釈」,「計画立案」,「回避的思考」,「気晴らし」,「カタルシス」,「責任転嫁」の 8 つの下位尺度の得点について、見捨てられスキーマ焦点群と WL 群の介入前の変化を調べるために、群（見捨てられスキーマ焦点群 / WL 群）および時期（プリテスト / ポストテスト）を独立変数、TAC-24 の得点を従属変数とした 2 要因の分散分析を行った。その結果、「肯定的解釈」,「回避的思考」,「気晴らし」について、時期の主効果が有意であった。「肯定的解釈」と「気晴らし」については、プリテストからポストテストにかけて、有意および有意傾向で得点が増加していた（順に、 $F(1,13) = 5.40, p < .05, F(1,12) = 3.56, p < .10$)。「回避的思考」については、プリテストからポストテストにかけて、有意に得点が低減していた ($F(1,13) = 5.08, p < .05$)。その他の下位尺度の得点については、主効果、交互作用ともに有意な結果は得られなかった (*n.s.*)。

考察

研究 5 では、見捨てられスキーマの内容の反証に焦点を当てた短期的介入実験を行った。

まず、仮説 1) 見捨てられスキーマの変容のための手

続きとして用いる認知的再構成法の手続きは、BPD傾向者において実践可能である、については、概ね支持されたといえる。見捨てられスキーマ焦点群における見捨てられスキーマの反証を行う手続きを用いたホームワークの達成率は高く、参加者全員が反証課題を実施していた。また、ABSQの3因子のうち2因子の得点が、見捨てられスキーマ焦点群でのみ低減していた。この結果から、BPD傾向者において強固とされる見捨てられスキーマに対しても、認知再構成の手続きを用いることは可能であることが示された。研究1～4において、見捨てられスキーマの内容特殊性は、BPDの徴候と関連が強いことが明らかとなっている。よって、本研究で用いた反証課題を行うことは、見捨てられスキーマの内容の変容に対して有用であると考えられる。

次に、仮説2)見捨てられスキーマ焦点群は、WL群と比較して、BPDの徴候(BPD傾向、感情のコントロール、見捨てられ場面での反応傾向)の得点が有意に変化する、について検証する。まず、BPD傾向を測定するPDQ-R得点は、見捨てられスキーマ焦点群とWL群の間で有意な差は示されなかった。また、感情の不安定性を測定するDBTマインドフルネス尺度の「情動コントロール」因子得点についても、両群で有意な差は示されなかった。イメージ想起実験における指標については、POMS得点、TAC-24得点は、交互作用は示されなかった。一方、気分調査票の「リフレッシュ」項目については、交互作用が示され、見捨てられスキーマ焦点群の方がWL群より有意に得点が増加していた。この結果から、2週間という短期的な介入では、全般的なBPD傾向の変化は見受けられないものの、見捨てられ場面における感情反応については、快感情が増加する可能性が示唆された。したがって、仮説2は、見捨てられ場面での感情反応のみ支持されたと考える。一方、TAC-24の得点に群間で有意な

差が認められなかったことから，見捨てられスキーマの内容の反証手続きのみでは，見捨てられ場面での対処行動の変容は促されないことが示された。研究3の結果から，見捨てられ場面での特定の対処行動がBPDの徴候の維持・強化に影響を与えていることが明らかになっている。よって，見捨てられスキーマの機能の変容をより促進するためには，見捨てられスキーマから誘発される対処行動（放棄・あきらめ，肯定的な解釈の不足といった認知的対処，对人的対処）に直接的に介入する手続きを用いることが必要であると考えられる。

研究5の結果から，BPD傾向者に対して，見捨てられスキーマの内容を反証する認知的再構成の手続きは実施可能であることが示された。一方，見捨てられスキーマ焦点群において，BPDの徴候そのものの変容に至らなかった背景には，介入が短期間であり，内容の変容のみに焦点を当てた手続きであったために，見捨てられスキーマの内容面・機能面を含めた認知的枠組み全体の変容には至らなかった可能性が考えられる。これは，見捨てられスキーマが慢性的で強固な認知的枠組みであることをふまえると，妥当な結果であるといえる。よって，今後は，より長期的な介入実験を行い，見捨てられスキーマの認知的枠組み全体の変容を目指す研究が求められる。

第 3 節 研究 6 見捨てられスキーマ変容が BPD の徴候の改善に及ぼす効果

目的

研究 5 では、見捨てられスキーマの認知的再構成の手続きを用いた 2 週間の短期的介入実験を行った。その結果、BPD 傾向者に対して見捨てられスキーマの内容の反証を行う認知的再構成の手続きは実施可能であることが示された。一方、見捨てられスキーマの認知的枠組み全体の変容を目指すためには、見捨てられスキーマから誘発される対処方略に対する介入を加えた、長期的な介入が必要であることが示唆された。

そこで、研究 1～5 の結果を踏まえて、研究 6 では、見捨てられスキーマの認知的枠組み全体の変容に焦点を当てた 8 週間の長期的介入実験を行い、BPD の徴候に与える効果を検討することを目的とした。具体的には、見捨てられスキーマの内容の反証の手続きに加えて、見捨てられスキーマが誘発する対処方略の変容の手続きを用いて、見捨てられスキーマが不適応的な思考・感情・対処を誘発する機能の変容にも介入の焦点を当て、見捨てられスキーマの認知的枠組み全体の変容を目指す。

研究 6 では、見捨てられスキーマの認知的枠組みの変容に焦点を当てた見捨てられスキーマ焦点群と、見捨てられスキーマには焦点を当てずに、認知再構成やコピーングの案出など認知行動療法の手法を用いる、見捨てられスキーマ非焦点群（非焦点群）、Waiting List（WL）群の 3 群を設定し、介入効果の検証を行った。見捨てられスキーマ焦点群においては、研究 5 で用いた見捨てられスキーマの内容に対する認知的再構成の手続きに加えて、研究 3・4 の結果から示された、見捨てられスキーマから誘発される認知的対処（見捨てられ場面における肯定的解釈の不足、放棄・あきらめ）と対人的対処（効

果的コミュニケーションの不足)に焦点を当てた介入を行った。さらに、研究2の結果から、見捨てられスキーマは感情の不安定性を引き起こすことが示されている。そこで、見捨てられスキーマから感情の不安定性への流れを断ち切り、見捨てられスキーマの機能の変容を促進するために、見捨てられ場面の感情反応への対処スキルも介入内容に加えた。

なお本研究では、介入効果の測定としてBPDの徴候を測定するPDQ-R、SCIDの行動化項目、DBTマインドフルネス尺度の「情動コントロール」因子項目を用いた。さらに、研究5と同様に見捨てられ場面のイメージ想起実験を行い、感情指標や対処行動の指標について、介入前後の得点の変化を調べた。

見捨てられスキーマに焦点を当てた介入を行うことで、BPDの徴候が改善することが示されれば、研究1~4において示唆された見捨てられスキーマがBPDの徴候に与える影響の重要性を裏付けることができる。また、既存のBPDに対する治療法では示されなかった見捨てられスキーマに焦点を当てる有効性を明らかにすることにより、BPD傾向者に対する支援法の発展に対する有用な示唆を提供できると考えられる。

研究6の仮説は以下の通りである。

仮説1)見捨てられスキーマ焦点群は、非焦点群やWL群と比較して、BPDの徴候(BPD傾向、感情不安定性、行動化)の得点の低減が大きい。

仮説2)見捨てられスキーマ焦点群は、非焦点群やWL群と比較して、プリテストからポストテストにかけて、見捨てられ場面想起後のネガティブな感情反応と、BPDの徴候に関連する行動化が低減する。

以上の仮説を検証することを，研究 6 のエンドポイントとした。

なお，研究 4 の結果から，BPD 傾向者の見捨てられスキーマは，相手の親密度の高さで関連する因子が異なり，その後の感情や行動傾向にも影響を与えている可能性が示されている。そこで，本研究では，見捨てられスキーマ焦点群の介入において，相手の親密度の違いによる反応傾向の差異についても考慮して，介入を行うこととした。さらに，イメージ想起実験を行う際に，相手の親密度が高い場面と低い場面の 2 場面を想起してもらい，それぞれの場面における介入前後の得点の変化について検討することとした。

方法

1. 実験参加者 2012 年 1 月～2013 年 5 月に，首都圏内の大学生を対象にスクリーニング調査を行った。講義場面での一斉配布による質問紙調査を実施した。調査者が質問紙を配布し，その場で回収した。本調査は強制ではないこと，回答内容は統計的に処理され，個人情報漏洩する心配のないことを調査前に教示した。欠損値を除外した有効回答者数は，大学生 563 名（男性 323 名，女性 219 名，不明 11 名，平均年齢 20.07 歳， $SD=1.64$ ）であった。スクリーニング調査には，ABSQ と PDQ-R を用いた。PDQ-R 全体の平均得点は，4.06 ($SD=2.55$) であり，平均値 + $1/2SD$ は 5.29 点であった。そこで，PDQ-R 得点が 5 点以上で，かつ ABSQ の得点が平均値（35.99 点）以上である男女 28 名を，BPD 傾向高群として実験の対象とした。実験参加者は，無作為に見捨てられスキーマ焦点群（10 名，男性 5 名，女性 5 名，平均年齢 19.40， $SD=1.08$ ）と，認知行動療法の手法を用いるが，見捨てられスキーマには焦点を当てない見捨てられスキーマ非焦点群（8 名，男性 4 名，女性 4 名，平均年齢 20.38，

$SD=1.77$), Waiting List (WL) 群 (10名, 男性4名, 女性6名, 平均年齢20.30, $SD=2.41$) に振り分けられた。実験終了までに, 非焦点群1名, WL群2名がドロップアウトした。また, 介入手続きについて, 実験の第3回目に出されたホームワークを行わなかった見捨てられスキーマ焦点群1名についても, 分析から除外した。最終的に見捨てられスキーマ焦点群9名 (男性4名, 女性5名, 平均年齢19.56, $SD=1.01$), 非焦点群7名 (男性3名, 女性4名, 平均年齢20.14, $SD=1.77$), WL群8名 (男性3名, 女性5名, 平均年齢20.50, $SD=2.67$) を分析の対象とした。なお, 実験実施前に健康アンケートを実施し, 現在医療や心理的治療を受けている者, 極度の疲労や抑うつ状態, 自殺念慮・激しい自傷行為等がある者は実験から除外することとしたが, 該当者はいなかった。

2. 実験者 臨床心理士有資格者の大学院生女性 (30代) 1名

3. 実験場所 静かな環境の実験室にて, 実験者と実験協力者が1対1で行った。

4. 実験材料 (a) ABSQ18項目。研究1で信頼性・妥当性は十分確認されている。見捨てられスキーマの程度の変化を調べるために用いた。(b) SDSの, 自殺項目を除いた19項目 (福田・小林, 1973)。実験参加者の抑うつ気分状態を測定するために用いた。4件法で回答を求めた。十分な信頼性・妥当性が確認されている。(c) PDQ-RのBPDに関する項目 (上原ら, 1996)。なお, PDQ-Rの項目については, 多変量分析を目的とするため, “全くあてはまらない”, “どちらかといえば当てはまらない”, “どちらかといえば当てはまる”, “全く当てはまる”, “ほとんど毎日”の5件法に変更して回答を求めた。十分な信頼性・妥当性が確認されている。(d) SCID-II (First et al., 1997 高橋監訳, 2002)より, 行動的側面に関する7項目。

BPD の行動的側面の徴候を測るために用いた。SCID の項目内容にある行動の頻度については，“全くない”，“1 ヶ月に 1 回程度”，“1 週間に 1 回程度”，“1 週間に 2~3 回程度”，“ほとんど毎日”の 5 件法で回答を求めた。(e) DBT における日本語版マインドフルネス尺度(斉藤・守谷, 2009)の, 「情動コントロール」因子は, BPD の徴候の一つである感情の不安定性を測るために用いた。続いて, 「効果的なコミュニケーション」因子は, 研究 3 で示された対人場面での対処行動を測定するために用いた。十分な信頼性が確認されている。また, DBT-C5 項目の得点と DBT コミュニケーション・スキル尺度や MCMI-II の得点との有意な関連が確認されている。4 件法で回答を求めた。なお, 「効果的なコミュニケーション」は全項目が逆転項目である。(f) POMS(横山・荒記, 1994)から, 「緊張-不安」, 「抑うつ-落ち込み」, 「混乱」, 「怒り-敵意」の 4 つの下位尺度 42 項目を抜粋した。イメージ想起前後の気分状態の変化の測定のために用いた。5 件法で回答を求めた。十分な信頼性・妥当性が確認されている。(g) 気分調査票(坂野ら, 1994)の「リフレッシュ」8 項目。イメージ想起前後の気分状態の変化の測定のために用いた。4 件法で回答を求めた。十分な信頼性・妥当性が確認されている。(h) TAC-24(神村ら, 1995)は, 「情報収集」, 「放棄, 諦め」, 「肯定的解釈」, 「計画立案」, 「回避的思考」, 「気晴らし」, 「カタルシス」, 「責任転嫁」の 8 つの下位尺度 24 項目から成る。5 件法で回答を求めた。十分な信頼性・妥当性が確認されている。本研究では見捨てられ想起場面における対処方略の傾向を調べるために, 教示部分の「精神的につらい状況に遭遇したとき」という部分を, 「他人から見捨てられたと感じるような状況に遭遇したとき」と変更した。(i) 研究実施者が作成した, 見捨てられ場面のイメージ鮮明度, 対象の親密度を問う項目。操作チェックのために用いた。

Table 8-3 研究 6 介入実験の手続き

	見捨てられスキーマ焦点群	非焦点群	WL群
Time1	健康アンケート・実験の説明		
	ABSQ,PDQ-R,SDS, SCID行動化項目, DBTマインドフルネス尺度「情動コントロール」因子, 「効果的なコミュニケーション」因子への回答		
	見捨てられ場面イメージ想起実験(親密度高/低) ABSQ, POMS, 気分調査票, TAC-24への回答		
	見捨てられスキーマの心理教育・同定・反証 ホームワークの説明	考え方の癖の同定・思考記録票での自動思考モニタリング ホームワークの説明	
ホームワークの実施			
Time2 (2weeks)	ABSQ,PDQ-R,SDS, SCID行動化項目, DBTマインドフルネス尺度「情動コントロール」因子, 「効果的なコミュニケーション」因子への回答		
	ホームワークの振り返り 放棄・あきらめ, 肯定的解釈の不足の変容, 思考記録票の説明 ホームワークの説明	ホームワークの振り返り 思考記録票での適応的な思考の案出 ホームワークの説明	
	ホームワークの実施		
Time3 (4weeks)	ABSQ,PDQ-R,SDS, SCID行動化項目, DBTマインドフルネス尺度「情動コントロール」因子, 「効果的なコミュニケーション」因子への回答		
	ホームワークの振り返り 感情への対処方略(思考との距離をとる, 心地よい活動)について ホームワークの説明	ホームワークの振り返り リラクゼーション法について ホームワークの説明	
	ホームワークの実施		
Time4 (6weeks)	ABSQ,PDQ-R,SDS, SCID行動化項目, DBTマインドフルネス尺度「情動コントロール」因子, 「効果的なコミュニケーション」因子への回答		
	ホームワークの振り返り 見捨てられ場面での自己主張スキルについて ホームワークの説明	ホームワークの振り返り ストレス対処法の案出 ホームワークの説明	
	ホームワークの実施		
Time5 (8weeks)	ABSQ,PDQ-R,SDS, SCID行動化項目, DBTマインドフルネス尺度「情動コントロール」因子, 「効果的なコミュニケーション」因子への回答		
	見捨てられ場面イメージ想起実験(親密度高/低) ABSQ, POMS, 気分調査票, TAC-24への回答		
	ホームワークの振り返り 介入実験の感想に関するインタビュー デブリーフィング	ホームワークの振り返り 介入実験の感想に関するインタビュー デブリーフィング	デブリーフィング

それぞれ 7 件法で回答を求めた。

5. 手続き 実験手続きを Table 8-3 に示す。まず、実験協力希望者から、事前に実験に関するインフォームド・コンセントを得た。了承を得られた実験協力者に対して、承諾書へのサインを求めた。実験者はそれぞれ見捨てられスキーマ焦点群、非焦点群、WL 群にランダムに割り振られた。両群でともに、1 回目の実験室来室において、ベースラインの測定のために、ABSQ、PDQ-R、SDS、SCID 行動化項目、DBT マインドフルネス尺度の「情動コントロール」因子と「効果的なコミュニケーション」因子への回答を求めた。

続いて、研究 5 と同様に見捨てられ場面のイメージ想起実験を行った。「本実験は、あなたが普段誰かに“見捨てられた”，あるいは“見捨てられるのではないか”と感じる場面についてお聞きするものです。大きな苦痛を伴うトラウマティックな出来事ではなく、普段あるようなささいな場面で、あなたが“見捨てられた”と感じるのはどのような場面ですか？“見捨てられた”と感じた場面を一つ思い出して下さい」と教示を行い、参加者の見捨てられ経験について、1 分間その場面についてイメージする時間を設けた。その後、見捨てられ場面の想起を促すため、研究 4 で用いた発話思考法を 3 分間実施した。発話思考法を行った後、イメージ想起後の気分や考え、見捨てられ場面での対処について、ABSQ、POMS、気分調査票のリフレッシュ項目、TAC-24 に回答を求めた。同様の手続きを、親密度の高／低いずれかの場面（実験参加者が実施していない場面）で実施した。場面提示の順序については、カウンターバランスをとった。

その後、見捨てられスキーマ焦点群と非焦点群に対しては、介入手続きを行った（詳細は後述する）。WL 群に対しては、特別な介入は行わなかった。

実験参加者には、1 回目の実験から 2 週間毎に実験室

に来室してもらい，ABSQ，PDQ-R，SDS，SCID 行動化項目，DBT マインドフルネス尺度の「情動コントロール」因子と「効果的なコミュニケーション」因子について回答を求めた。1 回目の来室時から約 8 週間後に 5 回目の来室を求め，1 回目と同様のイメージ想起実験を行った。まず，実験参加者には，ABSQ，PDQ-R，SDS，SCID 行動化項目，DBT マインドフルネス尺度の「情動コントロール」因子と「効果的なコミュニケーション」因子について回答を求めた。次に，1 回目と同様の手続きで，見捨てられ場面のイメージ想起実験を行った。イメージする場面については，1 回目と同様の場면을提示して，「現在のあなたであれば，もし同じ状況になったとき，どのような感情や考えになりますか。あるいはどのような行動をとりますか。イメージをしてみてください」と教示して，イメージ想起の手続きを行った。イメージ想起実験後，見捨てられスキーマ焦点群と非焦点群に対しては，8 週間の介入実験の感想などを尋ねるインタビューを行った。また，非焦点群と WL 群については，デブリーフィングを行い，希望があれば見捨てられスキーマ焦点群と同様の介入を行った。実験の所要時間は，見捨てられスキーマ焦点群と非焦点群は，約 60～90 分，WL 群は約 20 分～60 分であった。

6. 介入内容：見捨てられスキーマ焦点群と非焦点群の介入内容は以下の通りである。

見捨てられスキーマ焦点群に対しては，実験 1 回目では，見捨てられスキーマに関する心理教育，ホームワークの説明を行った。心理教育では，研究 1～4 の知見をもとに，見捨てられスキーマの概念に関する説明，見捨てられスキーマが感情の不安定さや行動に影響すること，相手の親密度によって刺激されるスキーマの内容が異なること等について説明を行った。次に，ABSQ の中から，特に自分の考えにあてはまると思う項目を，相手の親密

度が高い場合，低い場合に分けて，各3項目選ぶように求めた。ホームワークは，ABSQの中から選んだ項目の内容の反証を行う認知再構成の課題から構成された。ホームワークは冊子にして配布を行った。実験2回目では，実施したホームワークの振り返りと，見捨てられ場面において見捨てられスキーマから誘発される認知的対処（放棄・あきらめ，肯定的解釈の不足）について心理教育を行った。そして，認知行動療法の手続きである思考記録表の説明を行った。そして，2週間の間に経験した見捨てられ場面における思考・感情を記録して，第1回目の反証内容をもとに，代替思考を案出することをホームワークとした。実験3回目では，見捨てられスキーマが感情の不安定性を引き起こしているメカニズムについて説明を行い，見捨てられ場面での見捨てられスキーマの客観視を促進することを目的として，感情と距離を置くスキルや，見捨てられ場面で感じやすい感情に対する対処方略の案出を求めた。そして，見捨てられ場面が起こった際に，それらのスキルを実行することをホームワークとした。実験4回目では，見捨てられ場面において，見捨てられスキーマから誘発される「効果的なコミュニケーションの不足」について心理教育を行い，適切な自己主張スキルに関するワークを行った。手続きは，DBTの「対人関係スキル」から一部抜粋して，見捨てられ場面でのどのように自身の感情や要求を訴えるのかを案出するワークを行った。そして，見捨てられ場面が起こった際に，対人関係スキルを利用して相手に主張することをホームワークとした。

非焦点群に対しては，実験1回目では，認知行動理論に基づいた認知が感情や行動に影響を与えるという説明，自身の考え方のクセの確認（白黒思考・過度な一般化・将来に対する否定的な推測など），および思考記録表の使用方法について説明を行った。ホームワークは，思考記

録表を用いて、不安を感じた対人場面での自身の思考や感情をモニタリングすることを課題とした。その際、代替思考を案出できるようならば、案出した代替思考も記入するように求めた。実験 2 回目では、ホームワークの振り返りと、思考記録表を用いた代替思考の案出の方法について説明を行った。ホームワークでは、対人関係において不安を感じた場面について、思考記録表を用いて、代替思考を記入してもらった。実験 3 回目では、リラクセーション法の説明を行い、対人関係で不安を感じた場面でリラクセーション法を実施することをホームワークとした。実験 4 回目では、ストレス対処法の案出を目的として、対人関係で不安を感じた際に、どのようなストレス対処法があるかについて案出を求めた。ホームワークは、案出したストレス対処法を対人場面で不安を感じた際に実施することとした。

7. 倫理的配慮 実験においては、事前にいかなる段階でも参加を中断できること、いったん参加に同意した場合でも、いつでも同意を撤回できることを口頭および書面で説明した。本研究は、早稲田大学「人を対象とする研究に関する倫理委員会」の承認を得て実施した（承認番号：2011-179）。

結果

各指標の実験 1 回目（以下 Time1）、実験 3 回目（以下 Time3）、実験 5 回目（以下 Time5）の平均値および標準偏差を Table8-4 に示す。

Table8-4 Time1, Time3, Time5の各群における各指標得点の平均値と標準偏差

		N=26						時期	交互作用	
		見捨てられスキーマ焦点 N=9		非焦点群 N=7		Waiting List群 N=8				
		M	SD	M	SD	M	SD			F(df)
SDS	Time1	39.67	7.87	42.57	7.14	40.63	6.05	F(2,42)= .83, n.s.	F(4,42)= .32, n.s.	
	Time3	37.67	6.56	42.86	9.23	41.88	7.38			
	Time5	39.11	7.01	42.71	6.26	42.13	6.01			
ABSQ 全得点	Time1	42.89	7.87	45.00	5.42	42.75	5.60	F(2,42)= 6.21, p<.01	F(4,42)= 3.60, p<.05 Time3およびTime5において、焦点群<非焦点群, WL群 焦点群において、Time1>Time3, Time5 WL群において、Time3>Time5	
	Time3	36.22	4.49	41.14	7.43	45.75	6.09			
	Time5	35.22	3.56	40.86	8.38	42.50	4.69			
F1	Time1	15.44	4.00	18.57	3.05	17.00	3.21	F(2,42)= 4.10, p<.05	F(4,42)= 1.35, n.s.	
	Time3	12.78	2.73	17.29	2.29	18.00	2.62			Time1>Time5
	Time5	12.78	2.05	16.57	3.41	16.00	2.20			Time3>Time5
F2	Time1	20.44	4.53	17.43	4.12	17.63	4.44	F(2,42)= 2.95, p<.10	F(4,42)= 4.14, p<.05 焦点群において、Time1>Time3, Time5	
	Time3	16.89	2.93	16.14	4.85	19.13	3.31			
	Time5	16.33	1.94	16.29	4.75	18.63	4.03			
F3	Time1	7.00	1.87	9.00	1.53	8.13	1.46	F(2,42)= 2.57, p<.10	F(4,42)= 1.32, n.s.	
	Time3	6.56	1.33	7.71	1.98	8.63	2.07			Time1>Time3, Time5
	Time5	6.11	1.83	8.00	1.53	7.88	1.46			
PDQ-R	Time1	28.78	5.04	31.43	2.44	29.38	4.34	F(2,42)= 12.59, p<.001	F(4,42)= .29, n.s.	
	Time3	24.89	5.40	26.86	7.31	26.63	4.50			Time1>Time3
	Time5	24.78	3.83	25.57	4.43	24.63	3.66			
SCID行動化	Time1	10.22	1.86	10.86	2.41	10.13	2.47	F(2,40)= 12.60, p<.01	F(4,40)= 2.75, p<.10 Time5において、焦点群<非焦点群, WL群 焦点群において、Time1>Time5, Time3>Time5	
	Time3	9.56	2.40	10.29	1.50	10.25	2.55			
	Time5	7.78	2.91	10.00	1.73	9.50	2.45			
DBT-E	Time1	13.89	4.54	15.43	4.69	15.50	4.50	F(2,42)= .30, n.s.	F(4,42)= .26, n.s.	
	Time3	13.11	3.72	14.86	5.01	16.13	3.80			
	Time5	13.22	4.71	14.86	5.58	15.25	3.62			
DBT-C	Time1	14.11	3.48	15.43	3.41	13.25	4.56	F(2,42)= 2.59, p<.10	F(4,42)= 2.32, p<.10 焦点群において、Time1>Time5, Time3>Time5	
	Time3	15.33	4.06	16.29	4.19	13.50	4.34			
	Time5	17.22	4.55	15.57	3.64	13.38	5.01			

ABSQ= the Abandonment Schema Questionnaire

SDS=the Zung Self-rating Depression Scale

DBT-E=DBTにおける日本語版マインドフルネス尺度

F1=恒常的な見捨てられ・孤独

PDQ-R=the Personality Diagnostic Questionnaire-Revise

「情動コントロール」因子

F2=親密な関係に対するしがみつき・同一視

DBT-C=DBTにおける日本語版マインドフルネス尺度

F3=他者からの好意に対するあきらめ

「効果的なコミュニケーション」因子

1. 群の等質性に関する検討 まず、Time1段階のPDQ-R得点、ABSQ得点について、群（見捨てられスキーマ焦点群／非焦点群／WL群）を独立変数、PDQ-R得点およびABSQ得点を従属変数とする1要因の分散分析を行った。その結果、有意差は示されなかった（順に、 $F(2, 22) = .40, n.s.$ 、 $F(2, 22) = .25, n.s.$ ）。よって、BPD傾向、見捨てられスキーマの強さについて、両群に等質性があることが確認された。

2. 操作チェック イメージ想起実験の操作チェックとして、見捨てられ場面のイメージの鮮明度の平均値を求めた。イメージ鮮明度の平均値は、親密度高場面では、7点満点中5.36 ($SD = 1.22$)、親密度低場面では、5.40 ($SD = 1.23$)であった。よって、各実験参加者が中程度以上に見捨てられ場面についてイメージできていたことから、イメージ想起の操作は適切に行われたといえる。また、親密度高／低場面の親密度得点について t 検定を行った。その結果、親密度高場面の方が、親密度低場面よりも有意に親密度得点が高かった（親密度高場面平均値6.08, $SD = 1.08$ 、親密度低場面平均値2.36, $SD = 1.07$ 、 $t(48) = 12.22, p < .001$ ）。よって、場面の親密度の操作も適切に行われたといえる。

次に、見捨てられスキーマ焦点群の介入操作が適切に行われているか、ホームワークの達成度について調べた。その結果、見捨てられスキーマ焦点群1名が、Time3～Time4の介入期間のホームワークを全く行っていなかった。よって、この1名を分析の対象から除外した。その他の実験参加者は、各回で出されたホームワークを、指示通り実施していた。

見捨てられスキーマおよびBPDの徴候

3. ABSQ得点 見捨てられスキーマ焦点群と非焦点群、およびWL群のABSQ合計得点について、介入前後の変化を調べるために、群（見捨てられスキーマ焦点群／非

焦点群 / WL 群) および時期 (Time1, Time3, Time5) を独立変数, ABSQ の得点を従属変数とした 2 要因の分散分析を行った。ABSQ 得点は, 各回のベースライン測定値を用いた。分析の結果, 交互作用が有意であった ($F(4,42) = 3.60, p < .05$) (Figure 8-4)。単純主効果を検定した結果, Time3 と Time5 について, 群の主効果が有意であった (順に $F(2,21) = 5.38, p < .05, F(2,21) = 3.86, p < .05$)。群の要因について多重比較を行ったところ, Time3 において, 見捨てられスキーマ焦点群は, WL 群よりも有意に ABSQ の全体得点が低いことが示された ($F(1,21) = 10.74, p < .01$)。また, Time5 について, 見捨てられスキーマ焦点群は, 非焦点群および WL 群よりも, ABSQ の全体得点が低いことが示された (順に, $F(1,21) = 3.89, p < .10, F(1,21) = 6.96, p < .05$)。さらに, 見捨てられスキーマ焦点群, 非焦点群, WL 群において, 時期の単純主効果が有意であった (順に, $F(1,21) = 497.11, p < .001, F(1,21) = 477.05, p < .001, F(1,21) = 580.69, p < .001$)。時期の要因について多重比較を行って調べたところ, 見捨てられスキーマ焦点群においては, Time1 から Time3 および Time5 にかけて ABSQ の合計得点が有意に低減した (いずれも $p < .01$)。非焦点群においては, Time1 から Time3 にかけて, ABSQ の合計得点の低減が有意傾向であった ($p < .10$)。WL 群は, Time3 から Time5 にかけて, ABSQ の合計得点の低減が有意であった ($p < .05$)。

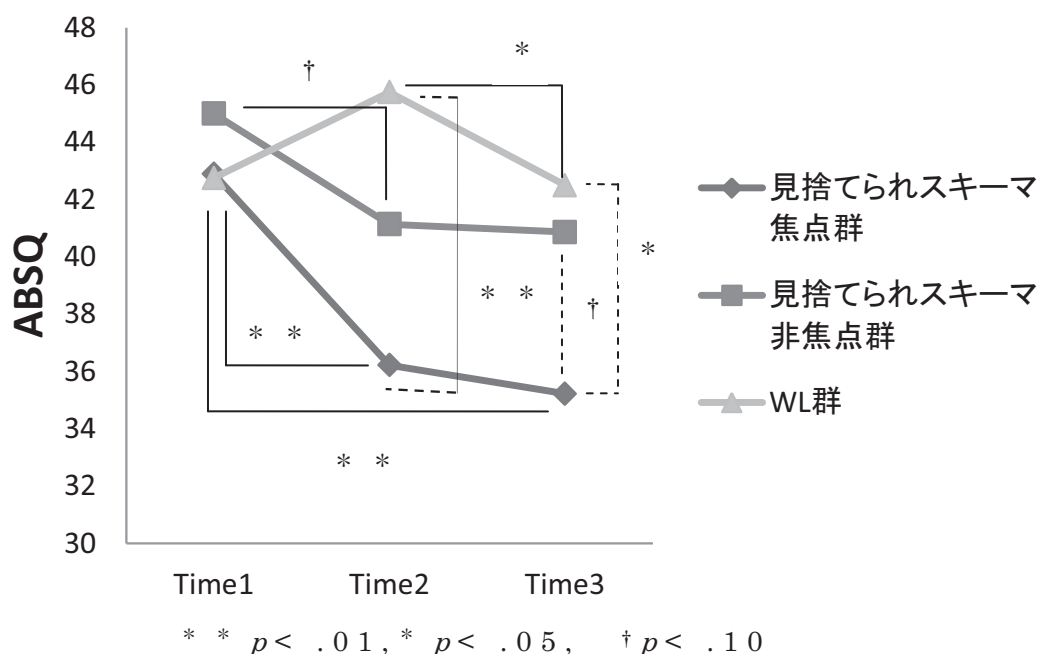


Figure 8-4 ABSQ 全得点の平均値の変化

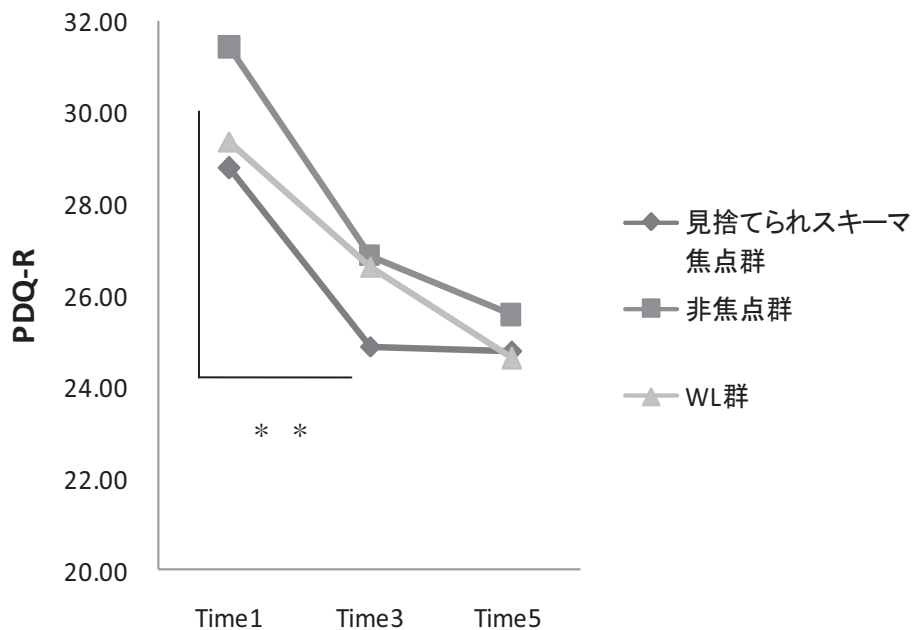
さらに，ABSQの各因子についても，同様に2要因の分散分析を行った。「恒常的な見捨てられ・孤独」因子について分析を行った結果，時期の主効果が有意であった ($F(2,42) = 4.10$, $p < .05$)。時期の要因について多重比較を行って調べたところ，Time1からTime5，およびTime3からTime5にかけて「恒常的な見捨てられ・孤独」因子得点の低減が有意および有意傾向であった (順に， $p < .10$, $p < .05$)。

次にABSQの「親密な関係に対するしがみつき・同一視」因子の得点について，同様に2要因の分散分析を行った。分析の結果，交互作用が有意であった ($F(4,42) = 4.14$, $p < .05$)。群の単純主効果を検定した結果，有意な差は示されなかった (*n.s.*)。さらに，見捨てられスキーマ焦点群，非焦点群，WL群において，時期の単純主

効果が有意であった（順に， $F(1,21) = 232.15$ ， $p < .001$ ， $F(1,21) = 155.84$ ， $p < .001$ ， $F(1,21) = 219.71$ ， $p < .001$ ）。時期の要因について多重比較を行って調べたところ，見捨てられスキーマ焦点群において，Time1からTime3およびTime5にかけて「親密な関係に対するしがみつき・同一視」因子の得点の低減が有意であった（いずれも $p < .01$ ）。

ABSQの「他者からの好意に対するあきらめ」因子の得点について，同様に2要因の分散分析を行った。分析の結果，時期の主効果が有意傾向であった（ $F(2,42) = 2.57$ ， $p < .10$ ）。時期の要因について多重比較を行って調べたところ，Time1からTime3，およびTime1からTime5にかけて，「他者からの好意に対するあきらめ」因子得点の低減が有意傾向であった（ともに $p < .10$ ）。

4. PDQ-R 得点 見捨てられスキーマ焦点群と非焦点群，およびWL群のPDQ-R得点について，介入前後の変化を調べるために，群（見捨てられスキーマ焦点群／非焦点群／WL群）および時期（Time1，Time3，Time5）を独立変数，PDQ-R得点を従属変数とした2要因の分散分析を行った。その結果，時期の主効果が有意であった（ $F(2,42) = 12.59$ ， $p < .001$ ）（Figure8-5）。時期の要因について多重比較を行って調べたところ，Time1からTime3にかけて，PDQ-R得点の低減が有意であった（ $p < .01$ ）。

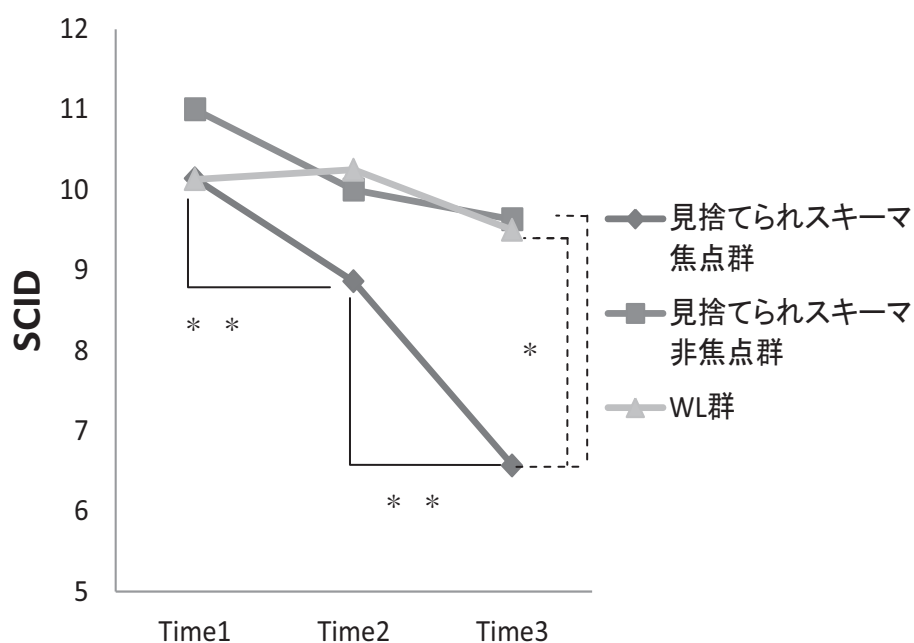


* * $p < .01$

Figure 8-5 PDQ-R 得点の平均値の変化

5. SCID 行動化得点 見捨てられスキーマ焦点群と非焦点群，および WL 群の SCID 行動化得点について，介入前後の変化を調べるために，群（見捨てられスキーマ焦点群／非焦点群／WL 群）および時期（Time1，Time3，Time5）を独立変数，行動化得点を従属変数とした 2 要因の分散分析を行った。その結果，交互作用が有意傾向であった（ $F(4, 40) = 2.75$ ， $p < .10$ ）（Figure 8-6）。単純主効果を検定した結果，Time5 について，群の主効果が有意であった（ $F(2, 20) = 4.87$ ， $p < .05$ ）。群の要因について多重比較を行ったところ，Time5 において，見捨てられスキーマ焦点群は，非焦点群および WL 群よりも有意に行動化得点が低いことが示された（順に， $F(1, 20) = 7.77$ ， $p < .05$ ， $F(1, 20) = 7.15$ ， $p < .05$ ）。さらに，見捨てられスキーマ焦点群，非焦点群，WL 群において，時期の単純主効果が有意であった（順に， $F(1, 20) = 164.51$ ， $p < .001$ ， $F(1, 20) = 269.67$ ， $p < .001$ ，

$F(1,20) = 256.62, p < .001$)。時期の要因について多重比較を行って調べたところ，見捨てられスキーマ焦点群においては，Time1からTime5,およびTime3からTime5にかけて行動化得点が有意に低減した(いずれも $p < .01$)。なお，見捨てられスキーマ焦点群 1名において，SCID項目の回答に欠損値があったため，1名除外して分析を行った。



** $p < .01$, * $p < .05$

Figure 8-6 SCID 行動化得点の平均値の変化

6. DBT における日本語版マインドフルネス尺度 まず，見捨てられスキーマ焦点群と非焦点群，および WL 群の「情動コントロール」因子得点について，介入前後の変化を調べるために，群（見捨てられスキーマ焦点群／非焦点群／WL 群）および時期（Time1, Time3, Time5）を独立変数，「情動コントロール」因子得点を従属変数とした 2 要因の分散分析を行った。その結果，主効果，交互作用ともに有意な結果は得られなかった (*n.s.*)

(Figure 8-7)。

次に、見捨てられスキーマ焦点群と非焦点群、およびWL群の「効果的なコミュニケーション」因子得点について、介入前後の変化を調べるために、群（見捨てられスキーマ焦点群／非焦点群／WL群）および時期（Time1, Time3, Time5）を独立変数、「効果的なコミュニケーション」因子得点を従属変数とした2要因の分散分析を行った。その結果、交互作用が有意傾向であった（ $F(4,42) = 2.32$, $p < .10$ ）（Figure 8-8）。単純主効果を検定した結果、有意な結果は得られなかった（*n.s.*）。さらに、見捨てられスキーマ焦点群、非焦点群、WL群において、時期の単純主効果が有意であった（順に、 $F(1,21) = 121.36$, $p < .001$, $F(1,21) = 91.72$, $p < .001$, $F(1,21) = 142.91$, $p < .001$ ）。時期の要因について多重比較を行って調べたところ、見捨てられスキーマ焦点群においては、Time1からTime5、およびTime3からTime5にかけて「効果的なコミュニケーション」因子の得点が有意に増加した（順に、 $p < .01$, $p < .05$ ）。

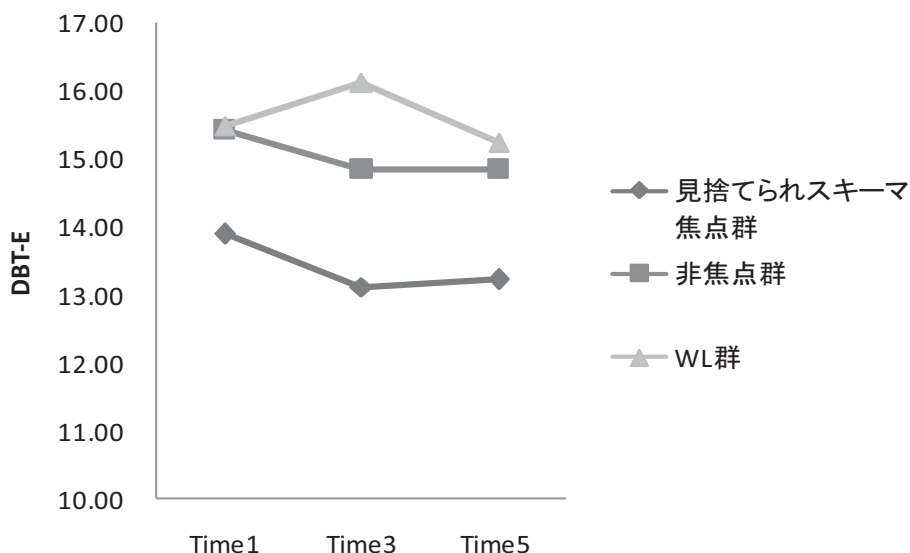
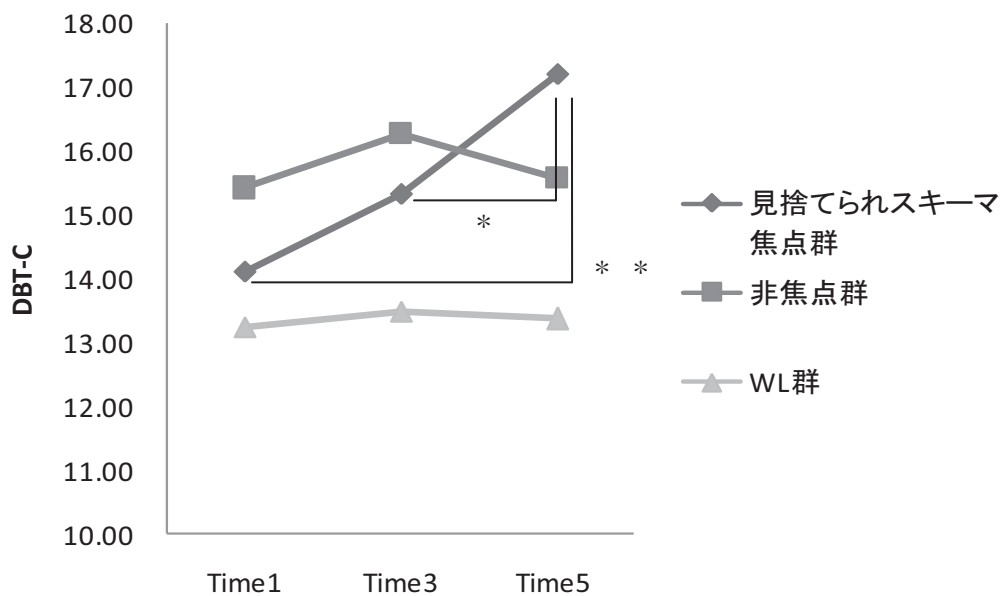


Figure 8-7 DBT-E 得点の平均値の変化



** $p < .01$, * $p < .05$

Figure 8-8 DBT-C 得点の平均値の変化

7. SDS 得点 見捨てられスキーマ焦点群と非焦点群，および WL 群の SDS 得点について，介入前後の変化を調べるために，群（見捨てられスキーマ焦点群 / 非焦点群 / WL 群）および時期（Time1, Time3, Time5）を独立変数，SDS 得点を従属変数とした 2 要因の分散分析を行った。その結果，主効果，交互作用ともに有意な結果は得られなかった (*n.s.*)。

8. イメージ想起実験指標 Time1 と Time5 で行った見捨てられ場面のイメージ想起実験の各指標の測定値について分析を行った。Time1 をプリテスト，Time5 をポストテストとした。親密度高 / 低場面の各指標の平均値と標準偏差を Table 8-5，および Table 8-6 に示す。

Table8-5 イメージ実験/親密度高場面の各群における各指標得点の平均値と標準偏差

		N=24						時期	交互作用
		見捨てられスキーマ焦点 N=9		非焦点群 N=7		Waiting List群 N=8			
		M	SD	M	SD	M	SD		
ABSQ									
全得点	Pre	46.33	9.82	47.14	7.06	49.25	7.17	F (1,21) =16.32, p<.001	F (2,21) =2.29, n.s.
	Post	34.11	4.54	42.00	10.07	45.25	4.77		
F1	Pre	18.11	4.65	19.14	4.88	19.75	4.20	F (1,21) =9.20, p<.001	F (2,21) =2.18, n.s.
	Post	12.00	2.55	17.57	3.46	18.00	2.00		
F2	Pre	19.56	5.10	19.57	4.50	20.13	4.02	F (1,21) =.78, n.s.	F (2,21) =.82, n.s.
	Post	15.11	4.20	20.14	15.29	19.50	3.82		
F3	Pre	8.67	2.50	8.43	2.82	9.38	1.51	F (1,21) =4.71, p<.05	F (2,21) =1.44, n.s.
	Post	6.78	1.79	8.57	1.90	7.75	1.39		
POMS									
緊張-不安	Pre	20.22	8.77	21.14	7.13	23.63	7.50	F (1,21) =13.71, p<.01	F (2,21) =1.95, n.s.
	Post	12.44	6.31	17.86	8.67	21.13	8.76		
抑うつ-落ち込み	Pre	29.44	14.98	29.57	12.47	30.50	9.10	F (1,21) =11.96, p<.01	F (2,21) =1.64, n.s.
	Post	14.67	8.44	24.29	15.21	24.75	13.09		
混乱	Pre	13.44	6.73	15.00	4.12	15.75	6.07	F (1,21) =3.95, p<.10	F (2,21) =.90, n.s.
	Post	8.78	3.83	13.14	5.67	14.88	6.51		
怒り-敵意	Pre	13.89	12.04	14.14	10.56	16.88	8.69	F (1,21) =.13, n.s.	F (2,21) =.91, n.s.
	Post	9.67	13.97	17.14	14.09	15.75	12.57		
気分調査票 リフレッシュ	pre	10.44	2.79	11.29	6.60	9.50	3.12	F (1,21) =24.37, p<	F (2,21) =1.04, n.s.
	Post	14.89	4.51	14.29	7.52	11.75	4.56		
TAC-24									
カタルシス	pre	8.89	3.18	8.14	5.18	10.25	3.62	F (1,21) =1.84, n.s.	F (2,21) =.13, n.s.
	Post	10.22	2.39	9.14	4.22	10.75	3.01		
放棄・あきらめ	pre	8.22	2.64	9.57	3.87	10.00	1.69	F (1,21) =.00, n.s.	F (2,21) =.63, n.s.
	Post	7.67	3.24	10.86	2.85	9.13	2.75		
情報収集	pre	7.78	4.32	6.43	4.28	7.38	1.85	F (1,21) =.89, n.s.	F (2,21) =.25, n.s.
	Post	6.78	2.86	9.00	3.42	8.63	4.34		
気晴らし	pre	8.00	2.65	8.29	2.14	9.50	3.38	F (1,21) =7.78, p<.05	F (2,21) =1.54, n.s.
	Post	10.67	2.50	9.86	3.44	9.88	2.17		
回避的思考	pre	6.22	2.68	9.00	2.58	9.00	2.67		
	Post	8.44	1.51	12.00	1.83	9.63	2.07		
	変化率	.62	.75	.42	.43	.12	.28	注)	
肯定的解釈	pre	7.78	2.68	10.14	3.72	8.50	2.62	F (1,21) =7.10, p<.05	F (2,21) =.71, n.s.
	Post	10.00	2.06	10.71	3.15	10.38	2.13		
計画立案	pre	7.67	3.16	10.00	4.43	7.13	1.64	F (1,21) =1.21, n.s.	F (2,21) =.03, n.s.
	Post	9.75	3.81	10.71	2.69	7.88	2.47		
責任転嫁	pre	8.11	3.22	9.00	4.32	7.50	2.73	F (1,21) =.20, n.s.	F (2,21) =.17, n.s.
	Post	7.44	3.43	9.71	3.73	7.25	1.83		

ABSQ= the Abandonment schema Questionnaire

TAC-24=the Tri-Axial Coping Scale

F1=恒常的な見捨てられ・孤独

注) TAC-24「回避的思考」はプリテスト段階で群間に有意差があったため、変化率を算出。群間の差について一元配置の分散分析で比較した結果、有意差なし (F (2,21) = 2.78, n.s.)

F2=親密な関係に対するしがみつきの同一視

F3=他者からの好意に対するあきらめ

Table8-6 イメージ実験／親密度低場面の各群における各指標得点の平均値と標準偏差

		N=23						時期	交互作用
		見捨てられスキーマ焦点 N=9		非焦点群 N=7		Waiting List群 N=7			
		M	SD	M	SD	M	SD		
ABSQ									
全得点	Pre	45.67	6.65	41.71	10.98	46.25	5.70	$F(1,20) = 19.40, p <$	$F(2,20) = 5.52, p < .05$ 焦点群およびWL群において, Pre>Post
	Post	33.33	7.12	40.57	11.90	41.86	8.76		
F1	Pre	19.11	3.41	18.14	4.91	19.13	3.18	$F(1,20) = 27.43, p <$	$F(2,20) = 9.47, p < .001$ 焦点群およびWL群において, Pre>Post
	Post	12.44	3.21	17.71	5.22	17.00	4.69		
F2	Pre	18.33	5.50	15.43	5.13	17.63	2.56	$F(1,20) = 1.41, n.s.$	$F(2,20) = .95, n.s.$
	Post	14.89	4.46	15.14	5.87	17.71	5.06		
F3	Pre	8.22	1.09	8.14	2.48	9.50	1.31	$F(1,20) = 29.25, p <$	$F(2,20) = 4.03, p < .05$ 焦点群およびWL群において, Pre>Post
	Post	6.00	1.80	7.71	2.36	7.14	1.46		
POMS									
緊張-不安	Pre	16.78	6.83	17.00	7.94	19.50	6.02	$F(1,20) = 6.33, p < .01$ Pre>Post	$F(2,20) = .63, n.s.$
	Post	12.33	5.45	15.71	12.22	16.29	7.85		
抑うつ-落ち込み	Pre	26.78	10.23	26.29	15.38	25.50	12.19	$F(1,20) = 20.07, p <$ Pre>Post	$F(2,20) = 1.28, n.s.$
	Post	16.00	13.01	14.86	9.51	21.86	19.07		
混乱	Pre	11.67	4.66	11.14	5.70	13.13	4.36	$F(1,20) = 4.69, p < .05$ Pre>Post	$F(2,20) = .13, n.s.$
	Post	8.78	5.97	9.43	5.22	10.71	6.73		
怒り-敵意	Pre	11.78	11.97	11.14	7.73	11.13	11.15	$F(1,20) = 1.77, n.s.$	$F(2,20) = 3.21, p < .10$ 焦点群において, Pre>Post
	Post	3.33	1.87	13.86	8.88	8.57	13.28		
気分調査票 リフレッシュ	pre	10.56	3.84	13.29	4.89	12.38	3.07	$F(1,20) = 6.58, p < .05$	$F(2,20) = 4.19, p < .05$ 焦点群およびWL群において, Pre<Post
	Post	15.11	5.37	12.14	3.76	15.57	4.54		
TAC-24									
カタルシス	pre	8.67	4.80	8.00	4.73	10.00	3.85	$F(1,20) = 1.21, n.s.$	$F(2,20) = .62, n.s.$
	Post	10.67	2.60	10.29	4.11	9.14	4.95		
放棄・あきらめ	pre	6.78	3.70	9.00	3.21	8.38	2.88	$F(1,20) = .18, n.s.$	$F(2,20) = .26, n.s.$
	Post	7.22	2.95	10.00	2.58	7.43	3.41		
情報収集	pre	6.78	4.29	7.14	4.63	7.88	3.64	$F(1,20) = .89, n.s.$	$F(2,20) = .25, n.s.$
	Post	7.11	2.37	8.86	3.89	7.86	4.53		
気晴らし	pre	6.78	3.96	10.00	3.21	8.88	4.02	$F(1,20) = 2.30, n.s.$	$F(2,21) = 4.17, p < .05$ 焦点群において, Pre<Post
	Post	11.00	2.45	10.14	3.44	8.57	4.54		
回避的思考	pre	7.44	4.10	11.00	3.06	8.75	2.05	$F(1,20) = .61, n.s.$	$F(2,20) = 1.56, n.s.$
	Post	9.89	1.96	11.29	2.87	8.00	3.56		
肯定的解釈	pre	7.44	3.78	9.86	2.48	10.00	2.39	$F(1,20) = 1.36, n.s.$	$F(2,20) = 1.46, n.s.$
	Post	10.56	1.94	11.00	1.83	9.43	4.58		
計画立案	pre	6.33	3.71	10.14	2.97	7.88	3.36	$F(1,20) = .77, n.s.$	$F(2,20) = 1.45, n.s.$
	Post	8.56	3.68	11.00	2.45	6.57	3.51		
責任転嫁	pre	4.44	2.70	8.57	3.69	8.00	3.02		
	Post	6.44	1.88	8.14	3.24	7.71	3.82		
	変化率	.42	.61	.12	.72	-.06	.73	注)	

ABSQ= the Abandonment schema Questionnaire

F1=恒常的な見捨てられ・孤独

F2=親密な関係に対するしがみつき・同一視

TAC-24=the Tri-Axial Coping Scale

注) TAC-24「責任転嫁」はプリテスト段階で群間に有意差があったため、変化率を算出。群間の差について一元配置の分散分析で比較した結果、有意差なし ($F(2,20) = .99, n.s.$)

9. ABSQ 得点 見捨てられ場面における見捨てられスキーマの賦活の程度の変化を調べるために、見捨てられ場面想起後における ABSQ 合計得点について、群（見捨てられスキーマ焦点群 / 非焦点群 / WL 群）および時期（プリテスト / ポストテスト）を独立変数、ABSQ の合計得点を従属変数とした 2 要因の分散分析を行った。ABSQ 得点は、イメージ操作導入後の測定値を用いた。

まず、親密度高場面について分析を行った結果、時期の主効果が有意であった ($F(1,21) = 16.32, p < .001$)。プリテストからポストテストにかけて、ABSQ の合計得点が低減していた。さらに、ABSQ の各因子についても、同様に 2 要因の分散分析を行った。ABSQ の「恒常的な見捨てられ・孤独」因子の得点については、時期の主効果が有意であった ($F(1,21) = 9.20, p < .001$)。プリテストからポストテストにかけて、「恒常的な見捨てられ・孤独」因子の得点が低減していた。ABSQ の「親密な関係に対するしがみつき・同一視」因子の得点については、主効果、交互作用ともに有意な結果は得られなかった (*n.s.*) ABSQ の「他者からの好意に対するあきらめ」因子の得点について、同様に 2 要因の分散分析を行った。その結果、時期の主効果が有意であった ($F(1,21) = 4.71, p < .05$)。プリテストからポストテストにかけて、「他者からの好意に対するあきらめ」因子の得点が低減していた。

続いて、親密度低場面についても、群（見捨てられスキーマ焦点群 / 非焦点群 / WL 群）および時期（プリテスト / ポストテスト）を独立変数、ABSQ の合計得点を従属変数とした 2 要因の分散分析を行った。その結果、交互作用が有意であった ($F(2,20) = 5.52, p < .05$)。単純主効果の検定の結果、見捨てられスキーマ焦点群および WL 群において、ABSQ の合計得点がプリテストからポストテストにかけて有意に低減していた（順に、

$p < .001$, $p < .05$)。さらに、ABSQ の各因子についても、同様に 2 要因の分散分析を行った。ABSQ の「恒常的な見捨てられ・孤独」因子の得点については、交互作用が有意であった ($F(2,20) = 9.47$, $p < .001$)。単純主効果の検定を行った結果、見捨てられスキーマ焦点群および WL 群において、「恒常的な見捨てられ・孤独」因子の得点がプリテストからポストテストにかけて有意に低減していた (順に、 $p < .001$, $p < .05$)。「親密な関係に対するしがみつき・同一視」因子の得点については、主効果、交互作用ともに有意な結果は得られなかった (*n.s.*)。ABSQ の「他者からの好意に対するあきらめ」因子の得点について、同様に 2 要因の分散分析を行った。その結果、交互作用が有意傾向であった ($F(2,20) = 4.03$, $p < .05$)。単純主効果の検定の結果、見捨てられスキーマ焦点群および WL 群において、「他者からの好意に対するあきらめ」因子の得点がプリテストからポストテストにかけて有意に低減していた (ともに、 $p < .001$)。

10. 気分指標 見捨てられ場面のイメージ想起実験における、見捨てられスキーマ焦点群と非焦点群、および WL 群の POMS の各下位尺度得点について、介入前後の変化を調べるために、群 (見捨てられスキーマ焦点群 / 非焦点群 / WL 群) および時期 (プリテスト / ポストテスト) を独立変数、POMS 得点を従属変数とした 2 要因の分散分析を行った。分析は、親密度高場面、親密度低場面それぞれについて行った。その結果、親密度高場面においては、POMS の「緊張 - 不安」、「抑うつ - 落ち込み」、「混乱」について、時期の主効果が有意および有意傾向であった (順に、 $F(1,21) = 13.71$, $p < .01$, $F(1,21) = 11.96$, $p < .01$, $F(1,21) = 3.95$, $p < .10$)。各下位尺度において、プリテストからポストテストにかけて、得点が有意に低減していた。「怒り - 敵意」については主効果、交互作用ともに有意な結果は得られなかった (*n.s.*)。

また、親密度低場面においては、POMSの「緊張－不安」、「抑うつ－落ち込み」、「混乱」について、時期の主効果が有意であった（順に、 $F(1,20) = 6.33$, $p < .01$, $F(1,20) = 20.07$, $p < .001$, $F(1,20) = 4.69$, $p < .05$ ）。各下位尺度において、プリテストからポストテストにかけて、得点が有意に低減していた。一方、「怒り－敵意」については、交互作用が有意傾向であった（ $F(2,20) = 3.21$, $p < .10$ ）。時期の単純主効果を検定した結果、見捨てられスキーマ焦点群のみ、有意に得点が低減していた（ $p < .01$ ）。

また、気分調査票の「リフレッシュ」項目についても、同様に2要因の分散分析を行った。その結果、親密度高場面は時期の主効果が有意であった（ $F(1,21) = 24.37$, $p < .001$ ）。プリテストからポストテストにかけて、得点が有意に低減していた。一方、親密度低場面は、交互作用が有意であった（ $F(2,20) = 4.19$, $p < .05$ ）。時期の単純主効果を検定した結果、見捨てられスキーマ焦点群およびWL群において、得点の低減が有意および有意傾向であった（順に、 $p < .01$, $p < .10$ ）。

11. TAC-24 まず、親密度高場面における、TAC-24の「情報収集」、「放棄、諦め」、「肯定的解釈」、「気晴らし」、「カタルシス」、「責任転嫁」、「計画立案」の下位尺度の得点について、介入前後の変化を調べるために、群（見捨てられスキーマ焦点群／非焦点群／WL群）および時期（プリテスト／ポストテスト）を独立変数、TAC-24の得点を従属変数とした2要因の分散分析を行った。その結果、「気晴らし」と「肯定的解釈」において、時期の主効果が有意であった（順に、 $F(1,21) = 7.78$, $p < .05$, $F(1,21) = 7.10$, $p < .05$ ）。プリテストからポストテストにかけて、得点が有意に増加していた。「情報収集」、「放棄、諦め」、「カタルシス」、「責任転嫁」、「計画立案」については、主効果、交互作用ともに有意な結果は得られ

なかった (*n.s.*)。また、「回避的思考」に関しては、プリテスト段階で群間の差が有意傾向であった ($F(2,21) = 3.09, p < .10$)。そこで、各群の変化率 (ポストテスト - プリテスト / プリテスト) を算出し、見捨てられスキーマ焦点群、非焦点群、WL群の差について1元配置の分散分析を行った。その結果、有意差は示されなかった (見捨てられスキーマ焦点群平均値 .62, 非焦点群平均値 .42, WL群平均値 .12, *n.s.*)。

次に、親密度低場面における、TAC-24の「情報収集」、「放棄、諦め」、「肯定的解釈」、「計画立案」、「気晴らし」、「カタルシス」、「回避的思考」の下位尺度の得点について、介入前後の変化を調べるために、群 (見捨てられスキーマ焦点群 / 非焦点群 / WL群) および時期 (プリテスト / ポストテスト) を独立変数、POMS得点を従属変数とした2要因の分散分析を行った。その結果、「気晴らし」の得点において、交互作用が有意であった ($F(2,21) = 4.17, p < .05$)。単純主効果の検定を行った結果、見捨てられスキーマ焦点群のみ、プリテストからポストテストにかけて、得点が有意に増加していた ($p < .01$)。「情報収集」、「放棄、諦め」、「肯定的解釈」、「カタルシス」、「計画立案」、「回避的思考」については、主効果、交互作用ともに有意な結果は得られなかった (*n.s.*)。また、「責任転嫁」に関しては、プリテスト段階で群間の差が有意および有意傾向であった ($F(2,20) = 4.29, p < .05$)。そこで、各群の変化率 (ポストテスト - プリテスト / プリテスト) を算出し、見捨てられスキーマ焦点群、非焦点群、WL群の差について1元配置の分散分析を行った。その結果、有意差は示されなかった (見捨てられスキーマ焦点群平均値 .42, 非焦点群平均値 .12, WL群平均値 -.06, *n.s.*)。

12. インタビュー内容

見捨てられスキーマ焦点群に対して、介入実験の感想

を求めた。実験参加者からは、「自分が陥りやすい考え・感情が分かったので、いい方向の他の考え方を認識してもらっておくと、もっと楽に生きられることが分かった」という感想や、「スキーマがあって、それに付随して悪いサイクルになって、ストレスのもとになっていることが分かった。さらに悪循環になって次にもつながってしまう。(見捨てられスキーマについて) 知ることで対応を考えられる」といった感想が報告された。また、見捨てられ場面の感情のコントロールについては、「今まではどんどん不安などがおそってきて、次の行動につながらなかった。客観的に見られるようになって、多少対応できるようになった」、「前はエンドレスに考え続けたが、何があっても前向きに考えるようになった」といった感想が報告された。また、「相手を責めることがなくなった」、「今までは、思った時は相手に対してアクションを起こしてなかったが、提案するなどやってみたら、今までもよい対人関係を築けると思った」など、見捨てられ場面における行動面の変化も報告された。さらに、本研究で行った介入を長期的に続けることは有効か、という質問に対しては、「長く続けることで、合う方法も見つかるし、定着する(ため有効)」、「人ともめた時も、ずっとひきずらないで問題が解決できそう」など、より長期的な介入が有効であるという意見が多く報告された。

考察

本研究では、BPD傾向者を対象として、見捨てられスキーマの認知的枠組み全体の変容に焦点を当てた8週間の長期的介入実験を行い、BPDの徴候の改善に与える効果を検討することを目的とした。

本研究では、見捨てられスキーマに焦点を当てた介入手続きとして、ABSQの内容に関する反証課題、および見捨てられスキーマから誘発される認知的対処や対人的

対処（効果的なコミュニケーション）の変容を促す介入を行った。そして、認知行動療法的な介入を行うが、見捨てられスキーマを介入の焦点にしない非焦点群、何も介入を行わない WL 群との比較を行った。

まず、本研究において意図していた介入操作が、適切に行われていたかどうかについて考察する。ホームワークは、分析から除外した見捨てられスキーマ焦点群 1 名を除いて、見捨てられスキーマの内容の反証の操作に関して適切に実施されていた。また、ABSQ の合計得点について、見捨てられスキーマ焦点群は、非焦点群および WL 群と比較して、介入前から介入後にかけて有意に低減していた。また、イメージ想起実験においても、見捨てられ場面のイメージ想起後の ABSQ 得点が、介入前から介入後にかけて有意に低減していた。よって、見捨てられスキーマの内容特殊性に注目して、反証を行う操作は適切に行われていたと考えられる。

さらに、見捨てられスキーマから誘発される対処方略の操作について、認知的対処から考察する。イメージ想起実験の結果から、TAC-24 の「放棄・あきらめ」、「肯定的解釈」について、親密度低場面の「肯定的解釈」に時期の主効果が認められたものの、それ以外では時期の主効果、交互作用ともに認められなかった。

一方、対人的対処の操作については、「効果的なコミュニケーション」因子の得点について、交互作用が示された。見捨てられスキーマ焦点群のみ、有意な得点の増加が示された。よって、見捨てられスキーマ焦点群において、対人的対処の変容を行う操作については、適切に行われたと考えられる。

次に、本研究の仮説の検証を行う。まず、仮説 1) 見捨てられスキーマ焦点群は、非焦点群や WL 群と比較して、BPD の徴候（BPD 傾向、感情不安定性、行動化）の得点の低減が大きい、については、一部支持されたといえる。

BPD 傾向を測定する PDQ-R 得点，感情の不安定性を測定する「情動コントロール」因子については，交互作用は示されなかったものの，SCID の行動化得点については，交互作用が示された。よって，見捨てられスキーマに焦点を当てた介入を行うことで，BPD の徴候である，しがみつきや対人関係の断絶といった行動化が低減するといえる。これは，研究 2 のパス解析において，見捨てられスキーマが行動化に直接的に影響を及ぼしているという因果モデルと符合する結果である。

一方，PDQ-R 得点については，時期の主効果は有意であったものの，交互作用は示されなかった。この理由として，本来慢性的なパーソナリティ障害の徴候を測定する PDQ-R を 2 週間毎という短い期間で測定していたことが考えられる。2 週間という短い期間では，ストレスイベントが発生しないことによって，BPD の徴候を自覚しにくかったために，3 群ともに得点が有意に低減したと推測できる。介入実験の性質上，2 週間毎という測定期間を設定したが，より長期的な介入を行い，長期的なスパンにおける得点の変化を検討することが求められる。

さらに，感情の不安定性についても，得点に有意な変化は認められなかった。「情動コントロール因子」は，主に感情のコントロール可能性について問う質問項目により構成されているが，インタビューにおいては，「最近あまり見捨てられ感を感じる場面がない」といった感想も報告された。よって，見捨てられ場面がそもそも起こらないために，自身の感情のコントロールが向上しているかどうかを確かめる機会がないことが，結果に影響している可能性が考えられる。

続いて，仮説 2)見捨てられスキーマ焦点群は，非焦点群や WL 群と比較して，プリテストからポストテストにかけて，見捨てられ場面想起後のネガティブな感情反応

と、BPDの徴候に関連する行動化が低減する、については、一部支持されたものと考えられる。イメージ想起実験の親密度低場面において、見捨てられスキーマ焦点群のみ怒り-敵意の得点が有意に低減した。また、相互作用は示されなかったものの、親密度高/低場面ともに、不安-緊張気分、混乱気分、リフレッシュ気分についても、プリテストからポストテストにかけて、見捨てられスキーマ焦点群で最も得点が低減していた。よって、3群の中で、見捨てられスキーマ焦点群が、感情反応の変化が最も顕著であったと推察される。見捨てられ場面でこれらの感情反応が変容することによって、感情の不安定性が改善され、長期的にBPDの徴候の改善に結びつくと考えられる。また、対処行動について、親密度高/低場面ともに、「気晴らし」が増加していた。親密度低場面では、相互作用が有意であり、見捨てられスキーマ焦点群のみ、「気晴らし」得点が増加していた。これは、見捨てられスキーマの変容に伴い、スキーマ関連思考への捉われが減少して、気晴らしといった情緒的対処をとりやすくなったのではないかと考えられる。

また、イメージ想起実験の結果から、本研究では、相手の親密度が低い場面に対して、見捨てられスキーマに焦点を当てた介入の効果が顕著に得られたと考えられる。研究4の結果と併せると、相手の親密度が低い方が、高い場面よりも感じる感情価が弱く、感情があまり長引かないために、新しい視点取得や適応的な対処行動がとりやすいためと考えられる。一方、親密度が高い場面においても、有意な差は示されなかったものの、見捨てられスキーマ焦点群の方が非焦点群・WL群よりも抑うつ気分、緊張・不安の得点が低く、気晴らし対処の得点が増加していた。このことから、相手の親密度が高い場面についても、より長期的な介入を行うことで、変容が促進されることが推察される。

本研究の結果から，見捨てられスキーマの認知的枠組みに焦点を当てた介入を行うことによって，BPD傾向者のBPDの徴候のひとつである行動化に有効である可能性が示された。また，BPDの徴候である感情の不安定性に関つなぐると推察される見捨てられ場面の感情反応や行動においても，一部変容がみられた。これは，見捨てられスキーマがBPDの徴候に影響を与えているというメカニズム研究を支持する結果であるといえる。本研究によって，BPD傾向者におけるBPDの徴候に対する見捨てられスキーマに焦点を当てた介入の効果が示唆されたと考えられる。これは，先行研究では得られなかった，本研究での新たな成果である。本研究で明らかになった見捨てられスキーマの効果的な変容手続きの知見は，今後のBPD傾向者に対する治療法の発展に寄与すると考えられる。

本研究の課題としては，BPD傾向を測定するPDQ-Rの得点に交互作用が示されなかったことが挙げられる。今後は，BPD傾向を測定する尺度の測定ポイントを工夫した上で，より長期的な介入実験を行い，見捨てられスキーマの認知的枠組みの変容を定着させることで，BPDの徴候の変容が促進されるかどうかを検証する必要がある。さらに，「放棄・あきらめ」，「肯定的解釈の不足」といった認知的対処の変容に課題が残ったことから，これらの認知的対処の変容をより促進するような，自動思考に焦点を当てた介入操作を行う必要があると考えられる。また，相手の親密度が高い場合，見捨てられスキーマの変容がより促進されにくいことが示されたことから，相手の親密度が高い場合により焦点を当てた介入を行うことが必要であるといえる。例えば，研究4では，親密度が高い場合は見捨てられスキーマの「親密な関係に対するしがみつき・同一視」因子が強く関連している可能性が示されている。本研究においては，ベースライン測定

時の得点においては，ABSQの「親密な関係に対するしがみつき・同一視」因子の得点の変化に交互作用が示されていたものの，イメージ想起実験においては，有意な変化は示されなかった。このことから，いったん「親密な関係に対するしがみつき・同一視」に関連する内容が賦活されてしまうと，すぐに反証することが難しい可能性が考えられる。よって，このスキーマの変容により焦点を当てた介入を行うことで，親密度が高い場面においても介入の効果が得られる可能性が考えられる。

今後は，以上の課題をふまえて，さらに見捨てられスキーマの認知的枠組み全体の変容を促進するような長期的な介入を行って，BPDの徴候の改善の程度を検証ことが求められる。

第 4 節 本章の考察

本章では，研究 1 で開発した ABSQ を使用して，研究 2～4 で得られた知見をもとに，見捨てられスキーマの変容が BPD の徴候の改善に及ぼす影響を検討することを目的とした。ABSQ の項目内容に反映されている見捨てられスキーマの内容特殊性を考慮して，BPD 傾向者に対して見捨てられスキーマの内容と機能の変容を促すような介入実験を行った。

研究 5 では，BPD 傾向者においても，見捨てられスキーマの反証を行う認知的再構成の手続きが実施可能であることが示された。また，研究 6 において，見捨てられスキーマの反証および見捨てられスキーマが誘発する対処方略に焦点を当てた長期的な介入を行った。その結果，見捨てられスキーマの変容を促すことは，BPD 傾向者の行動化の改善に影響を与えることが示された。また，見捨てられ場面における反応傾向の変容が示された。研究 6 の結果から，研究 2～4 において得られた見捨てられスキーマが BPD の徴候に与える影響に関するメカニズム研究の知見は概ね支持されたと考えられる。よって，見捨てられスキーマが BPD の徴候に与える影響の重要性が，改めて示されたといえる。

また，相手の親密度が高いほど，見捨てられスキーマの変容はより困難である可能性が示された。これは，相手の親密度が高いほど，感情が激化する（Mason & Kregg, 1998 荒井他訳 2003）という BPD の特徴に由来する結果であると考えられる。よって，相手の親密度が高い場面で活性化しやすい見捨てられスキーマにより焦点を当てた介入が必要であると考えられる。

さらに，見捨てられスキーマが強固であることを踏まえると（Beck & Freeman, 1990），8 週間よりもさらに長期的な介入をすることで，見捨てられスキーマの機能面のさらなる変容を促し，見捨てられスキーマの内容の

反証の確信度を上げるような経験の蓄積ができると考えられる。

本章の研究において、見捨てられスキーマに焦点を当てる有効性が示されたことは、STなどの既存の治療法では実証されていない点であり、本論文において新たに明らかとなった知見であるといえる。

今後は、本章の知見をもとに、見捨てられスキーマの認知的枠組み全体の変容をさらに促進させる介入を行い、その効果を検証することが必要であると考えられる。例えば、本章で得られた知見や、先行研究を基に、BPD傾向者に対する見捨てられスキーマに焦点を当てた介入法を作成して、STなど既存の介入法の手続きとの効果の比較を行う無作為割り付け研究を行うことが求められる。

第 9 章 総括的考察

本論文では，認知行動理論の立場から，BPD 傾向者の見捨てられスキーマが BPD の徴候に与える影響のメカニズムを検討することを通して，見捨てられスキーマの変容が BPD の徴候の改善に及ぼす効果について明らかにすることを主たる目的とした。本論文における研究では，見捨てられスキーマを詳細に測定する信頼性・妥当性の高い尺度を開発したうえで（研究 1），質問紙法および実験的手法を用いた研究を行い，見捨てられスキーマが BPD の徴候に与える影響のメカニズム，および見捨てられスキーマが誘発する対処方略が BPD の徴候に与える影響のメカニズムについて検討した（研究 2～4）。そして，メカニズム研究で得られた知見を検証するために介入研究を行い，BPD 傾向者を対象として，見捨てられスキーマの変容が BPD の徴候の改善に及ぼす効果について検討した（研究 5・6）。

本章では，本論文における研究の成果とその意義，ならびに本論文と今後の課題について総括的考察を行う。

1. 本論文の成果

見捨てられスキーマを測定する尺度の開発，見捨てられスキーマの作用機序に関するメカニズムの解明，見捨てられスキーマの変容が BPD の徴候の改善に及ぼす効果の検討の 3 点について，本論文における研究の成果を考察する。

1) 見捨てられスキーマを測定する尺度の開発

BPD をはじめとするパーソナリティ障害に関連するスキーマを測定する尺度は，the Young Schema Questionnaire (YSQ; Young & Brown, 1990) や the Early Maladaptive Schema Questionnaire-Research Version (EMSQ-R; Ball & Young, 2001) など，いくつ

か開発されている。本邦においても、BPDのためのスキーマ同定質問紙（the Borderline Schemata Questionnaire: BSQ; 井沢, 2005）が作成されている。しかしながら、因子構造が安定していないといった問題点があり、見捨てられスキーマを詳細に測定する尺度としては不十分であると考えられる。

そこで、本論文の研究1では、見捨てられスキーマを詳細に測定する信頼性・妥当性の高い尺度を開発することを目的として、見捨てられスキーマ尺度（the Abandonment Schema Questionnaire: ABSQ）を作成し、信頼性・妥当性について検討した。

研究1-1によって、18項目からなり高い内的一貫性（ $\alpha = .89$ ）を有する、3因子構造のABSQが作成された。ABSQは、「恒常的な見捨てられ・孤独」因子7項目（ $\alpha = .86$ ）、「親密な関係に対するしがみつき・同一視」因子8項目（ $\alpha = .82$ ）、「他者からの好意に対するあきらめ」因子3項目（ $\alpha = .81$ ）から構成された。再検査信頼性を検討した結果、再検査信頼性係数は $r = .85$ であり、十分な値を示した。項目作成の際には、既存の見捨てられ不安および見捨てられスキーマに関連する尺度を参照したうえで、見捨てられスキーマの概念に合致する項目内容になるように十分検討した。研究1-2において、ABSQの併存的妥当性を検討した結果、ABSQの得点は見捨てられ不安の得点と有意な高い相関係数を示した。また、ABSQの得点は、BPD傾向を測るPDQ-Rの得点と有意な中程度の相関係数を示した。よって、ABSQの十分な併存的妥当性が示されたといえる。研究1-3では、ABSQの弁別的妥当性を検討した。その結果、ABSQの得点は、見捨てられ不安項目の得点と比べて、BPD傾向を測定するPDQ-Rの得点との偏相関係数が有意に高い値であった。また、ABSQの得点は、BPDに特徴的なスキーマ全般を測定するBSQの得点と比べて、見捨てられ不安項目

の得点との偏相関係数が有意に高い値であった。この結果から、ABSQは、BPDの徴候と関連する見捨てられスキーマを測定することに特化した尺度であり、見捨てられ不安を測定する尺度やBPDのスキーマ全般を測定する尺度との弁別は可能であるといえる。よって、ABSQの十分な弁別的妥当性が示されたと考えられる。

ところで、研究4の実験研究において、見捨てられ場面をイメージ想起する実験手続きを行ったところ、BPD傾向者において、ABSQの得点が見捨てられ場面想起前から想起後にかけて有意に増加していた。見捨てられスキーマの概念を踏まえると、見捨てられスキーマはBPD傾向者において強固である認知的枠組みであり、見捨てられることに関連する刺激によって賦活して、特定の認知（自動思考）等に影響を及ぼすと考えられる。研究4の結果は、本論文の見捨てられスキーマの定義に沿う結果であり、ABSQの十分な構成概念妥当性を示唆する結果であるといえる。

以上の検討を通して、ABSQは十分な信頼性・妥当性を備えており、見捨てられスキーマを測定する尺度として、今後の研究に有用であることが示された。

ABSQの項目は、見捨てられスキーマの概念を十分反映しているものの、3因子構造であり、従来の1因子構造よりも複雑な構造を示している。例えば、「恒常的な見捨てられ・孤独」因子は、Beck & Freeman (1990) がBPDに特徴的なスキーマとして示している“私は生まれつき嫌われ者だ”という内容のスキーマに共通するような、生涯にわたる孤独感や疎外感、他者への不信感に関する内容から構成されている。ABSQの「親密な関係に対するしがみつき・同一視」因子は、親しい人物との関係性に対する価値観が示されている。これは、BPDが親密な関係に対して反応が激化する (Mason & Kreger, 1998 荒井他訳 2003) ことに関連しているスキーマであ

ると考えられる。ABSQの「他者からの好意に対するあきらめ」因子は，“他者は結局のところ，自分から離れていく”という内容から構成されている。これは，BPDの徴候である，継続的に良好な関係が築けない，不安定な対人関係に関連するスキーマであると考えられる。このことから，ABSQは，見捨てられスキーマの多面的な内容を捉えることができる尺度であり，見捨てられスキーマとBPDの様々な徴候との関連を調べるうえで，有用な尺度であることが推察される。

2) 見捨てられスキーマの作用機序に関するメカニズムの解明

従来のBPD患者およびBPD傾向者に関する知見から，BPDの病理の特徴として顕著な見捨てられ不安が挙げられ，様々な感情・行動に影響を与えていることが示唆されている（e.g., Gunderson, 1996; Schmahl et al., 2003）。これに関連して，認知行動理論の立場からは，見捨てられスキーマの存在が指摘されており（Young et al., 2003 伊藤他訳 2008），見捨てられスキーマが賦活することにより，認知・感情・行動に影響を及ぼして，様々な機能不全を引き起こしている可能性が指摘されている。しかしながら，見捨てられスキーマがBPDの徴候に与える影響について，実証的に検討した研究はほとんど見られない。

この課題を解決するために，本論文の第6章および第7章では，質問紙法と実験的手法を用いて，見捨てられスキーマがBPDの徴候に及ぼす影響に関するメカニズムと，見捨てられスキーマが誘発する対処方略がBPDの徴候に及ぼす影響のメカニズムを実証的に検討した。

研究2では，見捨てられスキーマが，BPDの徴候である感情不安定性や行動化（怒りの表出，不安定な対人関係，飲酒や過食など）に与える影響に関して，ABSQを

用いて量的に検討した。パス解析の結果，見捨てられスキーマが直接的に，あるいは感情の不安定性を介して，BPD に特徴的な行動化に影響を及ぼしているという因果モデルが示された。感情の不安定性は，BPD の病理において主要な症状であるとされていることから（e.g., Linehan, 1993; Glenn & Klonsky, 2009），見捨てられスキーマは，BPD の主要な徴候を引き起こす中核的な要因であると解釈できる。また，ABSQ の各下位因子を独立変数，ALS の各下位因子を従属変数として，重回帰分析を行った結果，ABSQ の全ての下位因子が，ALS の「不安抑うつ」の揺らぎ，「高揚感の揺らぎ」，「怒りの揺らぎ」，「睡眠の揺らぎ」因子に対して有意な標準偏回帰係数を示した。よって，見捨てられスキーマは，不安や抑うつ，怒りといった感情のみではなく，「高揚感」というポジティブな感情の不安定性や，不眠につながるような感情の不安定性にも影響を与えていると考えられる。この結果から，BPD の徴候である“理想化とこき下ろし”や，不眠などの身体症状に対しても，見捨てられスキーマが影響している可能性が考えられる。今後は，見捨てられスキーマと，高揚感といったポジティブな感情や身体症状との関連についても検討する必要があるだろう。

研究 3 では，見捨てられスキーマが誘発する対処方略と BPD の徴候との関連を調べることを目的とした。見捨てられスキーマは，見捨てられ場面における認知・感情・行動に影響を与えて，不適切な対処を誘発すると考えられる。研究 3 では，見捨てられスキーマが誘発する対処を同定することを目的として，見捨てられスキーマ→見捨てられ場面の対処→BPD 傾向という因果モデルを想定して，検証を行った。パス解析の結果，見捨てられスキーマが，自己主張といった対人スキルの欠如や，「放棄・あきらめ」，「肯定的解釈の不足」といった認知的対処を誘発して，これらの対処方略が BPD の徴候を強化し

ていることが示唆された。また、研究 2 で検討した、BPD の徴候である感情の不安定性や行動化にも、これらの対処方略が影響を与えている可能性が示された。この結果から、見捨てられ場面での適切な自己主張のスキルを身に着けることと、見捨てられ場面におけるネガティブな自動思考の形式を変容することが、見捨てられスキーマの影響を弱めて、BPD の徴候が改善することが推測される。BPD 患者がスキーマに関連する特定の不適切な対処をとることは、臨床的経験から示唆されてきたが (Young et al., 1990, 2003), BPD 傾向者を対象として、実証的に検討した研究は見受けられない。本研究の結果から、BPD 傾向者において、見捨てられスキーマが不適切な対処を誘発することにより、BPD の徴候が悪化していくという因果モデルを実証的に示すことができたことは、本研究の新しい知見であるといえる。

研究 4 では、見捨てられ場面をイメージ想起する実験を行い、BPD 傾向者群と BPD 傾向低群の反応の違いを比較して、BPD 傾向者の見捨てられスキーマの賦活の程度と、感情・行動反応について検討した。研究 4 の結果、BPD 傾向高群でのみ、ABSQ の得点が見捨てられ場面想起後に有意に増加していた。また、発話思考法によって抽出した発話内容の評定結果から、BPD 傾向高群では、BPD 傾向低群と比べて、見捨てられ場面における見捨てられスキーマに関連する発話が有意に多く報告された。相手の親密度の高／低による違いを検討したところ、相手の親密度が高い場面においては、ABSQ の「恒常的な見捨てられ・孤独」因子と「親密な関係に対するしがみつき・同一視」因子に関連する発話が多く、親密度が低い場面においては ABSQ の「恒常的な見捨てられ・孤独」因子と「他者からの好意に対するあきらめ」因子に関連する発話が多いことが示された。この結果から、BPD 傾向高群では見捨てられ場面において見捨てられスキーマ

が賦活しやすいこと，相手の親密度によって，賦活する見捨てられスキーマの内容が異なることが示された。また，半構造化面接の結果から，BPD傾向高群では，BPD傾向低群と比べて，相手の親密度が高い場面において「孤独感」が有意に多く報告された。この結果から，相手の親密度によって，賦活される見捨てられスキーマの内容が異なるために，その後の感情や行動の傾向の違いにつながっている可能性が示唆された。既存のBPDにおける見捨てられ不安に関する臨床的知見では，親密度が高い相手に対する劇的な反応が注目されてきた（Mason & Kregler, 1998 荒井他訳 2003）。しかしながら，研究4の結果から，相手の親密度が高い／低いに関わらず見捨てられスキーマは賦活されるが，賦活される内容に違いがあるために，その後の感情や行動の表出が異なることが示された。つまり，相手の親密度の高／低に関わらず，見捨てられスキーマがBPDの徴候に影響を与えていることが考えられるため，親密度高／低の両方の場面に注目して研究を進める必要があるといえる。

本論文のスキーマの定義では，スキーマは内容特殊性だけでなく，特定の場面において特定の認知・感情・行動を引き起こすという機能的な側面も含む。質問紙による調査では，見捨てられスキーマが見捨てられ場面において実際に賦活されるかどうか，その後の自動思考や感情・行動に影響を与えているかどうかという機能的な側面は十分に探索できない。しかし，研究4により，実験的手法を用いることで，見捨てられ場面における認知・感情・行動反応についても詳細に検討できたことから，見捨てられスキーマの内容特殊性のみではなく，機能的な側面についても明らかにできたといえる。

見捨てられスキーマから誘発される対処方略に関しては，研究4の発話思考法と半構造化面接の結果から，BPD傾向高群では，見捨てられ場面において「肯定的解釈の

不足」や「放棄・あきらめ」といった否定的な自動思考が起りやすいことが示された。そして、行動面では、BPD 傾向高群では、BPD 傾向低群と比べて、親密度が低い場面において「相手と距離をとる」という BPD に特徴的であるとされる行動が多く報告された。また、見捨てられ場面において適切な自己主張を行っていないことが確認された。よって、研究 3 で得られた見捨てられスキーマから誘発される対処方略の要因が、研究 4 においても示されたと解釈できる。また、半構造化面接の結果から、BPD 傾向高群では、BPD 傾向低群と比べると、気晴らしや問題解決といった対処が少なく、ネガティブな感情が長引く傾向にあることが推察された。このことから、BPD 傾向高群では見捨てられ場面でのストレス対処のレパートリーが少ないため、見捨てられスキーマの影響が断ち切れずに、BPD の徴候が悪化している可能性が考えられる。

研究 2～4 の結果から、見捨てられスキーマが感情や行動に影響を与えるという認知行動理論は概ね支持されたといえる。よって、BPD 傾向者の徴候の改善に認知的介入の効果が期待できると推測される。また、介入を行ううえで、スキーマから誘発される認知的対処と対人的対処にも焦点を当てて、見捨てられ場面での対処方略を増やすような介入を行うことで、見捨てられスキーマの認知的枠組み全体の変容が促進され、BPD の徴候の改善に効果的であると考えられる。

研究 2～4 において、見捨てられスキーマが BPD に及ぼす影響のメカニズムと、見捨てられスキーマが誘発する対処方略が BPD の徴候に及ぼす影響のメカニズムについて、認知行動理論の視点から包括的に解明することができたといえる。既存の研究において、BPD 傾向者におけるスキーマの影響を調べるために、質問紙調査を行い、パス解析を用いて検討した研究はいくつか見受けら

れるが (e.g., Specht, Chapman, & Cellucci, 2009), 実験的手法と組み合わせて詳細に検証した研究は見受けられない。本論文の研究により, 量的および質的な側面から, 頑健な知見が得られたといえる。

なお, 研究 2~4 の結果から, 見捨てられスキーマおよび BPD 傾向において, 性差は示されなかった。これは, BPD 患者は女性が占める確率が高いとする報告 (DSM-5, 2013) とは一致しない。この原因として, 自傷行為や自殺企図といった医療にかかりやすい症状を呈する者は, 女性が多い可能性が考えられる。これに関連して, BPD の診断基準自体が女性が診断されやすくなっており, 診断の際に性差のバイアスが生じているとする報告や (Boggs et al., 2005), 男性は, 攻撃性や薬物依存など, 反社会的な方向に向かいやすい可能性が指摘されている (Chapman & Gratz, 2007 荒井他訳 2009)。このことから, 見捨てられ不安や感情の不安定性といった, BPD に特徴的な心性は男女に共通して見受けられるが, 病理が深刻になるにしたがって, 表出される行動化が異なることが推測される。今後は, BPD 臨床群と BPD 傾向者の性差の特徴の違いについて, 知見を蓄積する必要がある。

3) 見捨てられスキーマの変容が BPD の徴候の改善に及ぼす効果の検討

本論文の最終的な目的は, BPD 傾向者を対象として, 見捨てられスキーマに焦点を当てた介入が BPD の徴候の改善に及ぼす効果について明らかにすることであった。研究 2~4 では, 研究 1 で開発した ABSQ を用いて, 見捨てられスキーマのメカニズムに関する研究を行った。その結果, 見捨てられスキーマは BPD の徴候に影響を与える中核的な役割を果たしており, 不適応的な対処を誘発することによって, さらに BPD の徴候を強化していることが示唆された。しかし, 見捨てられスキーマが BPD

の徴候に与える因果関係を検討するためには、見捨てられスキーマの変容を意図する操作を行うことで、BPDの徴候が変化するかどうかを調べる必要がある。そこで、研究5と6において、見捨てられスキーマの変容に焦点を当てた介入研究を行い、BPDの徴候が改善するかどうかについて検討した。

研究5では、見捨てられスキーマの内容特殊性に注目して、BPD傾向者を対象として、認知的再構成の手続きの有用性について検討する2週間の短期的介入実験を行った。その結果、見捨てられスキーマが強固であると考えられるBPD傾向者においても、見捨てられスキーマの内容を反証する操作は可能であることが示された。ただし、2週間という短期的介入では、見捨てられスキーマの認知的枠組み全体の変容は難しく、より長期的・多面的な介入が必要であることが示された。

研究6では、研究1～5の結果をふまえて、見捨てられスキーマの認知的枠組み全体の変容に焦点を当てた8週間の長期的介入実験を行い、その効果を検討した。対照群として、見捨てられスキーマの変容に焦点を当てずに、認知行動療法の手法を用いて介入を行う見捨てられスキーマ非焦点群と、実験期間は何も介入を行わないWaiting List群を設定した。見捨てられスキーマ焦点群においては、ABSQを用いた見捨てられスキーマの内容に対する反証手続きに加えて、見捨てられスキーマが誘発する認知的対処（「放棄・あきらめ」、「肯定的解釈の不足」）と対人的対処（自己主張スキルの不足）の変容手続きを用いた。介入の結果、見捨てられスキーマ焦点群においてのみ、ABSQの得点の低減と、BPDの徴候のひとつである行動化の得点の低減が示された。また、見捨てられスキーマから誘発される対処である「効果的なコミュニケーション」因子は、見捨てられスキーマ焦点群でのみ、有意に得点が低減していた。「放棄・あきらめ」、

「肯定的解釈の不足」といった認知的対処に関しては、TAC-24の得点において交互作用は示されなかった。これらの結果から、「放棄・あきらめ」、「肯定的解釈の不足」といった認知的対処の操作に課題は残るものの、見捨てられスキーマに焦点を当てた介入の操作は概ね適切に行われたとえる。その結果、見捨てられスキーマの認知的枠組み全体の変容が促され、BPDに特徴的な行動化が改善したと考えられる。これは、研究2で得られたパス解析の結果と一部合致する結果である。

しかし、BPDの徴候である感情の不安定性については、見捨てられスキーマ焦点群において得点の有意な変化は認められなかった。今後は、感情の不安定性を測定する尺度および測定のタイミングについて考慮したうえで、再度検討する必要があると考えられる。

研究6のイメージ想起実験の結果からは、特に相手の親密度が低い場合において、見捨てられスキーマに対する介入の効果が示されていた。親密度低場面においては、見捨てられスキーマ焦点群でのみ、POMSの「怒り－敵意」の得点が有意に低減していた。また、見捨てられスキーマ焦点群でのみ、TAC-24の「気晴らし」対処の得点が有意に増加していた。このことから、研究6で行った介入は、見捨てられ場面における怒りなどの攻撃性に関する反応の低減に効果があったと考えられる。これは、研究4において示された、親密が低い場面は怒り感情が多く報告されることや、相手との関係を断つといった行動につながりやすいという特徴からも推察される。一方、相手の親密度が高い場合は、見捨てられスキーマの変容がしにくいことが示された。研究4では、相手の親密度が高い場合は、「孤独感」をより感じやすいことが報告されている。よって、相手の親密度が高い場面での見捨てられスキーマの変容を促進するためには、孤独感につながるような見捨てられスキーマの内容により焦点を当て

て介入を行う必要があるといえる。

研究 5 および 6 を通して，BPD 傾向者において，見捨てられスキーマの認知的枠組み全体の変容を促すことによって，BPD の徴候が改善することが示された。これは，研究 2～4 で示された見捨てられスキーマが BPD の徴候に及ぼす影響のメカニズムに関する知見を支持する結果である。このことから，研究 6 によって見捨てられスキーマが BPD の徴候に及ぼす影響の因果関係を示唆することができたといえる。また，見捨てられスキーマに焦点を当てた介入を行うことで，BPD の徴候が改善する可能性を示すことができたといえる。

2. 本論文の意義

以上にあげた本論文の研究成果を踏まえて，見捨てられスキーマの理解と変容へのアプローチという観点から，BPD 傾向者に対する ABSQ を用いた介入法の発展における本論文の意義を考察する。

1) 見捨てられスキーマの理解に対する本論文の寄与

本論文では，見捨てられスキーマに焦点を当てた研究を行うにあたり，見捨てられスキーマを 1) 見捨てられることに関する認知的枠組みであり，見捨てられると感じる場面において，特定の認知（自動思考）・感情・行動を誘発するもの，2) BPD 傾向者において強固であり，内容特殊性をもつもの，と定義した。既存の研究において，見捨てられスキーマの定義については，内容面に関する言及が多く，機能面を含めた定義はあまりなされていなかった。例えば，Cecero et al.(2004)は，見捨てられスキーマを“重要な他者は，自分よりもより魅力的で，知的で，安定した人物のもとに去ってしまうだろうとする信念”と述べているが，機能面については言及していない。しかし，本来の認知科学的視点におけるスキーマの

概念をふまえると、スキーマは内容のみならず、情報処理の側面も含めた定義付けを行う必要があると考えられる。本論文によって、見捨てられスキーマを内容・機能面両側面から定義付けたことは、見捨てられスキーマに関する研究を発展させるうえで意義深いと考えられる。

本論文では、見捨てられスキーマを測定する信頼性・妥当性が高い尺度である ABSQ が開発された。これは、BPD 傾向者に対するカウンセリングを行う際のアセスメントツールとして有用であると考えられる。例えば、スキーマは中核的な認知構造であるために、日常では言語的内容を意識しにくいと考えられる。ABSQ を用いることによって、見捨てられスキーマの内容特殊性を客観的に捉えやすくなり、見捨てられスキーマの変容を促進しやすくなることが推測できる。さらに、BPD 患者はカウンセリング場面において、カウンセラーに対してしばしば見捨てられ不安を呈して、カウンセリングの継続が困難になることが指摘されている（浜中，2004）。BPD 傾向者においても、見捨てられ不安の高さが示されていることから、カウンセリング場面での困難さが推測される。ABSQ を用いることによって、こうしたカウンセリング場面におけるカウンセラーとクライアントとの間に起こる葛藤の理解についても役立つと考えられる。

本論文における研究では、見捨てられスキーマが BPD の徴候に与える影響に関するメカニズムの解明と、見捨てられスキーマが誘発する対処方略が BPD の徴候に与える影響のメカニズムを解明した。先行研究において、BPD 傾向者を対象として、見捨てられスキーマに焦点を当てて実証研究を行った研究は見受けられない。よって、本論文における研究で、BPD 傾向者の見捨てられスキーマが BPD の徴候に及ぼす影響に関するメカニズムを明らかにできたことは意義深い。

また、主に BPD をはじめパーソナリティ障害の臨床群

を対象としている Young の Schema Therapy (ST; 1990, 2003) や Beck & Freeman (1990) のパーソナリティ障害の認知療法など、パーソナリティ障害に特徴的なスキーマを扱っている既存の介入法は、主に臨床的な知見から治療法が発展してきたといえる。ST は、無作為割り付け研究において、BPD に対する治療効果が示されているものの (Giesen-Bloo et al., 2006)、その治療メカニズムは十分に明らかになっていない。BPD 臨床群と BPD 傾向者の間で質的に大きな差異はないと想定されることを踏まえると、本論文の知見は、これらの既存の認知行動理論を適用した介入法がなぜ有効であるかという効果メカニズムに関して、一定の示唆を与えることができたと考えられる。つまり、スキーマという中核的な認知的要因に介入することによって、見捨てられスキーマに起因する認知・感情・行動反応が変容して、感情の不安定性や BPD に特徴的な行動化の改善に至っていることが考えられる。

本論文では、これまで指摘されてきた BPD の病理に関する臨床的知見と実証研究を結ぶ橋渡しとなる知見を提供することができたといえ、有意義であると考えられる。

2) BPD 傾向者への効果的な介入法に対する本論文の寄与

本論文は、BPD 傾向者を対象として、見捨てられスキーマに焦点を当てた介入が BPD の徴候の改善に及ぼす効果について明らかにすることを目的とした。本論文における研究では、BPD 傾向者に対する支援法の開発の検討は目的としていないものの、本論文の知見を通して、BPD 傾向者に対する有用な支援法開発への示唆は得ることができたと考えられる。

まず、BPD 傾向者への効果的な介入法を考察するにあたり、本論文で得られた BPD 傾向者に関する知見をまと

める。

研究 2 と 4 の結果から、BPD 傾向者においても BPD の病理に特徴的であるとされる感情の不安定性や行動化が確認された。具体的には、BPD 傾向者においても、ネガティブな感情の反応のしやすさや、ネガティブな感情からの回復の遅さといった感情の不安定性の特徴がみられた。そして、怒りの表出や、対人関係の断絶（特に相手の親密度が低い場合）といった BPD に特徴的な行動化も示された。そして、それらの BPD の徴候に対して、主観的な困難感を感じていることが示された。よって、BPD 傾向者に対しても、主観的な苦痛を軽減するような支援が必要であるといえる。また、BPD の徴候の悪化を防ぐという予防的な観点からも、BPD 傾向者に対して有効な支援法を開発することが求められる。

一方、研究 4 の半構造化面接の結果から、BPD 傾向者においては見捨てられ場面での、極端な攻撃性やリストカット等の深刻な自傷行為は報告されなかった。この結果から、BPD 傾向者と BPD 臨床群を比較すると、衝動性の強度が異なることが考えられる。BPD 患者に対して有効性が実証されている弁証法的行動療法では、治療目標を段階的に設定しているが、1) 自殺関連行動や、2) セラピーへの妨害行動、といった極端な行動化は治療初期段階の標的として位置づけられている。それらの問題が改善されたのちに、3) 生活の質を損なう行動の減少や、4) 行動スキルの増進を標的とする段階へと治療が進んでいく（Linehan, 1993）。本論文において対象とした BPD 傾向者は、上述した 1) と 2) の段階における問題は深刻ではない状態であると捉えられる。よって BPD 傾向者を対象とした支援においては、3) の段階からの介入を想定することが妥当であると考えられる。

以上をふまえて、BPD 傾向者に対する有効な介入法について考察する。

研究 6 の介入研究によって、見捨てられスキーマに焦点を当てた介入を行うことで、BPD の徴候が改善されることが示唆された。また、見捨てられスキーマの維持・強化要因に対しても介入の焦点を当てることによって、見捨てられスキーマの認知的枠組み全体の変容を促し、BPD の徴候の改善を促進する可能性が示された。見捨てられスキーマに特化して介入を行うことの有用性については、既存の研究では検討がなされなかった点であり、本論文において得られた新たな知見であるといえる。Young (2003 伊藤他訳 2008) は、ST において、見捨てられることに関する認知や反応傾向は特に治療の初期において扱う必然性があることを指摘している。このことから、BPD 傾向者に対するカウンセリングの導入段階において、研究 6 で実施したような見捨てられスキーマに焦点を当てた介入を取り入れることで、治療効果が効率的に得られやすくなる可能性が考えられる。既存の BPD 臨床群を想定した治療法は、長期間の介入を想定しており、治療が数年にわたることも少なくない。しかし、BPD 傾向者は衝動性が深刻ではないという特徴をふまえると、BPD 患者を想定して構成された既存の治療法で想定されているような、治療の初期段階の目標とされる自殺企図等の激しい行動化に対するアプローチは簡略化できると考えられる。よって、それらの過程を簡略化したうえで、カウンセリングの導入段階で ABSQ を用いた見捨てられスキーマに焦点を当てた介入を行うことで、BPD 傾向者に対する短期間で効率的な支援法が開発できると考えられる。また、研究 6 の結果から、相手の親密度による見捨てられスキーマの影響の違いに注目して介入を行うことで、広範な対人場面で治療効果を期待できると考えられる。

今後は、既存の認知行動理論的な介入法の利点を生かしつつ、上記の点をふまえた BPD 傾向者に対する新たな

支援法を作成して、STなど既存の介入法との効果の比較を行う無作為割り付け研究を行うことが求められる。

3. 本論文の限界と今後の課題

本論文における研究によって、BPD傾向者における見捨てられスキーマがBPDの徴候に与える影響が解明された。しかしながら、研究を進めるうえで、本論文の限界と今後の課題についても、明らかとなった。将来的に、これらの課題が解決されることが望まれる。

本論文において開発されたABSQについては、十分な信頼性・妥当性が確認された。しかし、見捨てられスキーマの各因子の機能の差異に関しては、さらなる検討が必要であると考えられる。研究1-2の結果から、ABSQの第2因子である「親密な関係に対するしがみつき・同一視」因子の得点は、見捨てられ不安の得点とは中程度の相関係数を示したものの ($r = .59, p < .001$)、PDQ-Rの得点については、他の因子に比べると弱い相関係数を示した ($r = .30, p < .001$)。また、研究2のパス解析においては、他の2因子とは異なり、直接BPDの徴候である行動化に至る有意な標準偏回帰係数は示されなかった。この結果から、「親密な関係に対するしがみつき・同一視」因子は、見捨てられ不安や感情の不安定性といったBPD傾向の徴候とは強い関連があるものの、他の因子に比べると、BPDの徴候の行動的な側面とは関連が弱いことが考えられる。このことから、「親密な関係に対するしがみつき・同一視」因子が、他の因子と異なる機能を有している可能性が考えられる。今後は、ABSQの各因子の機能について、より詳細に検討する必要があるといえる。

また、ABSQの弁別妥当性について、BSQや見捨てられ不安に関する項目との弁別性は示されているが、Young & Brown (1990)が開発したYSQとの弁別的妥当性は検討していない。YSQは、欧米においてはパーソナ

リテイ障害のスキーマに関する研究の指標として多く用いられている尺度であり，本邦では，梅原・鈴木・瀧ヶ崎・福井（2012）によって日本語版の標準化がなされている。よって，YSQとの弁別性も今後検討する必要があると考えられる。

また，本論文において実施した見捨てられスキーマがBPDの徴候に与えるメカニズムに関する研究では，BPDの徴候として主に感情の不安定性や行動化について取り上げた。しかしながら，BPDに特徴的な病理傾向としては，他にも自我同一性の混乱や空虚感，解離症状といった徴候も挙げられる（DSM-5, 2013）。見捨てられスキーマがBPDの徴候に与える影響を包括的に捉えるためには，これらのBPDの徴候についても，量的・質的に検討する必要があると考えられる。

さらに，研究6における見捨てられスキーマの変容を促す介入研究の手法についても，いくつか課題が残る。まず，見捨てられスキーマから誘発される対処方略である，「放棄・あきらめ」，「肯定的解釈の不足」といった認知的対処について，介入前後のTAC-24の得点の相互作用は有意ではなかった。このことから，これらの認知的対処の変容をより促すような介入を工夫する必要があるといえる。また，イメージ想起実験の結果から，相手の親密度が高い場合は，見捨てられスキーマが変容しにくいことが示された。よって，今後は親密度が高い相手に対する見捨てられスキーマに由来する反応傾向により焦点を当てて，介入を行うことが求められる。

介入期間においても，課題が挙げられる。研究6では8週間の実験を行ったが，見捨てられスキーマが幼少期から形成された強固な認知構造であることをふまえると，より長期的な介入が効果的であると考えられる。これは，介入実験の感想を問うインタビューにおいて，より長期的な介入が効果的であるという感想が多かったことから

も推察される。今後介入研究を行うにあたっては、これらの課題をふまえた長期的な介入内容を設定して、研究を行う必要があるといえる。そして、フォローアップ調査を実施して、介入の効果が持続しているかどうかについて、検討する必要があるといえる。

引用文献

- American Psychiatric Association (1980). *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders 3rd Edition (DSM-III)*. Washington DC: American Psychiatric Association. (高橋三郎ほか訳 (1982). DSM-III 精神障害の分類と診断の手引き 医学書院)
- American Psychiatric Association (2000). *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders 4th ed Text Revision (DSM-IV-TR)*. Washington DC: American Psychiatric Association. (高橋三郎・大野裕・染谷俊幸訳 (2002). DSM-IV-TR 精神障害の分類と診断の手引き 医学書院)
- American Psychological Association (APA). (2001). *Publication Manual of the American Psychological Association (5th ed.)*. Washington, DC: Author.
- American Psychiatric Association (2013). *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders Fifth Edition (DSM-5)*. Washington DC: American Psychiatric Association.
- Arntz, A., & Vee, G. (2001). Evaluations of others by borderline patients. *The Journal of Nervous and Mental Disease*, **189**, 513-521.
- Arntz, A., Bernstein, D., Gielen, D., van Nieuwenhuizen, M., Penders, K., Haslam, N., & Ruscio, J. (2009). Taxometric evidence for the dimensional structure of Cluster-C, Paranoid, and Borderline Personality Disorders. *Journal of Personality Disorders*, **23**, 606-628.
- Ball, & Young, J. E. (2001). The Early Maladaptive Schema Questionnaire-Research Version : EMSQ-R. S.A. Unpublished data.

- Beck, A. T., & Freeman, A. (1990). *Cognitive therapy of personality disorders*. New York : Guilford Press.
- Bell, M., Billington, R., Cicchetti, D., & Gibbons, J. (1988). Do object relations deficits distinguish BPD from other diagnostic groups? *Journal of Clinical Psychology*, **44**, 511-516.
- Boggs, C. D., Morey L. C., Skodol, A. E., Shea, M. T., Sanislow, C. A., Grilo, C., M., McGlashan, T. H., Zanarini, M. C., & Gunderson, J. G. (2005). Differential impairment as an indicator of sex bias in DSM-IV criteria for four personality disorders. *Psychological Assessment*, **17**, 492-496.
- Cecero, J. J., Nelson, J. D., & Gillie, J. M. (2004). Tools and tenets of schema therapy: toward the construct validity of the Early Maladaptive Schema Questionnaire-Research version(EMSQ-R). *Clinical Psychology and Psychotherapy*, **11**, 344-357
- Chapman, A. L., & Grantz, K. L. (2007). *The Borderline Personality Disorder Survival Guide*. Oakland: New Harbinger Publications. (アレクサンダー・A・チャップマン キム・L・グラッツ 荒井英樹監訳 (2009). 境界性パーソナリティ障害サバイバル・ガイド 星和書店)
- Conklin, C. Z., & Westen, D. (2005). Borderline personality disorder in clinical practice. *American Journal of Psychiatry*, **162**, 867-875
- Donegan, N. H., Sanislow, C. A., Blumberg, H. P., Fulbright, R. K., Lacadie, C., Skudlarski, P., Gore, J. C., Olson, I. R., McGlashan, T. H., &

- Wexler, B. E. (2003). Amygdala hyperreactivity in borderline personality disorder: Implications for emotional dysregulation. *Society of Biological Psychiatry*, **54**, 1284-1293.
- Dougherty, D. M., Bjork, J. M., Huckabee, H. C. G., Moeller, F. G., & Swann, A. C. (1999). Laboratory measures of aggression and impulsivity in woman with borderline personality disorder. *Psychiatry Research*, **85**, 315-326.
- Drapeau, M., & Perry, J. C. (2004). Interpersonal conflicts in borderline personality disorder: An exploratory study using the CCRT-LU. *Swiss Journal of Psychology/Schweizerische Zeitschrift für Psychologie/Revue Suisse de Psychologie*, **63**, 53-57.
- 浜中 聡子 (2004). 境界性人格障害 -治療技法の洗練 -1 境界性人格障害治療の場と限界設定 -他科との関わりを中心に(救急部での対応)- 精神科治療学, **19**, 729-734
- First, M. B., Gibbon, M., Spitzer, R. L., Williams, J. B. W., & Benjamin, L. S. (1997). *Structured clinical interview for DSM-IV Axis II personality disorders (SCID-II)*. Washington, DC : American Psychiatric Press.(M.ファースト他著 高橋三郎(監訳) 大曾根彰(訳)(2002). SCID-II : DSM-IV II軸 人格障害のための構造化面接 医学書院)
- 藤本学・大坊郁夫 (2007). コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み. パーソナリティ研究, **15**, 347-361.
- 福田一彦・小林重彦 (1973). 自己評価式抑うつ性尺度の研究 精神神経学雑誌, **75**, 673-679.
- Gardner, K. J., Qualter, P., Stylianou, M., &

- Robinson, A. J. (2010). Facial affect recognition in non-clinical adults with borderline personality features: The role of effortful control and rejection sensitivity. *Personality and Individual Differences*, **49**, 799-804.
- Giesen-Bloo, J., Dyck, R. Spinhoven, P., Tilburg, W., Dirksen, C., Asselt, T., Kremers, I., Nadort, M., & Arntz, A. (2006). Outpatient Psychotherapy for Borderline Personality Disorder: Randomized Trial of Schema-Focused Therapy vs Transference-Focused Psychotherapy. *Archives of General Psychiatry*, **63**, 649-658.
- Glenn, C. R., & Klonsky, E. D. (2009). Emotion dysregulation as a core feature of borderline personality disorder. *Journal of Personality Disorders*, **23**, 20-28.
- Gunderson, J. G. (1984). *Borderline personality disorder writings of John G. Gunderson*. Washington DC, American Psychiatric Press. (J・G・ガンダーソン著, 松本雅彦・石坂好樹・金吉晴訳 (1988). 境界パーソナリティ障害 - その臨床病理と治療 - 岩崎学術出版社)
- Gunderson, J. G. (1996). The borderline patient's intolerance of aloneness: insecure attachment and therapist availability. *American Journal of Psychiatry* 1996: **153**, 752-758.
- 浜中聡子 (2004). 境界性人格障害 - 治療技法の洗練 - 1 境界性人格障害治療の場と限界設定 - 他科との関わりを中心に (救急部での対応) - 精神科治療学, **19**, 729-734.
- Herpertz, S., Gretzer, A., Steinmeyer, E. M., Muehlbauer, V., Schuerkens, A., & Sass, H. (1997).

- Affective instability and impulsivity in personality disorder; Results of an experimental study. *Journal of Affective Disorders*, **44**, 31-37.
- Hill, J., Stepp, S. D., Wan, M. W., Hope, H., Morse, J. Q., Steele, M., Steele, H., & Pilkonis, P. A. (2011). Attachment, borderline personality, and romantic relationship dysfunction. *Journal of Personality Disorders*, **25**, 789-805.
- 細羽 竜也・中谷 隆 (2002). 攻撃性が境界性人格障害の形成に及ぼす影響 県立広島女子大学生活科学部紀要, **8**, 251-263.
- 井上 和臣 (1995). 人格障害の認知行動療法 福島章・町沢 静夫・大野 裕(編) 人格障害 金剛出版
- 井沢 功一郎 (2005). ボーダーライン・スキーマ質問紙(BSQ)の作成 心理臨床研究, **23**, 273-282.
- 井梅 由美子・平井 洋子・青木 紀久代・馬場 黎子 (2006). 日本における青年期用対象関係尺度の開発 パーソナリティ研究, **14**, 181-193.
- Johnson, P. A., Hurley, R. A., Benkelfat, C., Herpertz, S. C., & Taber, K. H. (2003). Understanding emotion regulation in borderline personality disorder: Contributions of Neuroimaging. *The Journal of Neuropsychiatry and Clinical Neurosciences*, **15**, 397-402
- 神村 栄一・海老原 由香・佐藤 健二・戸ヶ崎 泰子・坂野 雄二(1995). 対処方略の三次元モデルの検討と新しい尺度(TAC-24)の作成. 教育相談研究(筑波大学学校教育部紀要), **33**, 41-47.
- 加藤 亜紀 (2005). 境界性パーソナリティ障害傾向者の感情統制不全 - そのメカニズムの理解に向けて - 早稲田大学人間科学研究科修士論文
- Kellogg, S. H., & Young, J. E. (2006). Schema therapy

- for borderline personality disorder. *Journal of Clinical Psychology*, **62**, 445-458.
- Kernberg, O. (1967). Borderline personality organization. *Journal of the American Psychoanalytic Association*, **15**, 641-685.
- Koenigsberg, H. W., Harvey, P. D., Mitropoulou, V., Schmeidler, J., New, A. S., Goodman, M., Silverman, J. M., Serby, M., Schopick, F., & Siever, L., J. (2002). Characterizing affective instability in borderline personality disorder. *American Journal of Psychiatry*, **159**, 784-788.
- Korfine, L., & Hooley, J. M. (2000). Directed forgetting of emotional stimuli in borderline personality disorder. *Journal of Abnormal Psychology*, **109**, 214-221.
- Lawrence, K. A., Allen, J. S. & Chanen, A. M. (2011). A study of maladaptive schemas and Borderline Personality Disorder in young people. *Cognitive Therapy and Research*, **35**, 30-39.
- Layden, M.A., Newman, C.F., Freeman, A., & Morse, S. B. (1993). *Cognitive therapy of borderline personality disorder*. Massachusetts, Allyn & Bacon.
- Lee, C. W., Taylor, G., & Dunn, J. (1999). Factor Structure of the Schema Questionnaire in a Large Clinical Sample. *Cognitive Therapy and Research*, **23**, 441-451.
- Limberg, A., Barnow, S., Freyberger, H. J., & Hamm, A. O. (2011). Dissociation and emotion regulation in borderline personality disorder. *Psychological Medicine*, **42**, 783-794.
- Linehan, M. M., Armstrong, H. E., Suarez, A.,

- Allmon, D., & Heard, H. L. (1991). Cognitive-behavioral treatment of chronically parasuicidal borderline patients. *Archives of General Psychiatry*, **48**, 1060-1064.
- Linehan, M. M. (1993). *Cognitive-Behavioral Treatment for Borderline Personality Disorder*. New York : Guilford Press.
- Lundh, Lars-Gunnar, & Dzyzykow-Czarnocka, S. (2001). Priming of the emotional stroop effect by a schema questionnaire: An experimental study of test order. *Cognitive Therapy and Research*. **25**(3). 281-289.
- 町沢 静夫 . (2003). *人格障害とその治療*, 創元社
- Mahler, M.S. (1972). On the first three subphases of the separation-individuation process. *International Journal of Psychoanalysis*, **53**, 333-338.
- Masterson, J. F., & Costelle, J. L. (1980). *The borderline adolescent to Functioning adult: the test of time*. Brunner Mazel, New York.
- Masterson J. F. (1981). *The Narcissistic and Borderline Disorder: An Integrated Developmental Approach*. Taylor & Francis, New York: Brunner/Mazel. (富山幸祐・尾崎新訳 1990 自己愛と境界例 星和書店).
- Mason, P. T., & Kreger, R. (1998). *Stop walking on eggshells*. New Harbinger Publication.
- (メイソン, P. & クリーガー, R. 荒井英樹・野村祐子・東原美和子訳 (2003). 境界性人格障害 = BPD : はれものにさわるような毎日をすごしている方々へ 星和書店)
- McGlashan, T. H., Grilo, C. M., Skodol, A. E.,

- Gunderson, J. G., Shera, M. T., Morey, L. C., Zanarini, M. C., & Stout, R. L. (2000). The collaborative longitudinal personality disorders study: baseline Axis I / II and II / II diagnostic co-occurrence. *Acta Psychiatria Scandinavica*, **102**, 256-264.
- 三宅なほみ (1999). スキーマ 中島義明 (編) 心理学辞典 有斐閣 pp.469.
- Moriya, M., Miyake, Y., Minakawa, K., Ikuta, N., & Nishizono-Maher, A. (1993). Diagnosis and clinical features of borderline personality disorder in the East and West: A preliminary report? *Comprehensive Psychiatry*, **34**, 365-466.
- 中尾達馬・加藤和生 (2004). “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学心理学研究, **5**, 19-27.
- Nordahl, H. M., Holthe, H., & Haugun, J. A. (2005). Early maladaptive schemas in patients with or without personality disorders: does schema modification predict symptomatic relief? *Clinical Psychology and Psychotherapy*, **12**, 142-149
- Oei, T. P. S., & Baranoff, J. (2007). Young schema questionnaire: Review of psychometric and measurement issues. *Australian Journal of Psychology*, **59**, 78-86.
- Ooshima, T. (2000). A psychopathological comparative study of borderline personality disorder and hysterical neurosis: symptomatic assessment by diagnostic interview for borderlines revised(DIB-R). 千葉医大, **76**, 113~117.
- Reisch, T., Ebner-Priemer, U. W., Tschacher, W., Bohus, M., & Linehan, M. M. (2008). Sequences of

- emotions in patients with borderline personality disorder. *Acta Psychiatrica Scandinavica*, **118**, 42-48.
- Russell, J. J., Moskowitz, D. S., Zuroff, D. C., Sookman, D. & Paris, J. (2007). Stability and variability of affective experience and interpersonal behavior in borderline personality disorder. *Journal of Abnormal Psychology*, **116**, 578-588.
- Ruocco, A. C., Amirthavasagam, S., & Zakzanis, K. K. (2012). Amygdala and hippocampal volume reductions as candidate endophenotypes for borderline personality disorder: A meta-analysis of magnetic resonance imaging studies. *Psychiatry Research: Neuroimaging*, **201**, 245-252.
- 齋藤 富由起 (2007). 境界性パーソナリティ特性尺度開発の試み. 千里金蘭大学紀要, **4**, 65-72.
- 齋藤 富由起・守谷賢二 (2009). 弁証法的行動療法におけるマインドフルネスと境界性パーソナリティ傾向との関連. 千里金蘭大学紀要, **6**, 43-50.
- 坂野雄二・福井和美・熊野宏昭・堀江はるみ・川原健資・山本晴義・野村忍・末松弘行 (1994). 新しい気分調査票の開発とその信頼性・妥当性の検討. 心身医学, **34**, 629-636.
- Samuel, D. B., & Ball, S. A. (2013). The factor structure and concurrent validity of the early maladaptive schema questionnaire: Research version. *Cognitive Therapy Research*, **37**, 150-59.
- Sanislow, C. A., Grilo, C. M., & McGlashan, T. H. (2000). Factor analysis of the DSM-III-R borderline personality disorder criteria in

- psychiatric patients. *American Journal of Psychiatry*, **157**, 1629-1633.
- Sanislow, C. A., Grilo, C. M., Morey, L. C., Bender, D. S., Skodol, A. E., Gunderson, J. G., Shera, M. T., Stout, R. L., Zanarini, M. C., & McGlashan, T. H. (2002). Confirmatory factor analysis of DSM-IV Criteria for borderline personality disorder: Finding from the collaborative longitudinal personality disorders study. *American journal of psychiatry*, **159**, 284-290.
- 佐々木裕子・小川俊樹 (1994). 「見捨てられ抑うつ」尺度の作成とその検討 筑波大学心理学研究, **16**, 243-254.
- 佐藤寛之・町沢静夫 (1992). 知覚心理学, 認知心理学 氏原寛・亀口憲治・成田義弘・東山紘久・山中康弘 (編) 心理臨床大事典 培風館 pp.55-64.
- Schmahl, C. G., Elzinga, B. M., Ebner, U. W., Simms, T., Sanislow, C., Vermetten, E., McGlashan, T., & Bremner, J. D. (2004). Psychophysiological reactivity to traumatic and Abandonment script in borderline personality and posttraumatic stress disorders: a preliminary report. *Psychiatry Research*, **126**, 33-42.
- Schmahl, C. G., Elzinga, B.M., Vermetten, E., Sanislow, G., McGlashan, T. H., & Bremner, J. D. (2003). Neural correlates of memories of Abandonment in women with and without borderline personality disorder. *Biol Psychiatry*, 2003, **54**, 142-151
- Sieswerda, S., Barnow, S., Verheul, R., & Arntz, A. (2013). Neither dichotomous nor split, but schema-related negative interpersonal evaluations

- characterize borderline patients. *Journal of Personality Disorders*, **27**, 36-52.
- Simard, V., Moss, E., & Pascuzzo, K. (2011). Early maladaptive schemas and child and adult attachment: A 15-year longitudinal study. *Psychology and psychotherapy: Theory, Research and Practice*. **84**, 349-366.
- Soloff, P. H., Lynch, K. G., Kelly, T. M., Malone, K. M., & Mann, J. J. (2000). Characteristics of suicide attempts of patients with major depressive episode and borderline personality disorder: A comparative study. *American Journal of Psychiatry*, **157**, 601-608.
- Specht, M. W., Chapman, A., & Cellucci, T. (2009). Schemas and borderline personality disorder symptoms in incarcerated women. *Journal of Behavior Therapy and Experimental Psychiatry*, **40**, 256-264.
- Staebler, K., Helbing, E., Rosenbach, C., & Renneberg, B. (2011). Rejection sensitivity and borderline personality disorder. *Clinical Psychology and Psychotherapy*, **18**, 275-283.
- Stern, A. (1938). Psychoanalytic Investigation of and Therapy in The Border Line Group of Neurosis. *Psychoanalytic Quarterly*, **7**, 467-489
- 牛島定信 (1991). *境界例の臨床* 金剛出版
- Teasdale, J. D., Segal, Z., & Williams, M. G. (1995). How does cognitive therapy prevent depressive relapse and why should attentional control (mindfulness) training. *Behavior Research and Therapy*, **33**, 25-39.
- Trull, T. (1995). Borderline personality features in

- nonclinical young adults: 1. Identification and validation. *Psychological Assessment*, **7**, 33-41.
- Trull, T., Ueda, J., Conforti, K., & Doan, B. (1997). Borderline personality disorder features in nonclinical young adults: 2. two-year outcome. *Journal of Abnormal Psychology*, **106**, 307-314.
- 上原 徹・佐藤 哲哉・坂戸 薫・佐藤 聡 (1996). 日本語版 PDQ-R の信頼性と妥当性 - 自己記入式質問紙による人格障害診断 - 精神科診断学, **7**, 259-267.
- 梅原 沙衣加・鈴木 孝信・瀧ヶ崎 隆司・福井 至 (2012). Young Schema Questionnaire の日本語版標準化の試み(3). 日本行動療法学会第 38 回大会発表論文集, 248-249.
- Unoka, Z., Fogd, D., Füzy, M., & Csukly, G. (2011). Misreading the facial signs: Specific impairments and error patterns in recognition of facial emotions with negative valence in borderline personality disorder. *Psychiatry Research*, **189**, 419-425.
- van Elst, L. T., Hesslinger, B., Thiel, T., Geiger, E., Haegele, K., Lemieux, L., Lieb, K., Bohus, M., Hennig, J., & Ebert. (2003). Frontolimbic brain abnormalities in patients with borderline personality disorder: a volumetric magnetic resonance imaging study. *Society of Biological Psychiatry*, **54**, 163-171.
- Veen, G., & Arntz, A. (2000). Multidimensional dichotomous thinking characterizes borderline personality disorder. *Cognitive Therapy and Research*, **24**, 23-45.
- 横山 和仁・荒記 俊一 (1994). 日本版 POMS 手引き. 東京: 金子書房.

- Young, J. E. (1990). *Cognitive therapy for personality disorders*. Sarasota, FL: Professional Resources Press.
- Young, J. E., & Brown, G. (1990). *The schema questionnaire*. New York: Cognitive Center of New York.
- Young, J. E., Klosko, J. S., & Weishaar, M. E. (2003). *Schema therapy A practitioner's guide*. New York: The Guilford Press. (ジェフリー・E・ヤング, ジャネット・S・クロスコ, マジョリエ・E・ウェイシャー. 伊藤絵美監訳 (2008). スキーマ療法—パーソナリティの問題に対する統合的認知行動療法アプローチ 金剛出版)
- Zanarini, M. C., Frankenburg, F. R., Dubo, E. D., Sickel, A. E., Anjana Trikha, M. A., Levin, A., & Reynolds, V. (1998). Axis I comorbidity of borderline personality disorder. *American Journal of Psychiatry*, **155**, 1733-1739.

あとがき

本論文を執筆するにあたって、多くの方々に支えていただいた。心より感謝を表したい。

まず、学部3年生の頃から現在まで、10年間に渡りご指導をいただいた主査の根建金男先生に、心より感謝を申し上げたい。10年間、かけがいのない学びの時間を得ることができた。そして、本論文の執筆にあたっては、立ち止まることが多かった私だが、根建先生の忍耐強く丁寧なご指導があってこそ、本論文を完成することができた。

副査をお引受けいただいた野村忍先生、鈴木伸一先生にも、深く御礼を申し上げたい。本論文に関して、重ね重ねご指導の機会をいただいたことで、本論文をひとつの作品として完成させることができた。数々の貴重なご指導は、これからも研究の糧にしていく所存である。

また、本論文について貴重なご指導をいただいた熊野宏昭先生、嶋田洋徳先生にも、心より感謝申し上げます。

教場での調査の実施を承諾してくださった先生方、調査や実験に参加してくださった学生の方々にも、御礼を申し上げたい。本当に多くの方々のご協力があり、本論文は成り立っている。実験の際に、「がんばってください」とお声をかけていただいた実験参加者の皆様も大勢いらっしゃった。本論文の成果をできるだけ世の中に発信していくことで、恩返しをしたい。

そして、私が所属していた根建研究室の皆様には、言葉に尽くせないほど感謝している。お会いする度に、励ましのお言葉をくださった先輩方、いつも相談に乗ってくれた博士課程の皆さん、快く研究に協力してくれた後輩の皆さんに支えられて、本論文を完成することができた。特に、調査の協力から研究発表の助言に至るまで、様々な面で支えてくれた宮崎球一さん、松野航大さんに

は，心より感謝したい。また，いつも優しく励ましの言葉をくださった野村研究室の皆様にも，感謝を申し上げます。

最後に，くじけそうになった時に，暖かく，時には叱咤激励しながらも，常に私を支えてくれた家族に，深い感謝の意を捧げたい。

2014年1月吉日

井合真海子

資料

本論文で使用した尺度は、以下の通りである。以下の表には、資料（尺度・実験材料）の名称を示し、本論中において、各資料を使用した研究に○印をつけた。さらに、実際の資料を添付した。

1. 尺度

資料番号	尺度名	研究 1	研究 2	研究 3	研究 4	研究 5	研究 6
1-1	見捨てられスキーマ尺度(the ABandonment Schema Questionnaire: ABSQ) ※研究1-1で開発	○	○	○	○	○	○
1-2	愛着スタイル尺度の見捨てられ不安項目(中尾・加藤, 2004)	○					
1-3	日本語版the Personality Diagnostic Questionnaire-Revise: PDQ-R(上原・佐藤・坂戸・佐藤, 1996)のBPD項目	○	○	○	○	○	○
1-4	the Zung Self-Rating Depression Scale: SDS(福田・小林, 1973)の自殺項目を除いた項目	○		○	○	○	○
1-5	BPDのためのスキーマ同定質問紙(BSQ;井沢, 2005)	○					
1-6	日本語版感情不安定性尺度(the Affective Liability Scale: ALS; 加藤, 2005)		○				
1-7	Structured clinical interview for DSM-IV Axis II(SCID-II)より、行動的側面に関する項目		○				○
1-8	3次元モデルにもとづく対処方略尺度(Tri-Axial Coping Scale: TAC-24; 神村・海老原・佐藤・戸ヶ崎・坂野, 1995)			○		○	○
1-9	ENDCORE(簡易版)(藤本・大坊, 2007)			○			
1-10	DBTにおける日本語版マインドフルネス尺度の「効果的な対人コミュニケーション」因子(斉藤・守谷, 2009)			○		○	○
1-11	DBTにおける日本語版マインドフルネス尺度の「情動コントロール」因子(斉藤・守谷, 2009)						○
1-12	POMS短縮版(横山・荒記, 1994)				○	○	○
1-13	気分調査票(坂野・福井・熊野・堀江・川原・山本・野村・末松, 1994)の「リフレッシュ」項目				○	○	○

2. 実験材料

資料番号	実験材料名	研究 1	研究 2	研究 3	研究 4	研究 5	研究 6
2-1	健康アンケート				○	○	○
2-2	イメージ想起実験記述シート				○	○	○
2-3	イメージ想起実験半構造化面接の項目				○		
2-4	見捨てられスキーマの心理教育 ※見捨てられスキーマ焦点群用					○	○
2-5	見捨てられスキーマ反証のホームワーク ※見捨てられスキーマ焦点群用					○	○
2-6	見捨てられ場面における思考記録票の心理教育・ホームワーク ※見捨てられスキーマ焦点群用					○	○
2-7	感情への対処方略の心理教育・ホームワーク ※見捨てられスキーマ焦点群用						○
2-8	見捨てられ場面での自己主張スキル心理教育・ホームワーク ※見捨てられスキーマ焦点群用						○
2-9	考え方のクセの心理教育・思考記録票のホームワーク ※見捨てられスキーマ非焦点群用						○
2-10	リラクゼーション法についての心理教育・ホームワーク ※見捨てられスキーマ非焦点群用						○
2-11	ストレス対処法の案出の心理教育・ホームワーク ※見捨てられスキーマ非焦点群用						○

以下の質問は、あなたの普段の考え方について調べるものです。以下の質問項目について、あなたの普段の考え方にあてはまる番号を○で囲んでください。

		全く当てはまらない	当てはまらない	どちらかといえば当てはまる	どちらかといえば当てはまる	とても当てはまる
1	親しい人は、私の一部だ。	1	2	3	4	
2	人は私が大切に思うのと同じくらい、私のことを大切に思わなければならない。	1	2	3	4	
3	その人から好かれるようなことをしないと、人は私の元を去っていく。	1	2	3	4	
4	私は全ての人に好かれなければならない。	1	2	3	4	
5	親しい人が私から離れていったら、私は生きていけない。	1	2	3	4	
6	私が必要としていても、人は私から離れていこう。	1	2	3	4	
7	人は私が想う以上に、私のことを想ってはくれないだろう。	1	2	3	4	
8	親しい人は私が必要なときに側にいるべきだ。	1	2	3	4	
9	私が親密になりたいと思うほど、人はうんざりして離れていこう。	1	2	3	4	
10	私の人間関係はいつもうまくいかない。	1	2	3	4	
11	私は生まれつき一人ぼっちだ。	1	2	3	4	
12	私はいつも見捨てられる。	1	2	3	4	
13	誰かが私の考えを否定するということは、私のことが嫌いであるということだ。	1	2	3	4	
14	人は簡単に私を裏切るだろう。	1	2	3	4	
15	私には常に親しい二者関係が必要だ。	1	2	3	4	
16	自分のことを誰も助けてはくれないだろう。	1	2	3	4	
17	人はいったん自分のところから去っていったら、もう二度と戻ってこないだろう。	1	2	3	4	
18	親しい人は、私とできるだけたくさんの時間を過ごすべきだ。	1	2	3	4	

1-1 見捨てられスキーマ尺度 (the Abandonment Schema Questionnaire: ABSQ) ※ 研究 1-1 で開発

下記の質問について、普段のあなたに最も当てはまると思われる段階を1～7から一つだけ選んで、選んだ番号を○で囲んで下さい。あまり考えないで、普段のあなたを思い浮かべながら回答してください。

		<div style="display: flex; justify-content: space-between; align-items: center;"> 全く当てはまらない 非常によく当てはまる </div>						
1	私は一人ぼっちになってしまうのではないかと心配する。	1	2	3	4	5	6	7
2	私は、(知り合いに)見捨てられるのではなかと心配になることはほとんどない。	1	2	3	4	5	6	7
3	私は、知り合いを失うのではないかとけっこう心配している。	1	2	3	4	5	6	7
4	私が人のことを大切に思うほどには、人が私のことを大切に思っていないのではないかと私は心配する。	1	2	3	4	5	6	7
5	私は、色々な人との関係について、非常に心配している。	1	2	3	4	5	6	7
6	私は、見捨てられるのではと心配だ。	1	2	3	4	5	6	7
7	私が人ととても親密になりたいと強く望むがために、時々人はうんざりして私から離れていく。	1	2	3	4	5	6	7
8	私は、人が必要なときにいつでも私のためにいてくれないといらいらする。	1	2	3	4	5	6	7
9	私があまりにも気持ちの上で完全に一つになることを求めるがために、ときどき人はうんざりして私から離れていってしまう。	1	2	3	4	5	6	7
10	私には、人は私に対して好意的であるということを何度も何度も言ってくれることが必要だ。	1	2	3	4	5	6	7
11	私は、私がいてほしいと望むくらいに人がそばにいてくれないと、いらいらしてしまう。	1	2	3	4	5	6	7
12	私は人に自分のことを好きになってもらうことが出来なかったら、私はきつと気が動転して、悲しくなったり腹が立ったりする。	1	2	3	4	5	6	7
13	私が親密になりたいと望むほどには、人は私と親密になりたいと思っていないと私は思う。	1	2	3	4	5	6	7
14	私は誰かと付き合っていないと、何となく不安で不安定な気持ちになる。	1	2	3	4	5	6	7
15	私はいつも、人が私に対していてくれる気持ちが、私が人に対していてくれる気持ちと同じくらい強ければいいのになと思う。	1	2	3	4	5	6	7
16	私は、人にもっと自分の感情や自分達の関係に真剣である事をしめさせようとしているのを、感じる事がときどきある。	1	2	3	4	5	6	7
17	人にダメだなと言われると、自分は本当にダメだなあと感じる。	1	2	3	4	5	6	7
18	私は、知り合いが私のことをほっといて自分一人で何かをすることが重なってくると腹が立ってきってしまう。	1	2	3	4	5	6	7

1-2 愛着スタイル尺度の見捨てられ不安項目（中尾・加藤，2004）

この調査用紙は、最近のあなたがどういう人かを見るためのものです。回答するときには、**ここ数年間**、あなたがどんな風に感じ、考え、行動してきたかを考えてください。各設問の文章があなたに大体あてはまるときは、「はい」に○をしてください。各設問の文章があなたにあまりあてはまらないときには、「いいえ」に○をしてください。どちらに

		はい	いいえ
1	人に対する感情が、突然変わってしまう。	1	2
2	私が尊敬してきた人に落胆させられ、付き合いなくなったということがしばしばある。	1	2
3	私はとても気分屋だ。	1	2
4	自分でどうしようもないほどの怒りを感じることは、めったにない。	1	2
5	すぐに手を出して喧嘩をしてしまう方だ。	1	2
6	死ぬといって脅かしたことはない。	1	2
7	突発的に自分自身を傷つけてしまうことがしばしばある。	1	2
8	友人や人生の目標、または自分の信念が絶えず変わってしまう。	1	2
9	自分が本当はどのような人間なのか分からなくなる。	1	2
10	むなしかったり、退屈だったりする 때가 多い。	1	2
11	もし誰かとの関係が終わろうとしていることを知っても、平和的にその関係を終わらせると思う。	1	2
12	自分自身を苦しめるような事(下に書かれたような)を衝動的にした経験がある。	1	2



設問12で、具体的にどのようなことをしたのか、以下の1～7について**経験がある番号に○をつけて下さい**。また、経験があると答えた方は、**ここ数年間について**、そのような行動がどの程度の頻度であったのか、1～5から最も当てはまる番号に○をつけて下さい。

		ここ数年間について				
		全くない	程 1 度 1 ヶ月に 1 回	程 1 度 1 週間 1 回	3 1 回 1 週間に 2 3 回	ほとんど毎日
1	自分が持っている以上にお金を使ってしまう。	1	2	3	4	5
2	ほとんど知らない人とでも性的な関係を持ってしまう。	1	2	3	4	5
3	お酒を非常に飲みすぎる。	1	2	3	4	5
4	覚せい剤や麻薬を使用する。	1	2	3	4	5
5	過食する(一度にたくさんものを食べる)こと。	1	2	3	4	5
6	万引きをする。	1	2	3	4	5
7	無謀運転をする。	1	2	3	4	5

1-3 日本語版 the Personality Diagnostic Questionnaire-Revise: PDQ-R (上原・佐藤・坂戸・佐藤, 1996) の BPD 項目 ※行動化項目は、研究 2 のみ使用

下の各々の文章を読んで、最近のあなたの状態に最もよく当てはまると思われる段階を1~4の中から一つだけ選んで、選んだ番号を○で囲んでください。
あまり考えないで、最近感じている通りにつけて下さい。

		ほとんどない	ときどきある	かなりの間ある	ほとんどいつもある
1	気分が沈んで憂うつだ。	1	2	3	4
2	朝方はいちばん気分がよい。	1	2	3	4
3	泣いたり、泣きたくなる。	1	2	3	4
4	夜よく眠れない。	1	2	3	4
5	食欲はふつうだ。	1	2	3	4
6	異性に対する関心がある。	1	2	3	4
7	やせてきたことに気がつく。	1	2	3	4
8	便秘している。	1	2	3	4
9	ふだんよりも動悸がする。	1	2	3	4
10	何となく疲れる。	1	2	3	4
11	気持ちはいつもさっぱりしている。	1	2	3	4
12	いつもとかわりなく仕事をやれる。	1	2	3	4
13	落ち着かず、じっとしてられない。	1	2	3	4
14	将来に希望がある。	1	2	3	4
15	いつもよりいらいらする。	1	2	3	4
16	たやすく決断できる。	1	2	3	4
17	役に立つ、働ける人間だと思う。	1	2	3	4
18	生活はかなり充実している。	1	2	3	4
19	日頃していることに満足している。	1	2	3	4

1-4 the Zung Self-Rating Depression Scale: SDS (福田・小林, 1973) の自殺項目を除いた項目

この質問は、普段の考え方について調べるためのものです。下記の質問項目について、あなたの考えに当てはまる番号を選んで丸をつけて下さい。

まったくあてはまらない	どちらかといえはあてはまらない	どちらかといえはあてはまる	とてもあてはまる
-------------	-----------------	---------------	----------

1 私の存在は周囲の人から見れば「うっとおしい」のだろう。	1	2	3	4
2 私の望みに反して、ほとんどの人は私から離れていこう。	1	2	3	4
3 私は人から必要とされるような人間ではないのだろう。	1	2	3	4
4 相手の言うことに素直に従えば、相手も助け舟を出してくれるだろう。	1	2	3	4
5 私は自分の要求をまげて、相手の言うことに合わさなければならないだろう。	1	2	3	4
6 私は今までもずっと一人ぼっちだったし、これからもうさうだろう。	1	2	3	4
7 私の気持ちを分かってくれる人は誰もいないだろう。	1	2	3	4
8 私はむずかしい問題に立ち向かうのは怖いし、それを受けて立つだけの力もないだろう。	1	2	3	4
9 問題が起きた原因は私の能力不足のせいだろう。	1	2	3	4
10 私には欠点が多すぎるので、何かに挑戦することは極力避けた方がいいだろう。	1	2	3	4
11 人と深く関わると必ず傷つくことはわかっているので、私はできるだけ人と距離をとった方がいいだろう。	1	2	3	4
12 私は人から親切にされるとかえって気持ちが混乱してしまうので、人と親しくなりすぎない方がいいだろう。	1	2	3	4
13 ごく親しい人と一緒にいすぎると、私は自分がどういう人間なのかわからなくなってしまうだろう。	1	2	3	4
14 自分の言いたいことを言うとかえって傷つくので、言わないほうがいいだろう。	1	2	3	4
15 問題が起きたときは必ずこじれるので、十分警戒した方がいいだろう。	1	2	3	4
16 相手は私を追いつめるためにさらに何かしてくるだろう。	1	2	3	4
17 相手は意図的に私を傷つけようとしているので、何とかして自分を守らなくてはならないだろう。	1	2	3	4
18 私は間違っても「愛すべき人」ではないだろう。	1	2	3	4
19 私のことをよく知れば知るほど、人は私を嫌いになるだろう。	1	2	3	4
20 私の本当の姿がわかってしまうと誰も私を愛してくれないだろうから、私は本性をかきなくてはならないだろう。	1	2	3	4

1-5 BPD のためのスキーマ同定質問紙 (BSQ; 井沢, 2005)

この質問は、人の気分について調べるためのものです。下記の質問項目について、あなたにもっともあてはまる番号を選んで○で囲んでください。

		あてはまらない まったく	どちらかといえば あてはまらない	どちらかといえば あてはまる	とてもあてはまる
1	私は睡眠パターンが、十分に眠れる場合から、寝付けずぐっすり眠れない場合へと変わる。	1	2	3	4
2	私は全く落ち着きがないと感じたすぐその後に、とても落ちついていると感じるときがある。	1	2	3	4
3	私は頭がくらくらしたり、めまいがする程、神経が過敏になっていると感じたそのすぐ後に、何もする気が起きない程、悲しくなってしまうことがある。	1	2	3	4
4	私は普通の人以上に心配する場合と、誰よりも心配しない場合とを揺れ動くことがよくある。	1	2	3	4
5	私は普通の人と同じくらいにリラックスしていた数分後に、頭がくらくらしたり、めまいがする程に神経が過敏になってしまうことが時々ある。	1	2	3	4
6	私は後に後悔したり、すぐに興味を失ってしまうような活動に深く関わってしまうことがある。	1	2	3	4
7	私は普段楽しみにしていることが、とても楽しいと感じるときから、全く関心がないときへと変わってしまうことがよくある。	1	2	3	4
8	私は「何で私は価値がないんだろう」としか考えられなかったすぐ後に、私は心配している物事についてしか考えられないことがある。	1	2	3	4
9	私は睡眠週間が、一日中でも眠れる場合から、眠る必要をほとんど感じない場合へと変わることがよくある。	1	2	3	4
10	私は「大丈夫やっっていける」と感じる事ができたかと思うと、次の瞬間には緊張したり、びくびくしたり、神経質になったりする。	1	2	3	4
11	私は何かに対して怒り狂った後すぐに、平常心を取り戻すことがよくある。	1	2	3	4
12	私はとてもびりびりして緊張した後に、突然とても悲しくなり落ち込むことがよくある。	1	2	3	4
13	私は何かに対してとても不安を感じてから、とても落ち込んでしまうことが時々ある。	1	2	3	4
14	私は未来に対して適度に楽観的な気持ちを抱いていたすぐその後に、未来やそれがもたらすものに対してとても悲観的になることがある。	1	2	3	4
15	私はとても穏やかな場合と、イライラしたり、びりびりしたりする場合とを揺れ動く。	1	2	3	4
16	私はとても穏やかだと感じた次の瞬間に、とてもささいなことで怒り狂うことがある。	1	2	3	4
17	私の感情は抑うつ的に感じて「どん底に落ち込む」と、「いらいら」して物事に過敏になることを揺れ動く。	1	2	3	4
18	私は「やっっていけるだろう」と感じた後に、突然何かにあたりたくなるくらい怒り狂うことがよくある。	1	2	3	4
19	私はぐっすり眠れる場合と、とてもびりびりしてしまい少しも眠れない場合とを揺れ動く。	1	2	3	4
20	私は「気が立って」イライラしていると感じたすぐ後に、気楽でリラックスしていると感じる事ができる。	1	2	3	4

21	私は落ち込んでいるかと思うと、そのすぐ後に、気分が高揚することが時々ある。	1	2	3	4
22	私は「自分が全く価値のない人間だ」と感じた後、突然自分自身や自分がこれまでやってきたことについて「すばらしい！」と思い始めることがある。	1	2	3	4
23	私は十分やっていけると思ったすぐ後に、泣きたくなることが時々ある。	1	2	3	4
24	私は極端に楽観的になるときに、普通の人と同程度に楽観的になるときをよく揺れ動く。	1	2	3	4
25	私はどうしてもわめくことを止められない程怒っていたすぐ後で、わめくことについて少しも考えなくなることがある。	1	2	3	4
26	私は自分自身についてあらゆる面ですばらしいと感じたすぐ後で、普通の人と同レベルだと感じることもある。	1	2	3	4
27	私は多くの物事について心配する場合と、あらゆることにほとんど興味が湧かない場合とを揺れ動く。	1	2	3	4
28	私は、もう寝るしかないと思うくらい悲しくなったすぐ後で、まったく眠ることが出来ないくらいびりびりしてしまうことが時々ある。	1	2	3	4
29	私は普通の人以上に生産的でない場合と、とても生産的であると感ずる場合とを揺れ動く。	1	2	3	4
30	私は心臓がドキドキして震え出す程に怒ったすぐ後に、すっかりリラックスしてしまうことがある。	1	2	3	4
31	私はとても非生産的であると感ずる場合と、人並みには生産的であると感ずる場合とを揺れ動く。	1	2	3	4
32	私はとても気力に満ち溢れているように感じた次の瞬間に、ほとんど気力がなくなり何かするにもやつのことが時々ある。	1	2	3	4
33	私はとても穏やかな気分と、心臓がドキドキして高鳴ったり、胃の不快感があたり、呼吸困難になったりを揺れ動く。	1	2	3	4
34	私は普段の自分や普通の人よりも気力に満ちあふれていると感じたすぐ後で、普通の人と同程度の気力しかないと感じることがある。	1	2	3	4
35	私は物事をものすごく遅いペースでやっているように感じたすぐ後で、他の人と同じくらいのペースであるように感ずることが時々ある。	1	2	3	4
36	私はいつになく明確で創造的に考えられる場合と、他の誰よりもあまり創造的で明確に考えられない場合とを揺れ動く。	1	2	3	4
37	私は睡眠パターンが、寝付けない場合から、少しも眠りたいと感じない場合へと変わることがよくある。	1	2	3	4
38	私は考えたり集中したりすることが難しいと感じたすぐ後に、私が心配している物事全てについてとても考えることが時々ある。	1	2	3	4
39	私は人に一日中「くっつかかる」くらい頭にきていたすぐ後に、人に非常に寛大になることがよくある。	1	2	3	4
40	私は多くの人と一緒にいたいと感じたすぐ後で、一人になり誰とも会いたくないと感じることがある。	1	2	3	4
41	私は性的興味、性に対してとても興味を感じた次の瞬間には、他の人と同程度の興味しか感じないというようにとても変化する。	1	2	3	4
42	私はほとんど睡眠時間を必要としないときに、普通の人と同じくらい睡眠時間を必要とするときとを揺れ動く。	1	2	3	4
43	私は社会的活動への好み、他の人と一緒に楽しむ場合と、独りでいて、誰にも会いたくない場合とを揺れ動く。	1	2	3	4

1-6 日本語版感情不安定性尺度 (the Affective Lability Scale: ALS; 加藤, 2005)

下記の質問は、あなたが質問項目に当てはまる行動を普段どの程度しているかをお聞きするものです。ここ数年のあなたに最も当てはまると思われる番号に○をつけてください。あまり考えないで、普段のあなたを思い浮かべながら回答してください。

		全 く な い	1 ヶ 月 に 1 回 程 度	1 週 間 に 1 回 程 度	1 週 間 に 2 〜 3 回	ほ と ん ど 毎 日
1	あなたは本当に大事にしていた人が去ってしまうことを考えてひどく取り乱し、相手を攻撃したり、相手が去らないように行動をしたことがありますか？	1	2	3	4	5
2	あなたが本当に大事にしている人と、親密な関係を築いたかと思えば、すぐに自分から断絶してしまうなど、人間関係について極端な行動をとりますか？	1	2	3	4	5
3	あなたは自分を傷つけようとしたり、自殺しようとしたり、自殺するぞと脅したことはありますか？	1	2	3	4	5
4	あなたは自分の体をわざと切ったり、やけどをしたり、ひっかいたりしたことがありますか？	1	2	3	4	5
5	あなたは激しいかんしゃくを起こしたり、怒って自制心を失うことがよくありますか？	1	2	3	4	5
6	あなたは怒ると、人を叩いたり、人に物を投げつけたりしますか？	1	2	3	4	5
7	あなたはほんのちょっとしたことで腹を立ててしまいますか？	1	2	3	4	5

1-7 Structured clinical interview for DSM-IV Axis II (SCID-II) より、行動的側面に関する項目

あなたは、他人から「見捨てられた」と感じるような状況に遭遇したとき、その場を乗り越え、落ち着くために、あなたは普段から、どのように考え、どのように行動するようになっていますか。各文章に対して、自分がどの程度あてはまるか評定してください。

選択肢

- 1: そのようにしたこと(考えたこと)はこれまでにない。今後も決してないだろう。
 2: ごくまれにそのようにしたこと(考えたこと)がある。今後もあまりないだろう。
 3: 何度かそのようにしたこと(考えたこと)がある。今後も時々はそうするだろう。
 4: しばしばそのようにしたこと(考えたこと)がある。今後もたびたびそうするだろう。
 5: いつもそうしてきた(考えてきた)。今後もそうするだろう。

1 悪いことばかりではないと楽観的に考える	1	2	3	4	5
2 誰かに話を聞いてもらい気を静めようとする	1	2	3	4	5
3 嫌なことを頭に浮かべないようにする	1	2	3	4	5
4 スポーツや旅行などを楽しむ	1	2	3	4	5
5 原因を検討しどのようにしていきべきか考える	1	2	3	4	5
6 力のある人に教えを受けて解決しようとする	1	2	3	4	5
7 どうすることもできないと解決を先延ばしにする	1	2	3	4	5
8 自分は悪くないと言い逃れをする	1	2	3	4	5
9 今後はよいこともあるだろうと考える	1	2	3	4	5
10 誰かに話を聞いてもらって冷静さを取り戻す	1	2	3	4	5
11 そのことをあまり考えないようにする	1	2	3	4	5
12 買い物や賭け事、おしゃべりなどで時間をつぶす	1	2	3	4	5
13 どのような対策をとるべきか綿密に考える	1	2	3	4	5
14 詳しい人から自分に必要な情報を収集する	1	2	3	4	5
15 自分では手に負えないと考え放棄する	1	2	3	4	5
16 責任を他の人に押しつける	1	2	3	4	5
17 悪い面ばかりでなくよい面を見つけていく	1	2	3	4	5
18 誰かに愚痴をこぼして気持ちをほらす	1	2	3	4	5
19 無理にでも忘れるようにする	1	2	3	4	5
20 友達とお酒を飲んだり好物を食べたりする	1	2	3	4	5
21 過ぎたことの反省をふまえて次にすべきことを考える	1	2	3	4	5
22 既に経験した人から話を聞いて参考にする	1	2	3	4	5
23 対処できない問題と考え、諦める	1	2	3	4	5
24 口からでまかせを言って逃げ出す	1	2	3	4	5

1-8 3次元モデルにもとづく対処方略尺度 (Tri-Axial Coping Scale: TAC-24; 神村ら, 1995)

以下の質問は、あなたが「見捨てられた」と感じた場面において、対人関係に対してどのように対処するかについてお聞きするものです。自分に当てはまる番号に○をつけてください。

	かなり 苦手	苦 手	やや 苦 手	ふ つ う	やや 得 意	得 意	かなり 得 意
1 自分の感情や行動をうまくコントロールできる。	1	2	3	4	5	6	7
2 自分の考えや気持ちをうまく表現する。	1	2	3	4	5	6	7
3 相手の伝えたい考えや気持ちを正しく読み取る。	1	2	3	4	5	6	7
4 自分の意見や立場を相手に受け入れてもらえるように主張する。	1	2	3	4	5	6	7
5 相手を尊重して相手の意見や立場を理解する。	1	2	3	4	5	6	7
6 周囲の人間関係にはたらきかけ良好な状態に調整する。	1	2	3	4	5	6	7

1-9 ENDCORE (簡易版) (藤本・大坊, 2007)

以下の質問は、あなたの普段の対人場面の傾向についてお聞きするものです。自分に当てはまる番号に○をつけてください。

	い つ も 違 う	←————→			い つ も そ う で あ る
1 自分の意見を主張するよりも、影響力のある他者の意見にあわせてしまう。	1	2	3	4	5
2 他人の意見と比べてしまい、自分の意見を主張することに自信がない。	1	2	3	4	5
3 自分の意見を持つことが苦手で、世間的な常識にあわせてしまう。	1	2	3	4	5
4 困難に直面した時、自分の意見よりも他人の意見の方が優れていると思うことが多いため、気が付くと自分の意見を変えている。	1	2	3	4	5
5 自分が一番良いと思っていることをするよりも、「私はこうするべきだ」という考えや他人の期待を優先してしまう。	1	2	3	4	5

1-10 DBT における日本語版マインドフルネス尺度の「効果的な対人コミュニケーション」因子 (斉藤・守谷, 2009)

以下の質問は、あなたの普段の傾向についてお聞きするものです。自分に当てはまる番号に○をつけてください。

1	激しい感情にとらわれてしまって、様々な行動が引き起こされてしまう。	1	2	3	4	5
2	激しい感情を感じると、自分が損してしまうような行動をしてしまう。	1	2	3	4	5
3	非常に短気なので、自分をコントロールできないと感じる。	1	2	3	4	5
4	気が動転している時、その時の状況や経験がはっきりしない。	1	2	3	4	5
5	深く考えないで行動してしまって、後悔することが多い。	1	2	3	4	5

1-11 DBT における日本語版マインドフルネス尺度の「情動コントロール」因子（斉藤・守谷，2009）

この質問紙は、あなたの気分状態についてお尋ねするものです。それぞれの質問について、あまり深く考えず、第一印象を大切にしてください。

* 今思い出していただいたイメージ場面で、あなたがどういう気分状態だったかについて、教えてください。

	まったくなかった	少しあった	まあまああった	かなりあった	非常に多くあった
1 楽しくない	0	1	2	3	4
2 気がかりでそわそわする	0	1	2	3	4
3 集中できない	0	1	2	3	4
4 めいわくをかけられて困る	0	1	2	3	4
5 ゆうつだ	0	1	2	3	4
6 自分はほめられるに値しないと感じる	0	1	2	3	4
7 あれこれ後悔する	0	1	2	3	4
8 はげしい怒りを感じる	0	1	2	3	4
9 物事がてきぱきできる気がする	0	1	2	3	4
10 いじわるしたい	0	1	2	3	4
11 心の中でふんがいする	0	1	2	3	4
12 頭が混乱する	0	1	2	3	4
13 罪悪感がある	0	1	2	3	4
14 反抗したい	0	1	2	3	4
15 うろたえる	0	1	2	3	4
16 ふきげんだ	0	1	2	3	4
17 もう何の望みもない	0	1	2	3	4
18 がっかりしてやる気をなくす	0	1	2	3	4
19 自分は何もできない	0	1	2	3	4
20 物事に確信がもてない	0	1	2	3	4

		まったくなかった	少しあった	まあまああった	かなりあった	非常に多くあった
21	落ち着かない	0	1	2	3	4
22	怒る	0	1	2	3	4
23	すぐけんかしたくなる	0	1	2	3	4
24	気持ちがくつろぐ	0	1	2	3	4
25	希望が持てない	0	1	2	3	4
26	孤独でさびしい	0	1	2	3	4
27	悲しい	0	1	2	3	4
28	考えがまとまらない	0	1	2	3	4
29	気がはりつめる	0	1	2	3	4
30	すぐかっとなる	0	1	2	3	4
31	自分ほみじめだ	0	1	2	3	4
32	とほうに暮れる	0	1	2	3	4
33	気持ちが沈んで暗い	0	1	2	3	4
34	いらいらする	0	1	2	3	4
35	あれこれ心配だ	0	1	2	3	4
36	緊張する	0	1	2	3	4
37	内心ひどく腹立たしい	0	1	2	3	4
38	何かにおびえる	0	1	2	3	4
39	どうも忘れっぽい	0	1	2	3	4
40	神経がたかぶる	0	1	2	3	4
41	自分は価値がない人間だ	0	1	2	3	4
42	不安だ	0	1	2	3	4

1-12 POMS (横山・荒記, 1994)

次の項目をよく読んで、あなたの状態に最もよく当てはまると思う番号に丸印をつけてください。

* 今思い出していただいたイメージ場面で、あなたがどういう気分状態だったかについて、教えてください。

		全くあてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	非常にあてはまる
1	心静かな気分だ	1	2	3	4
2	頭の中がすっきりしている	1	2	3	4
3	くつろいだ気分だ	1	2	3	4
4	物事を楽にやることができる	1	2	3	4
5	生き生きしている	1	2	3	4
6	元気いっぱいである	1	2	3	4
7	気持ちが引き締まっている	1	2	3	4
8	充実している	1	2	3	4

1-13 気分調査票（坂野・福井・熊野，1994）の「リフレッシュ」項目

実験参加にあたってのアンケート

ID _____

_____年 _____月 _____日

このアンケートは、あなたが実験に参加していただける状態であるかどうかの判断材料にさせていただきます。このアンケートは実験中に起こりうる問題を未然に防ぐために実施させていただくものでありますので、できるだけありのままをお答えください。

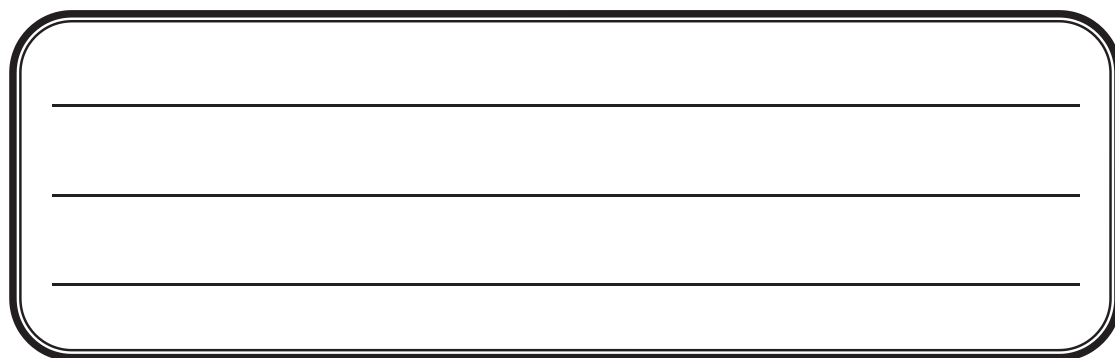
1. 現在何か病気をしている。
2. いま現在、極度の睡眠不足または疲労を感じている。
3. 現在、精神科や心療内科、カウンセリングにかかっている。
4. 現在、向精神薬を服用している。
5. 現在あるいは実験直前に顕著な心理的苦痛(例えば、自殺念慮、パニック発作、極端な自傷行為、重度の抑うつ症状)あるいは極度のトラウマティックな体験を経験している。

この中でひとつでも当てはまるものがありますか？Yes/No どちらかを○で囲んでください。

YES / NO

* その他、何かお知らせしたいことがあればお書きください。

思い浮かべた「見捨てられた」と感じた場面について、どのような場面だったかを、箇条書きでよいので以下に簡単に書き込んでください。



・この場面について、どの程度「見捨てられた」と感じましたか？

な か っ た	ほ と ん ど 感 じ							感 じ た	か な り 強 く
1		2	3	4	5	6			7

見捨てられ場面に関する半構造化面（実験者記入用）

それでは、あなたが先ほど挙げて下さった「見捨てられた」と感じた出来事についていくつか質問したいと思います。質問は出来事に関する気分や行動に関するもので、13問あります。お答えいただいている間に気分が悪くなる場合があったらすぐにお知らせください。

1. その出来事が起こったのはいつですか？

2. 相手の方はどのような関係の方ですか？答えられる範囲で結構ですので、簡単にあなたとの関係性を教えてください。

3. その出来事が起こった状況は、「～」ということでしたが、先ほど書いていただいたこの内容に付け加えることがあれば、簡単にお話してください。

4. その出来事が起こった時、あなたはどのような気持ちになりましたか？まずはその出来事が起こった直後の気持ちを教えてください。（例えば、悲しい、さみしい、怒り等）

5. その気持ちの強さはどれぐらいでしたか。0点～10点の10点満点で教えてください。

6. また、そうした気持ちが強すぎて、感情のコントロールがきかないと感 じることや、苦痛に感 じること がありましたか。

7. その気持ちはどのくらいおさまりましたか。また、しばらく経ってからその気持 ちに 変化 がありましたか。

8. 話 して くださ った 出来 事 が あ った 後、その人 の こと を、ど の よう に 感 じ ま した か。あるいは、ど の よう な 人 だ と 考 え ま した か。（評 価）

9. その出来事 が 起 こ った 時、あなた は 実 際 に どの よう な 行 動 を と り ま した か？ 起 こ した 行 動 を、出来 事 が 起 こ った 直 後 から 順 番 に お 話 く だ さ い。直 接 相 手 に 何 か 行 動 を 起 こ した 場 合 で な く て も、た と え ば、「気 分 転 換 の た め や け 食 い を し た」、「衝 動 買 い し た」な ど、その 出 来 事 が き か っ け で 起 こ した 行 動 が あ れ ば 教 え て く だ さ い。

10. その行動の結果どうなりましたか。

11. あなたは、こうした「見捨てられた」と思うような出来事があった時、今話して下さったような気持ちや行動をとることが多いですか。(1回目のみ)

12. あなたが「見捨てられた」と思うような出来事があった時、相手の親しさによって、感じる気持ちや行動が異なることはありますか。(2回目のみ)

13. あなたが「見捨てられた」と感じることはよくありますか。(1回目のみ)

質問は以上になります。ご協力ありがとうございました。

2-3 イメージ想起実験半構造化面接の項目

「見捨てられる」ことに対する考え方のメカニズム

1. 見捨てられスキーマって？

「誰かに見捨てられるのではないか」と不安に感じたり、「見捨てられる」と思って相手に怒りを感じることは、大学生でも多くの人が経験するといわれています。一方で、こうした「見捨てられる」ことに対して、特に敏感な人たちがいることも分かっています。見捨てられることに敏感であると、対人関係で混乱しやすかったり、感情的に不安定になりやすいたことが知られています。また、孤独感を感じやすく、抑うつ的な気分になりやすいたことが分かっています。



このように、「見捨てられること」に対して過敏な人たちの特徴として、見捨てられることに関して特徴的な強い考えを持っていることが知られています。例えば、

「私は生まれつき一人ぼっちだ」

「私が親密になりたいと思うほど、人はうんざりして離れていく」

というような考えです。この考えは、「見捨てられスキーマ*」と呼ばれ、感情の不安定さや、対人関係において色々な影響を与えることが分かっています。そのため、こうした考えを客観的に捉えなおして、より自分にとって負担の少ない考え方を検証することが有効であるとされています。

*スキーマとは、個人が持っている考え方の枠組みのことです。

2. 自分が強く持っていると思う「見捨てられスキーマ」を探そう。

まずは、あなたはどんな「見捨てられスキーマ」を強く持っているでしょうか？これからお渡しする項目リストの中から、自分が強く持っていると思う考えを、3つ選んでください。また、見捨てられスキーマは、相手が親密な関係(家族・恋人など)の場合と、相手があまり親しくない(知人など)場合では、強く持っているスキーマが異なる場合があることが分かっています。そのため、相手の親密度が高い場合と、低い場合に分けて、自分が強く持っていると感じるスキーマの項目番号を書き込んでみてください。

親密度が高い相手の場合

項目番号

項目番号

項目番号

親密度が低い相手の場合

項目番号

項目番号

項目番号

■項目リスト

1. 親しい人は、私の一部だ。
2. 人は私が大切に思うのと同じくらい、私のことを大切に思わなければならぬ。
3. その人から好かれるようなことをしないと、人は私の元を去っていく。
4. 私は全ての人に好かれなければならない。
5. 親しい人が私から離れていったら、私は生きていけない。
6. 私が必要としても、人は私から離れていくだろう。
7. 人は私が思う以上に、私のことを想ってはくれないだろう。
8. 親しい人は私が必要なときに側にいるべきだ。
9. 私が親密になりたいと思うほど、人はうんざりして離れていくだろう。
10. 私の人間関係はいつもまぐいかない。
11. 私は生まれつき一人ぼっちだ。
12. 私はいつも見捨てられる。
13. 誰かが私の考えを否定するということは、私のことが嫌いであるということだ。
14. 人は簡単に私を裏切るだろう。
15. 私には常に親しい二者関係が必要だ。
16. 自分のことを誰も助けてはくれないだろう。
17. 人はいったん自分のところから去って行ってしまったら、もう二度と戻ってこないだろう。
18. 親しい人は、私とできるだけたくさんさんの時間を過ごすべきだ。

3. 見捨てられスキーマの働き

☆ 「見捨てられる」と感じるような場面

例えば、「携帯のメールに返信がない」という場面になると・・・



相手に対して極端な行動をとりやすくなる。

怒る, 突然距離を置く (親しくない場合),
見捨てられないように相手の愛情を過剰に
確かめるなど (親しい場合)

自分自身を苦しめるような行動をとりやすくなる。

やけ食い, 衝動買い, 多量飲酒など

考え

感情

行動

「見捨てられスキーマ」に挑戦してみよう！

☆ 考え方を変容する方法

「見捨てられスキーマ」を強く持っていることによって、自分の感情や対人関係に様々な影響があることは理解できたでしょうか。

こうした強い考えの影響を変えるために、その考えとは別の考え方を探して、気持ちや行動をコントロールする、という方法があります。この方法は、「認知行動療法」と呼ばれる心理療法の一つの技法です。これは、自分が落ち込んだり不安になってしまふような時の考え方のパターンを探して、その考え方とは別の考え方を見つけることで気分や行動の悪循環を防ぐ、という方法です。「認知行動療法」は、うつ病や不安障害などに効果があるとされており、対人場面で不安を抱えやすい人を対象とした研究でも効果が実証されています。

☆ 見捨てられスキーマを変えるには

そこで、「認知行動療法」を使って、自分が強く持っている「見捨てられスキーマ」とは少しでも違うような考え方を探して、「見捨てられスキーマ」の程度を減らす、ということに取り組んでみましょう。次のシートを、例を見ながら一緒に取り組んでみましょう。

1. まず、先ほど挙げていただいた中から、「見捨てられスキーマ」をひとつ選んでみてください。
2. 次に、そのスキーマをどれだけ正しいかと思っっているかという、「確信度」について、%で答えてください。
3. そのスキーマが正しいと思うような証拠を探してみてください。
4. そのスキーマが正しくないと思うような証拠を探してみてください。
5. 証拠探しを行った結果、あらためて「確信度」を答えてください。
6. 次に、「見捨てられスキーマ」に替わる、新しい考え方と、その確信度を書き込んでみてください。
7. 最後に、「今後の課題」として、新しい考え方をもとにどんな新しいことに挑戦してみたいか、書き込んでください。

例)

「見捨てられスキーマ」

■ その人から好かれるようなことをしないと、人は私の元から去っていく 確信度 95 %

この考え方を支持する証拠

- ・ 以前友人を怒らせてしまったら、縁を切られたことがあった。
- ・ 常に人に気を遣わないと、嫌われると教えられてきた。
- ・
- ・

この考え方を反証する証拠

- ・ 喧嘩をしても、ずっと友達でいてくれる友人がいる。
- ・ 時には自分の意見をはっきりと言う方が、よい関係を築ける。
- ・
- ・

証拠探しをした結果、このスキーマに対する確信度

確信度 40 %

新しい考え方

■ 常に好かれようとしなくても、良い人間関係は築ける 確信度 60 %

今後の課題

時には自分と相手の意見が違っても、主張してみよう。

ワークシート

「見捨てられスキーマ」 ■ _____	確信度 _____ %
------------------------	-------------



この考え方を支持する証拠

この考え方を反証する証拠



証拠探しをした結果、このスキーマに対する確信度 _____ %



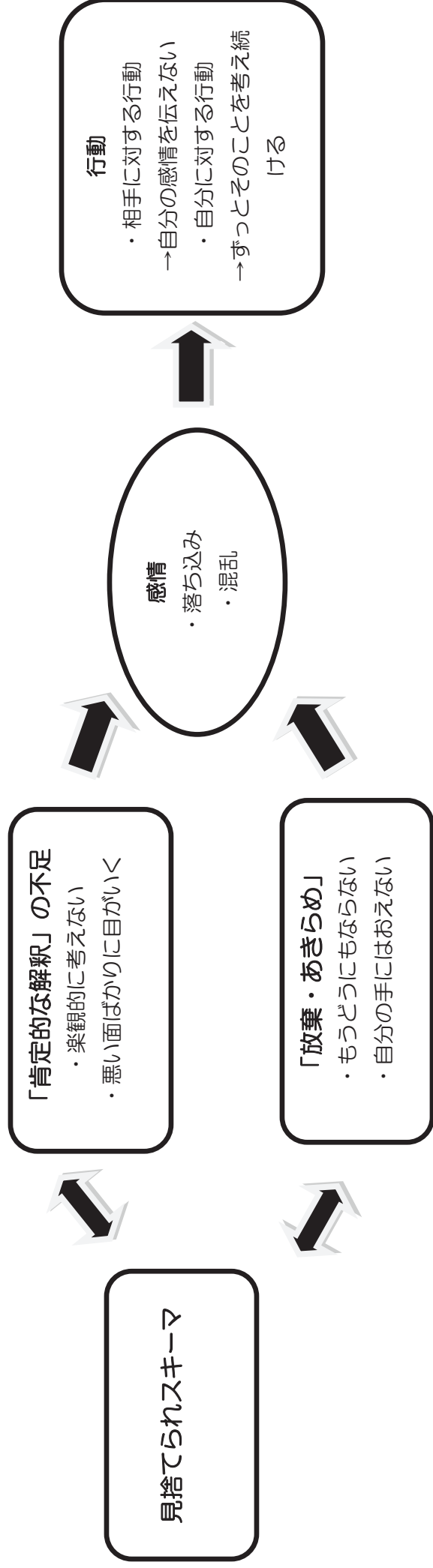
新しい考え方 ■ _____	確信度 _____ %
-------------------	-------------



今後の課題

「見捨てられた」と感じた場面で、考え方の視点を变える練習をしてみよう！

- ☆ 見捨てられスキーマが強いと、いざ「見捨てられた」という場面になった時に、見捨てられスキーマが弱い人よりも、肯定的にその出来事を捉えられなくなり、「もうどうにもならない」とあきらめて自暴自棄になってしまうことが多いことが分かっていきます。そこで、次のステップとして、認知行動療法でよく使用される「思考記録表」を使って、見捨てられたと感じた場面の考え方の視点を变える練習をしてみましよう。



◇ 思考記録表のやり方

1. 「見捨てられた」と感じるような場面があったら、まず「いつ・どこで」その出来事があったのかを書く。
2. 次に、「なにをして」いてそうなったのか、その時の状況を書く(自分が感じたことや考えたことは書かない)。
3. 次に、その時に自分の心を占めていた「考え」や「イメージ」について具体的に書く。
4. 次に、その時に感じた感情の強さを、%で表して書く。感情については、右の表を参考にする。また、その時自分が実際にとった行動について、具体的に書く。
5. 次に、考え方の視点を変える練習として、「もし違う考え方があったら」どのような考え方があるかについて書く。
☆あきらめたり、否定的な面ばかりを探すのではなく、肯定的な側面や、自分が対処できているイメージをもって考えましょう。

6. 最後に、5番目に記入した考え方をしたら、自分の感情や行動がどのようになったのか(あるいはどのようになるかと予測されるのか)、4番と同様の手順で記入する。

*ホームワークでは、2週間の間に「見捨てられた」と感じたような出来事が起こった際に、この思考記録表に記入してください。もし「見捨てられた」と感じるような場面がなかった場合は、過去にそう感じた場面について最低2つほど書いてみてください。

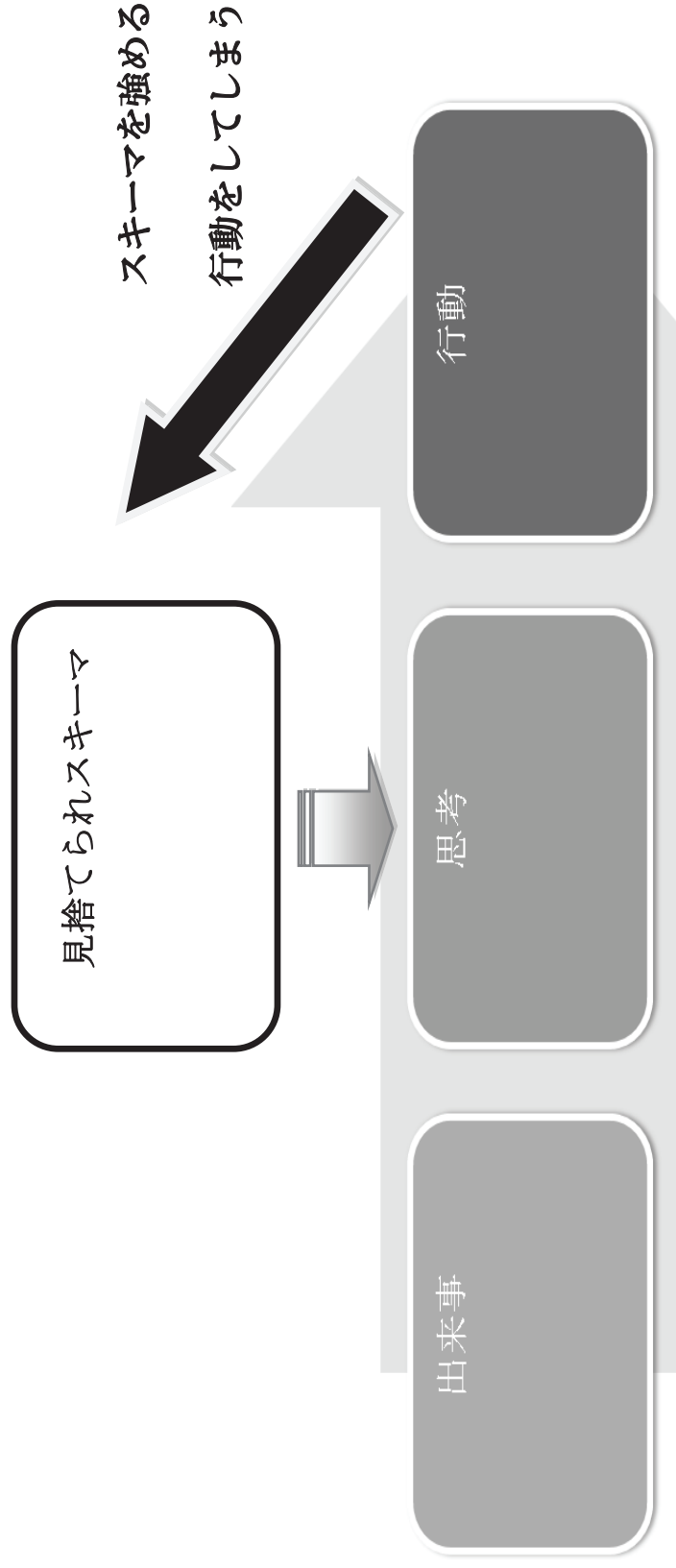
思考記録表

気分表

いつ、どこで	なにをして	考え 不快な感情を経験する ときにここを占めて いる考えやイメージ	*感情の強さ (0~100%) *行動	もし違う考え方があっ たら?	*感情の強さ (0~100%) *行動
例) 家で	親しい友人に、遊び に誘うメールをした が、1日たっても返信 が来ない。	自分がきつと嫌われたん だろう。 こんな自分に嫌気がさし たに違いない。	感情 悲しみ 80% 不安 70% 行動 友人に電話して文句を 言う。 ベッドでずつとふさぎ こむ。	たまたま忙しくて返信でき ないのだろう。 ずつと親しくしている友人 だから、自分のことを嫌っ ていることはないはずだ。	感情 悲しみ 30% 不安 40% 行動 もう一度友人に確認の メールを試してみる。 気分転換に音楽を聴く。

ゆううつ
不安
怒り
罪悪感
恥
悲しい
困惑
興奮
おびえ
いらだち
心配
誇り
パニック
うんざり
傷ついた
快い
失望
怖い
楽しい

スキーマと対処行動のしくみ



- ☆ 元にある思い込みが強いと、ある出来事が起こった時に、思考がスキーマに影響され、そのスキーマを強めるような行動をとってしまいます。例えば、「私の対人関係はいつもうまくいかない」という場合、はじめから親密な対人関係を作らなかつたり、うまくいきそ~~う~~な~~い~~人と付き合ってしまったり、過度に相手に服従して見捨てられないようにしたりします。これらの行動は、あまり機能的に働かないことから、結果的にスキーマを強めることとなります。

対処行動のレパトリーを増やそう！

このように、見捨てられスキーマが強い人は、弱い人よりも、衝動的な行動をとってしまったり、後になって自分が後悔するような行動をとりやすく、結果的にスキーマを強めてしまうことが指摘されています。これは、見捨てられスキーマの影響で、「相手は自分を嫌っている」と違いない」というように、現実を否定的に捉えてがちであることや、「見捨てられる」というような感情的に混乱する場面での、適切な対処行動がうまく身についておらず、選択肢が少ないことが関係しているといわれています。前半 4 週間の部分では、主に見捨てられ場面での「考え方」に注目してきました。そこで、介入の後半 4 週間では、見捨てられ場面での「対処行動」に注目して、対処行動の選択肢(レパトリー)を増やして、見捨てられスキーマを強めてしまう行動の連鎖を断ち切る、という練習をしていきます。

☆ 感情に対する対処

「見捨てられた」と感じた場面では、強い感情が引き起こされるために、その感情をコントロールできないように感じたり、感情を落ち着かせて適切な行動がとっさにとりにくかったりします。そこで、まず、見捨てられ場面で引き起こされた感情に対して、どのように対処していったら良いかを考えていきましょう。

まず、自分がそのような場面で感情の状態がどのようになりやすいのか、考えてみましょう。その際、相手が親密な場合とそうでない場合とでは、感じる感情が異なることが指摘されています。また、親密度が高いほど、強い感情が持続しやすいことが指摘されています。そのため、親密度が高い場合と低い場合に分けて、自分が感じやすい感情を書き込んでみてください。

親密度高

親密度低

☆感情の役割を理解する

そもそも、感情とはどのような働きがあるのでしょうか。あなたが「いらぬ」と思っている感情にも、その感情がある意味はあるのです。例えば、感情が表情に出ることで、他人に自分のメッセージを素早く伝えることができます。また、感情は何かの行動を移すきっかけになります。強い感情は、何か強い障害を乗り越えることに役立ちます。また、感情は自分が他人や出来事に関してどう感じているかという自己確認の手段になります。何かが起こっているというシグナルや警告を与えてくれます。

このように、どんなにネガティブに感じる感情にも、その意味はあります。そのため、感情をなくすことはできません。よって、感情の波をいかに乗りこなすかが、ポイントになってきます。以下に、波を乗りこなすための2つの方法を紹介します。

- ① 自分の状態から距離をとる
 - ・自分の感情を観察する（その存在に注目する、「私は悲しい」ではなく、「私は悲しいと感じている」と、一歩引いてみる。）
 - ・感情を体験する（感情を遮断しない、抑えつけない、感情を避けない、しがみつかない。波のように行ったり来たりするのを感じる）
 - ・自分の感情と自分自身は別ものであることを覚えておく（必ずしも感情にもとづいて行動する必要はない。違う感じ方をする時もある）
 - ・自分の感情を断定しない、価値づけをしない（良い・悪いなど）。受け入れる（その感情を感じている自分を否定しない）。

<呼吸を観察する>

自分の呼吸を観察することで、自分の感じている感情から一歩引いてみる事ができますといわれています。ゆっくり息を吸って、自分の肺に空気が入る感覚、お腹がふくらむ感覚に注目しましょう。次に、ゆっくり息を吐いて、お腹がしぼんでいく感覚、口から空気が出て行く感覚などに注目しましょう。こうして、その瞬間の身体の感覚に目を向けることで、感じている感情から少し切り離され、距離をとることができ

② 心地よくなる活動をする

自分が心地よくなったり、ポジティブな気持ちになれるような活動をすることで、感情の波をうまくのりこなすことができます。ここでは、いくつか例をあげますので、自分が取り組みやすいと思われる活動を書き込んでみましょう。

例) お風呂につかる／音楽を聴く／雑誌や新聞を読む／食事する／植物や動物の世話をする／アロマを嗅ぐ／眠る／リラククスできるシーンを想像する／マッサージをする／深呼吸する／友達と話す／運動する／旅行に行つて楽しかったことなどを思い出す／料理をする／おしゃべりをする／散歩に行く／きれいな景色を思い出す・・・etc

心地よくなる活動

-
-
-
-

ワークシート

感情への対処の練習

日にち	出来事	感情	感情の強さ (0~100)	感情から距離をとる (◎, ○, △, ×)	心地よい活動
例) 7月14日	仲が良いと思っていたA 子から、そっけない態 度をとられた	悲しい 不安 怒り	80 90 50	○ 「私は今悲しいと思ってい る」と心の中で唱えた。呼 吸に集中して、自分の気持 ちを否定しなかった。	お風呂に入る 深呼吸する リラックスできることを イメージする
月 日					
月 日					
月 日					
月 日					
月 日					

対人関係に対する対処

前回説明したように、見捨てられスキーマが強いと、衝動的になってしまふことが多いために、相手に対して攻撃的になってしまふたり、また逆に、自分の意見を言えなくなってしまう、適度な自己表現ができなくなってしまうことが指摘されています。また、自己表現が上手でないために、相手との関係を切ってしまうたりします。そして、その行動が見捨てられスキーマをさらに強めるという悪循環に陥ります。そこで、対人関係での自己表現の仕方(上手な伝え方)について考えてみましょう。

☆ 上手な伝え方について

まず・・・自分がその人に何か伝えられる環境かどうか、相手がそれを受け入れられる状況かを考える。

次に・・・自分が相手とどのような関係でありたいのか、考える。

その上で、相手に何か伝える必要があるとしたら、次のポイントに注意して伝える。

- ① 描写する：そのときの状況を言葉にする。できるだけ具体的に・客観的に説明する。
- ② 表現する：その状況や相手に対する自分の気持ちを明確な言葉にする。「私は〇〇と感じている」「私は〇〇したい」
- ③ 提案する：ステップ 1 相手に望むことを言葉にする。分かりやすい具体的な行動を提案する。
ステップ 2-a 相手が受け入れやすい提案のときには、その良い結果について伝える。
2-b 相手が受け入れにくい提案のときには、別の選択肢も提示する。

☆ 相手との関係のために

- ① ・おだやかに話す：攻撃しない（相手の良くないところを指摘しない）、おどさない（受け入れられなかったときに「〇〇してやる！」など。断定しない（「あなたは〇〇すべきだ」「あなたは〇〇すべきでない」）
- ② ・相手の話に関心を向ける：うなずく・相槌を打つ・相手の言葉を復唱する。話をさえぎらずに聞く。
- ③ ・相手を肯定する：その場における相手の気持ちや状況を考慮した声をかける（「忙しいとは思うけど…」「難しいかもしれないけれど…」）
- ④ ・なごやかな態度を取る：やわらかい表情や口調。

【例】友人 A ちゃんが、突然自分に対してそっけない態度をとってきた。

①・描写する

「今日は A ちゃんはいつもより元気がないように見えるね。口数が少なくて、声も小さい感じがするんだけど、大丈夫？」

②・表現する

「A ちゃんの様子を見ると心配になるな。何か気がかりなことがあるのかな？」

③ 提案する「もし私に関係があることだったら、教えてほしいな」

a 「その方が、お互い気持ちやすつきりするかもしれないし」

b 「今話すことが難しかったら、よかったら今度落ち着いた時に教えてね」

<自分が見捨てられ場面になったら、相手にどのように伝えたらよいかを考えてみましょう>

状況：

① 描写する：

② 表現する：

③ 提案する：

a:

b:

ワークシート

<見捨てられ場面での自己表現の練習>

Step 1 : 自分がその人に何か伝えられる環境かどうか, 相手がそれを受け入れられる状況か? ○ △ ×

Step 2 : 自分が相手とどういう関係でありたいのか? _____

状況 : _____

④ 描写する: _____

⑤ 表現する: _____

⑥ 提案する: _____

a: _____

b: _____

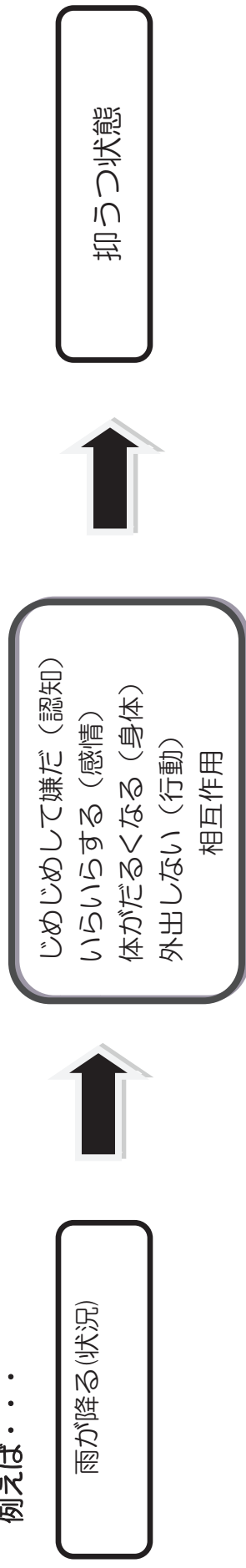
以下のことはできていましたか?

- | | | | |
|----------------|---|---|---|
| ⑤ ・ おだやかに話す | ○ | △ | × |
| ⑥ ・ 相手の話の話を傾ける | ○ | △ | × |
| ⑦ ・ 相手を気遣う | ○ | △ | × |
| ⑧ ・ なごやかな態度を取る | ○ | △ | × |

認知行動療法って？

認知行動療法とは、心理療法の一つで、うつ病、不安障害など、様々な精神疾患に有効であるとされている療法です。認知行動療法では、ある出来事(状況)と、考え方(認知)―行動―感情―身体―相互作用として症状を捉えます。

例えば・・・



認知行動療法でも代表的な認知療法では、出来事そのものが直接悲しみや怒りなどの感情、あるいはその人にとる行動を引き起こすのではなく、出来事に対する考え方が気持ちや行動、身体の症状に影響していると考えます。

例えば、うつ病の人は、ある出来事の結果を否定的に予測したり、すべて良いか悪いかの両極端で解釈したり、悪い事ばかりに注意がいつてしまふといった認知の特徴があります。こうした認知の特徴が気分を落ち込みやすくさせ、抑うつ状態に陥ると認知行動療法では解釈します。

本研究では、主に対人場面で浮かぶ考え方について注目して、認知行動療法の手法をとりいれた介入実験を行います。まずは、あなたに對人場面で不安になりやすい認知の特徴があるかどうかを考えてみましょう！次の例からあなたの考え方に共通する特徴をピックアップしてみてください。

べき思考

「こうあるべき」と決めつけること

ラベリング思考

「状況を変えることは自分にはできない！」と決めつけること

自責的思考

必ずしも自分の責任でないのに、自分の責任だと責める

完べき思考

自分が完べきであることを望む

白か黒か思考

物事を「良い」「悪い」など、極端に判断すること。

過小評価・過大評価

良いことは過小に評価し、悪いことを過大に評価すること。

過度な一般化

たったひとつの出来事を、すべてそうだと極端に解釈する

推論の誤り

未来の出来事を、極端に悪い方に考える。

自分の対人場面での考え方のクセだと思うものに○をつけてみてください。

思考記録表を書いてみよう！

☆ 自分の考え方のクセは見つけられましたか？それでは、これからそのクセをふまえて、そのクセに振り回されずに、対人関係で不安に感じる場面での考え方の視点を变える練習をしてみたいと思います。今回は、認知行動療法でよく用いられる、「思考記録表」を使って、その練習をしてみましょう。

☆ 思考記録表のやり方

1. 対人関係で不安に感じたり、気分が落ち込むような場面があったら、まず「いつ・どこで」その出来事があったのかを書く。
2. 次に、「なにをして」いてそうなったのか、その時の状況を書く(自分が感じたことや考えたことは書かない)。
3. 次に、その時に自分の心を占めていた「考え」や「イメージ」について具体的に書く。
4. 次に、その時に感じた感情の強さを、%で表して書く。感情については、右の表を参考にする。また、その時の自分が実際にとった行動について、具体的に書く。
5. 次に、考え方の視点を变える練習として、「もし違う考え方があったら」どのような考え方があるかについて書く。最後に、5番目に記入した考え方をしたら、自分の感情や行動がどのようになったのか(あるいはどのようになると予測されるのか)、4番と同様の手順で記入する。

前半4週間のホームページでは、この思考記録表に記入して、考え方の視点を变える練習をします。

ワークシート

思考記録表

いつ、どこで	なにをして	考え 不快な感情を経験する ときにここを占めて いる考えやイメージ	*感情の強さ (0~100%)	もし違う考え方があっ たら？	*感情の強さ (0~100%)
例) 家で	親しい友人に、遊び に誘うメールをした が、1日たっても返信 が来ない。	自分がきつと嫌われたん だろう。 こんな自分に嫌気がさし たに違いない。	感情 悲しみ 80% 不安 70%	たまたま忙しくて返信でき ないのだろう。 ずっと親しくしている友人 だから、自分のことを嫌っ ていることはないはずだ。	感情 悲しみ 30% 不安 40%

気分表

ゆうつ 不安 怒り 罪悪感 恥 悲しい 困惑 興奮 おびえ いらだち 心配 誇り パニック うんざり 傷ついた 快い 失望 怖い 楽しい
--

対人場面での対処方法を身に着けよう！

前半の 4 週間では、対人場面での考え方の視点を变える練習をしてきました。後半の 4 週間では、対人場面で不安に感じた時、どのような対応をすればよいかについて考えていきましょう。

認知行動療法では、認知-行動-感情-身体は相互に関係し合っていると考えます。まずこれから 2 週間は、「身体」に対する対処法を考えてみましょう。

☆身体への対処法

不安を緩和するために用いる、「リラクセーション法」を実践してみます。

◇ リラクセーション法

上述したように、認知-行動-感情-身体は密接につながっています。そのため、ストレスを感じるような状況や、気分が落ち込んだ時に、身体の筋肉の緊張を緩和することで、不安な気持ちも低減して、気持ちを落ち着けることができるというわけです。これは、対人場面でストレスを感じた際でも同様のことがいえます。そこで、今回は、リラクセーション法という筋肉の緊張をほぐすやり方を実践してみましょう。

リラクゼーション法（漸進的筋弛緩法）

イスに深く腰をかけて、数cmお尻を前に出して下さい。
両手は軽く膝の上に、背中が軽く浮かすようにしてください。
膝と足をお尻の幅と同じくらいに開いてください。
足の裏は全部つけてください。目は軽く閉じましょう。

1. 効き手を、親指を外にして、力をこめてぎゅっと握って下さい。(数秒) ゆっくり息を吐きながら力を抜きましょう。息を吐くと緊張も抜けていきます。
2. 次は反対の手でやってみましょう。(数秒) ゆっくり息を吐きながら力を抜きましょう。
3. 次は、両手を同じように強く握り、両ひじを身体の横につけながら両手を肩につけるように曲げて、腕に力を入れてみましょう。(数秒) ゆっくり息を吐きながら力を抜きましょう。腕がだらんとぶらさがるのが感じましょう。
4. 次は、右肩を上上げて力を入れてみましょう。(数秒) ゆっくり息を吐きながら力を抜きましょう。腕の重さを感じて下さい。
5. 次は、左肩を上上げて力を入れてみましょう。(数秒) ゆっくり息を吐きながら力を抜きましょう。
6. 次は、ウエストの下あたりを前に押し出すように力を入れてみましょう。(数秒) ゆっくり息を吐きながら力を抜きましょう。
7. 次は、足の指でパーを作りながら、地面を押しすように力を入れてみましょう。お尻の穴をすぼめるように力を入れましょう。(数秒) ゆっくり息を吐きながら力を抜きましょう。
8. 今度は顔に力を入れてみましょう。舌を丸めないように平らなままで上あごに押しつけ、歯を食いしばり、唇をぎゅっと閉じ、眉間にしわを作り、まぶたを強く閉じましょう。(数秒) ゆっくり息を吐きながら力を抜きましょう。
9. 次は、おへそに力を入れてみましょう。(数秒) ゆっくり息を吐きながら力を抜きましょう。
10. 最後に、全身に力を入れましょう。両手を握りしめ、ひじに力を入れながら腕をぎゅっと曲げ、両肩を上上げて、ウエストの下あたりを前に出すように力を入れ、足の指でパーを作りながら地面を押し、お尻の穴をすぼめて、おへそに力を入れながら、舌を上あごに押しつけ、歯を食いしばり、唇をぎゅっと閉じ、眉間にしわを寄せ、まぶたを強く閉じましょう。(1秒) ゆっくり息を吐きながら力を抜きましょう。

そのままの姿勢でゆっくり深呼吸をしましょう。息をゆっくり吐いてください。

ワークシート

リラクゼーションの練習

日にち	出来事	感情	身体の反応	リラクゼーション (◎ ○ △ ×)
例) 7月14日	仲が良いと思っていた A子から、そっけない 態度をとられた	悲しい 不安 怒り	肩が緊張し て固くなっ ていた	○ リラクゼーションを やったら、少し身体が 軽くなって気分が良 くなった
月 日				
月 日				
月 日				
月 日				
月 日				

☆ 対人関係での対処行動

対人関係でうまくいかなかったことがある時、自分はどのような行動をしていたのでしょうか。自分の行動の傾向をつかみ、対人場面での適切な行動をあらかじめ考えておくことは、その後の対人関係はもちろん、気分や考えなどにも有効です。そこで、例を参考にして、自分が対人関係でうまくいかなかった場面を一つピックアップして、その出来事に対する適切な対処行動として、どんなものがあるのかを考えてみましょう。

例)

1. 状況：サークルの先輩に、ちょっとしたミスで怒鳴られた。
2. 自分の認知, 感情：わざとやったんじゃないのに・先輩は自分のことが嫌いなのか（認知），悲しみ・くやしさ（感情）
3. その時自分のとった行動：先輩に何も言えず、じっとだまっていた。誰にも話さずに、一日ふさぎこんでいた。
4. ストレスの程度：80
5. どのような対処行動があったか（認知, 感情, 身体, 行動）：サークルの友人に仲介してもらい、先輩に事情を説明する。友人に相談して、愚痴を聞いてもらう。リラクセーション。
6. ストレスの改善度の予想：40

ワークシート

1. 状況：
2. 自分の認知, 感情：
3. その時自分のとった行動：
4. ストレスの程度：
5. どのような対処行動があったか（認知, 感情, 行動, 身体）：
6. ストレスの改善度の予想：